茨城県教育財団文化財調査報告第397集

上境旭台貝塚４

中根・金田台特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書XIX

平成27年３月

独立行政法人都市再生機構
首都圏ニュータウン本部茨城業務部
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第397集

上境旭台貝塚4

かみざかいあさひだい

中根・金田台特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書XIX

平成27年3月

独立行政法人都市再生機構
首都圏ニュータウン本部茨城業務部
公益財団法人茨城県教育財団

調査区全景（北東上空から）

上境旭台貝塚出土土器

序

茨城県では，つくば市を世界的な科学技術研究の中核都市と位置づけ，さらには，国際交流の拠点にふさわしい街にすることを目指して整備を進めています。

この新しい街づくりの一環として，つくば市と独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城業務部は，当市と首都圏を直結する「つくばエクスプレス」の沿線開発を一体的に進める土地区画整理事業を計画的に推進しています。しかしながら，その事業予定地内には，埋蔵文化財包蔵地である上境旭台貝塚が所在し，記録保存の措置を講ずる必要があるため，当財団が住宅・都市整備公団つくば開発局（現　独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城業務部）から開発区域内における埋蔵文化財発掘調査の委託を受け，平成19年４月から平成23年12月の期間に計６次にわたりこれを実施しました。これらの成果は，『茨城県教育財団文化財調査報告』第325・364・368集として順次刊行しています。

本書は，平成22年度に調査を実施したＧ区の調査成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもとより，郷土の歴史に対する理解を深め，教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが，発掘調査から報告書の刊行に至るまで，委託者であります独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城業務部から多大な御協力を賜りましたことに対し，厚く御礼申し上げますとともに，茨城県教育委員会，つくば市教育委員会をはじめ，関係各位からいただいた御指導，御協力に対し，深く感謝申し上げます。

平成27年 3月

公益財団法人茨城県教育財団

理 事 長　鈴 木 欣 一

例　　言

1　本書は，独立行政法人都市再生機構茨城地域支社（現　独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城業務部）の委託により，財団法人茨城県教育財団（現　公益財団法人茨城県教育財団）が平成22年度に発掘調査を実施した，茨城県つくば市中根字中谷津834－1番地ほかに所在する上境旭台貝塚の発掘調査報告書である。

2　発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調査　平成22年10月 1日～12月31日

整理　平成26年 4月 1日～平成27年 3月31日

3　発掘調査は，調査課長池田晃一のもと，以下の者が担当した。

首席調査員兼班長　　仲村浩一郎

主任調査員　　市村　俊英

主任調査員　　本橋　弘巳

主任調査員　　大関　　隆

主任調査員　　坂本　勝彦

調査員　　関　　絵美

4　整理及び本書の執筆・編集は，整理課長後藤一成のもと，首席調査員兼班長小林和彦が担当した。

5　本書の作成にあたり，出土した縄文土器の様式や時期については，日本考古学協会会員齋藤弘道氏を講師として招聘し，ご指導いただいた。出土した動物遺体の同定・分析については，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部名誉教授西本豊弘氏に依頼し，同定・分析結果及び考察は，付章1として巻末に掲載した。第296号土坑の土壌及び出土した自然遺物（木片・種実）の自然科学分析は，パリノ・サーヴェイ株式会社に委託し，分析結果及び考察は，付章2として巻末に掲載した。

凡　　例

1　当遺跡の地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し，X = + 12,160 m，Y = + 26,280 mの交点を基準点（A 1 a1）とした。なお，この原点は，世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40 m四方の大調査区に分割し，さらに，この大調査区を東西・南北に各々10等分し，4 m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へA，B，C…，西から東へ1，2，3…とし，「A 1区」のように呼称した。さらに小調査区は，北から南へa，b，c…j，西から東へ1，2，3，…0と小文字を付し，名称は，大調査区の名称を冠して「A 1 a1区」のように呼称した。

2　実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構　HG －遺物包含層　P －ピット　PG －ピット群　SA －柱穴列　SD －溝跡　SI －竪穴建物跡
SK －土坑　SM －貝層　TP －陥し穴

遺物　B －骨角歯牙製品　DP －土製品　M －金属製品　N －自然遺物　P －土器　Q －石器・石製品
S －貝製品　TP －拓本記録土器

土層　K －撹乱

3　遺構・遺物実測図の作成方法については，次のとおりである。

⑴　遺構全体図は400分の1，各遺構の実測図は原則として60分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は，個々に縮尺をスケールで表示した。

⑵　遺物実測図は，原則として3分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は，個々に縮尺をスケールで表示した。

⑶　遺構・遺物実測図中の表示は，次のとおりである。

□ 焼土　□ 炉（火床面）　■ 柱痕跡

● 土器　○ 土製品　□ 石器・石製品　■ 骨角歯牙製品　▲ 貝・貝製品　× 獣骨・魚骨類
★ 木片　☆ 種実

4　土層観察と遺物における色調の判定は，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。また，土層解説中の含有物については，各々総量を記述した。

5　遺構一覧表・遺物観察表の表記は，次のとおりである。

⑴　計測値の単位はm，cm，gで示した。なお，現存値は（　）を，推定値は［　］を付して示した。

⑵　遺物観察表の備考の欄は，残存率，写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

⑶　遺物番号は通し番号とし，本文，挿図，観察表，写真図版に記した番号と同一とした。

6　竪穴建物跡の「主軸」は，炉を通る軸線とし，主軸方向は，その他の遺構の長軸（径）方向と共に，座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例　N － 10°－ E）。それが不明の場合は，最大幅をとる軸線を長軸とし，主軸方向に準じて表示した。

7　当財団既刊の第364集「上境旭台貝塚2」及び第368集「上境旭台貝塚3」で報告した遺構番号を以下のように改称する。

第364集　西部包含層→第1号包含層，東部包含層→第2号包含層

第368集　南部包含層→第3号包含層

8　今回の報告分で，調査段階での遺構名を変更したもの及び欠番にしたものは以下のとおりである。

変更　HG 5→HG 4，HG 7→HG 5，PG 5→PG 6，SK184→TP 2，SM 6→第1号地点貝塚
SM 7→第2号地点貝塚，SM 8→第3号地点貝塚，SM10→第4号地点貝塚，SX 2→SK296
SX 3→第1号遺物集中地点，SX 5→第2号遺物集中地点

欠番　HG 6，SK179・181，SM 5

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次
概　要 …… 1
第１章　調査経緯 …… 3
　第１節　調査に至る経緯 …… 3
　第２節　調査経過 …… 4
第２章　位置と環境 …… 5
　第１節　位置と地形 …… 5
　第２節　歴史的環境 …… 5
第３章　調査の成果 …… 11
　第１節　調査の概要 …… 11
　第２節　基本層序 …… 11
　第３節　遺構と遺物 …… 13
　　１　縄文時代の遺構と遺物 …… 13
　　⑴　竪穴建物跡 …… 13
　　⑵　陥し穴 …… 17
　　⑶　土坑 …… 18
　　⑷　柱穴列 …… 38
　　⑸　溝跡 …… 39
　　⑹　ピット群 …… 48
　　⑺　斜面貝層 …… 50
　　⑻　地点貝塚 …… 67
　　⑼　遺物集中地点 …… 73
　　⑽　遺物包含層 …… 80
　　２　その他の遺構と遺物 …… 147
　　⑴　溝跡 …… 147
　　⑵　遺構外出土遺物 …… 148
　第４節　まとめ …… 150
付　章 …… 158
　　１　上境旭台貝塚平成 22 年度調査出土の動物遺体 …… 158
　　２　上境旭台貝塚第 296 号土坑の自然科学分析調査 …… 164
写真図版 …… PL 1 ～ PL26
抄　録
付　図

上境旭台貝塚の概要

遺跡の位置と調査の目的

上境旭台貝塚は，つくば市の東部，桜川右岸の標高21～27ｍの台地斜面部に立地しています。中根・金田台特定土地区画整理事業に伴い，茨城県教育財団が，平成22年10月から12月までの３か月間，発掘調査を実施しました。

調査の内容

今回の調査では，縄文時代後期後葉から晩期前葉（約3,000年前）の竪穴建物跡１棟，陥し穴１基，土坑35基のほか，斜面貝層３か所，地点貝塚４か所，遺物包含層２か所などを確認しました。主な出土遺物は，大量の縄文土器や土製品（土偶・土版など），石器（鏃・石皿・磨石など），石製品（石棒・石剣・独鈷石・石冠など）のほか，サルボウ属やハマグリ製の貝輪や貝刃，骨角製の刺突具や髪飾りなどがあります。

調査区全景（南東上空から）

縄文時代晩期前葉の第 15 号竪穴建物跡

第４号貝層の土器・獣骨出土状況

土偶・海獣形土製品ヵ

石冠（左上），独鈷石（左中），貝輪（左下２点）
石棒・石剣（右３点）

調査の結果

当貝塚では，縄文時代後期後葉から晩期前葉にかけて，台地上から台地縁辺部に集落が営まれていました。谷津に面した斜面部には，当時の人々が日々の生活の中で不要になった土器や道具類，食料とした貝類や小動物の骨などを廃棄した跡である貝塚や遺物包含層が形成された遺跡であることが分かりました。斜面貝層や遺物包含層からは，土器のほか，土偶（どぐう）や海獣形土製品（かいじゅうがたどせいひん）ヵ，石冠（せっかん）や独鈷石（どっこいし）など，祀（まつ）りに使用したとみられる土製品や石製品も出土しています。標高の低い場所では，粘土層の上面から多量の木片とともにトチの実・クルミなどの種実が出土し，水辺の生活の一端を示す遺物が出土したことも注目されます。また，桜川を５㎞ほど下った地点にある土浦市上高津貝塚（かみたかつ）（国指定史跡）をはじめ，当時内海であった古霞ヶ浦湾沿岸地域では，製塩に関わる遺跡が多く見られます。今回の調査区内でも製塩土器の破片が出土していることから，当遺跡でも製塩が行われていたのかもしれません。

第１章　調　査　経　緯

第１節　調査に至る経緯

つくば市では，世界に開かれた国際交流の中心，世界の科学技術をリードする研究開発の拠点として，21世紀の新しい街づくりが進められている。その一環として取り組んでいるのが，2005年に開業した「つくばエクスプレス」の沿線開発である。中根・金田台地区については，住宅・都市整備公団つくば開発局（平成９年10月から住宅・都市整備公団茨城地域支社に，平成11年10月から都市基盤整備公団茨城地域支社に，平成16年７月から独立行政法人都市再生機構茨城地域支社に，平成23年７月から独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部に，平成26年４月から独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城業務部に名称を変更）を事業主体として，土地区画整理事業を進めている。

平成６年11月18日，住宅・都市整備公団つくば開発局長は，茨城県教育委員会教育長あてに，中根・金田台特定土地区画整理事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は，平成７年度に現地踏査を，平成12年１月18・19日に試掘調査を実施し，遺跡の所在を確認した。平成12年２月15日，茨城県教育委員会教育長は，都市基盤整備公団茨城地域支社長あてに，事業地内に上境旭台貝塚が所在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成19年１月11日，独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長は，茨城県教育委員会教育長にあてに，文化財保護法第94条の規定に基づき，土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は，現状保存が困難であることから，記録保存のための発掘調査が必要であると判断し，平成19年１月31日，独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長あてに，工事着工前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成22年３月17日，独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長は，茨城県教育委員会教育長にあてに，中根・金田台特定土地区画整理事業に係わる埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成22年３月26日，茨城県教育委員会教育長は，独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長あてに，上境旭台貝塚について発掘調査の範囲及び面積について回答し，併せて埋蔵文化財の調査機関として，財団法人茨城県教育財団（現　公益財団法人茨城県教育財団）を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は，独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け，Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ区の2,878㎡について，平成19年４月から平成20年１月までに，断続的に３回の発掘調査を実施し，平成21年に報告書を刊行した。また，Ｂ・Ｄ区の未調査部及びＦ区の2,898㎡については，平成21年10月１日から12月31日まで発掘調査を実施し，平成24年に報告書を刊行した。Ｂ・Ｄ・Ｅ区の未調査部1,038㎡については，平成23年10月１日から12月31日まで発掘調査を実施し，平成25年に報告書を刊行した。今回報告するのは，平成22年10月１日から12月31日まで発掘調査を実施したＧ区の1,937㎡についてである。

第2節　調　査　経　過

上境旭台貝塚の調査は，平成22年10月1日から12月31日までの3か月間にわたって実施した。以下，その概要を表で記載する。

期間 工程	10　月	11　月	12　月
調査準備 表土除去 遺構確認			
遺構調査			
遺物洗浄 注記 写真整理			
撤収			

第2章　位　置　と　環　境

第1節　位　置　と　地　形

上境旭台貝塚は，茨城県つくば市中根字中谷津834－1番地ほかに所在している。

つくば市は，茨城県の南西部に位置し，北部は筑波山塊に接し，東側約5㎞には霞ヶ浦がある。市域の多くは筑波山を北端として，その南東側に広がる標高25ｍほどの平坦な筑波・稲敷台地上にある。この台地は，東を霞ヶ浦に流入する桜川，西を利根川に合流する小貝川によって区切られており，東から花室川，蓮沼川，小野川，谷田川，西谷田川などの中小河川がほぼ北から南に向かって流れている。

筑波・稲敷台地は，千葉県北部から茨城県南部に広がる常総台地の一部であり，地質的には海成砂層の成田層を基盤として，その上に砂層・砂礫層の竜ヶ崎層，さらに泥質粘土層の常総粘土層，関東ローム層が連続して堆積し，最上部は腐植土層となっている[1)]。

当遺跡は，つくば市の東部に位置し，桜川右岸の低地から入り込む谷津に面する標高21～27ｍの台地縁辺部に立地しており，桜川低地との比高は17～20ｍである。谷津は調査区の東側にあたり，ほぼ南に向かって開析されている。谷津頭付近が近年敷設された道路によって遮断されたため，現在はため池となっている。調査区の北側及び東側は谷津に向かって，南側は谷津から西側へ入り込む小支谷に向かって，緩やかに傾斜している。その台地縁辺部から斜面部にかけて貝の散布が確認できている。

当遺跡とその周辺は，台地上の縁辺部の一部が雑木林・杉林のほか，主として畑地として利用されている。桜川によって形成された沖積低地は，主に水田として利用されている。当遺跡の調査前の現況は，宅地･畑地･山林であった。

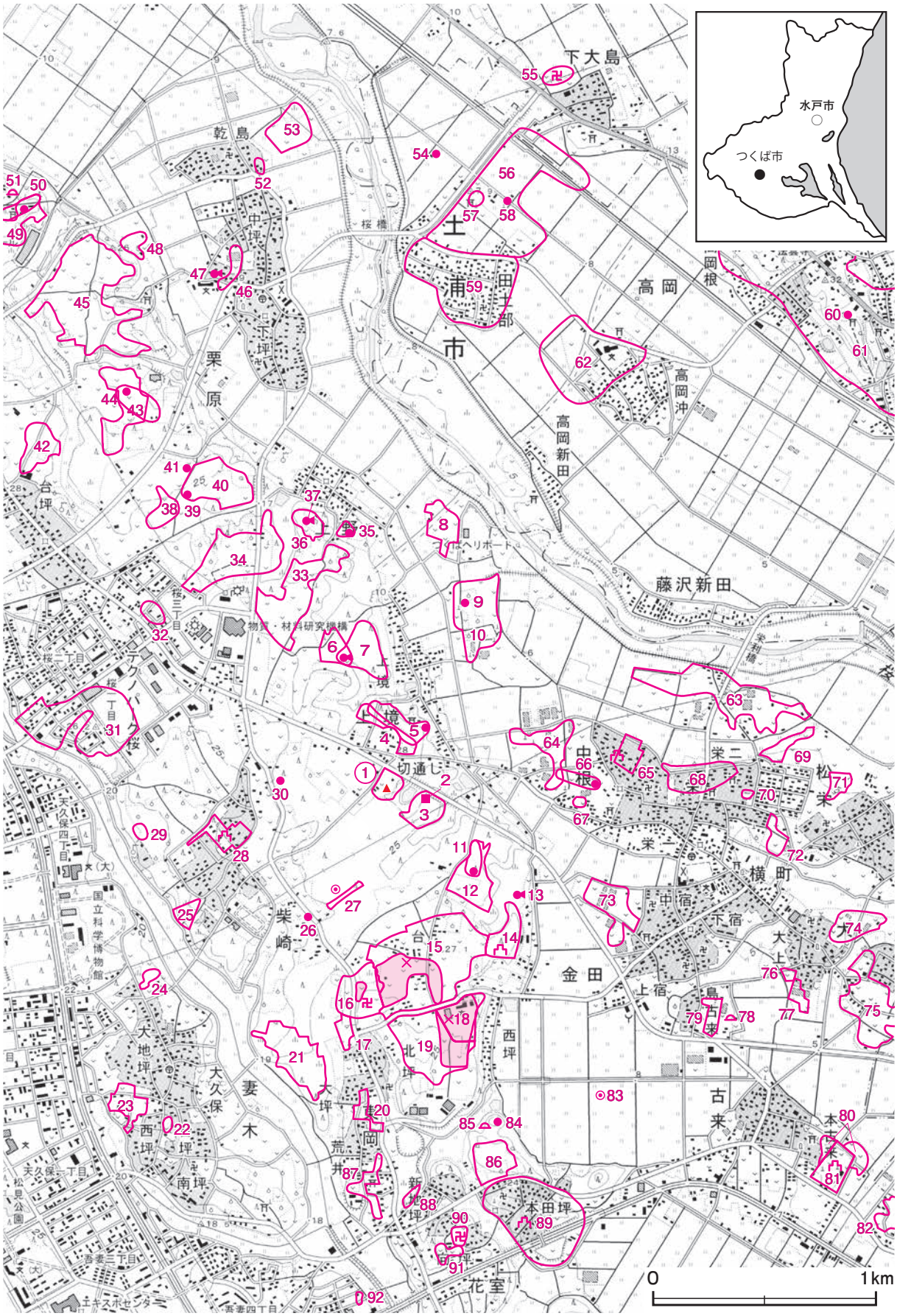
第2節　歴　史　的　環　境

桜川と花室川に挟まれた台地上には，旧石器時代から室町時代にかけての遺跡が集中している[2)]。ここでは，当遺跡の主たる時期である縄文時代の遺跡を中心に，周辺の遺跡を概観する。

当該地域で人々の生活痕跡が認められるのは後期旧石器時代に遡り，東岡中原遺跡〈21〉では，荒屋型彫器を含む細石刃石器群が確認されている[3)]。

今から約1万2千年前に始まる縄文時代から，地球規模での温暖化により海面が少しずつ上昇し，内陸部まで海水が進入するいわゆる「縄文海進」により，縄文時代早期末から前期初め頃には，霞ヶ浦周辺地域に広大な「内海」が形成される。この「内海」の形成と時を同じくして，台地縁辺部を中心に貝塚が形成されるようにようになる。桜川下流域及び霞ヶ浦土浦入沿岸では，土浦市沖宿（おきじゅく）貝塚群の早期末に遡る事例を最古として，前期の貝塚が確認できる。桜川水系の前期の貝塚としては，当遺跡の桜川低地を挟んで対岸約3㎞に上坂田寺裏（かみさかたてらうら）貝塚，下坂田鹿島前（しもさかたかしまま）貝塚が，下流約4㎞に宍塚（ししつか）貝塚がある。これらの貝塚は，内湾などの浅海の泥底に生息するハイガイを主体とする貝塚であり，当時の水辺環境を知る上での貴重な資料となる。

縄文時代中期の遺跡は多数確認でき，後期あるいは晩期まで継続して集落が営まれるようになる。当遺跡周辺においても，上境滝ノ臺（かみざかいたきのだい）遺跡〈4〉，中根不葉抜（なかねぶはぬき）遺跡〈64〉，金田西（こんだにし）遺跡〈15〉，柴崎南（しばさきみなみ）遺跡〈25〉では，中期の，金田西坪（こんだにしつぼえー）A遺跡〈18〉，金田西坪（こんだにしつぼびー）B遺跡〈19〉，花室（はなむろ）遺跡〈86〉では中期から後期にかけての遺構や遺物が確認



第１図　上境旭台貝塚周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000 分の１「上郷」「常陸藤沢」）

表１　上境旭台貝塚周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸
①	上境旭台貝塚		○		○			
2	中根中谷津古墳				○			
3	中根中谷津遺跡	○	○			○		
4	上境滝ノ臺遺跡		○	○				
5	上境滝の台古墳群				○			
6	上境作ノ内遺跡		○	○	○			
7	上境作ノ内古墳群				○			
8	上境北ノ内遺跡					○	○	○
9	上境どんどん塚古墳				○			
10	上境古屋敷遺跡				○	○	○	○
11	横町古墳群				○			
12	横町庚申塚遺跡		○		○	○	○	○
13	金田古墳				○			
14	金田城跡						○	
15	金田西遺跡		○		○	○	○	○
16	九重東岡廃寺					○	○	○
17	東岡中畑遺跡					○		
18	金田西坪Ａ遺跡		○			○		
19	金田西坪Ｂ遺跡		○		○	○		
20	東岡南遺跡					○	○	○
21	東岡中原遺跡	○	○			○	○	○
22	妻木宮前遺跡					○	○	○
23	妻木坪内遺跡					○	○	○
24	妻木鴻ノ巣遺跡				○	○		
25	柴崎南遺跡		○		○		○	○
26	柴崎稲荷前古墳				○			
27	柴崎大堀遺跡						○	○
28	柴崎片岡上館跡				○	○	○	
29	柴崎ボツケ遺跡					○		
30	柴崎大日塚							
31	柴崎遺跡				○	○	○	
32	上野中塚遺跡		○			○		
33	上野古屋敷遺跡	○	○	○	○	○	○	○
34	上野陣場遺跡		○	○	○	○	○	○
35	上野定使古墳群				○			
36	上野天神遺跡		○					
37	上野天神塚古墳				○			
38	栗原大山西遺跡					○	○	○
39	栗原十日塚古墳				○			
40	栗原大山遺跡				○	○		
41	栗原愛宕塚古墳				○			
42	栗原才十郎遺跡		○					
43	栗原五竜遺跡		○		○	○	○	
44	栗原五龍塚古墳群				○			
45	栗原中台遺跡		○	○	○	○	○	○
46	栗原古塚遺跡					○	○	○

番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸
47	栗原古塚古墳				○			
48	栗原登戸遺跡					○	○	
49	玉取遺跡		○	○	○	○		○
50	玉取古墳群				○			
51	玉取弁天塚						○	○
52	栗原遺跡					○	○	○
53	栗原沼向遺跡				○	○	○	
54	稲荷塚古墳				○			
55	下大島遺跡							
56	広畑遺跡				○	○	○	○
57	田土部明神古墳群				○			
58	供養塚							○
59	田土部館跡						○	
60	大日塚古墳(鹿島神社)				○			
61	岡の宮遺跡		○		○	○		
62	五斗内遺跡				○	○		
63	中根遺跡				○	○	○	
64	中根不葉抜遺跡		○			○	○	○
65	中根屋敷附館跡					○	○	○
66	中根とりおい塚古墳群				○			
67	中根宮ノ前遺跡					○	○	○
68	栄土器屋遺跡					○	○	○
69	松塚鷺打遺跡					○	○	○
70	栄屋敷付遺跡					○	○	○
71	松塚高畑遺跡				○	○	○	
72	栄尼塚遺跡						○	○
73	金田竜宮橋遺跡					○	○	○
74	大白畑遺跡				○	○	○	○
75	大寺前遺跡				○	○	○	○
76	阿弥陀寺跡						○	○
77	大南遺跡				○	○	○	○
78	古来島ノ前塚						○	○
79	古来北ノ崎遺跡					○	○	○
80	古来遺跡					○	○	
81	古来館跡					○	○	
82	吉瀬黄金遺跡				○	○	○	○
83	金田本田遺跡					○	○	
84	花室大日塚古墳				○			
85	花室後田塚						○	○
86	花室遺跡		○			○		
87	東岡天神前遺跡					○	○	○
88	花室溝向遺跡					○		
89	花室城跡		○	○	○	○	○	○
90	花室寺畑廃寺						○	
91	花室寺山前遺跡					○	○	○
92	花室大根遺跡				○			

されている。中期の貝塚は，阿見町竹来貝塚や見目貝塚など，霞ヶ浦に直面する台地上に立地し，サルボウガイ，アカガイ，ハマグリなどが主体の主鹹貝塚の様相を呈しており，前期から中期にかけての海退に伴う水辺の環境変化が指摘されている[4)]。

花室川右岸約６㎞下流の下広岡遺跡では，中期中葉阿玉台式期から中期後葉加曽利Ｅ式期の竪穴建物跡86棟と，袋状土坑を含む土坑600基以上が確認されている。また，袋状土坑からは大量の縄文土器のほか，パン状炭化物や炭化種子などが出土しており注目される[5)]。その他，当遺跡周辺の遺跡としては，上野陣場遺跡〈34〉があげられ，前期前葉花積下層式期から中期後葉加曽利Ｅ式期までの竪穴建物跡８棟と土坑８基が調査されている[6)]。また，上野古屋敷遺跡〈33〉でも前期前葉の竪穴建物跡18棟と中期加曽利Ｅ式期の竪穴建物跡１棟，陥し穴３基，土坑55基が調査されている[7)]。

当遺跡の存続時期と同じく後期から晩期に最盛期を迎えている遺跡には，当遺跡と桜川低地を挟んだ対岸に位置している下坂田貝塚，桜川右岸約５㎞下流の上高津貝塚があげられる。下坂田貝塚は中期から晩期の遺跡であるが，貝層の主体は後期中葉加曽利Ｂ式期で，出土貝類の98％以上がヤマトシジミである[8)]。出土した貝類の傾向は当遺跡と類似しており，水辺環境の広がりを捉えることができる。国指定である上高津貝塚は後期から晩期にかけて形成された大規模な馬蹄形貝塚で，４地点からなる貝層はヤマトシジミが主体である。捕獲魚類として汽水域を主たる生息域とするクロダイやスズキなどの魚骨が多量に確認され，当水域が汽水化していく傾向がうかがえる。また，加曽利Ｂ式期の貝層中から外洋の水深30ｍ以深の海底に生息するマダイ成魚の骨が多量に出土しており，当該期の縄文人の漁労活動を推測する上で良好な資料を提示している[9)]。

当遺跡と谷津を挟んで対岸に所在する中根中谷津遺跡〈３〉は，平成８・９年度及び平成22年度に調査を行い，後期後葉堀之内１・２式期の竪穴建物跡10棟と晩期前葉安行３ｂ式期の竪穴建物跡１棟，後期の地点貝塚４か所，焼土遺構６基，遺物包含層５か所などを確認している。堀之内１式期の竪穴建物跡は９棟確認し，台地際に環状の配置をとっている。後期前葉の集落の配置を捉えることができる貴重な調査例であるとともに，当遺跡に先行して営まれた集落であり，集落の展開や移動を考察する上での好資料となる[10)]。

縄文時代以降も桜川と花室川に挟まれた当地域には，継続して集落が営まれている。上野陣場遺跡では，10世紀後半まで，隣接する上野古屋敷遺跡でも16世紀代まで，断続的ながら集落が確認されている。奈良時代・平安時代には，河内郡菅田郷に属し，北は筑波郡に隣接している。当遺跡の南約１㎞に位置する国指定史跡である金田官衛遺跡（金田西遺跡，金田西坪Ａ遺跡，金田西坪Ｂ遺跡，九重東岡廃寺〈16〉）は，河内郡衙跡及び関連遺跡群と推定されている[11)]。また，東岡中原遺跡，柴崎遺跡[12)]〈31〉，上野陣場遺跡などは河内郡衙を支えた集落と位置づけられており，当該地域が河内郡の中心であったことが想定される。鎌倉時代から戦国時代には小田氏及び佐竹氏の支配下となり，台地上には金田城跡〈14〉をはじめとする中小城館及びその関連施設が築かれ，領主層の抗争の舞台となった。しかし，小田氏の衰退に伴い土豪層の多くが帰農したことによって，集落の廃絶と移動があったと考えられる。江戸時代になると，上野・栗原地区は堀氏玉取藩の知行地であったが，旧桜村の多くは土浦藩に属することになり，明治４（1874）年の廃藩置県に至っている。

※本章は，『茨城県教育財団文化財調査報告』第325・364・367・368集を参照し，若干の加筆をしたものである。なお，文中の〈　〉内の番号は，第１図及び表１の該当番号と同じである。

註

１）大山年次監修『茨城県　地質のガイド』コロナ社　1977年８月

２）ａ　茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図（地名表編・地図編）』茨城県教育委員会　2001年３月

b　茨城県つくば市教育委員会『つくば市遺跡分布調査報告書－谷田部地区・桜地区』 2001 年３月

３）a　成島一也「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ　中原遺跡１」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 155 集　2000 年３月

b　成島一也・宮田和男「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　中原遺跡２」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 159 集　2000 年３月

c　高野節夫・白田正子・仲村浩一郎・島田和宏「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ　中原遺跡３」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 170 集　2001 年３月

d　駒澤悦郎「東岡中原遺跡４　中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅷ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 251 集　2005 年３月

４）真貝理香「遺跡の位地と環境」『国指定史跡上高津貝塚Ａ地点』慶應義塾大学文学部民族学・考古学研究室小報９　1994 年３月

５）高根信和・加藤雅美・小河邦男「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告Ⅹ』 1981 年３月

６）a　川上直登・長谷川聡・大塚雅昭「上野陣場遺跡　中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 182 集　2002 年３月

b　川井正一・齋藤和浩「上野陣場遺跡２　中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告第XI」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 323 集　2009 年３月

７）a　三谷正・大塚雅昭・桑村裕「上野古屋敷遺跡１　中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅸ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 285 集　2007 年３月

b　川井正一「上野古屋敷遺跡２　中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅹ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 307 集　2008 年３月

c　川井正一・齋藤和浩「上野古屋敷遺跡３　中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XII」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 324 集　2009 年３月

d　櫻井完介・江原美奈子「上野古屋敷遺跡４　中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XIV」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 334 集　2010 年３月

８）前田潮編「「古霞ヶ浦湾」沿岸貝塚の研究」『筑波大学先史学・考古学研究調査報告』Ⅵ　1991 年３月

９）a　佐藤孝雄・大内千年編『国指定史跡上高津貝塚Ａ地点－史跡整備事業に伴う発掘調査報告－』土浦市教育委員会　1994 年３月

b　塩谷修編『国指定史跡上高津貝塚Ｅ地点－史跡整備事業に伴う発掘調査報告－』土浦市教育委員会　2000 年３月

c　石川功・福田礼子編『国指定史跡上高津貝塚Ｃ地点－史跡整備事業に伴う発掘調査報告－』土浦市教育委員会　2006 年３月

10）a　川村満博「（仮称）中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　中谷津遺跡１」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 139 集　1998 年９月

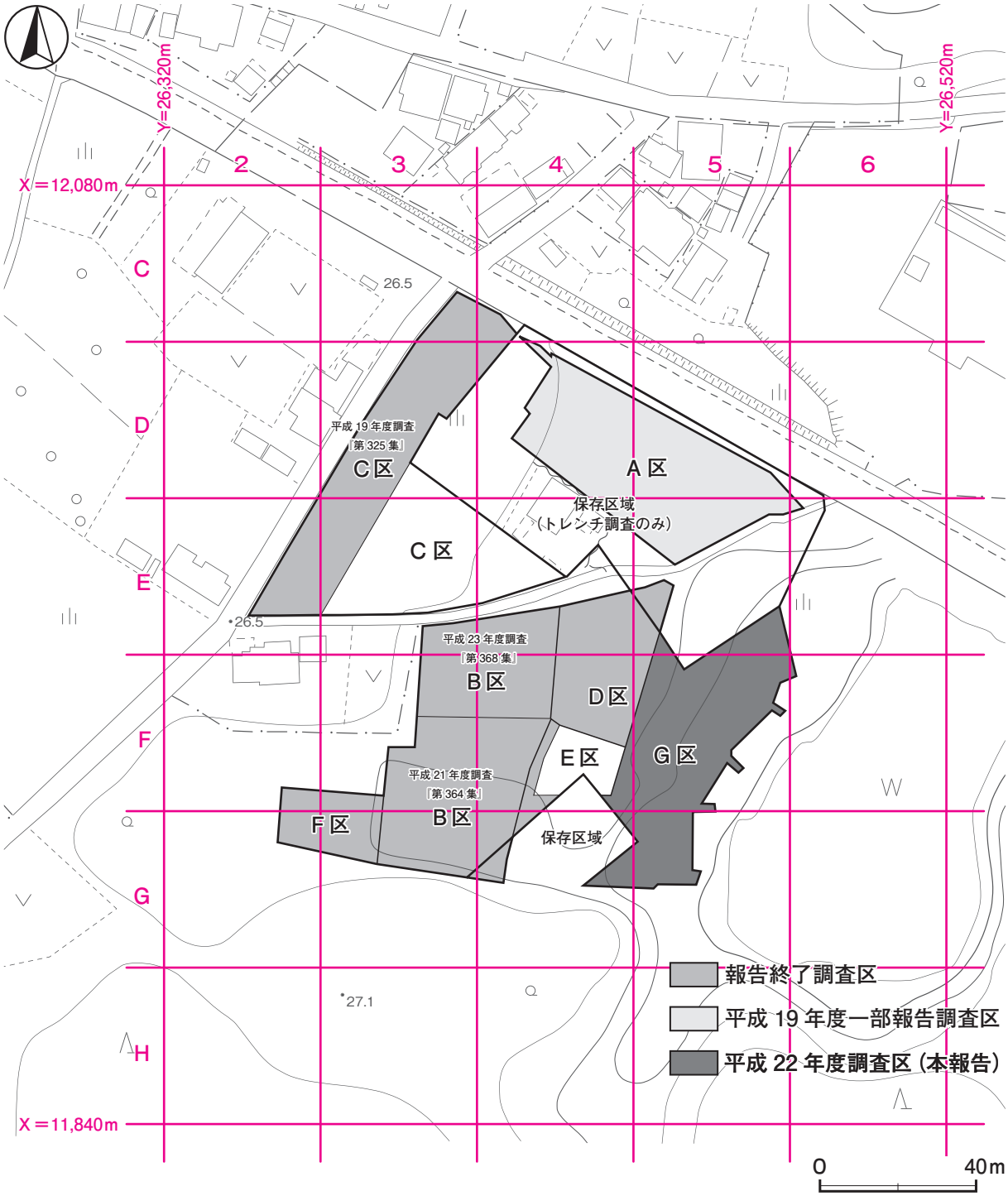
b　荒蒔克一郎「中根中谷津遺跡２　中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XVII」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 367 集　2013 年３月

11）a　白田正子『九重東岡廃寺確認調査報告書１』財団法人茨城県教育財団　2001 年３月

b　白田正子「金田西遺跡・金田西坪Ｂ遺跡・九重東岡廃寺　中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 209 集　2003 年３月

12）a　土生朗治「研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅲ）　柴崎遺跡Ⅲ区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 72 集　1992 年３月

b　萩野谷悟「研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅳ）　柴崎遺跡Ⅱ区・Ⅲ区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 93 集　1994 年３月



第２図　上境旭台貝塚調査区設定図（「つくば市都市計画基本図」2,500 分の 1 から作成）

第３章　調　査　の　成　果

第１節　調　査　の　概　要

上境旭台貝塚は，桜川右岸の低地から入り込む谷津の北岸に位置し，標高 21 ～ 27 ｍほどの台地上及び台地縁辺部に立地している。遺跡の範囲は南北 150 ｍ，東西 200 ｍほどであり，調査前の現況は，畑地，山林，宅地で，地表面の観察により調査区内の台地縁辺に沿って貝の散布が認められていた。今回の調査は，平成 19 年度から６次にわたって断続的に調査されたうちの，平成 22 年度に行われた第５次調査で，調査区全体の中では南東部にあたる。道路や調査順により便宜的に分けられたＡ～Ｇ区のうちの，Ｇ区であり，調査面積は 1,937㎡である。

今回の調査では，縄文時代の竪穴建物跡１棟，陥し穴１基，土坑 35 基，柱穴列１条，溝跡５条，ピット群１か所，斜面貝層３か所，地点貝塚４か所，遺物集中地点２か所，遺物包含層２か所，時期不明の溝跡２条を確認し，縄文時代の斜面貝層を含む集落跡であることが分かった。

遺物は，遺物収納コンテナ（60 × 40 × 20㎝）に 236 箱出土している。出土遺物は，縄文土器（深鉢，鉢，浅鉢，台付鉢，台付土器，異形台付土器，壺，注口土器，蓋，ミニチュア土器，手捏土器，把手付土器，釣手土器，手燭形土器，製塩土器），土製品（土玉，土錘，垂飾品，耳飾り，土版，土偶，海獣形土製品ヵ，円盤，土器片錘，土器片円盤），石器（鏃，打製石斧，磨製石斧，石匙，石皿，磨石，敲石，石錘，凹石，ヘラ状石器，砥石），石製品（小玉，円盤，石版，石棒，石剣，独鈷石，石冠），石核，剥片，骨角製品（髪飾り，刺突具），貝製品（貝輪，貝刃，有孔装身具）のほか，動物遺体（貝殻，獣骨，鳥骨，魚骨），自然遺物（センダン，トチ，クルミ，エゴ）などである。

第２節　基　本　層　序

今回（平成 22 年度）の調査では，斜面部の最も低いＧ区の南部（Ｇ５b1 区）にテストピット４を設定し，基本土層（第３図）の観察を行った。平成 19 年度の調査において，台地上のＣ区の西部（Ｄ３j8 区）にテストピット１が，谷津に向かう斜面部のＢ区の東部（Ｆ４g5 区）にテストピット２，西部（Ｆ３f6 区）にテストピット３が設定されている。台地上，斜面部，谷部との比高及び層位の変化を確認するために，４地点の土層を併記することとした。

今回設定したテストピット４は，表土下 2.5 ｍまで掘り下げて基本層序の確認を行った。色調・構成粒子・含有物・粘性などから８層に細分でき，観察結果は以下のとおりである。

第１層は，暗褐色を呈する耕作土層である。ロームブロックを少量，焼土粒子･炭化粒子を微量含み，粘性･締まりともに普通で，層厚は 15 ～ 20㎝である。

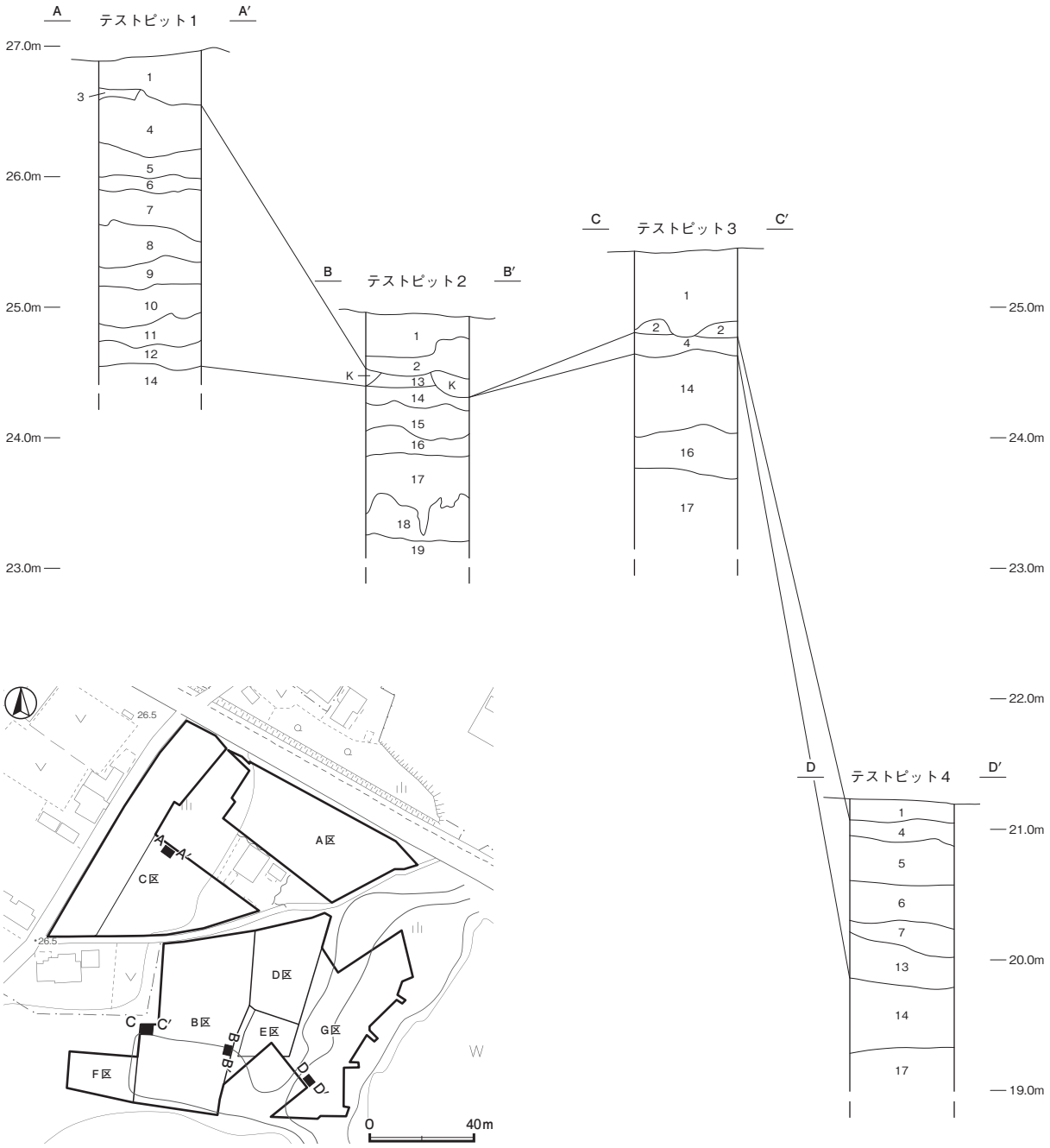
第４層は，暗褐色を呈するローム層への漸移層である。土器を少量含み，粘性・締まりともに普通で，層厚は 10 ～ 15㎝である。

第５層は，褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりは普通で，層厚は 30 ～ 40㎝である。

第６層は，褐色を呈するハードローム層である。締まりは強く，層厚は 35 ～ 40㎝である。

第７層は，褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに強く，層厚は 30 ～ 40㎝である。

第 13 層は，黄褐色を呈する粘土層への漸移層である。細礫を微量含み，粘性が強く，層厚は 20 ～ 30㎝である。



第３図　基本土層図

第 14 層は，灰白色を呈する粘土層である。細礫・砂粒を微量含んでいる。粘性・締まりともに強く，層厚は 45 ～ 80㎝である。

第 17 層は，青灰色を呈する粘土層である。細礫・砂粒を少量含み，下部は湧水により未掘のため，層厚は不明である。

遺構は主に第４層の上面で確認できる。台地上と谷部の比高は，ローム漸移層上で，5.6 mほどである。

第３節　遺 構 と 遺 物

１　縄文時代の遺構と遺物

今回の調査で確認した当時代の遺構は，竪穴建物跡１棟，陥し穴１基，土坑 35 基，柱穴列１条，溝跡５条，ピット群１か所，斜面貝層３か所，地点貝塚４か所，遺物集中地点２か所，遺物包含層２か所である。以下，それぞれの遺構の特徴及び遺物について記述する。

⑴　竪穴建物跡

第 15 号竪穴建物跡（第４・５図）

位置　調査区北部のＥ５i9 区，標高 21 ｍほどの緩やかな斜面部に位置している。

重複関係　第４号包含層を掘り込んで構築され，第 197 号土坑に掘り込まれている。確認面では貝の散布や焼土・炭化材の広がりが見られた。覆土が削平を受けているため，土層の堆積状況による確認はできないが，第２号地点貝塚及び第１号遺物集中地点が本跡の上層に広がっていたものと推測できる。

規模と形状　北西部が調査区域外に延びており，長径は 5.13 ｍで，短径は 4.14 ｍのみを確認した。平面形は円形または楕円形で，主軸方向はＮ－ 17°－Ｅと推定できる。南西部に出入り口とみられる張り出し部が認められる。確認できた壁は高さ４～ 58㎝で，ほぼ直立している。

床　平坦な貼床で，硬化面は認められない。北部の調査区域際で，幅約 15㎝，長さ約 60㎝にわたって帯状に広がる焼土を確認した。貼床は，低い部分に焼土・炭化粒子を含む黒褐色を埋土して，上面の高さをほぼ均一に構築している。

炉　中央部に付設されている。撹乱を受けているため，長径 142㎝のみを確認した。平面形は円形または楕円形と推定でき，床面を 20㎝ほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。第３・４層は炉床の構築土である。

炉土層解説

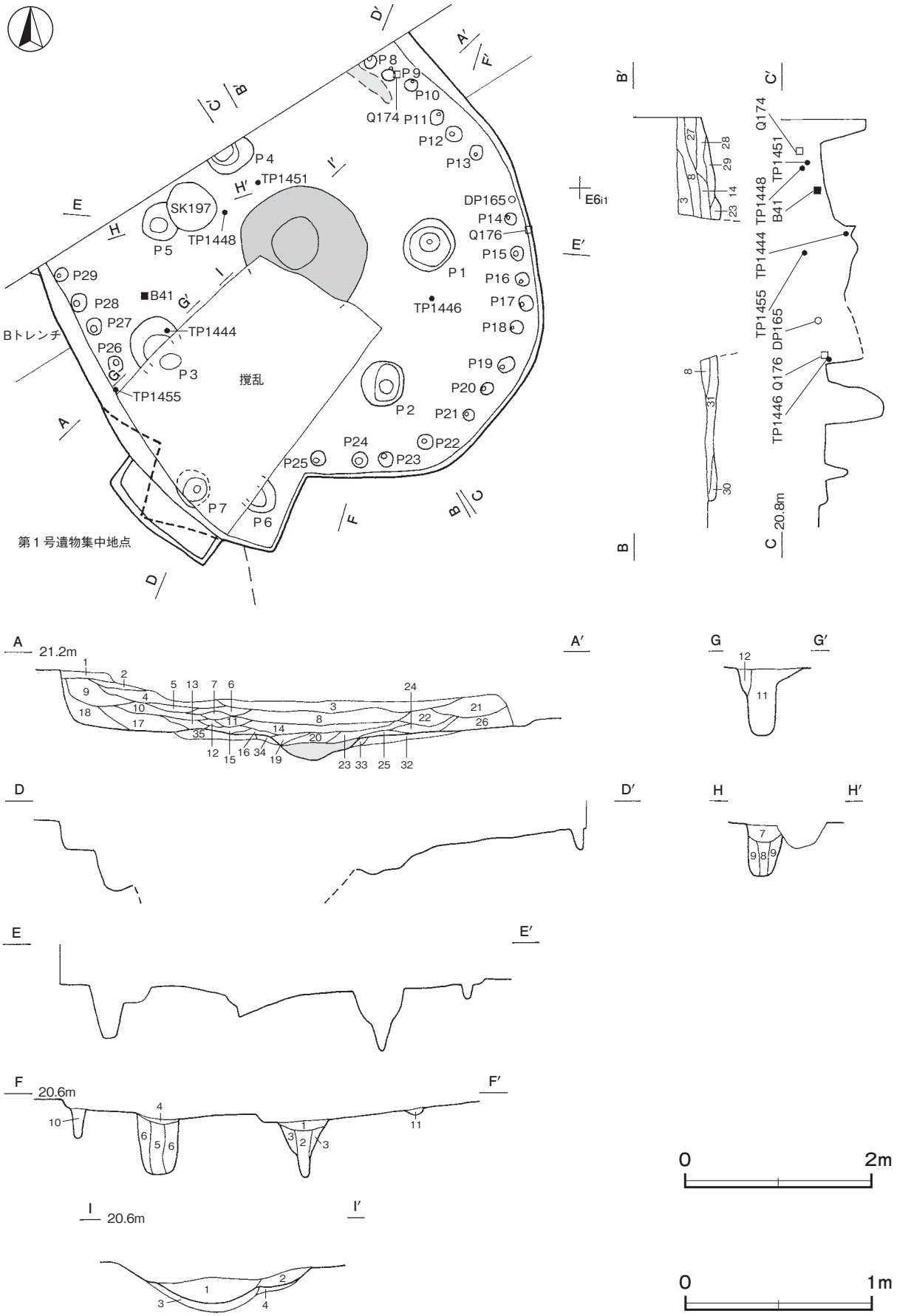
1	灰　褐　色	灰多量，焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	
2	黒　褐　色	灰中量，焼土ブロック・炭化物・ローム粒子少量	
3	黒　褐　色	焼土粒子中量，炭化物少量，ローム粒子・灰微量	
4	黒　褐　色	ロームブロック・炭化物少量，焼土粒子微量	

ピット　29 か所。Ｐ１～Ｐ４は，深さが約 50 ～ 70㎝で径が約 50 ～ 60㎝と大きく，配置状況から主柱穴と考えられる。Ｐ５は深さが約 60㎝で径が約 40㎝とやや大きく，Ｐ３とＰ４の間に位置することから補助柱穴と考えられる。Ｐ６・Ｐ７は深さが約 20・50㎝で径がともに約 40㎝で，南西部の張り出し部分に位置していることから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。Ｐ８～Ｐ 29 は深さが約５～ 30㎝で径がそれぞれ約 20㎝で，壁下に巡るように配置されていることから壁柱穴と考えられる。ピットの覆土はいずれも黒褐色で，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子が微量含まれているものが多い。

ピット土層解説

1	黒　色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・中礫微量
2	黒　褐　色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・細礫微量
3	黒　褐　色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
4	黒　色	炭化粒子少量，焼土ブロック・ローム粒子・細礫微量
5	黒　褐　色	炭化物少量，ローム粒子・焼土粒子・細礫微量
6	黒　褐　色	ローム粒子・炭化粒子・細礫微量
7	黒　色	焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子・細礫微量
8	黒　褐　色	ローム粒子・焼土粒子微量
9	黒　褐　色	ローム粒子・炭化粒子微量
10	黒　色	ローム粒子・細礫微量
11	黒　褐　色	炭化物・焼土粒子中量，中礫少量，ローム粒子微量
12	黒　褐　色	ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子・骨粉微量

覆土　35 層に分層できる。 本跡の廃絶後に北西側から南東方向に向けて，多量の土器片を包含する焼土・炭化粒子などを含む黒褐色土が投げ込まれたように堆積していることから，埋め戻されている。第 32 ～ 35 層は貼床の構築土である。



第４図　第 15 号竪穴建物跡実測図

土層解説

1　黒　　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・破砕貝微量
2　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・破砕貝微量
3　黒　　色　焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子・破砕貝微量
4　黒　褐　色　焼土粒子少量，炭化物・ローム粒子・破砕貝微量
5　暗　褐　色　焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子微量
6　黒　褐　色　焼土ブロック・炭化粒子少量，ローム粒子・破砕貝微量
7　黒　褐　色　焼土粒子中量，炭化粒子・破砕貝少量
8　黒　　色　焼土ブロック・炭化粒子少量，ロームブロック・破砕貝・中礫微量
9　黒　褐　色　焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・破砕貝・細礫微量
10　黒　褐　色　炭化物中量，焼土ブロック少量，ロームブロック・中礫微量
11　にぶい赤褐色　灰多量，焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子微量
12　黒　　色　焼土ブロック・炭化粒子中量，ローム粒子微量
13　黒　　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・細礫微量
14　黒　　色　ロームブロック・炭化粒子少量，ローム粒子・破砕貝・骨片微量
15　黒　褐　色　炭化材・焼土粒子少量，ローム粒子微量
16　黒　褐　色　焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・細礫微量
17　黒　褐　色　炭化物少量，ローム粒子・焼土粒子・骨片・中礫微量
18　黒　褐　色　炭化粒子少量，焼土ブロック・ローム粒子・細礫微量
19　黒　褐　色　焼土ブロック少量，ローム粒子・灰微量
20　黒　　色　炭化物少量，焼土ブロック・ローム粒子微量
21　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子・破砕貝微量
22　黒　褐　色　焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量，ローム粒子・破砕貝微量
23　暗　褐　色　灰中量，炭化粒子少量，ローム粒子・焼土粒子微量
24　黒　　色　焼土ブロック少量，ローム粒子・細礫微量
25　黒　　色　焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子・骨片微量
26　黒　褐　色　焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量，ローム粒子・骨片・細礫微量
27　黒　褐　色　細礫少量，ローム粒子・炭化粒子微量
28　にぶい赤褐色　ロームブロック多量，炭化粒子・灰少量
29　黒　褐　色　焼土ブロック中量，炭化粒子・灰少量，ローム粒子微量
30　黒　褐　色　焼土ブロック・炭化粒子中量，ローム粒子微量
31　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・骨片微量
32　黒　褐　色　焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子・灰微量
33　黒　褐　色　焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量，ローム粒子・細礫微量
34　黒　褐　色　焼土粒子・炭化粒子・細礫少量，ローム粒子微量
35　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　縄文土器片 2,329 点，土製品３点（土器片円盤２，不明１），石器２点（磨石），石製品１点（石剣），骨角製品１点（髪飾り），剥片１点（チャート）のほか，イノシシ・シカを主体とした獣骨，貝（ヤマトシジミ 68.2g，アカニシ 86.6g）が，北西部の調査区域際の覆土上層から，南東部の床面にかけて出土している。TP1444 ～ TP1456 は全て小破片であり，DP165・DP166 やＱ 174 ～Ｑ 176，Ｂ 41 もそれぞれ欠けているものがほとんどであり，竪穴建物の廃絶後，上層の北西側から谷側の本跡に向けて埋土とともに投棄されたものと考えられる。

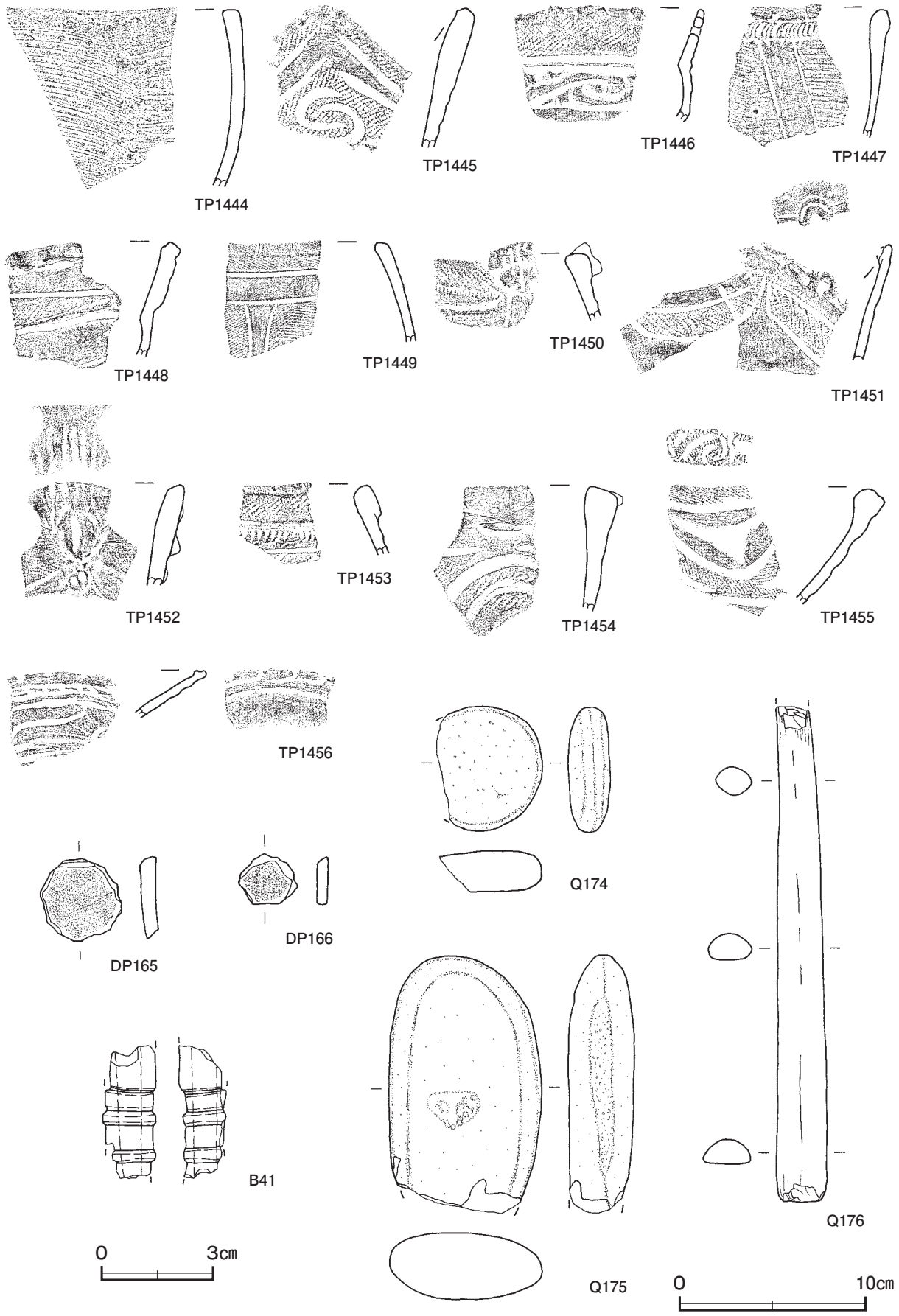
所見　第４号包含層中に形成された竪穴建物跡である。覆土中に獣骨や若干の破砕貝が含まれているが，建物の廃絶後の埋土とともに投棄されたとみられる。出土土器は後期後葉の安行１式から晩期前葉の安行３ｂ式まで確認できるが，最も新しい安行３ｂ式を中心に出土していることから，晩期前葉と考えられる。

表２　第 15 号竪穴建物跡ピット計測表

番号	深さ(cm)	番号	深さ(cm)	番号	深さ(cm)	番号	深さ(cm)	番号	深さ(cm)	番号	深さ(cm)	番号	深さ(cm)	番号	深さ(cm)
Ｐ１	68	Ｐ５	55	Ｐ９	10	Ｐ13	11	Ｐ17	26	Ｐ21	21	Ｐ25	24	Ｐ29	19
Ｐ２	68	Ｐ６	20	Ｐ10	15	Ｐ14	17	Ｐ18	23	Ｐ22	30	Ｐ26	20		
Ｐ３	67	Ｐ７	54	Ｐ11	9	Ｐ15	19	Ｐ19	18	Ｐ23	23	Ｐ27	31		
Ｐ４	45	Ｐ８	10	Ｐ12	5	Ｐ16	24	Ｐ20	23	Ｐ24	17	Ｐ28	26		

第 15 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第５図）

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1444	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→条線文　内面磨き	Ｐ３覆土中層	
TP1445	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	波状口縁　口唇部ナデ→条線文　内面磨き	覆土中	PL15
TP1446	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	貼瘤→沈線文→縄文 LR →口縁部双方向からの穿孔　内面磨き	床面	PL15
TP1447	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰褐	普通	口唇部ナデ→口縁部紐線貼付→沈線文　条線文→無文部磨き内面ナデ	覆土中	
TP1448	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	口唇部紐線貼付→沈線文→縄文 LR →無文部磨き　内面磨き	覆土中層	
TP1449	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰褐	普通	沈線文→条線文→無文部磨き　内面磨き	覆土中	
TP1450	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	貼瘤→沈線文→隆帯下刺突文→縄文 RL　内面磨き	覆土中	



第５図　第 15 号竪穴建物跡出土遺物実測図

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1451	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	波状口縁　貼瘤→沈線文→縄文 RL →無文部磨き　内面磨き	覆土中層	
TP1452	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	浅黄橙	普通	沈線文→刻み目→貼瘤→縄文 RL　内面磨き	覆土中	
TP1453	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	沈線文→三叉文→縄文 LR　内面磨き	覆土中	
TP1454	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	沈線→縄文 LR →無文部磨き　内面磨き	覆土中	
TP1455	縄文土器	浅鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐灰	普通	沈線文　三叉文→刻み目　縄文 RL →無文部磨き　内面磨き	覆土中層	PL15
TP1456	縄文土器	浅鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	沈線文→無文部磨き　内面磨き	覆土中	PL15

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	色調・胎土	特　　徴	出土位置	備　考
DP165	土器片円盤	4.5	4.4	1.0	21.7	黒褐 長石・石英・赤色粒子	周縁部粗割り	覆土下層	
DP166	土器片円盤	2.7	3.2	0.65	7.20	黒褐 長石・石英・赤色粒子	周縁部粗割り	覆土中	

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q174	磨石	6.8	(5.7)	2.2	(113.2)	凝灰岩	一部欠損　表・裏面使用	覆土中層	
Q175	磨石	(13.9)	8.3	3.6	(650.3)	安山岩	一部欠損　表・裏面使用	覆土中	
Q176	石剣	(26.7)	2.7	1.5	(193.9)	安山岩	片側端部欠損　研磨整形	床面	PL24

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
B 41	髪飾り	(3.6)	1.4	1.3	(3.31)	鹿角	研磨調整　孔径 0.5 ～ 0.7cm	覆土下層	PL25

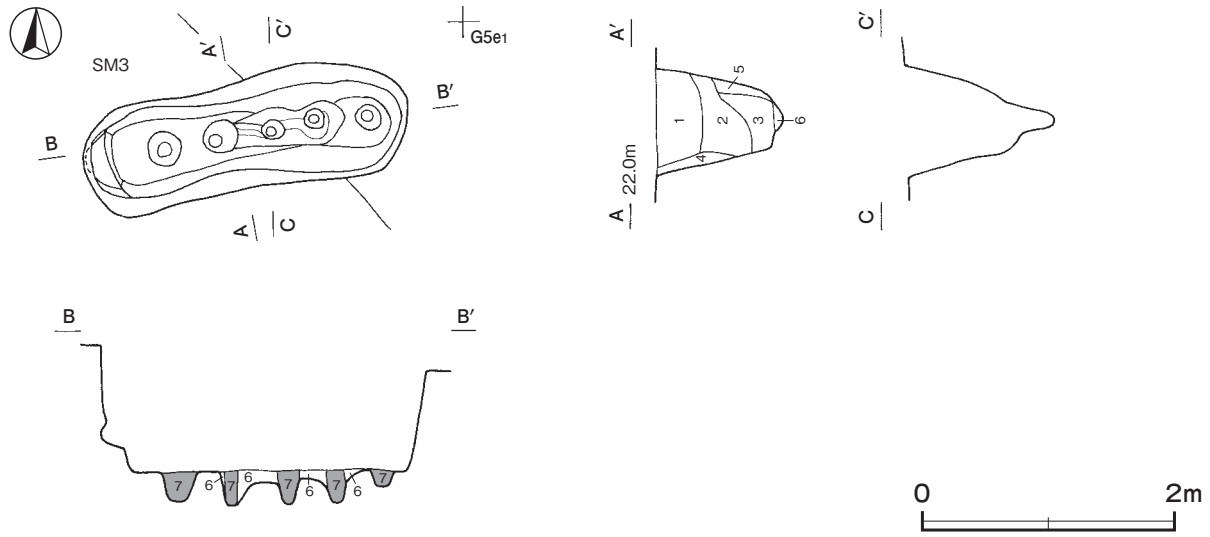
(2)　陥し穴

第２号陥し穴（第６図）

位置　調査区南部のＧ４e0 区，標高 22 mほどの台地上から谷に向かう斜面部に位置している。

重複関係　第５号包含層を掘り込み，上層に第３号貝層が形成されている。

規模と形状　長径 2.56 m，短径 0.92 mの楕円形で，長径方向はＮ－ 81 °－Ｅである。深さは 82 ～ 100cmで，底面は平坦である。西・東壁は直立し，北・南壁はほぼ直立している。底面には，ほぼ等間隔に並んだピット状の掘り込み５か所が確認でき，逆茂木が立てられていた痕跡と考えられる。



第６図　第２号陥し穴実測図

覆土　７層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから，自然堆積である。第４・５層は壁の崩落土，第６層は逆茂木敷設時の埋土，第７層は柱痕跡である。

土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子・粘土粒子少量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量，粘土粒子少量
3　暗　褐　色　ローム粒子少量，粘土粒子微量
4　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子・粘土粒子少量
5　褐　　色　ローム粒子中量
6　オリーブ褐色　粘土粒子多量，中礫中量，ローム粒子微量
7　暗　褐　色　粘土粒子少量，ローム粒子微量

所見　時期は，出土遺物がないため明確ではないが，遺構が小動物を追い込むのに適している位置に所在することや，形状の特徴及び重複関係から後期後葉から晩期前葉と考えられる。

(3)　土坑

今回の調査で，縄文時代の土坑 35 基を確認した。以下，遺構･遺物の特徴について記述するが，ここでは，覆土の堆積状況や出土遺物が特徴的な 11 基について取り上げて解説する。その他の 24 基については，出土遺物や遺存状況などの制約から時期判断が困難であるが，出土遺物，形状，重複関係，覆土の様相などの総合的な見地から当時代に帰属するものと判断できる。規模・形状などについては一覧表（表５）で，平面図・土層断面図（第 24・25 図）・土層解説については遺構順に掲載する。

第 180 号土坑（第７図）

位置　調査区中央部のＦ５f6 区，標高 22 mほどの谷に向かう斜面部に位置している。

規模と形状　長径 0.50 m，短径 0.42 mの楕円形で，長径方向はＮ－45°－Ｅである。深さは 24㎝，底面は皿状で，壁は外傾している。

覆土　単一層である。ローム粒子，炭化粒子，粘土粒子などが混在していることから，短時間で埋め戻されたと考えられる。

土層解説

1　暗　褐　色　粘土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子・砂粒少量

遺物出土状況　縄文土器片 18 点が出土している。出土土器はいずれも小破片で，TP1458・TP1459 は覆土中層，TP1457 は覆土中からそれぞれ出土していることから，埋土とともに投棄されたと考えられる。

第７図　第 180 号土坑・出土遺物実測図

所見　時期は，出土土器の特徴から後期後葉と考えられ，第４号包含層の形成時期とあまり差はないものとみられる。

第 180 号土坑出土遺物観察表（第７図）

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1457	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口縁部紐線貼付→条線文　内面ナデ	覆土中	
TP1458	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部ナデ→斜位の条線文　内面ナデ	覆土中層	
TP1459	縄文土器	浅鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口唇部ナデ→斜位の条線文　内面ナデ	覆土中層	

第 185 号土坑（第８図）

位置　調査区中央部のＦ５h4 区，標高 21 ｍほどの谷に向かう斜面部に位置している。

重複関係　第５号包含層を掘り込んでいる。

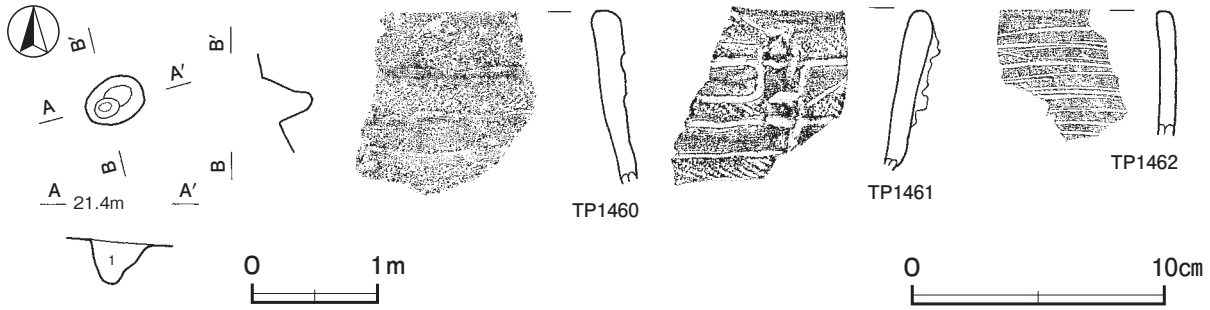
規模と形状　長径 0.46 ｍ，短径 0.36 ｍの楕円形で，長径方向はＮ－ 53°－Ｅである。深さは 34㎝，底面は平坦で，壁は外傾している。

覆土　単一層である。粘土ブロックや中礫などを含んでいることから，埋め戻されている。

土層解説
1　にぶい黄褐色　粘土ブロック・中礫・砂粒中量，ローム粒子微量

遺物出土状況　縄文土器片 12 点が出土している。TP1460 ～ TP1462 はいずれも破片で，覆土中からそれぞれ出土していることから，埋土とともに投棄されたものとみられる。

所見　時期は，出土土器から後期後葉から晩期前葉と考えられる。



第８図　第 185 号土坑・出土遺物実測図

第 185 号土坑出土遺物観察表（第８図）

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1460	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→平行沈線→縄文 LR →無文部磨き　内面磨き	覆土中	
TP1461	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	貼瘤→隆帯下沈線文→縄文 RL →無文部磨き　内面磨き	覆土中	
TP1462	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口唇部ナデ→横位の条線文　内面ナデ	覆土中	

第 193 号土坑（第９・10 図）

位置　調査区北部のＥ６i1 区，標高 20 ｍほどの緩やかな斜面部に位置している。

重複関係　第４号包含層を掘り込んでいる。

規模と形状　Ａトレンチで削平されているため，長径は 1.60 m，確認できた短径は 1.36 mの楕円形で，長径方向はＮ－５°－Ｅと推定できる。深さは 48㎝，底面は平坦で，壁は外傾している。

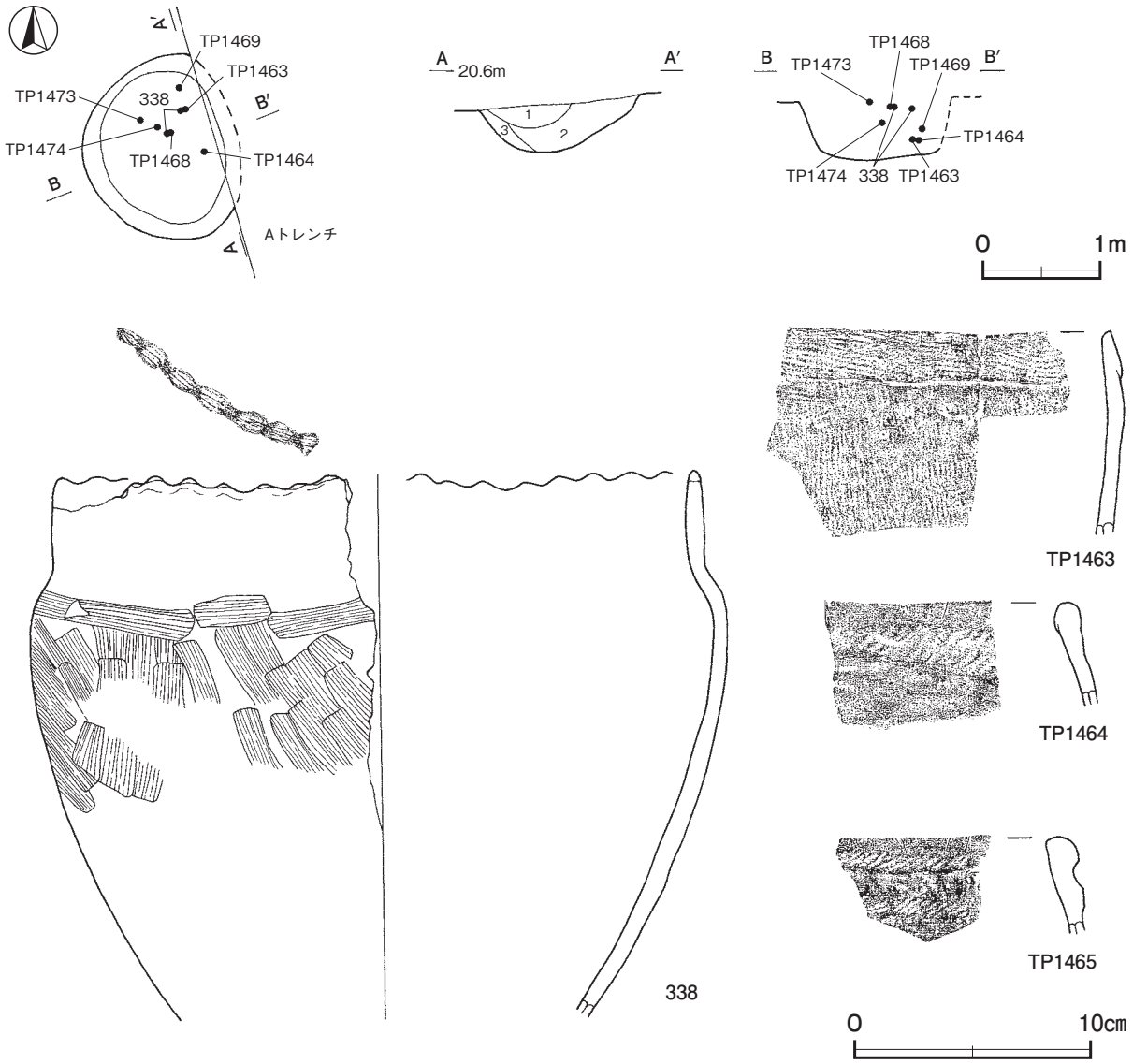
覆土　３層に分層できる。焼土ブロックや炭化物などが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説

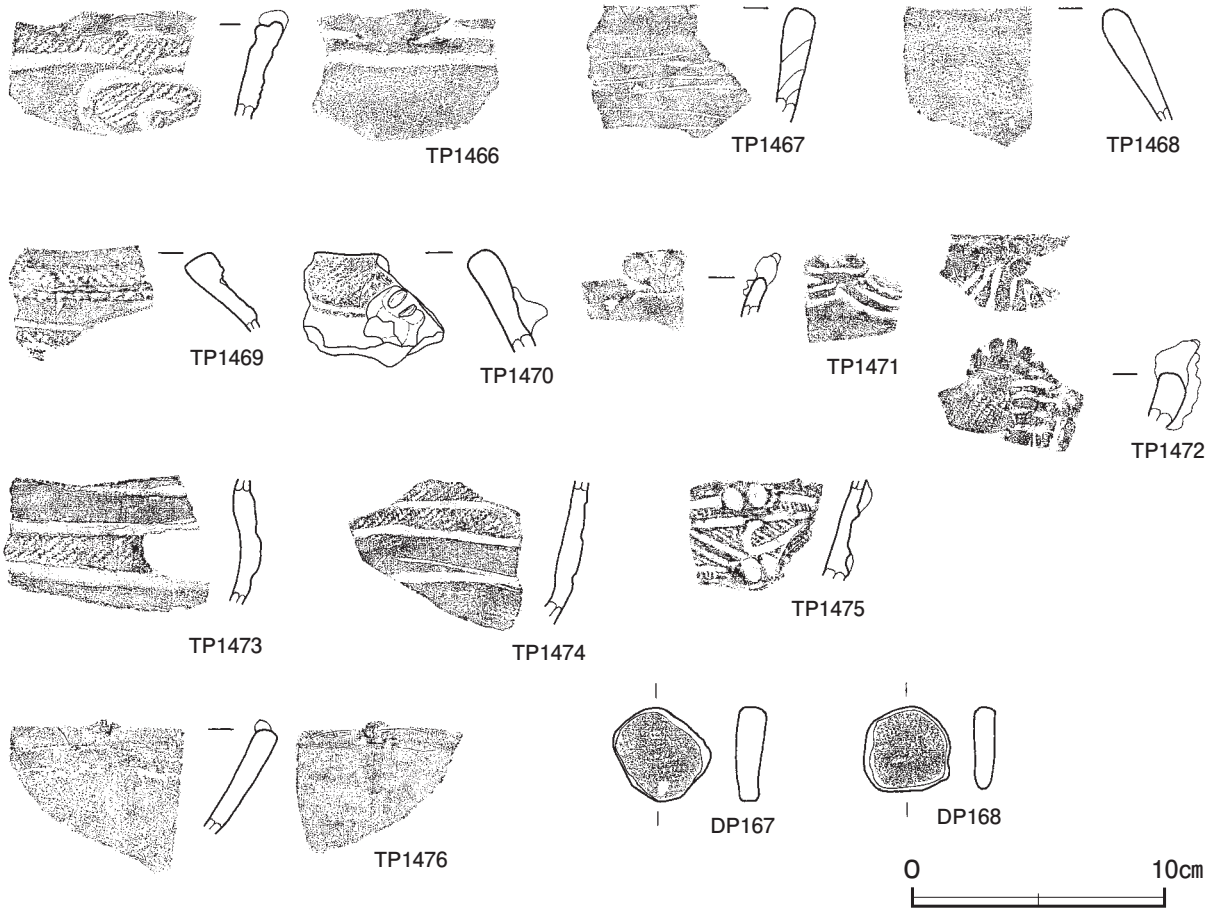
１　黒　　色　焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・中礫微量
２　黒　褐　色　焼土ブロック・炭化物少量，ローム粒子・中礫微量
３　黒　褐　色　炭化粒子・細礫少量，ローム粒子・焼土粒子微量

遺物出土状況　縄文土器片 374 点，土製品２点（土器片円盤），剥片２点（チャート）が，中央部の覆土上層から中層にかけて集中して出土している。338，TP1463 ～ TP1476，DP167・DP168 は，いずれも破片または小破片であり，埋土とともに投棄されたとみられる。

所見　本跡は，覆土の堆積状況及び遺物の出土状況から，本来の機能を終えてから廃棄土坑として再利用された可能性がある。時期は，出土土器の特徴から後期後葉から晩期前葉と考えられる。



第９図　第 193 号土坑・出土遺物実測図



第 10 図　第 193 号土坑出土遺物実測図

第 193 号土坑出土遺物観察表（第 9 ・10 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
338	縄文土器	深鉢	［27.0］	（23.0）	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部波状に押圧→櫛歯状工具によるナデ調整 内面ナデ	覆土上層	20%　PL11

番号	種　別	器種	胎　土	色　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1463	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部折り返し→口縁部横位の条線文→胴部縦位の条線文 内面ナデ	覆土下層	
TP1464	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →沈線文　内面磨き	覆土下層	
TP1465	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→隆帯縄文 LR →無文部磨き　内面磨き	覆土中	
TP1466	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	縄文 LR →沈線文→無文部磨き　口縁部内面横位の沈線 内面磨き	覆土中	
TP1467	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→横位の条線文　内面ナデ	覆土中	
TP1468	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ　外面磨滅顕著　内面ナデ	覆土上層	
TP1469	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→隆帯縄文 RL →隆帯下押引文→無文部磨き 内面磨き	覆土中層	
TP1470	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→隆帯縄文 LR →貼瘤→無文部磨き　内面磨き	覆土中	
TP1471	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→口唇部貼瘤　口縁部内面紐線貼付　内面磨き	覆土中	
TP1472	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →貼瘤→刻み目　内面磨き	覆土中	
TP1473	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	隆帯縄文 LR →隆帯下沈線→無文部磨き　内面磨き	覆土上層	
TP1474	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	縄文 LR →横位の平行沈線→無文部磨き　内面磨き	覆土中層	
TP1475	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄橙	普通	縄文 RL →沈線文→貼瘤→隆帯刻み目→無文部磨き　内面ナデ	覆土中	
TP1476	縄文土器	浅鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	口唇部ナデ→口唇部貼瘤　内面ナデ	覆土中	

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	色調・胎土	特　　徴	出土位置	備　考
DP167	土器片円盤	3.8	3.9	1.2	16.2	橙 長石・石英・赤色粒子	周縁部粗割り後研磨調整	覆土中	
DP168	土器片円盤	3.3	3.4	0.9	11.2	橙 長石・石英	周縁部粗割り後研磨調整	覆土中	

第 194 号土坑（第 11 図）

位置　調査区南西部のＦ５i2 区，標高 22 mほどの谷に向かう斜面部に位置している。

重複関係　第５号包含層を掘り込み，本跡が機能を終えて埋め戻された後，上層に第３号地点貝塚が形成されている。

規模と形状　長径 0.62 m，短径 0.42 mの楕円形で，長径方向はＮ－ 50゜－Ｗである。深さは 44㎝，底面は平坦で，壁は外傾している。

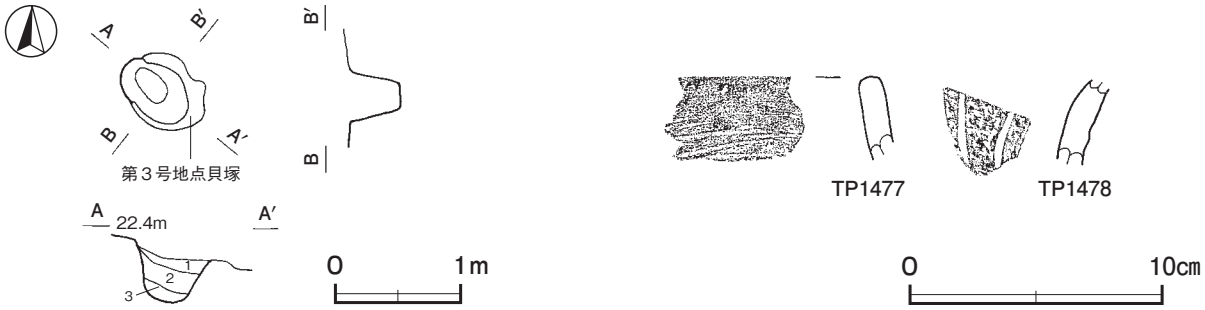
覆土　３層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから，自然堆積である。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子・破砕貝少量，粘土粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子・粘土粒子少量，焼土粒子微量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量

遺物出土状況　縄文土器片４点が覆土中から出土している。TP1477・TP1478 は，いずれも小片で，第５号包含層からの流れ込みと考えられる。

所見　時期は，第３号地点貝塚が形成される以前で，出土土器の特徴から第５号包含層の形成とあまり時期差のない後期と考えられる。



第 11 図　第 194 号土坑・出土遺物実測図

第 194 号土坑出土遺物観察表（第 11 図）

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1477	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	口唇部ナデ→横位のヘラ磨き　内面磨き	覆土中	
TP1478	縄文土器	深鉢	石英	にぶい褐	普通	縦位の沈線文　内面ナデ	覆土中	

第 196 号土坑（第 12 図）

位置　調査区南西部のＦ５j3 区，標高 21 mほどの谷に向かう斜面部に位置している。

重複関係　第５号包含層を掘り込み，廃絶後上層に遺物包含層が連続している。

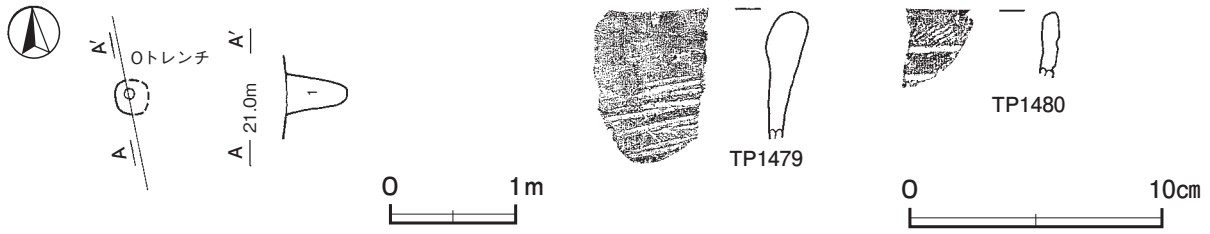
規模と形状　東側をＯトレンチで削平されているため，径 0.28 mの円形と推定できる。深さは 50㎝，底面は平坦で，壁は外傾している。

覆土　単一層である。周囲からの流入による堆積状況を示していることから，自然堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　砂粒少量，ローム粒子・焼土粒子微量

遺物出土状況　縄文土器片 14 点が覆土中から出土している。TP1479・TP1480 はいずれも小片で，上層の第５号包含層からの流れ込みとみられる。

所見　断面形が逆台形の比較的深い土坑である。柱穴の可能性もあるが，性格は不明である。時期は，出土土器の特徴から後期後葉に比定できる。



第 12 図　第 196 号土坑・出土遺物実測図

第 196 号土坑出土遺物観察表（第 12 図）

番号	種　別	器種	胎　土	色　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1479	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口唇部ナデ→横位の条線　内面磨き	覆土中	
TP1480	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	縄文 LR →横位の沈線→無文部磨き　内面磨き	覆土中	

第 197 号土坑（第 13 図）

位置　調査区北部のＥ５i9 区，標高 20 mほどの緩やかな斜面部に位置している。

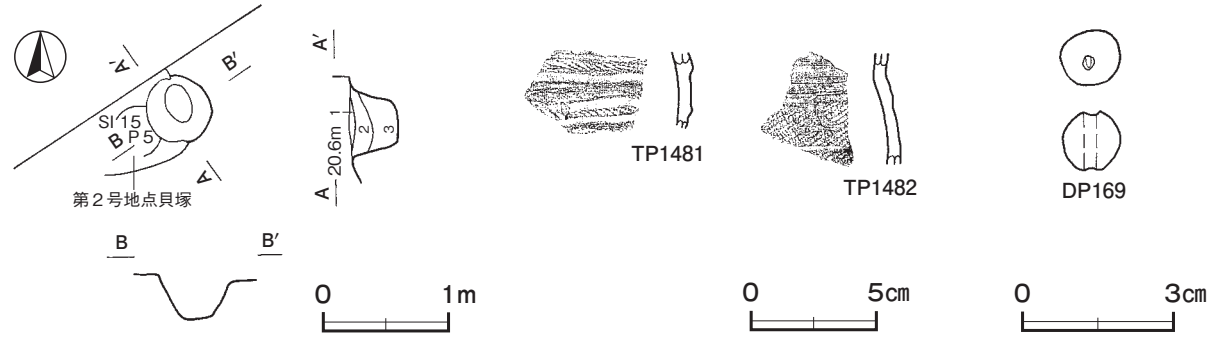
重複関係　第 15 号竪穴建物跡を掘り込み，本跡廃絶後上層に第２号地点貝塚が形成されている。

規模と形状　径 0.53 mの円形である。深さは 36㎝，底面はほぼ平坦で，壁は外傾している。

覆土　３層に分層できる。焼土ブロック，炭化物，骨片などが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説
1　赤　褐　色　焼土ブロック・炭化物・灰・破砕貝中量，ローム粒子微量
2　黒　褐　色　焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・破砕貝少量，骨片微量
3　黒　　色　ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子・細礫・骨片微量

遺物出土状況　縄文土器片 24 点，土製品１点（土玉），剥片１点（頁岩）のほか，イノシシ・シカを主体とした獣骨やスズキなどの魚骨が，覆土中から出土している。TP1481・TP1482 はいずれも小片であり，DP169 は



第 13 図　第 197 号土坑・出土遺物実測図

１点のみの出土で，装身具あるいは漁労の土錘と考えられ，それぞれ埋土とともに投棄されたものとみられる。

所見　第１・２層に焼土ブロックや骨片が含まれており，上層には第２号地点貝塚が形成されていることから，最終的には廃棄土坑として機能していた可能性が高い。時期は，出土土器の特徴から晩期前葉と考えられる。

第 197 号土坑出土遺物観察表（第 13 図）

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1481	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	灰褐	普通	縄文 RL →隆帯下横位の沈線→無文部磨き　内面磨き	覆土中	
TP1482	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	縄文 LR →沈線文→無文部磨き　内面磨き	覆土中	

番号	器　種	径	孔径	厚さ	重量	色調・胎土	特　　徴	出土位置	備　考
DP169	土玉	1.2	0.3	1.2	1.71	黒 長石・石英	ナデ調整　中央部穿孔	覆土中	PL20

第 198 号土坑（第 14 図）

位置　調査区中央部のＦ５f6 区，標高 21 mほどの谷に向かう斜面部に位置している。

重複関係　第４号包含層を掘り込んでいる。

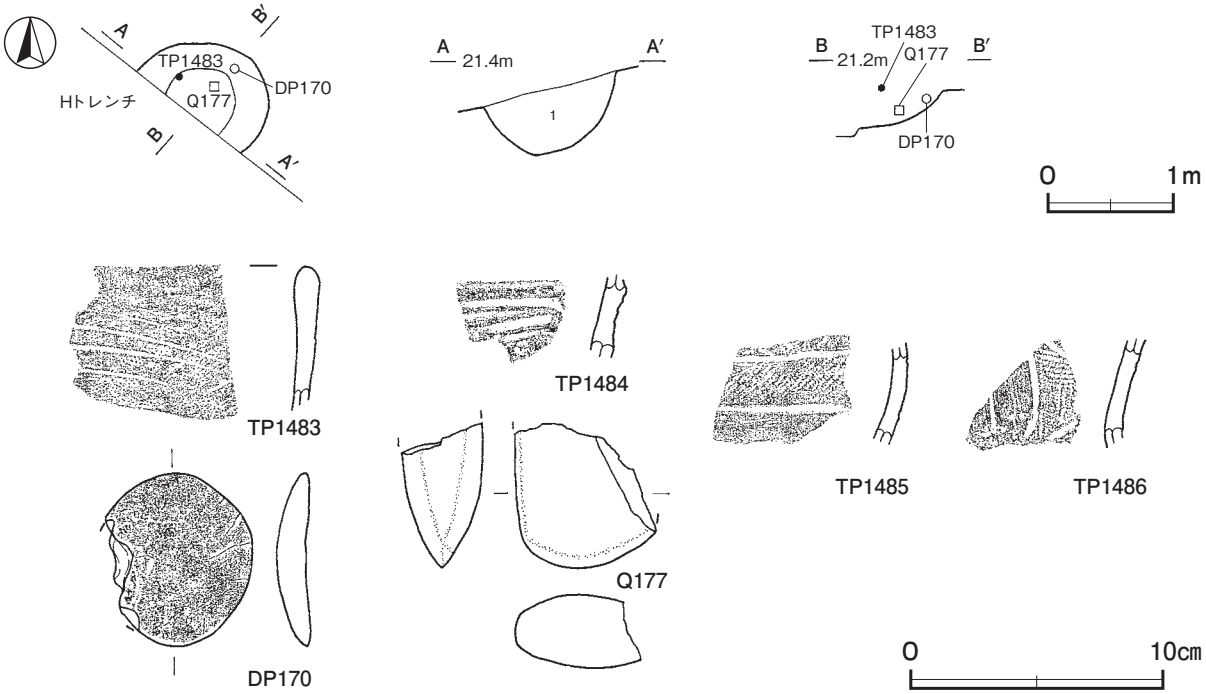
規模と形状　Ｈトレンチで削平されているため，長径は 1.16 m，確認できた短径は 0.64 mの円形または楕円形で，長径方向はＮ－ 50゜－Ｗと推定できる。深さは 52㎝，底面は皿状で，壁は外傾している。

覆土　単一層である。ロームブロックや焼土が含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説

1　黒　褐　色　砂粒中量，ロームブロック・焼土粒子・細礫微量

遺物出土状況　縄文土器片 20 点，土製品１点（円盤），石器１点（磨製石斧）が出土している。TP1483，DP170，Q 177 は覆土上層から下層にかけて，TP1484 ～ TP1486 は覆土中からそれぞれ出土しており，いずれも破片または欠損した状態で出土していることから，埋土とともに投棄されたものとみられる。



第 14 図　第 198 号土坑・出土遺物実測図

所見　覆土の堆積状況及び遺物出土状況から，廃棄土坑として使用された可能性がある。時期は，出土土器の特徴から後期後葉と考えられる。

第 198 号土坑出土遺物観察表（第 14 図）

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1483	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→弧状の条線文　内面ナデ	覆土上層	
TP1484	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	横位の沈線文　内面磨き	覆土中	
TP1485	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	縄文 LR →横位の平行沈線→無文部磨き　内面磨き	覆土中	
TP1486	縄文土器	深鉢	長石・石英	明褐色	普通	縄文→沈線文→無文部磨き　内面磨き	覆土中	

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	色調・胎土	特　　徴	出土位置	備　考
DP170	円盤	6.9	(5.8)	1.3	(46.2)	にぶい橙 長石・石英・赤色粒子	ナデ調整　断面三日月形	覆土下層	PL20

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q177	磨製石斧	(5.8)	(5.7)	(3.4)	(122.7)	斑レイ岩	定角式　研磨調整	覆土下層	

第 199 号土坑（第 15 図）

位置　調査区南西部のＦ５j1 区，標高 21 mほどの谷に向かう斜面部に位置している。

重複関係　第５号包含層を掘り込んでいる。

規模と形状　径 0.30 mほどの円形である。深さは 16cm，底面は平坦で，壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土　単一層である。ロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック・粘土粒子少量，焼土粒子微量

遺物出土状況　縄文土器片７点が覆土中から出土している。出土土器は TP1487 も含めていずれも小片であることから，埋土とともに投棄されたものとみられる。

所見　第 198 号土坑と同様な性格を持っていたと考えられる。時期は，出土土器が後期の粗製土器の特徴を有していることから後期と考えられる。

第 15 図　第 199 号土坑・出土遺物実測図

第 199 号土坑出土遺物観察表（第 15 図）

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1487	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	弧状の沈線文→沈線間列点文　内面ナデ	覆土中	

第 201 号土坑（第 16 図）

位置　調査区南西部のＦ５j1 区，標高 21 ｍほどの谷に向かう斜面部に位置している。

重複関係　第５号包含層を掘り込んでいる。

規模と形状　長径 0.30 ｍ，短径 0.24 ｍの楕円形で，長径方向はＮ－ 75 °－Ｗである。深さは 14㎝，底面はほぼ平坦で，壁は外傾している。

覆土　２層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック・粘土粒子少量，焼土粒子微量　　2　暗　褐　色　粘土粒子少量，ローム粒子・焼土粒子微量

遺物出土状況　縄文土器片４点が覆土中から出土している。出土土器は TP1488・TP1489 も含めていずれも小片であることから，埋土とともに投棄されたものとみられる。

所見　遺物の出土状況及び覆土の堆積状況から，廃棄土坑として使用された可能性がある。時期は，出土土器から後期後葉と考えられる。

第 16 図　第 201 号土坑・出土遺物実測図

第 201 号土坑出土遺物観察表（第 16 図）

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1488	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→横位の沈線→口縁部斜位の押圧文　内面磨き	覆土中	
TP1489	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	縄文→半截竹管による横位の平行沈線　内面ナデ	覆土中	

第 220 号土坑（第 17 図）

位置　調査区北部のＥ５j8 区，標高 21 ｍほどの緩やかな斜面部に位置している。

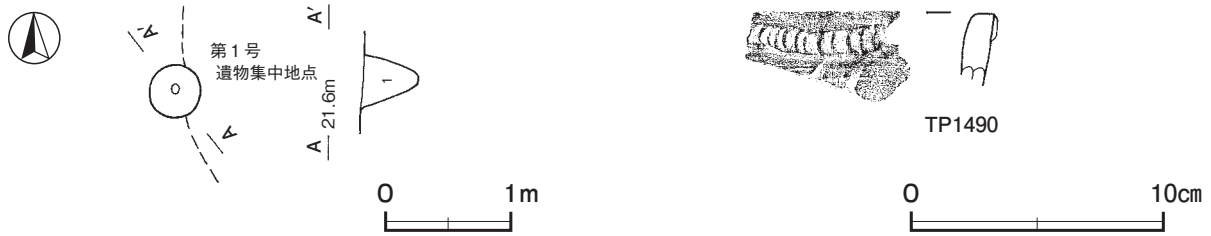
重複関係　第４号包含層を掘り込み，第１号遺物集中地点が上層に形成されている。

規模と形状　径 0.40 ｍの円形である。深さは 44㎝，底面は平坦で，壁は外傾している。

覆土　単一層である。層内の含有物が均一であることから，短時間で埋め戻された可能性がある。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量



第 17 図　第 220 号土坑・出土遺物実測図

遺物出土状況　縄文土器片２点が覆土中から出土している。出土土器はTP1490も含めて小片であることから，埋土とともに投棄されたものとみられる。

所見　断面形が逆台形の比較的深い土坑である。柱穴の可能性もあるが，性格は不明である。時期は，出土土器の特徴から後期前葉と考えられる。

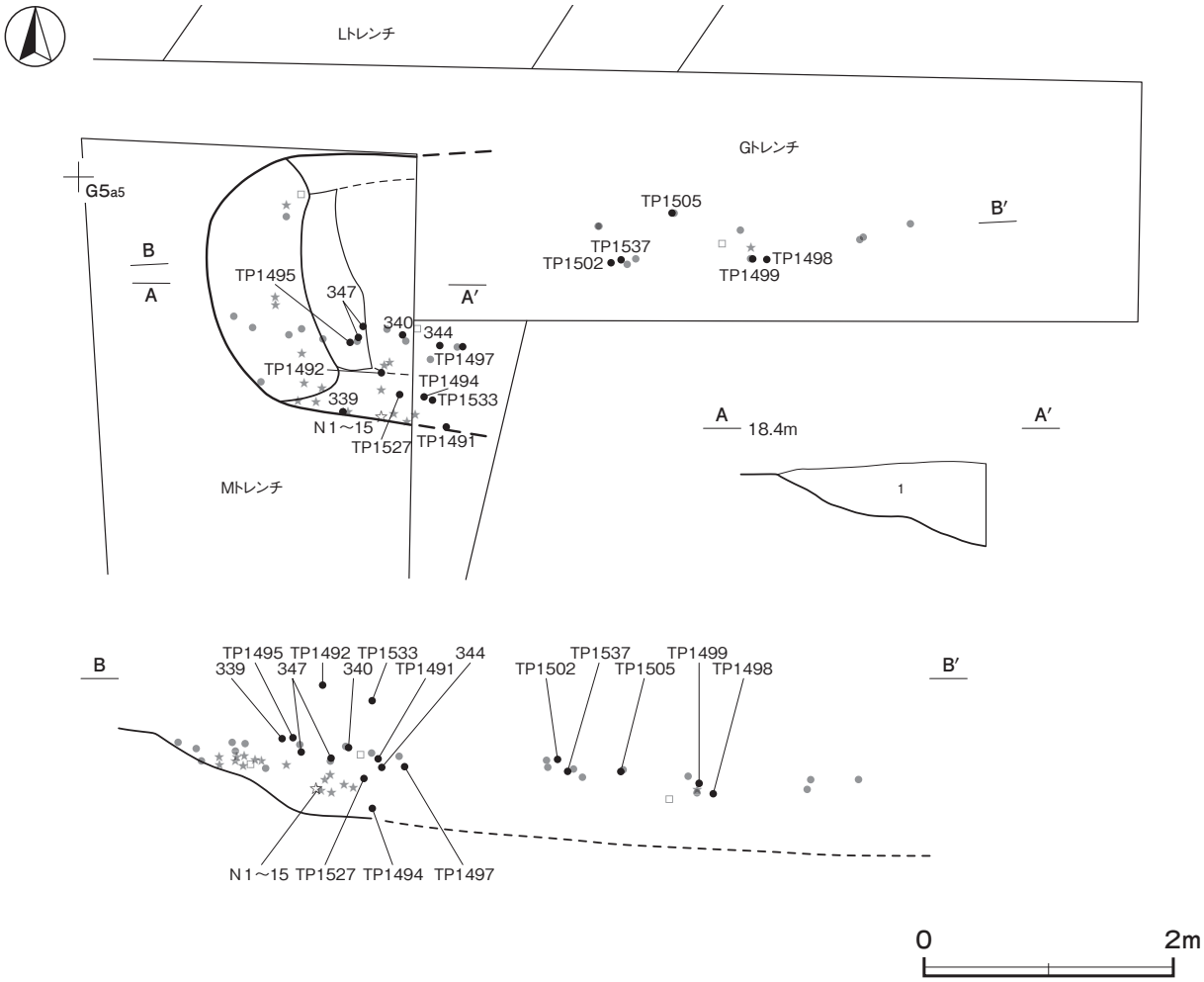
第220号土坑出土遺物観察表（第17図）

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1490	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→口縁部紐線貼付→横位の条線文　内面ナデ	覆土中	

第296号土坑（第18～23図）

位置　調査区南東部のＧ５a5区，標高18ｍほどの谷に向かう斜面部に位置している。

確認状況　調査区南東部の調査区域際で，第５号包含層の広がり及び堆積状況を確認するため，Ｇトレンチを掘削している際に，包含層の堆積土の下層で確認した。Ｇトレンチは，粘土層の深さまで掘削を行い，包含層の最下層と粘土層との間の層が本跡の覆土である。粘土層の上面は，東側の谷に向かって６度ほどの傾斜で緩やかに下っていたが，Ｇ５a5区内の当遺構に差しかかると，約25度と急になり，湧水が始まった。当遺構の



第18図　第296号土坑実測図

覆土中からは土器や石器のほかに，長さ５～20cmほどの木片や草木の種実が伴うようになり，第５号包含層の堆積土とは様相が変化した。この様相は更に東側に広がっているとみられることから，確認のために東側へのトレンチ掘削を試みた。しかし，湧水が激しく土質が軟弱であることから，覆土崩壊の危険性があるため，トレンチ掘削及び調査を断念した。なお，トレンチ内の遺物については計測して取り上げた。

重複関係　上層に第５号包含層が形成されている。

規模と形状　確認できたのは，南北 2.1 mで，東西は 1.6 mまでで，東に延びる楕円形を呈している。深さは 25 ～ 70cmで，東側の谷に向かって深くなっており，壁は外傾している。

覆土　単一層である。層厚が厚く，層中には粘土粒子や鉄分が均一に含まれている。斜面部の下位に位置することから，上方から流入した粒子の細かい土砂が厚く堆積したと考えられることから，自然堆積とみられる。

土層解説
1　黒　　色　粘土粒子中量，鉄分微量

表３　第 296 号土坑出土木片集計表

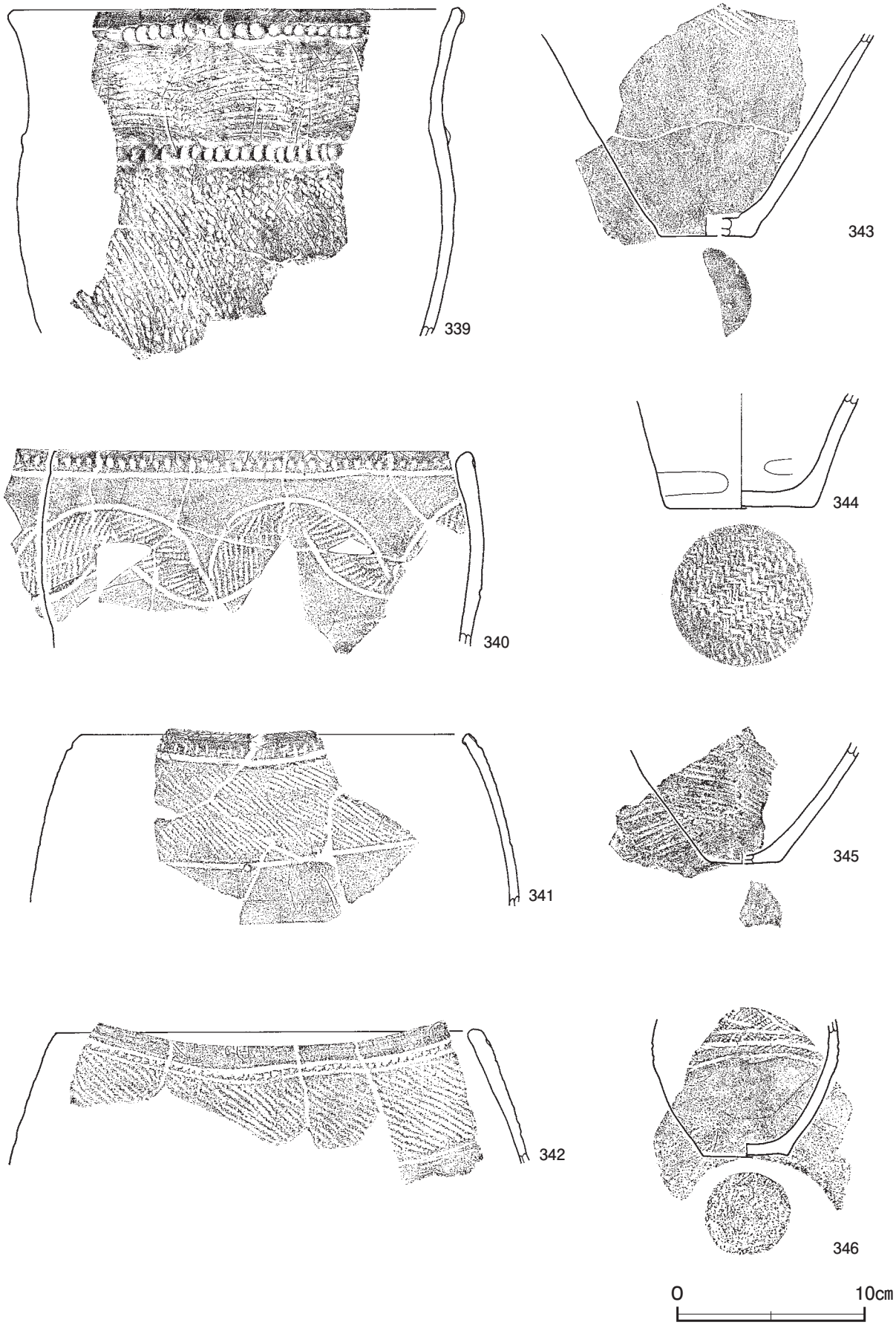
長　さ（cm）	点　数	重　量（g）	備　　考
0.5 未満	－	6.1	
0.5 ～ 4.9	2,929	1,331.3	
5.0 ～ 9.9	274	647.9	
10 ～ 14.9	29	170.1	
15 ～ 19.9	9	103.5	
20 ～ 24.9	1	4.8	
35 ～ 39.9	1	33.0	
合　計	3,243	2,296.7	

表４　第 296 号土坑出土種実集計表

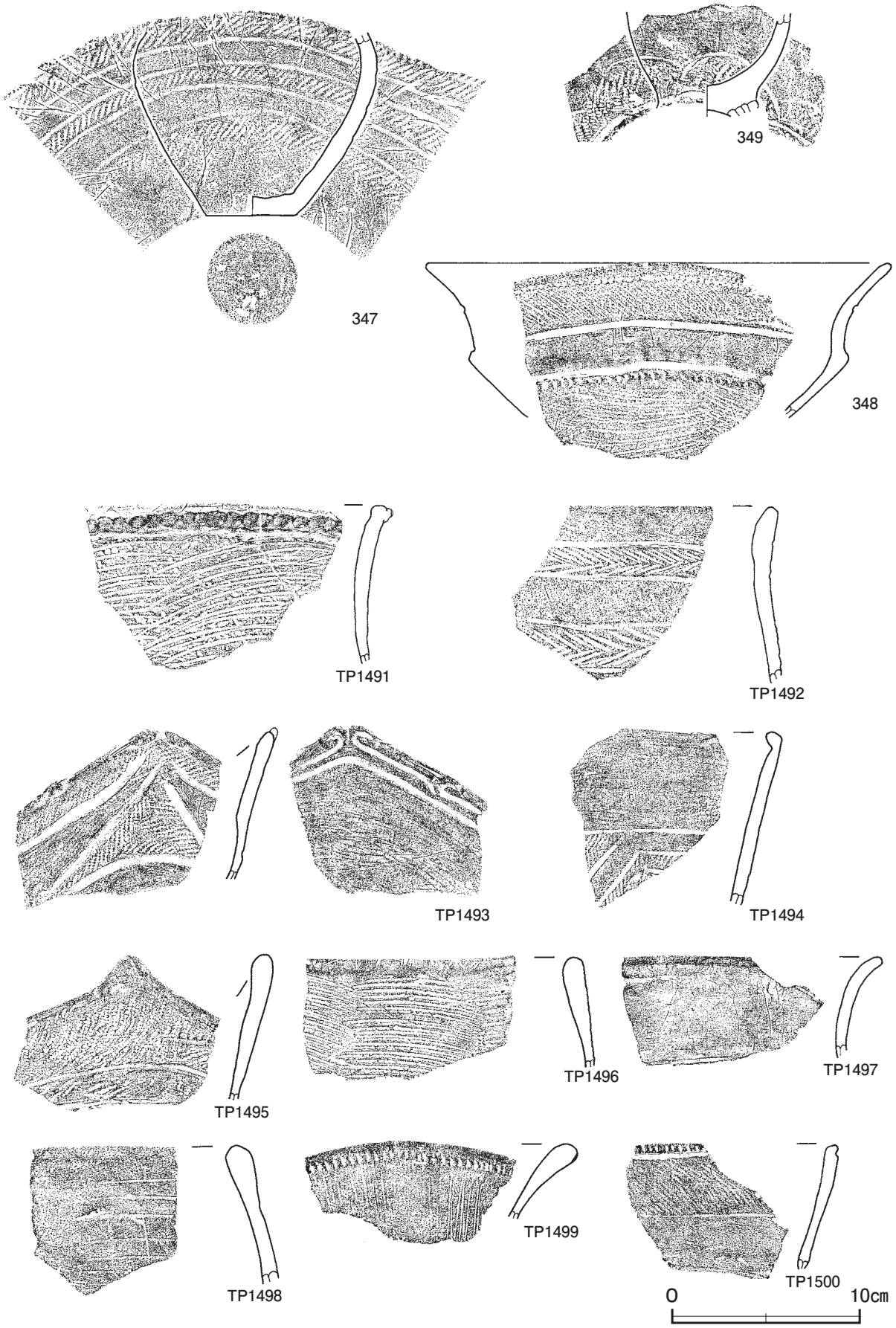
種　類	点　数	重　量（g）	備　　考
オニグルミ	227	598.2	
エゴの実	23	7.9	
トチの実	1	0.5	
不明	5	0.5	
合　　計	256	607.1	

遺物出土状況　縄文土器片 3,164 点，土製品５点（土版１，土偶１，土器片円盤３），石器６点（石皿１，敲石２，凹石１，砥石２），石製品３点（円盤，石棒，石冠），木片 3,243 点（2,296.7g），種実 256 点（オニグルミ 227，エゴの実 23，トチの実１，不明５）が出土している。縄文土器片 3,164 点のうち製塩土器片は６点（118.6g）である。遺物は南側から集中して出土している。出土土器は大半が破片であるが，包含層中の土器片よりも大形のものが多く，完形に近いものも１点出土した。遺物の大半は，本遺構が斜面部の下方に位置することから，本遺構が機能を終えた後，上方から土砂とともに流れ込んだものとみられる。完存率の高いものは，廃棄された可能性が高い。自然遺物である木片の樹種は，クリ・クルミ・イヌガヤが主体で，人為的な加工痕及び遺構を構成する要素は認められない。また，種実からも人為的な加工痕は確認できなかった。

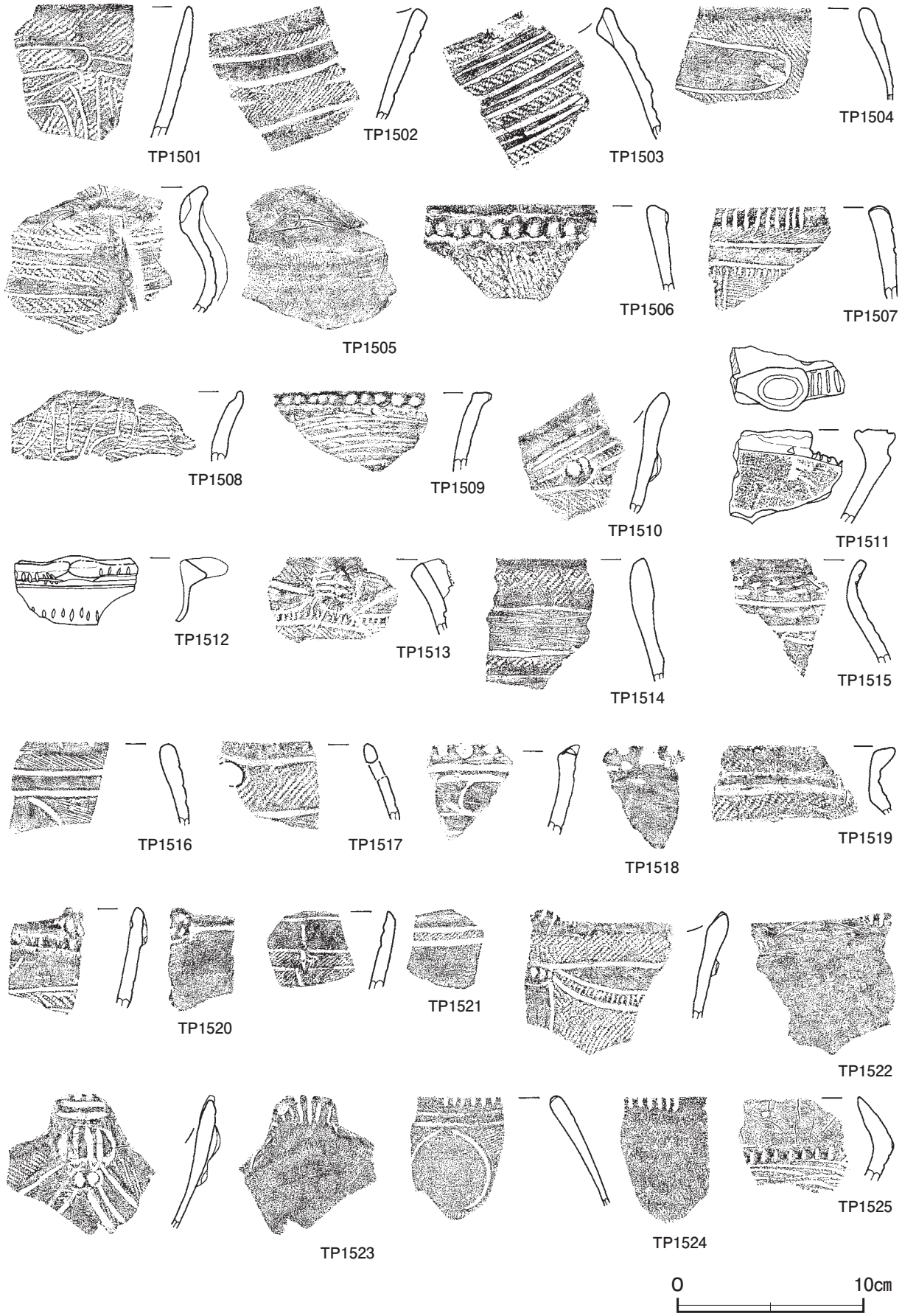
所見　確認できた範囲がわずかであり，人為的に掘削された痕跡を捉えることはできなかった。底面の傾斜が変化して急になっているが，自然地形の可能性もある。出土した木片については，加工痕がなく，立てられていたり組まれていたりした状況は認められなかったため，人々の営みに関わるものであるかは不明である。土壌分析，木片及び種実の年代測定では，縄文時代後期後半という結果が出ており（付章２参照），これらの自然遺物は，土器や石器・石製品などと同時期のものであることが分かっている。クリ・クルミ・イヌガヤなどの木片が遺存していたことから，当遺構の周辺は，温暖な気候の水辺に繁茂する広葉樹が主体の雑木林が広がり，谷部の下位は汽水域あるいは湿地などであったとみられる。当遺構は，当時の人々が水場まで降りてきて，洗うまたは晒すといった日常生活の場であった可能性もある。全容の解明には，現在の池底の調査結果を待ちたい。本遺構の出土土器は，後期前葉の堀之内式から晩期前葉の安行３Ｂ式まで見られるが，加曽利Ｂ式土器が中心に出土していることから，後期中葉以前から機能していたと考えられる。



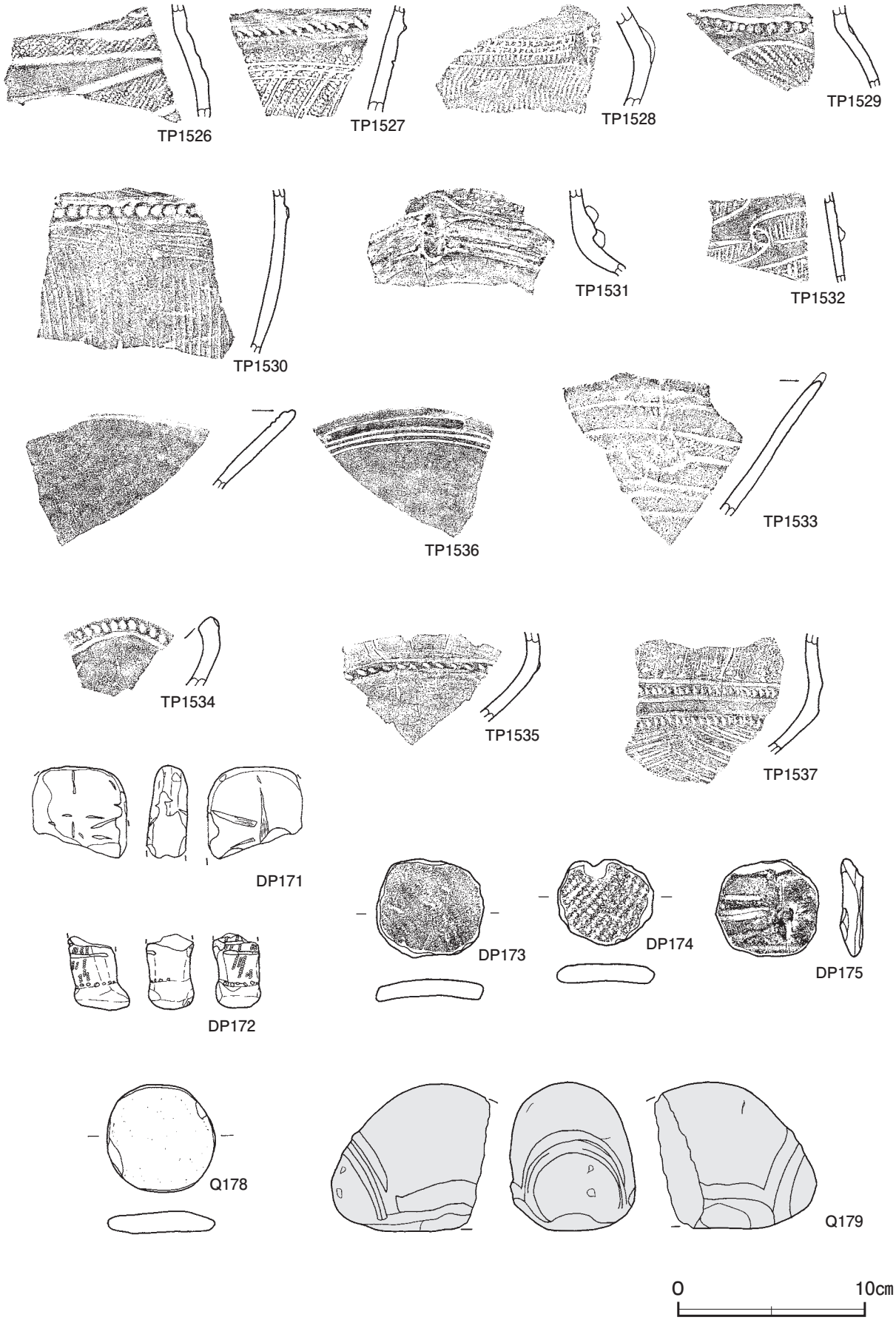
第19図　第296号土坑出土遺物実測図(1)



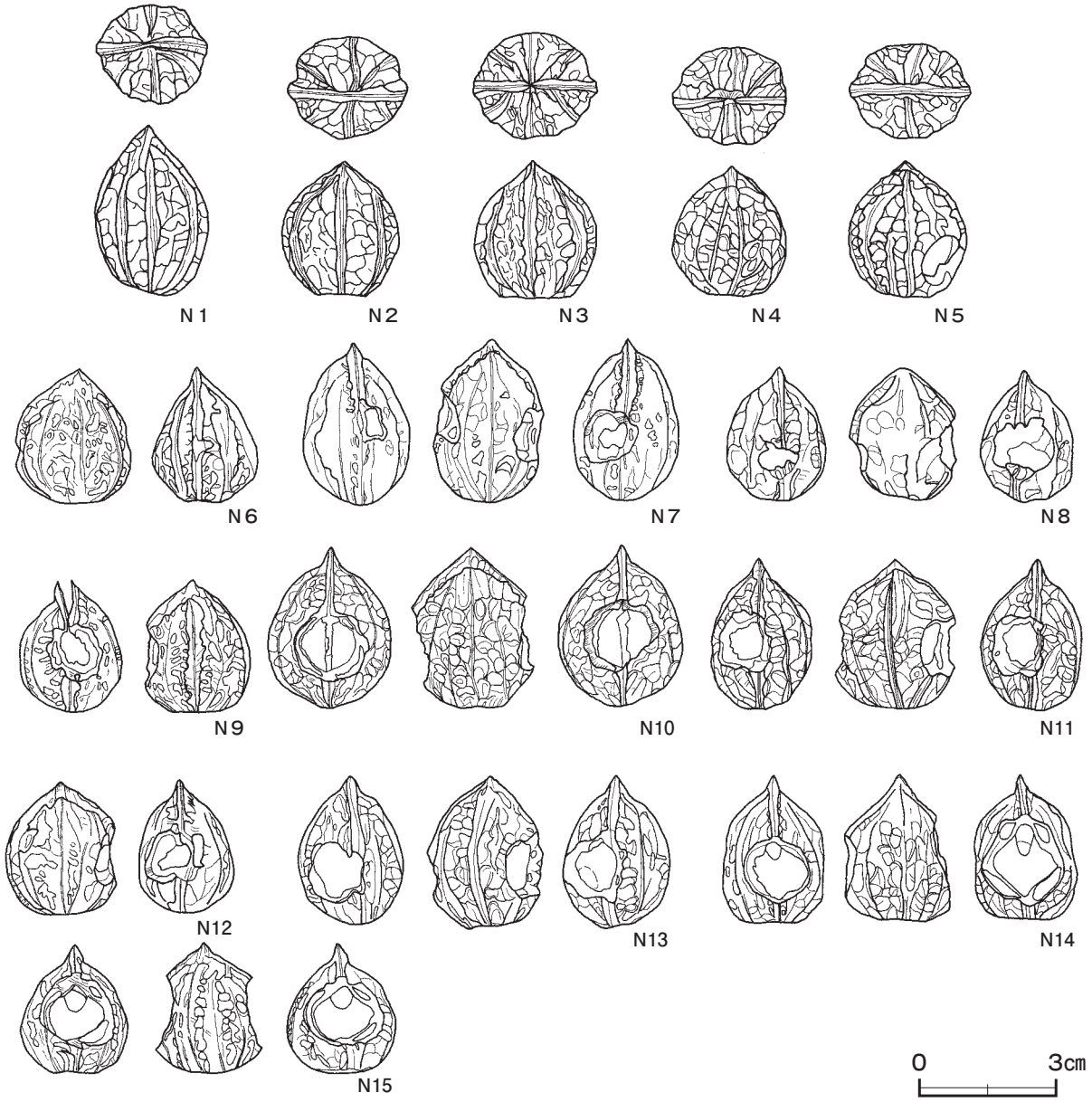
第 20 図　第 296 号土坑出土遺物実測図 (2)



第 21 図　第 296 号土坑出土遺物実測図 (3)



第 22 図　第 296 号土坑出土遺物実測図 (4)



第 23 図　第 296 号土坑出土遺物実測図 (5)

第 296 号土坑出土遺物観察表（第 19 ～ 23 図）

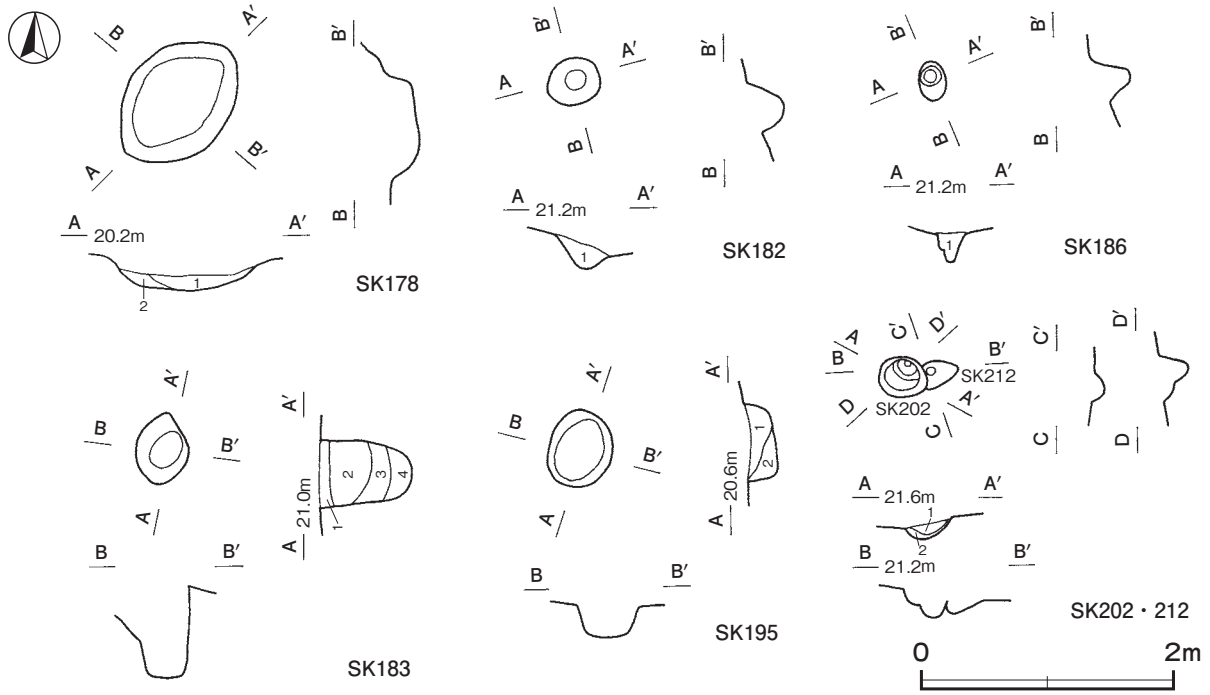
番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
339	縄文土器	深鉢	[24.2]	(17.5)	－	長石・石英・雲母	黒	普通	粗い縄文 RL →口縁部・胴部紐線文→胴部上位弧状の条線文→中位斜位の条線文　内面磨き	南部 覆土上層	15%
340	縄文土器	深鉢	[22.4]	(10.4)	－	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横位の沈線→縦位の刻み目→胴部上位連弧紋→縄文充填→無文部磨き　内面磨き	中央部 覆土上層	10%
341	縄文土器	深鉢	[20.8]	(9.2)	－	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→胴部上位縄文 RL →横位の沈線で区画→口縁部刻み目・無文部磨き　内面磨き	覆土中	5 %
342	縄文土器	深鉢	[23.0]	(7.2)	－	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	胴部上位横位の沈線で区画→縄文 RL 充填→口縁部２条の平行沈線→押引文充填　内面磨き	覆土中	10%
343	縄文土器	深鉢	－	(10.8)	[4.8]	長石・石英	にぶい橙	普通	胴部ナデ→斜位の条線文　内面磨き	覆土中	20%
344	縄文土器	深鉢	－	(6.1)	7.6	長石・石英	にぶい橙	普通	外面ヘラナデ　内面ナデ　底部外面網代痕	東部 覆土上層	20%　PL11
345	縄文土器	深鉢	－	(6.6)	[4.2]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	外面斜位の条線文　内面ナデ	覆土中	20%
346	縄文土器	鉢	－	(7.3)	4.6	長石・石英	褐灰	普通	縄文 LR →沈線文→無文部磨き　内面磨き	覆土中	30%　PL11
347	縄文土器	鉢	－	(9.8)	4.8	長石・石英・雲母	黒褐	普通	縄文 LR →横位の沈線で区画→無文部磨き　内面磨き	中央部 覆土上層	70%　PL11
348	縄文土器	台付鉢	[24.8]	(8.2)	－	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→沈線で区画→斜位・弧状の条線充填→列点文・刻み目→無文部磨き　内面磨き	覆土中	10%
349	縄文土器	台付鉢	－	(5.6)	－	長石・石英	黒褐	普通	沈線文→縄文 LR 充填→無文部磨き　内面ナデ	覆土中	20%

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1491	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	縄文→口縁部紐線文→弧状の条線文　内面ナデ	南東部 覆土上層	PL15
TP1492	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	灰白	普通	口唇部ナデ→横位の沈線→沈線間矢羽状の沈線文充填　内面ナデ	南部 覆土上層	PL15
TP1493	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	普通	波状口縁　口唇部ナデ後突起貼付→縄文→沈線で区画→無文部磨き　内面磨き後沈線文	覆土中	PL15
TP1494	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黄灰	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →沈線で区画→無文部磨き　口縁部内面凹線　内面磨き	南東部 覆土下層	
TP1495	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	黒褐	普通	波状口縁　縄文 LR →横位の沈線　内面ナデ	中央部 覆土上層	PL15
TP1496	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰褐	普通	口唇部ナデ→弧状の条線文　内面ナデ	覆土中	
TP1497	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰褐	普通	口縁部外反　横位の沈線→外・内面ナデ	東部 覆土上層	
TP1498	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→横位の条線文　内面ナデ	Ｇトレンチ 覆土上層	
TP1499	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外反　口唇部ナデ後刻み目→縦位の条線文　内面ナデ	Ｇトレンチ 覆土上層	
TP1500	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口縁部横位の沈線→刻み目→縄文 RL →横位の沈線　内面ナデ	覆土中	
TP1501	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →粗い沈線文　内面ナデ	覆土中	
TP1502	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	波状口縁　口唇部ナデ→縄文 LR →沈線で区画→無文部磨き　内面磨き	Ｇトレンチ 覆土上層	
TP1503	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰褐	普通	波状口縁　口縁部内面くの字に張り出す　口唇部ナデ→隆帯縄文 RL →隆帯間３条の沈線後磨き　内面磨き	覆土中	
TP1504	縄文土器	深鉢	長石・石英	明褐	普通	口唇部ナデ→縄文 RL →沈線文→沈線区画内磨き　内面磨き	覆土中	
TP1505	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐灰	普通	口唇部・胴部上位突起貼付→口唇部突起内面中央円形に押圧　胴部外面上位縄文 RL →横位の沈線　内面磨き	Ｇトレンチ 覆土上層	PL15
TP1506	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口唇部ナデ→口縁部紐線文→縄文　内面磨き	覆土中	
TP1507	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→横・縦位の沈線→口縁部・胴部に条線文充填→口唇部・沈線下に刻み目　内面磨き	覆土中	
TP1508	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄橙	普通	横位の条線→半截竹管による粗い沈線文→口縁部内面凹線内面磨き	覆土中	
TP1509	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	口縁部紐線文→弧状の条線文　内面磨き	覆土中	
TP1510	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰白	普通	波状口縁　口唇部ナデ→縄文 RL →隆帯刻み目→貼瘤→無文部磨き　内面磨き	覆土中	
TP1511	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部突起貼付後頂部に沈線　口唇部刻み目　外・内面ナデ	覆土中	PL15
TP1512	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外側に三角形に突出　横位の沈線→縦位の刻み目内面ナデ	覆土中	
TP1513	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口唇部ナデ→貼瘤後刻み目→隆帯縄文 RL 充填　刻み目→隆帯下沈線→無文部磨き　内面磨き	覆土中	
TP1514	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰褐	普通	口唇部ナデ→隆帯縄文 LR →隆帯下沈線　内面磨き	覆土中	
TP1515	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→口縁部２条の列点文　横位の沈線　内面磨き	覆土中	
TP1516	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→沈線で区画→細密な沈線文充填→無文部磨き内面ナデ	覆土中	
TP1517	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →横位の沈線　内面ナデ　口縁部穿孔１か所	覆土中	
TP1518	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口唇部突起貼付→沈線文　内面ナデ	覆土中	
TP1519	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黄灰	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →括れ部横位の平行沈線　内面ナデ	覆土中	
TP1520	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐灰	普通	口唇部ナデ→口縁部隆帯貼付→口唇部突起貼付→縄文 RL →横位の沈線→無文部磨き　口縁部内面凹線　内面磨き	覆土中	
TP1521	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒褐	普通	縄文 LR →横位の沈線→無文部磨き→縦位の区切り文　口縁部内面縄文 LR →２条の平行沈線→内面磨き	覆土中	
TP1522	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐	普通	緩やかな波状口縁　口唇部ナデ→口唇部及び胴部貼瘤後刻み目→縄文 LR →沈線で区画→刻み目充填　内面磨き	覆土中	
TP1523	縄文土器	深鉢	長石・雲母	にぶい黄褐 灰黄褐色	普通	波状口縁頂部　器面磨滅顕著　口唇部ナデ→縄文 RL →貼瘤後刻み目→隆帯下沈線→無文部磨き	覆土中	
TP1524	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ後一部刻み目→口縁部横位の平行沈線→胴部円形沈線文→斜位の細密な条線・縦位の刻み目　内面磨き	覆土中	
TP1525	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐灰	普通	ソロバン玉形　横位の条線文→縦位の刻み目　内面磨き	覆土中	
TP1526	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	縄文 LR →沈線で区画→無文部磨き　内面磨き	覆土中	
TP1527	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐灰	普通	紐線文→縄文 LR →半截竹管による沈線（横位→縦位）内面磨き	南部 覆土中層	
TP1528	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	縄文 LR →横位の沈線→貼瘤→沈線間刻み目　内面磨き	覆土中	
TP1529	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	紐線文→沈線で区画→縄文 RL 充填→　内面磨き	覆土中	
TP1530	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	褐灰	普通	弧状の条線文→紐線文→縦位の条線文　内面ナデ	覆土中	
TP1531	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	隆帯・瘤貼付→沈線で区画→列点充填　内面ナデ	覆土中	
TP1532	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	沈線で区画→貼瘤→縦位の条線充填→無文部磨き　内面磨き	覆土中	
TP1533	縄文土器	鉢	長石・石英	褐灰 灰白	普通	口唇部ナデ後突起貼付→縄文 LR →横位の沈線→沈線間入組文→無文部磨き　内面ナデ	南東部 覆土上層	PL15
TP1534	縄文土器	鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	波状口縁　口縁部紐線文後下位に沈線　内面磨き	覆土中	
TP1535	縄文土器	鉢	長石・石英	黒	普通	隆帯斜位の刻み目→無文部磨き　内面磨き	覆土中	
TP1536	縄文土器	浅鉢	長石・石英	黒	普通	口縁部内面横位の沈線４条　外・内面磨き	覆土中	
TP1537	縄文土器	台付鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	隆帯刻み目→胴部上位横位のナデ後工具痕を残す縦位のヘラナデ　下位弧状の条線文　内面磨き	Ｇトレンチ 覆土上層	

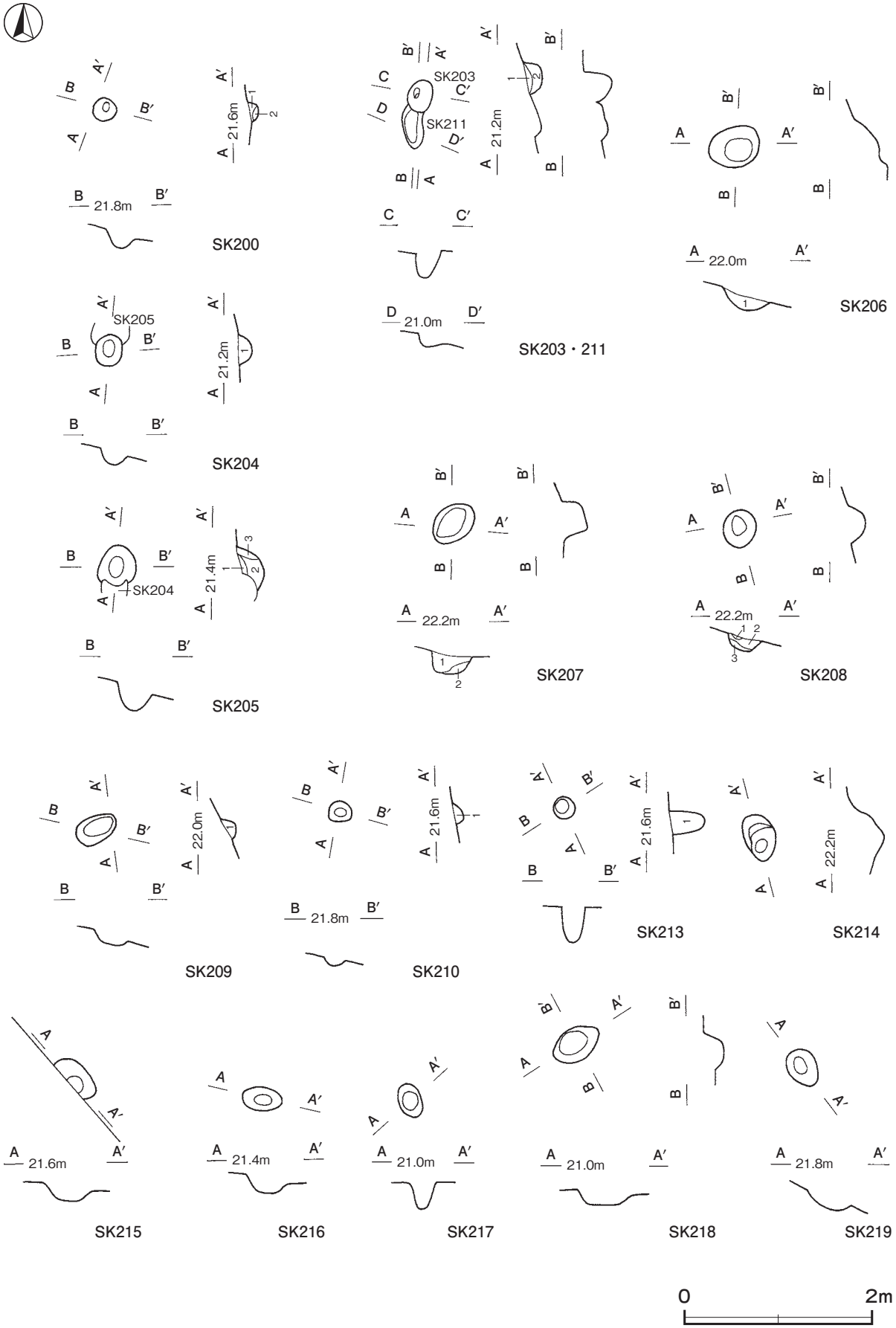
番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	色調・胎土	特　　徴	出土位置	備　考
DP171	土版	(4.9)	(5.1)	(2.2)	(54.0)	にぶい黄橙 長石・石英	表・裏面ナデ調整→沈線	覆土中	PL21
DP172	土偶	(4.0)	2.6	3.3	(30.8)	にぶい橙 長石・石英	土偶の右足　ナデ整形→縄文→沈線・列点	Ｇトレンチ 覆土中	PL21
DP173	土器片円盤	5.3	5.8	1.2	39.9	にぶい橙 長石・石英・赤色粒子	周縁部粗割り後一部研磨調整	覆土中	
DP174	土器片円盤	4.7	5.2	1.0	29.5	にぶい赤褐 長石・石英	周縁部粗割り後研磨調整	覆土中	
DP175	土器片円盤	5.2	5.6	1.3	29.3	褐灰 長石・石英	安行１式深鉢利用　周縁部粗割り後研磨調整	覆土中	

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q178	円盤	5.8	5.8	1.1	72.1	緑泥片岩	扁平な礫を利用　全面研磨調整	覆土中	PL25
Q179	石冠	(7.9)	(8.6)	(6.8)	(575.0)	砂岩	表面研磨調整　端部環状の隆帯２畝　下位隆帯１畝　被熱痕	覆土中	PL24

番号	種　類	長さ	幅	厚さ	重量	樹種（草種）	特　　徴	出土位置	備　考
N 1	種実	3.7	2.4	2.2	3.65	オニグルミ	完形	南部 覆土中層	PL26
N 2	種実	2.9	2.6	2.2	4.89	オニグルミ	完形	南部 覆土中層	PL26
N 3	種実	3.0	2.7	2.4	4.61	オニグルミ	完形	南部 覆土中層	PL26
N 4	種実	2.8	2.5	2.1	4.36	オニグルミ	完形	南部 覆土中層	PL26
N 5	種実	2.9	2.6	2.1	(3.94)	オニグルミ	ネズミ科の小動物による穿孔１か所	南部 覆土中層	PL26
N 6	種実	3.0	2.5	2.3	2.25	オニグルミ	完形	南部 覆土中層	PL26
N 7	種実	3.6	(2.5)	2.3	(4.23)	オニグルミ	ネズミ科の小動物による穿孔２か所	南部 覆土中層	PL26
N 8	種実	3.0	(2.3)	2.1	(2.10)	オニグルミ	ネズミ科の小動物による穿孔２か所	南部 覆土中層	PL26
N 9	種実	2.9	(2.4)	2.2	(4.69)	オニグルミ	ネズミ科の小動物による穿孔１か所	南部 覆土中層	PL26
N 10	種実	3.5	(2.7)	2.8	(3.94)	オニグルミ	ネズミ科の小動物による穿孔２か所	南部 覆土中層	PL26
N 11	種実	3.3	(2.6)	2.3	(3.70)	オニグルミ	ネズミ科の小動物による穿孔２か所	南部 覆土中層	PL26
N 12	種実	2.9	(2.4)	2.1	(1.94)	オニグルミ	ネズミ科の小動物による穿孔１か所	南部 覆土中層	PL26
N 13	種実	3.3	(2.5)	2.4	(3.35)	オニグルミ	ネズミ科の小動物による穿孔２か所	南部 覆土中層	PL26
N 14	種実	3.2	(2.3)	2.3	(3.03)	オニグルミ	ネズミ科の小動物による穿孔２か所	南部 覆土中層	PL26
N 15	種実	2.8	(2.4)	2.4	(3.34)	オニグルミ	ネズミ科の小動物による穿孔２か所	南部 覆土中層	PL26



第 24 図　土坑実測図 (1)


SK200
SK203
SK211
SK203・211
SK206
SK205
SK204
SK207
SK208
SK209
SK210
SK213
SK214
SK215
SK216
SK217
SK218
SK219
0
2m

第 25 図　土坑実測図 (2)

第 178 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック中量，粘土粒子少量
2　極 暗 褐 色　ローム粒子・粘土粒子中量

第 182 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量

第 183 号土坑土層解説
1　にぶい黄褐色　砂粒多量，粘土粒子中量，ローム粒子微量
2　暗　褐　色　砂粒多量，粘土粒子中量
3　暗　褐　色　砂粒多量，粘土粒子中量，細礫少量
4　暗　褐　色　砂粒多量，細礫微量

第 186 号土坑土層解説
1　黒　　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

第 195 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　炭化粒子・細礫少量，焼土ブロック・ローム粒子微量
2　黒　　色　細礫少量，焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量

第 200 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・粘土粒子少量
2　暗　褐　色　粘土粒子中量，ローム粒子微量

第 202 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・粘土粒子少量
2　暗　褐　色　粘土粒子中量，ローム粒子微量

第 203 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・粘土粒子少量
2　暗　褐　色　粘土粒子中量，ローム粒子微量

第 204 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子中量，粘土粒子少量，焼土粒子微量

第 205 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子・粘土粒子少量，焼土粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子・粘土粒子少量
3　極 暗 褐 色　ローム粒子・粘土粒子中量，焼土粒子微量

第 206 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・粘土粒子少量，焼土粒子微量

第 207 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・粘土粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量，粘土粒子少量

第 208 号土坑土層解説
1　極 暗 褐 色　ローム粒子少量
2　暗　褐　色　ローム粒子・粘土粒子少量，焼土粒子微量
3　暗　褐　色　粘土粒子中量，ローム粒子少量

第 209 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・粘土粒子少量

第 210 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子微量

第 213 号土坑土層解説
1　黒　　色　焼土粒子・砂粒微量

表５　縄文時代土坑一覧表

番号	位置	長軸（径）方向	平面形	規模（m） 長軸（径）×短軸（径）	深さ(cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
178	F 5 c0	N－47°－E	楕円形	1.14 × 0.84	23	外傾	平坦	人為	縄文土器	HG 4→本跡
180	F 5 f6	N－45°－E	楕円形	0.50 × 0.42	24	外傾	皿状	人為	縄文土器	
182	F 5 h4	N－68°－E	楕円形	0.44 × 0.37	22	外傾	平坦	自然	縄文土器	HG 5→本跡
183	G 5 d3	N－10°－E	楕円形	0.56 × 0.42	76	直立	平坦	人為		HG 5→本跡
185	F 5 h4	N－53°－E	楕円形	0.46 × 0.36	34	外傾	平坦	人為	縄文土器	HG 5→本跡
186	F 5 h5	N－11°－W	楕円形	0.30 × 0.22	26	外傾	平坦	自然		HG 5→本跡
193	E 6 i1	N－5°－E	［楕円形］	1.60 ×（1.36）	48	外傾	平坦	人為	縄文土器，土製品	HG 4→本跡
194	F 5 i2	N－50°－W	楕円形	0.62 × 0.42	44	外傾	平坦	自然	縄文土器	HG 5→本跡→第３号地点貝塚
195	E 6 h1	N－18°－E	楕円形	0.62 × 0.50	26	外傾	平坦	人為		HG 4→本跡
196	F 5 j3	－	円形	0.28 × 0.28	50	外傾	平坦	自然	縄文土器	HG 5→本跡
197	E 5 i9	－	円形	0.53 × 0.53	36	外傾	平坦	人為	縄文土器，土製品	SI15→本跡→第２号地点貝塚
198	F 5 f6	N－50°－W	［円形・楕円形］	1.16 ×（0.64）	52	外傾	皿状	人為	縄文土器，土製品，石器	HG 4→本跡
199	F 5 j1	－	円形	0.32 × 0.30	16	外傾	平坦	人為	縄文土器	HG 5→本跡
200	F 5 j1	－	円形	0.25 × 0.24	18	外傾	平坦	人為	縄文土器	HG 5→本跡
201	F 5 j1	N－75°－W	楕円形	0.30 × 0.24	14	外傾	平坦	人為	縄文土器	HG 5→本跡
202	G 5 a2	N－67°－W	楕円形	0.39 × 0.32	23	外傾	平坦	人為	縄文土器	HG 5，SK212→本跡
203	G 5 a2	N－18°－E	楕円形	0.35 × 0.26	28	外傾	平坦	人為	縄文土器	HG 5，SK211→本跡
204	F 5 j2	N－3°－W	楕円形	0.33 × 0.27	16	外傾	皿状	人為		HG 5，SK205→本跡
205	F 5 j2	N－62°－W	［楕円形］	（0.39）× 0.30	27	外傾	皿状	人為	縄文土器	HG 5→本跡→SK204

番号	位置	長軸（径）方向	平面形	規模（m） 長軸（径）×短軸（径）	深さ(cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
206	F 5 j2	N－62°－E	楕円形	0.57 × 0.43	16	外傾	平坦	人為		HG 5→本跡
207	F 5 j1	N－54°－E	楕円形	0.52 × 0.37	13	外傾	平坦	人為	縄文土器	HG 5→本跡
208	F 5 j1	N－16°－E	楕円形	0.43 × 0.34	20	外傾	平坦	人為	縄文土器	HG 5→本跡
209	F 5 j1	N－59°－E	楕円形	0.47 × 0.28	13	外傾	平坦	人為	縄文土器	HG 5→本跡
210	F 5 j1	－	円形	0.24 × 0.24	10	外傾	平坦	人為	縄文土器	HG 5→本跡
211	G 5 a2	N－9°－W	［不整楕円形］	(0.50) × 0.22	12	外傾	平坦	－		HG 5→本跡 →SK203
212	G 5 a2	N－74°－E	［楕円形］	(0.29) × 0.20	14	外傾	平坦	－	縄文土器	HG 5→本跡 →SK202
213	G 5 a1	－	円形	0.24 × 0.24	40	外傾	皿状	人為	縄文土器	HG 5→本跡
214	F 5 j2	N－20°－W	楕円形	0.52 × 0.36	20	外傾	皿状	－		HG 5→本跡
215	G 5 a1	N－38°－W	［楕円形］	0.52 × (0.22)	16	外傾	平坦	－	縄文土器	HG 5→本跡
216	G 5 a1	N－77°－W	楕円形	0.43 × 0.26	16	外傾	平坦	－	縄文土器	HG 5→本跡
217	G 5 a1	N－23°－W	楕円形	0.37 × 0.26	31	外傾	皿状	－	縄文土器	HG 5→本跡
218	F 5 i3	N－57°－E	楕円形	0.55 × 0.37	16	外傾	平坦	－		HG 5→本跡 →SM 9
219	F 5 j2	N－37°－W	楕円形	0.44 × 0.31	11	外傾	皿状	－		HG 5→本跡
220	E 5 j8	－	円形	0.40 × 0.40	44	外傾	平坦	人為	縄文土器	HG 4→本跡→ 第1号遺物集中地点
296	G 5 a5	－	［楕円形］	2.10 × (1.60)	25～70	外傾	緩斜	自然	縄文土器，土製品，石器・石製品 木片，種実	本跡→HG 5

(4) 柱穴列

第1号柱穴列（第26図）

位置　調査区南西部のＦ５i1～Ｆ５i2区，標高22ｍほどの谷に向かう斜面部に位置している。

重複関係　第５号包含層を掘り込んでいる。

規模と構造　3.50ｍの間にピット３か所を確認した。列方向はＮ－72°－Ｅで，柱間寸法は西から1.8ｍ，1.7ｍとほぼ等間隔である。

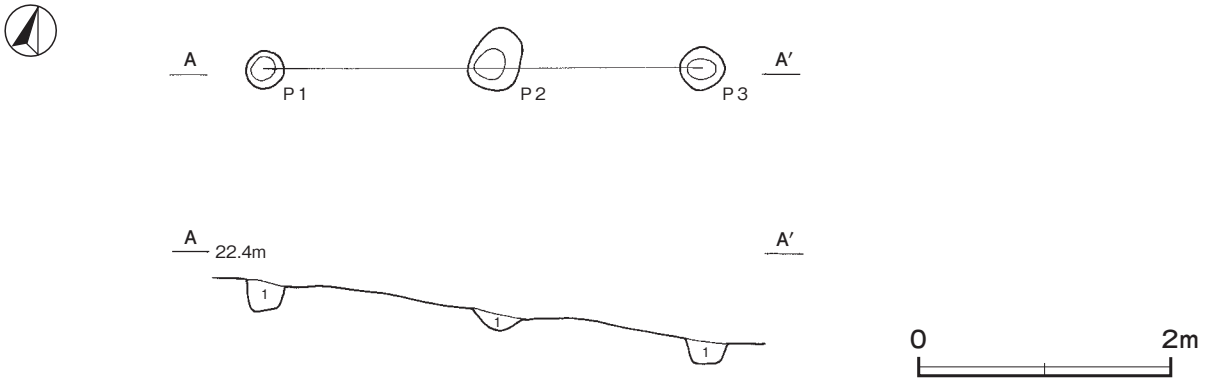
柱穴　平面形は円形または楕円形で，長径はＰ１から順に32，52，38cmで，短径は29，40，34cm，深さは22，13，17cmである。

覆土　単一層である。層内の含有物が均一であることから，柱抜き取り後に一度に埋め戻された可能性がある。

土層解説（各柱穴とも共通）
1　黒　褐　色　砂粒微量

遺物出土状況　縄文土器片９点がＰ１～Ｐ３の覆土中から出土しているが，いずれも細片のため図示できない。

所見　列方向が斜面の傾斜に対してほぼ直交していることから，柱列を敷設し，地上に何らかの構造物を設け



第26図　第１号柱穴列実測図

た土止めのための柵あるいは遮蔽の機能を持たせていた可能性があるが，詳細は不明である。時期は，後期後葉から晩期前葉の第５号包含層中で確認したことから，第５号包含層形成中に構築されているが，覆土の特徴などからさほど時期差はないとみられることから，晩期前葉と考えられる。

(5) 溝跡

第５号溝跡（第 27・付図）

位置　調査区南部のＧ４d0 ～Ｇ５d5 区，標高 21 mほどの谷に向かう斜面部に位置している。

重複関係　第５号包含層，第８号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状　Ｇ５d1 区からほぼ東方向（Ｎ－ 84 ～ 88°－Ｅ）に直線状に延びている。西及び東端部が調査区域外に延びているため，確認できた長さは 20.76 mである。上幅 0.84 ～ 1.56 m，下幅 0.62 ～ 1.32m で，深さ 18 ～ 52cmである。底面の高低差は 1.5 mほどで，東側の谷に向かって傾斜している。断面は浅いＵ字状で，壁は外傾している。

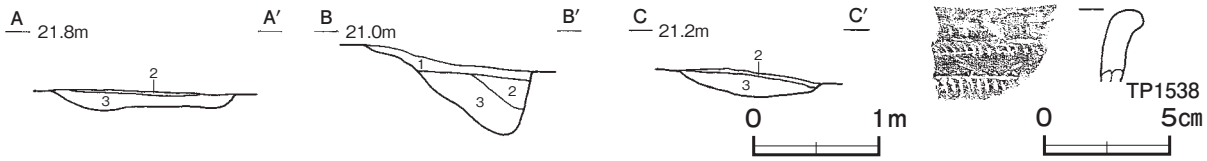
覆土　３層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから，自然堆積である。

土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量
2　にぶい黄褐色　砂粒多量，粘土粒子少量，ローム粒子微量
3　黒　褐　色　粘土粒子少量，ローム粒子・砂粒微量

遺物出土状況　縄文土器片 23 点が覆土中から出土している。出土土器は TP1538 も含めて全て小片であることから，本跡が機能を終えた後，第５号包含層から流れ込んだものと考えられる。

所見　西端部及び東端部が調査区域外へ延びているため詳細は不明である。溝底が谷に向かって傾斜していることから，谷への排水を目的として掘られた溝の可能性がある。時期は，本跡が第５号包含層中から確認できたこと及び出土土器の特徴から，晩期前葉と考えられる。



第 27 図　第５号溝跡・出土遺物実測図

第５号溝跡出土遺物観察表（第 27 図）

番号	種　別	器種	胎　土	色　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1538	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	普通	口唇部ナデ→沈線文→半截竹管による押引文　内面磨き	覆土中	

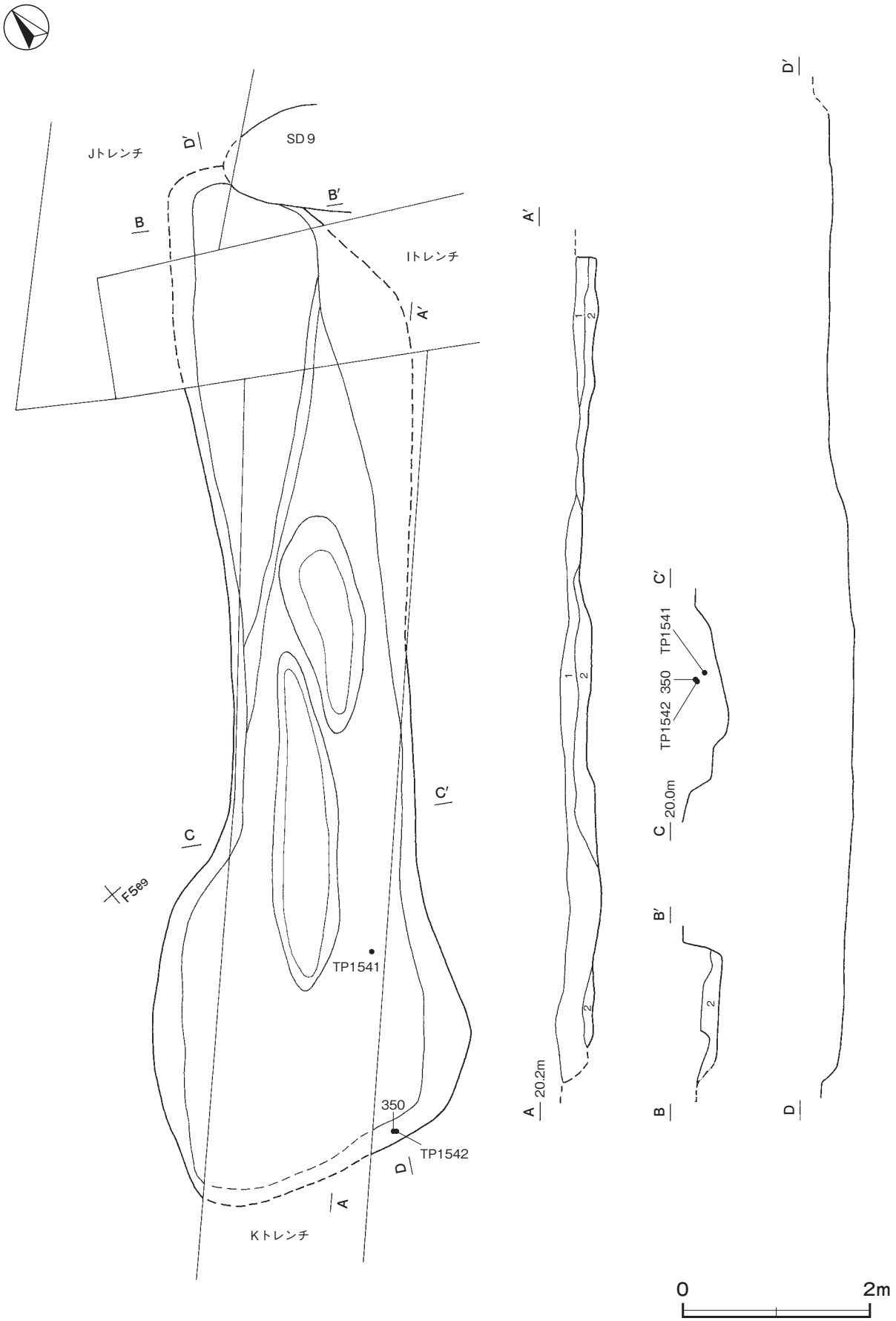
第６号溝跡（第 28・29 図）

位置　調査区北部のＦ５c0 ～Ｆ５e8 区，標高 20 mほどの谷に向かう斜面部に位置している。

重複関係　第４号包含層を掘り込み，第９号溝に掘り込まれている。

規模と形状　Ｆ５e8 区から北東方向（Ｎ－ 35°－Ｅ）に直線状に延びている。北東端部がＩ～Ｋトレンチに削平されているため，確認できた長さは 10.60 mである。上幅 1.94 ～ 3.42 m，下幅 1.68 ～ 2.58m，深さ 26 ～ 44cmで，中央部及び北部の溝底に，周囲より 20cmほど下がる部分がある。断面は逆台形で，壁は外傾している。

覆土　２層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから，自然堆積である。



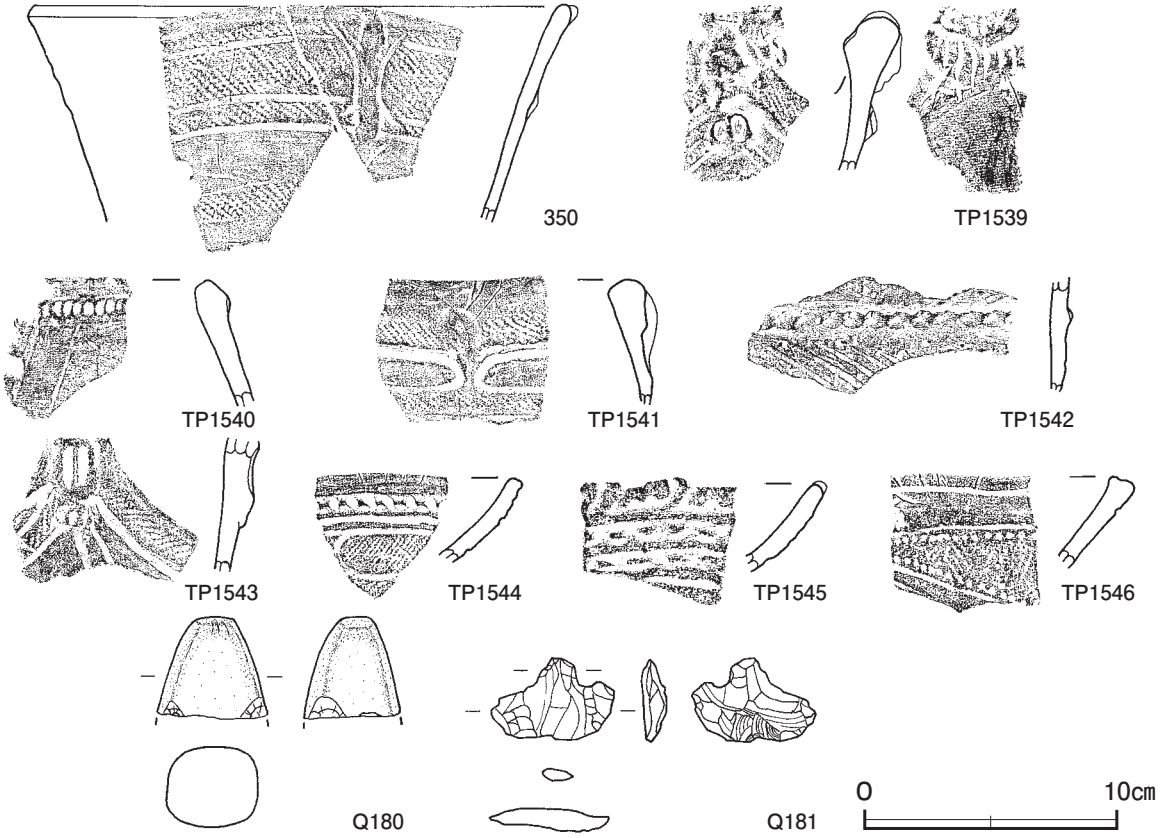
第 28 図　第 6 号溝跡実測図

土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子少量，細礫微量　　2　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量，焼土粒子・細礫微量

遺物出土状況　縄文土器片 288 点，石器２点（磨製石斧，石匙ヵ），剥片１点（チャート）が全域の覆土上層から中層にかけて出土している。比較的大きな破片である 350 は，南西部の覆土中層から出土しており，投棄された可能性がある。その他の出土土器は TP1541・TP1542 も含め，ほとんどが小片または欠損した状態で覆土上層から中層にかけて出土していることから，投棄されたか第４号包含層から流れ込んだものと考えられる。

所見　本跡は，台地の傾斜と平行に，標高 20.5 mの等高線に沿って延びているが，性格は不明である。時期は，本跡が後期後葉から晩期前葉に形成された第４号包含層を掘り込んでいるが，出土土器の特徴からあまり時期差はなく，後期後葉から晩期前葉と考えられる。



第 29 図　第６号溝跡出土遺物実測図

第６号溝跡出土遺物観察表（第 29 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
350	縄文土器	深鉢	[21.3]	(8.5)	－	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	横位の沈線文→貼瘤→縄文 RL →縦位の沈線文→無文部磨き	覆土中層	5％

番号	種　別	器種	胎　土	色　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1539	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	波状口縁　貼瘤→沈線文→縄文 RL　内面磨き	覆土中	
TP1540	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	口縁部紐線文→外面斜位の平行沈線　外・内面磨滅により調整不明瞭	覆土中	
TP1541	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→貼瘤→沈線文→縄文 RL　内面磨き	覆土中層	
TP1542	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	紐線文→沈線　内面磨き	覆土中層	
TP1543	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰褐	普通	波状口縁　貼瘤→沈線文→縄文 LR →無文部磨き　内面磨き	覆土中	

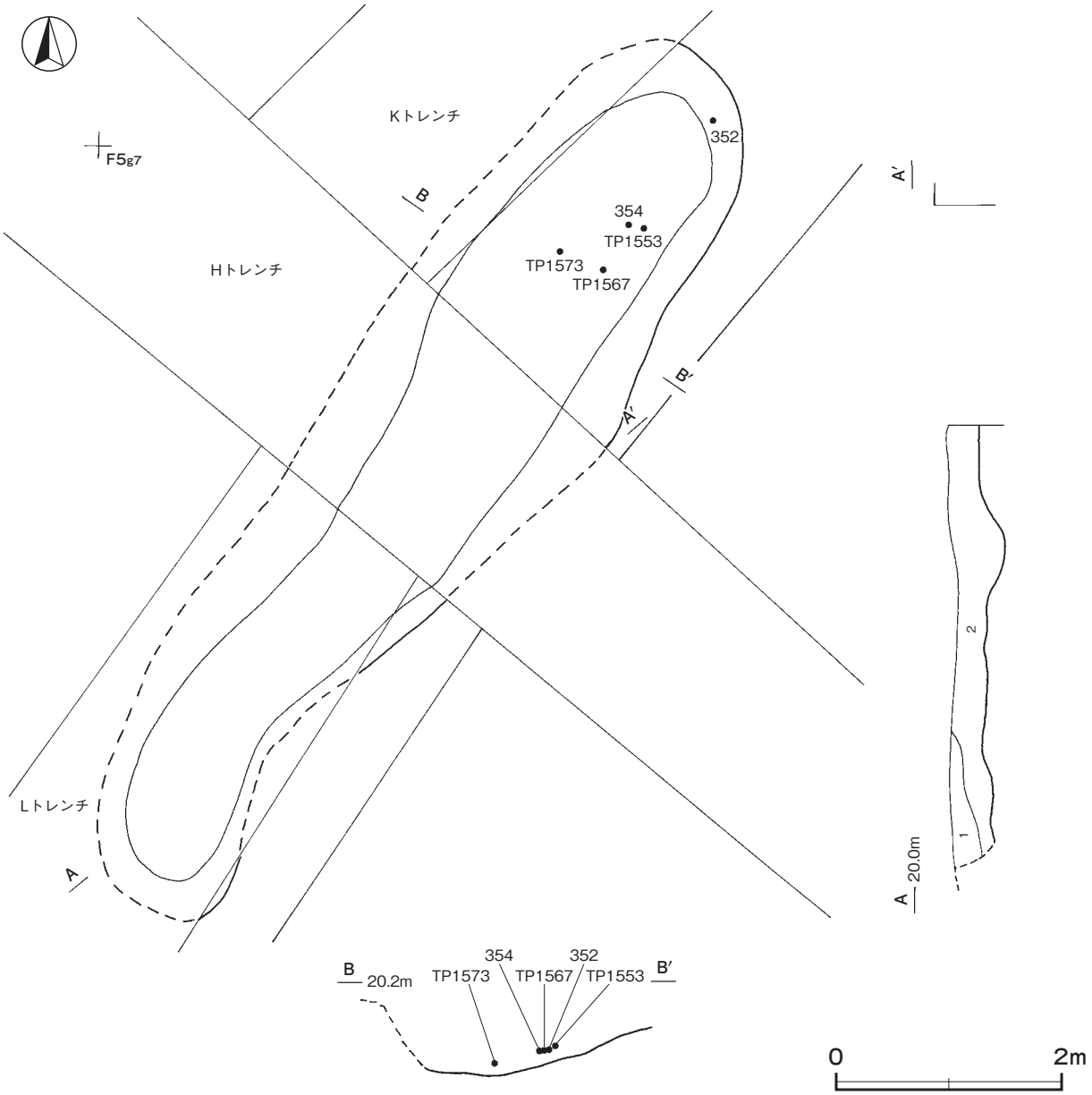
番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1544	縄文土器	浅鉢	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部列点文→沈線文→縄文 LR　内面磨き	覆土中	
TP1545	縄文土器	浅鉢	長石・石英・雲母	黄灰	普通	口唇部ナデ→沈線文→隆帯間三叉文　内面磨き	覆土中	
TP1546	縄文土器	浅鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	沈線文→沈線文に平行して列点文　内面ナデ	覆土中	

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q180	磨製石斧	(4.1)	4.4	3.8	(87.5)	砂岩	定角式　研磨調整	覆土中	
Q181	石匙ヵ	3.3	4.9	1.0	14.1	チャート	両面剥離調整	覆土中	PL23

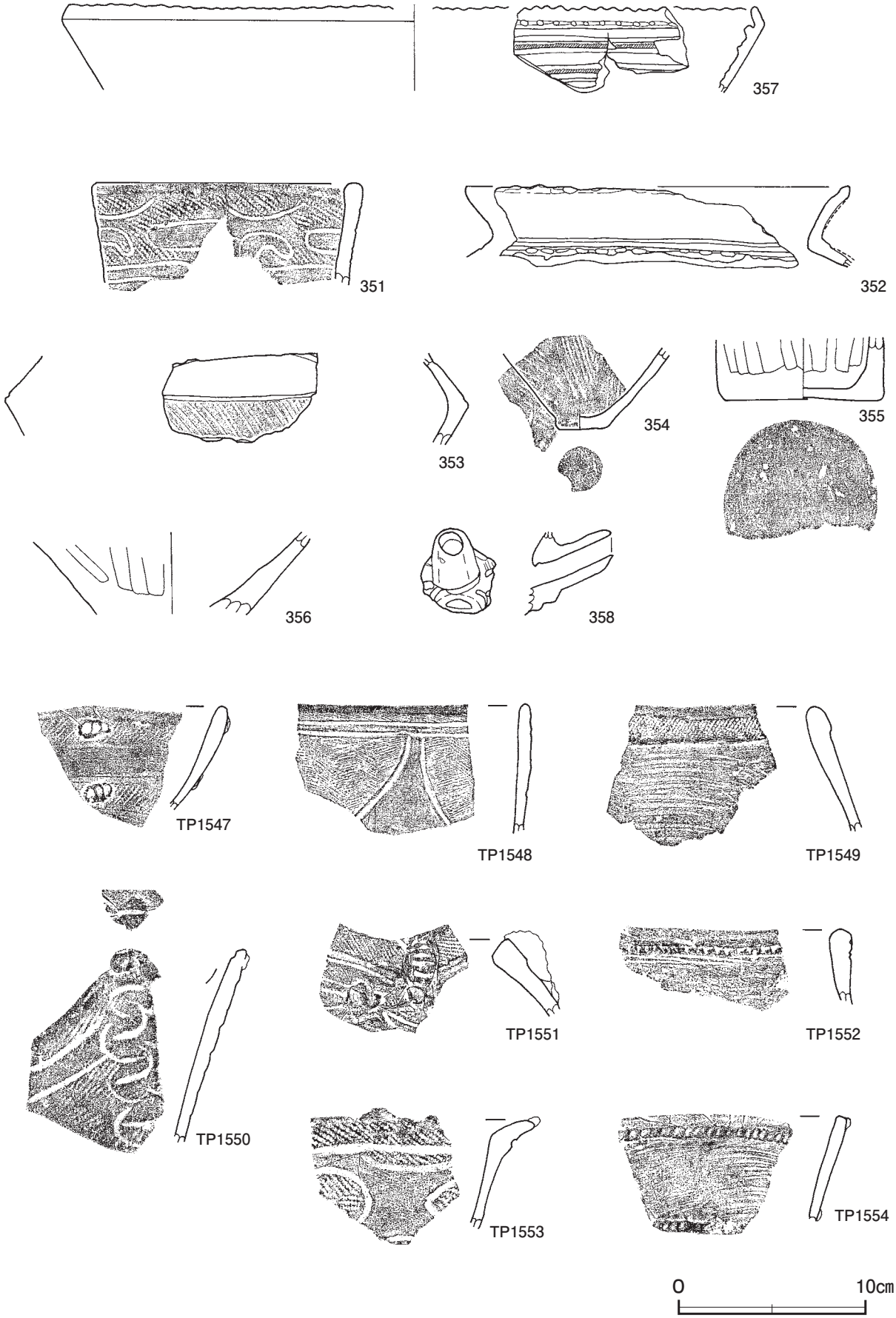
第７号溝跡（第 30 ～ 32 図）

位置　調査区東部のＦ５f8 ～Ｆ５h7 区，標高 20 mほどの谷に向かう斜面部に位置している。

重複関係　第４号包含層を掘り込んでいる。



第 30 図　第７号溝跡実測図



第 31 図　第７号溝跡出土遺物実測図 (1)

第 32 図　第７号溝跡出土遺物実測図 (2)

規模と形状　長さは8.95 mで，Ｆ５h7区から北東方向（Ｎ－36°－Ｅ）に直線状に延びている。上幅1.28～2.32 m，下幅0.82～1.48m，深さ５～54cmで，底面の高低差はほとんどない。断面は浅いＵ字状で，北西壁は外傾し，南東壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土　２層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから，自然堆積である。

土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子少量，細礫微量　　2　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子・細礫少量，焼土粒子微量

遺物出土状況　縄文土器片1309点，石器５点（磨製石斧１，石皿１，磨石１，敲石２）が全域の覆土上層から下層にかけて出土している。352・354，TP1553・TP1567・TP1573は，北東部の覆土下層からそれぞれ出土している。351・353・355～358，TP1547～TP1552・TP1554～TP1566・TP1568～TP1572・TP1574・TP1575，Ｑ182・Ｑ183は，覆土中からそれぞれ出土している。出土遺物の大半は土器の小片であるが，比較的大きな破片や石器なども出土していることから，投棄されたか第４号包含層から土砂とともに流れ込んだものと考えられる。

所見　本跡は，台地の傾斜と平行に，標高20 mの等高線に沿って延びており，北東側に所在する第６号溝跡と同様な性格と考えられるが，詳細は不明である。また，覆土中に北部包含層と同様の堆積土及び遺物が多量に流れ込んでいることから，本跡が機能を終えてから，第４号包含層が上層に再堆積したとみられる。時期は，出土土器の特徴から後期中葉から晩期前葉と考えられる。

第７号溝跡出土遺物観察表（第31・32図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
351	縄文土器	深鉢	［14.0］	（5.4）	－	長石・石英・雲母	褐灰	普通	口唇部ナデ→沈線文→縄文RL→無文部磨き	覆土中	５％
352	縄文土器	深鉢	［20.5］	（4.4）	－	長石・石英	黒褐	普通	外面磨滅顕著　平行沈線→羊歯状文	覆土下層	５％　PL11
353	縄文土器	深鉢	－	（4.8）	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	胴部くの字に屈曲　沈線文→斜位の条線文→内面磨き	覆土中	５％
354	縄文土器	深鉢	－	（4.3）	2.4	長石・石英	浅黄橙	普通	縦位の条線文	覆土下層	20％
355	縄文土器	深鉢	－	（3.4）	8.5	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	縦位の削り後ナデ　内面縦位の削り　内底面磨き	覆土中	５％
356	縄文土器	深鉢	－	（4.3）	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	浅黄橙	普通	外面縦位の削り後ナデ	覆土中	５％
357	縄文土器	浅鉢	［36.8］	（4.6）	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	口唇部棒状工具で波状に押圧　内面階段状に整形→刺突文→斜位の刻み目→外面磨き	覆土中	５％　PL11
358	縄文土器	注口土器	－	（4.5）	－	長石・石英	にぶい黄橙	普通	沈線文→無文部磨き	覆土中	５％

番号	種　別	器種	胎　土	色　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1547	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→沈線文→貼瘤→縄文LR→無文部磨き　内面磨き	覆土中	PL15
TP1548	縄文土器	深鉢	長石・石英	浅黄橙	普通	口唇部ナデ→沈線文→条線文→無文部磨き　内面磨き	覆土中	PL16
TP1549	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→縄文LR→横位の条線文　内面ナデ	覆土中	PL15
TP1550	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	波状口縁　貼瘤→沈線文→縄文LR　内面磨き	覆土中	PL15
TP1551	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	貼瘤→隆帯下沈線文→縄文RL→無文部磨き　内面磨き	覆土中	
TP1552	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口縁部三叉文→横位の沈線→無文部磨き　内面磨き	覆土中	
TP1553	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部貼瘤→沈線文→縄文RL　内面磨き	覆土下層	
TP1554	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→横位の条線文→口縁部・胴部紐線文　内面ナデ	覆土中	
TP1555	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部三叉文→斜位の平行沈線→横位の条線文　内面ナデ	覆土中	
TP1556	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→斜位の条線文　内面磨き	覆土中	
TP1557	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口唇部ナデ→紐線文→沈線で区画→無文部磨き　内面磨き	覆土中	
TP1558	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→斜位の条線文→三叉文→横位の沈線　内面磨き	覆土中	
TP1559	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	浅黄橙	普通	口縁部押圧波状文　地縄文→横位の平行沈線　内面ナデ	覆土中	
TP1560	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ後貼瘤→地縄文→沈線文→口縁部内面２条の列点文　内面磨き	覆土中	
TP1561	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→口縁部紐線文→横位の条線文→縦位の沈線→縄文RL充填　内面磨き	覆土中	
TP1562	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→隆帯下三叉文→縄文RL　内面磨き	覆土中	

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1563	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐灰	普通	口唇部ナデ→沈線文→縄文 RL →無文部磨き→貼瘤　内面磨き	覆土中	
TP1564	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰褐	普通	沈線文→縄文 RL →無文部磨き→貼瘤→口唇部ナデ　内面磨き	覆土中	
TP1565	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	普通	横位の条線文→口唇部ナデ　内面磨き	覆土中	
TP1566	縄文土器	深鉢	長石・石英・針状鉱物	にぶい橙	普通	沈線文→縄文 RL →無文部磨き　内面磨き	覆土中	
TP1567	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部紐線文→縦位の沈線　磨滅顕著	覆土下層	
TP1568	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→口縁部紐線文→斜位の条線文→縦位の沈線内面磨き	覆土中	
TP1569	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	縄文 RL →隆帯下沈線→無文部磨き　内面磨き	覆土中	
TP1570	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙 にぶい橙	普通	縄文 LR →半截竹管による平行沈線　内面磨き	覆土中	PL15
TP1571	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐灰 にぶい褐	普通	縄文 LR →沈線文→貼瘤→無文部磨き　内面磨き	覆土中	
TP1572	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	沈線文→縄文 RL →貼瘤→刻み目→無文部磨き　内面磨き	覆土中	
TP1573	縄文土器	深鉢	長石・石英	暗灰	普通	沈線文→縄文 LR →刺突文→無文部磨き　内面磨き	覆土下層	
TP1574	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐灰	普通	貼瘤→隆帯刻み目→隆帯下沈線→無文部磨き　内面磨き	覆土中	
TP1575	縄文土器	鉢	長石・石英	橙	普通	沈線文→縄文 RL →無文部磨き　内面磨き	覆土中	

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q182	磨石	8.2	6.2	3.0	212.0	安山岩	表・裏面使用	覆土中	
Q183	敲石	(9.0)	4.7	3.3	(200.3)	安山岩	片側端部欠損　片側側面に敲打痕	覆土中	PL24

第８号溝跡（第 33・付図）

位置　調査区南部のＧ５e1 ～Ｇ５d5 区，標高 21 ｍほどの谷に向かう斜面部に位置している。

重複関係　第５号包含層を掘り込み，第５号溝に掘り込まれている。

規模と形状　Ｇ５e1 区から北東方向（Ｎ－ 73°－Ｅ）に直線状に延び，Ｇ５d4 区から東方向（Ｎ－ 96°－Ｅ）にへの字状にやや屈曲している。西端部が撹乱を受け，東端部が調査区域外に延びているため，確認できた長さは 14.88 ｍである。上幅 0.58 ～ 1.06 ｍ，下幅 0.16 ～ 0.36m で，深さ 12 ～ 32㎝である。底面の高低差は１ｍほどで，東側の谷に向かって傾斜している。断面は逆台形またはＵ字状で，壁は斜面上層では外傾し，下層では緩やかに立ち上がっている。

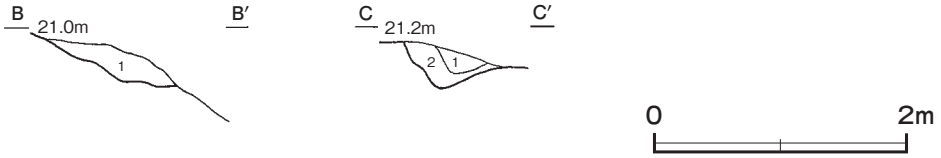
覆土　２層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから，自然堆積である。

土層解説

１　暗　褐　色　粘土粒子・砂粒中量，ローム粒子微量　　２　暗　褐　色　砂粒多量，粘土粒子中量，ローム粒子微量

遺物出土状況　縄文土器片２点が覆土中から出土しているが，いずれも細片のため図示できない。

所見　溝底が谷に向かって傾斜していることから，第５号溝跡と同様に，谷への排水の機能を有していた可能性がある。時期は，本跡は第５号包含層中から確認できたことから，後期後葉から晩期前葉と考えられる。また，重複関係にある第５号溝との時期差はあまりないと考えられる。



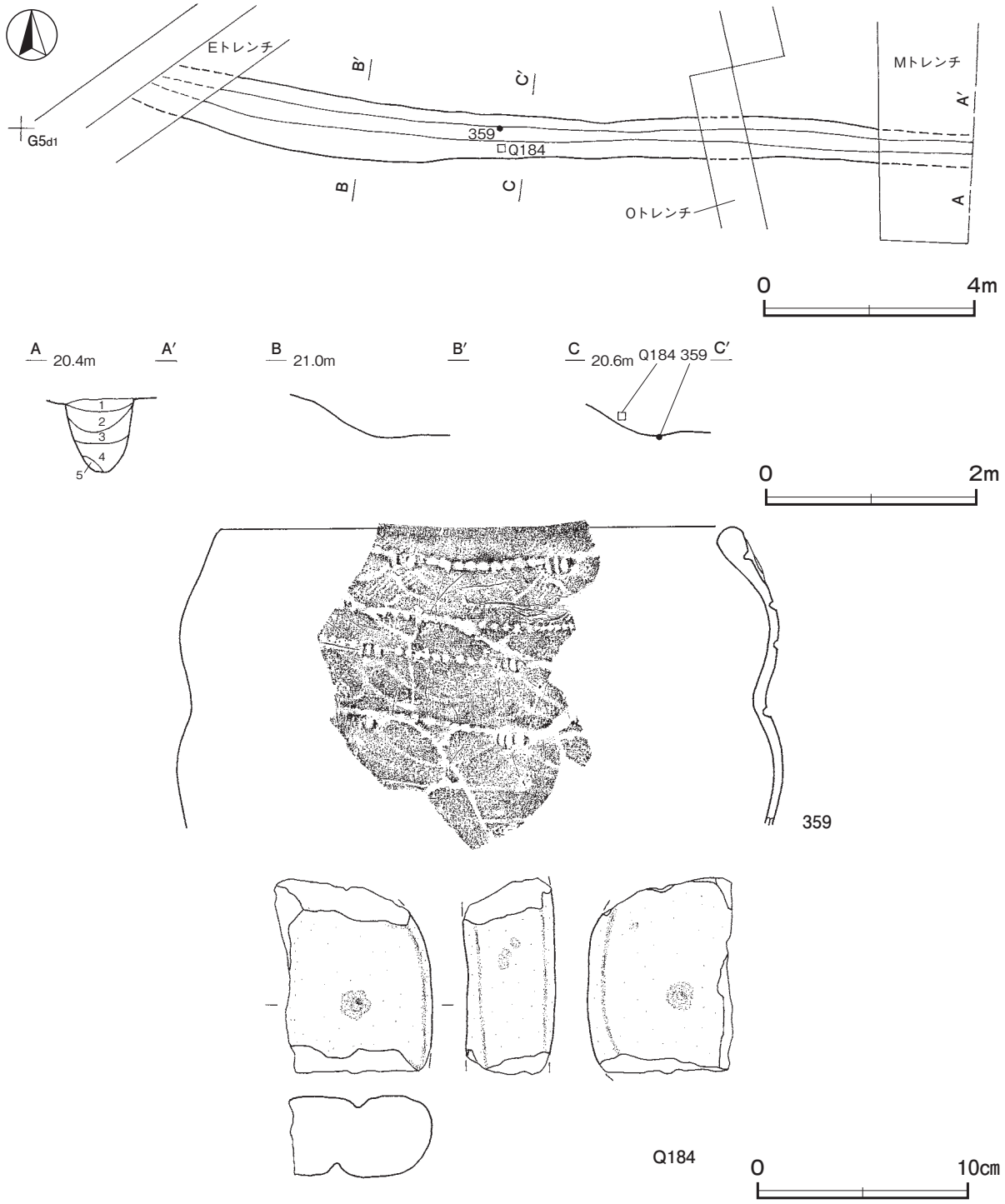
第 33 図　第８号溝跡実測図

第 11 号溝跡（第 34 図）

位置　調査区南部のＧ５c1 ～Ｇ５c5 区，標高 21 mほどの谷に向かう斜面部に位置している。

重複関係　第５号包含層を掘り込んでいる。

規模と形状　Ｇ５c1 区から東方向（Ｎ－ 86°－Ｅ）に直線状に延びている。西端部及び東端部が調査区域外に延びているため，確認できた長さは 14.60 mである。上幅 0.64 ～ 1.06 m，下幅 0.12 ～ 0.38m で，深さ８～ 38 ㎝である。底面の高低差は２mほどで，東側の谷に向かって傾斜している。断面はＵ字状で，壁は緩やかに立ち上がっている。



第 34 図　第 11 号溝跡・出土遺物実測図

覆土　５層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから，自然堆積である。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量
3　黒　褐　色　ローム粒子・粘土粒子微量
4　黒　　色　ローム粒子・焼土粒子・砂粒微量
5　極暗褐色　砂粒少量，焼土粒子微量

遺物出土状況　縄文土器片１点，石器１点（石皿）が覆土下層及び底面から出土している。359 は中央部の底面，Q 184 は下層からそれぞれ出土している。ともに破片であるが，比較的大形で重量を伴うことから，本跡が機能を終えてから早い段階で投棄されたものと考えられる。

所見　規模と方向から，未調査区を挟んで西側の調査区で確認した第１号流路跡（当財団文化財調査報告第 364 集「上境旭台貝塚２」で報告）とつながる可能性があるが，詳細は不明である。溝底が谷に向かって傾斜していることから，第５及び８号溝跡と同様に，谷への排水の機能を有していた可能性がある。時期は，第５号包含層中で確認したこと及び出土土器の特徴から後期後葉とみられ，遺物包含層の形成時期と大きな差はないものと考えられる。

第 11 号溝跡出土遺物観察表（第 34 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
359	縄文土器	深鉢	［24.6］	（14.2）	－	長石・石英	橙	普通	縄文 LR →貼瘤→刺突文　内面ナデ	底面	５％

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
Q184	石皿	（9.3）	（7.5）	4.4	（406.9）	安山岩	両磨面は皿状に凹む　側面に敲打痕　表・裏面に断面Ｖ字状の孔２か所	覆土下層	

表６　縄文時代溝跡一覧表

番号	位　置	方　向	平面形	規　模				断　面	壁　面	覆　土	主な出土遺物	備　考
				長さ（m）	上幅（m）	下幅（m）	深さ（cm）					
5	G 4 d0 ～ G 5 d5	N － 84° － E N － 88° － E	直線状	［20.76］	0.84 ～ 1.56	0.62 ～ 1.32	18 ～ 52	浅い U 字状	外傾	自然	縄文土器	HG 5，SD 8 → 本跡
6	F 5 c0 ～ F 5 e8	N － 35° － E	直線状	10.60	1.94 ～ 3.42	1.68 ～ 2.58	26 ～ 44	逆台形	外傾	自然	縄文土器，石器	HG 4 → 本跡→ SD 9
7	F 5 f8 ～ F 5 h7	N － 36° － E	直線状	8.95	1.28 ～ 2.32	0.82 ～ 1.48	5 ～ 54	浅い U 字状	外傾	自然	縄文土器，石器	HG 4 → 本跡
8	G 5 e1 ～ G 5 d5	N － 73° － E N － 96° － E	への字状	［14.88］	0.58 ～ 1.06	0.16 ～ 0.36	12 ～ 32	逆台形 U 字状	外傾	自然	縄文土器	HG 5 → 本跡→ SD 5
11	G 5 c1 ～ G 5 c5	N － 86° － E	直線状	［14.60］	0.64 ～ 1.06	0.12 ～ 0.38	8 ～ 38	U 字状	外傾	自然	縄文土器，石器	HG 5 → 本跡

(6)　ピット群

第６号ピット群（第 35・36 図）

位置　調査区北部の標高 20 ～ 21 mほどで，Ｆ５a9 ～Ｆ５d9 区にかけての東西６m，南北 13 mの範囲から，柱穴状のピット 13 か所を確認した。

重複関係　第４号包含層を掘り込み，本跡の上層に第２号遺物集中地点が形成されている。

規模と形状　平面形は長径 21 ～ 54cm，短径 20 ～ 37cmの円形または楕円形で，深さは 12 ～ 54cmである。

遺物出土状況　縄文土器片 18 点，石製品１点（石剣）がＰ１～Ｐ３・Ｐ７・Ｐ９から出土している。Q 185 はＰ６の覆土下層から，TP1576 はＰ７，TP1577 はＰ２，TP1578 はＰ９の覆土中からそれぞれ出土している。出土土器は全て小片，石器は欠損した状態で出土していることから，第４号包含層に投棄された遺物が混入または流れ込んだものと考えられる。

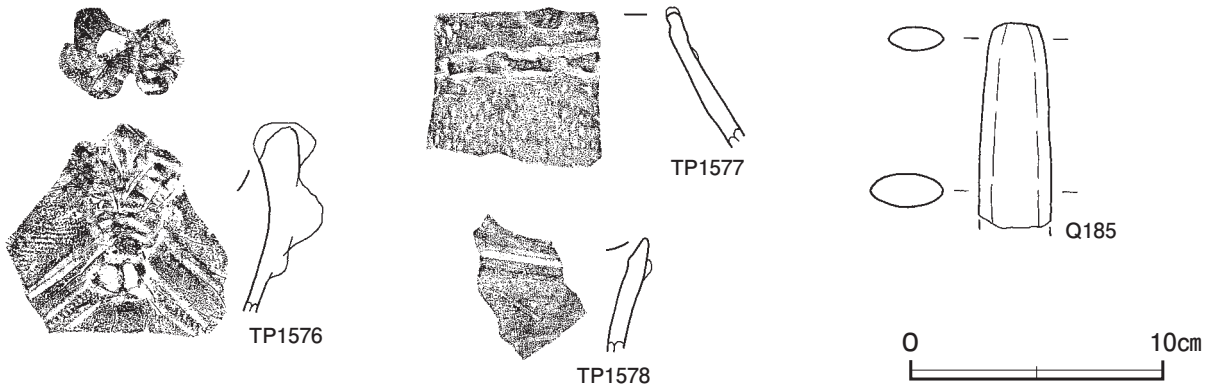
第35図　第６号ピット群実測図

所見　各ピットの位置関係や周囲の状況からは建物跡や構造物を想定することはできず，性格は不明である。時期は，出土土器の特徴及び重複関係から，後期後葉と考えられる。

表７　第６号ピット群ピット計測表

番号	位置	形状	規模（cm）		
			長径	短径	深さ
1	Ｆ５b9	円形	29	28	44
2	Ｆ５b0	楕円形	36	32	51
3	Ｆ５c0	楕円形	39	30	54
4	Ｆ５c9	円形	23	21	52
5	Ｆ５c9	楕円形	33	23	21
6	Ｆ５d9	楕円形	34	27	14
7	Ｆ５d8	楕円形	35	30	12

番号	位置	形状	規模（cm）		
			長径	短径	深さ
8	Ｆ５c8	円形	24	23	20
9	Ｆ５b9	楕円形	23	20	20
10	Ｆ５b9	円形	32	32	30
11	Ｆ５a9	楕円形	54	37	18
12	Ｆ５a9	楕円形	30	25	28
13	Ｆ５a9	円形	21	21	35



第 36 図　第６号ピット群出土遺物実測図

第６号ピット群出土遺物観察表（第 36 図）

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1576	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	波状口縁　口唇部ナデ→隆帯縄文 RL →隆帯下沈線→貼瘤→無文部磨き　内面磨き	Ｐ７覆土中	PL16
TP1577	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ後貼瘤→口縁部紐線文→口縁部内面横位の沈線内面ナデ	Ｐ２覆土中	
TP1578	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	波状口縁　隆帯下沈線　内面磨き	Ｐ９覆土中	

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q185	石剣	(8.1)	(2.9)	0.9～1.4	(55.3)	緑泥片岩	表面研磨調整	Ｐ６覆土下層	

(7)　斜面貝層

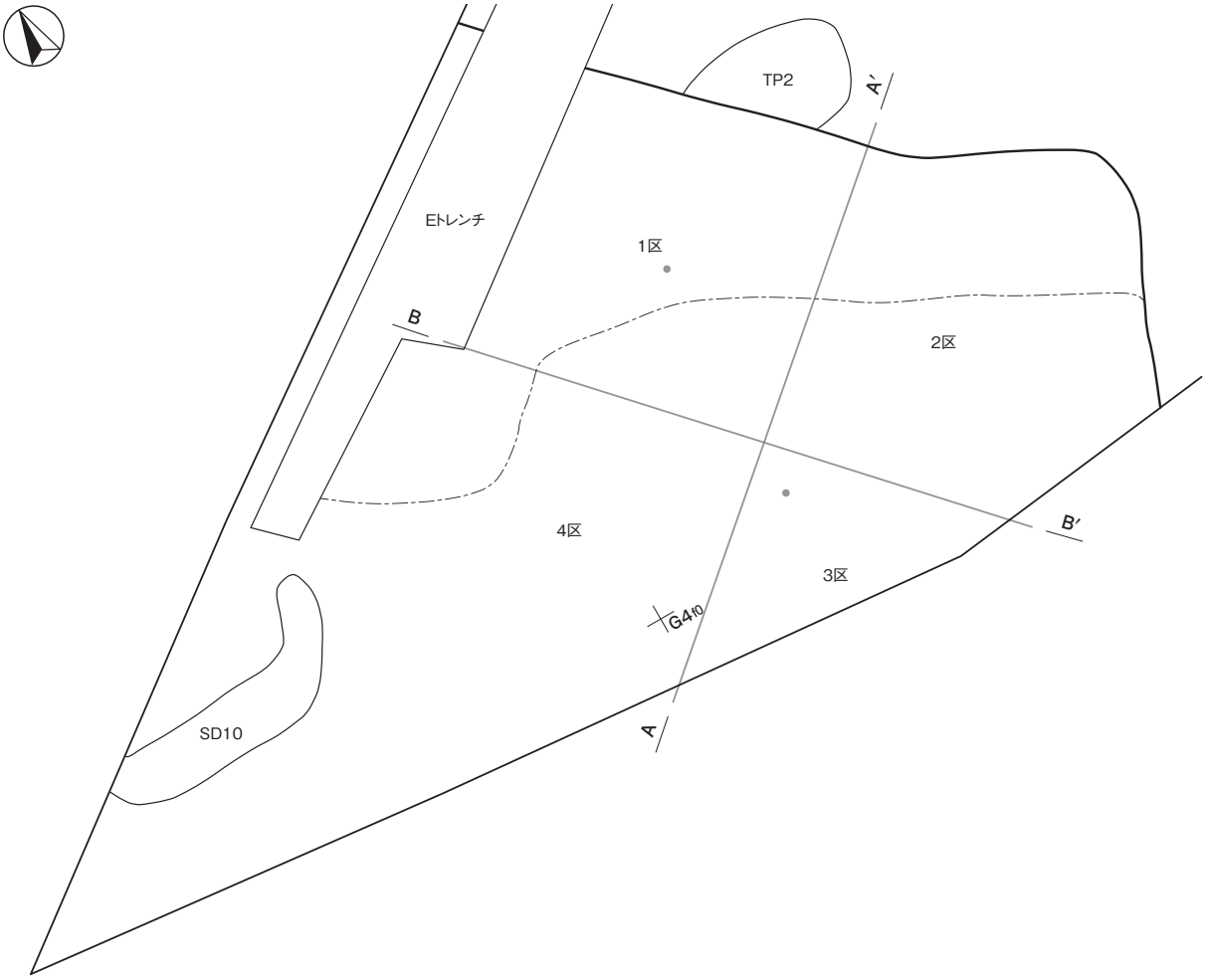
第３号貝層（第 37 ～ 39 図）

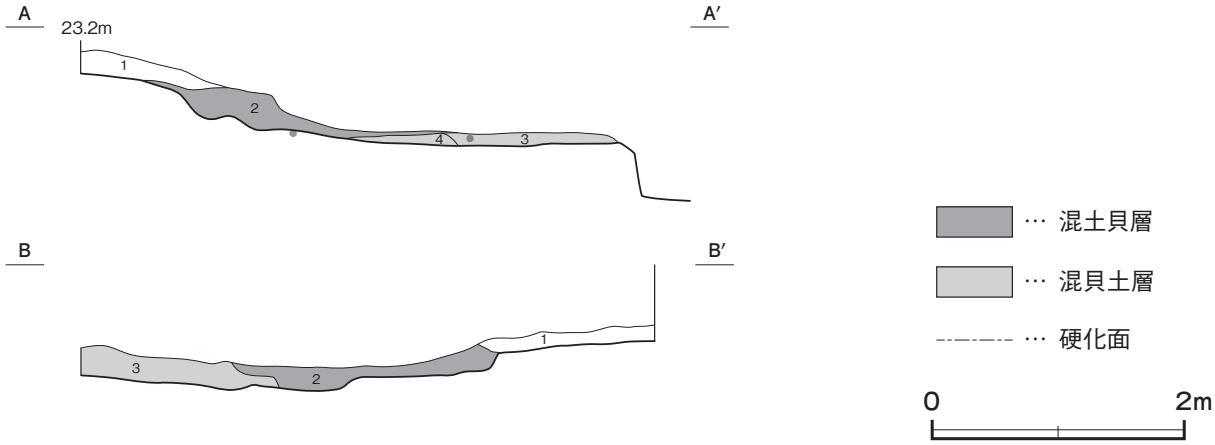
位置　調査区南部のＧ４e8 ～Ｇ５f1 区，標高 22 ～ 23 mの緩やかな台地斜面部に位置している。

確認状況　南部の調査区域際にＬ字状に設定したＥトレンチの南西端の断面で，貝層が存在することを確認した。表土除去後に南部の斜面部一帯に大きく広がる第５号包含層の上層で，貝層の広がりが認められた。貝層の西部及び南部は調査区域外に広がっている。北部はＧ４e0 区まで，東部はＧ５e1 区まで貝の散布が確認できた。また，本貝層から保存区域を挟んで 30 mほど北西側に，平成 21 及び 23 年度の調査で確認した第１号貝層が，所在している。本貝層は，台地の地形から，保存区域の貝層の北東部にあたるものとみられる。

重複関係　本貝層の下層に第５号包含層，第２号陥し穴が形成されており，第 10 号溝に掘り込まれている。

調査の方法　遺構確認の過程で，確認面での遺物の出土状況や貝の散布状況から，斜面の傾斜に沿って貝層が広がっていることが確認できた。そこで，傾斜に沿った方向とそれに直交するように，任意に十字のベルトを設定し，ベルト脇にトレンチを入れて貝層の堆積状況の観察を行った。トレンチ調査の結果，貝層の遺存状態は良好ではなく，上層の大部分が削平されている状況が分かった。遺物については，ベルトを境界に４区割りし，掘り下げる過程で土器の完形品に近いものや大形の破片，土製品，石器，石製品については座標と高さを





第 37 図　第３号貝層実測図

計測し，それ以外については層位毎に取り上げた。貝はすべて取り上げ，５㎜，１㎜メッシュの順でふるいにかけ，貝や骨類などの自然遺物，土器，貝製品や骨角歯牙製品などの人工遺物を回収した。貝については，貝種を同定し，殻頂部が残存しているものをカウントし，それぞれの点数及び重量を記録した。以下，第４・９号貝層及び比較的規模の大きな第４号地点貝塚についても同様の基準で調査を行っている。なお，獣骨類の同定については，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部名誉教授の西本豊弘氏に依頼し，結果については付章で解説した。

貝層の広がりと堆積状況　本貝層は，南西部の標高が約 23 ｍと高く，約 22 ｍである北東部に向かって緩やかに下っている。調査区域外である南西側は，現況で標高が徐々に高くなっていく状況が認められる。このことから，本貝層は，調査区域の南西側から北東方向に向かって広がっている斜面貝層の北東端部付近にあたると考えられる。東西の幅は約 11 ｍ，南北の幅は約５ｍ，高低差は約１ｍで，確認面での傾斜角は約５度である。４層に分層でき，全体の層厚は 10 ～ 30㎝である。土層・貝層解説では，混土貝層は混貝率が概ね 50％を超えるもの，混貝土層は混貝率が概ね 50％以下のものとした。また，貝の３分の１以上が欠損しているものを破砕貝とした。第１層は貝を含まない表土層で，標高の高い南西側からの流入土とみられ，層厚は５～ 15㎝である。第２層は貝の占める割合が 50％を超える混土貝層で，層厚は５～ 30㎝である。第３・４層はローム粒子を含む暗褐色土主体の混貝土層で，第３層の層厚は５㎝，第４層は 15㎝ほどである。堆積状況は一様でなく，中央部には混土貝層が形成されていることから，廃棄単位を示している可能性がある。また，北東部の確認面で，平坦な硬化面が確認でき，整地行為の跡の可能性がある。

本貝層から出土した貝の総数は 1,031 点である。一部分の調査であるため，数は少ない。貝種組成は表８のとおりである。第１優占種はハマグリで，849 点（3,498.5g）が出土しており，全体の 82.35％を占めている。第２優占種のヤマトシジミが 79 点（228.5g）で 7.66％，次いでウミニナが 37 点（21.4g）で 3.59％，及び内湾性の２枚貝及び巻き貝が出土している。この３種で 94％ほどを占めている。下層になるほど破砕貝が増加し，白化する傾向が認められた。当財団文化財調査報告「第 364 集」で報告した第１号貝層及び「第 368 集」で報告した第１・２号貝層の貝種組成状況は，ヤマトシジミが 85 ～ 95％ほどを占めていたが，今回の第３号貝層では，第１優占種がハマグリとなっている点が相違している。両者ともに淡水の影響を受ける内湾性の海の砂や泥底に生息する貝であるが，本貝層の第１優占種はハマグリであった。

土層・貝層解説

1　暗　褐　色　暗褐色土主体，粘土粒子微量
2　混 土 貝 層　ハマグリ・ヤマトシジミ主体，暗褐色土少量
3　混 貝 土 層　暗褐色土主体，粘土粒子少量，破砕貝微量
4　混 貝 土 層　暗褐色土主体，破砕貝微量

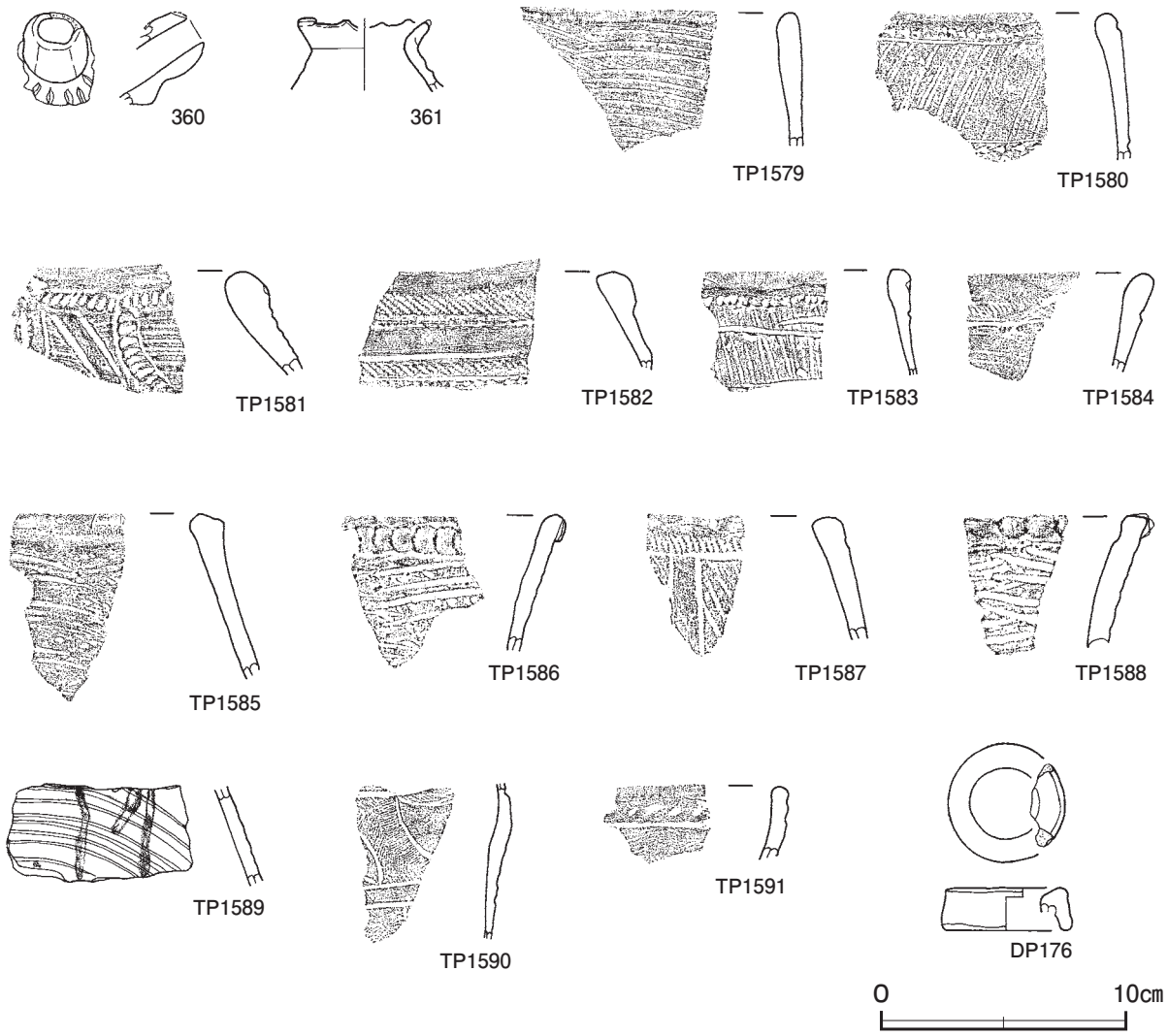
表８　第３号貝層貝種組成表

貝　　種	点数（点）	割合（％）	出土地点毎内訳（点）					総重量（ｇ）	備　　考
			１区	２区	３区	４区	Ｅトレンチ		
ハマグリ	849	82.35	47	25	76	571	130	3,498.5	
ヤマトシジミ	79	7.66	3	2	16	55	3	228.5	
ウミニナ	37	3.59	2	0	1	25	9	21.4	
シオフキ	36	3.49	3	3	2	8	20	144.0	
サルボウ	24	2.32	3	0	2	15	4	82.1	
アカニシ	3	0.29	0	0	0	2	1	131.7	
キサゴ	2	0.19	0	0	0	2	0	3.3	
オオタニシ	1	0.11	0	0	0	1	0	1.5	
合計	1,031	100.00	58	30	97	679	167	4,111.0	

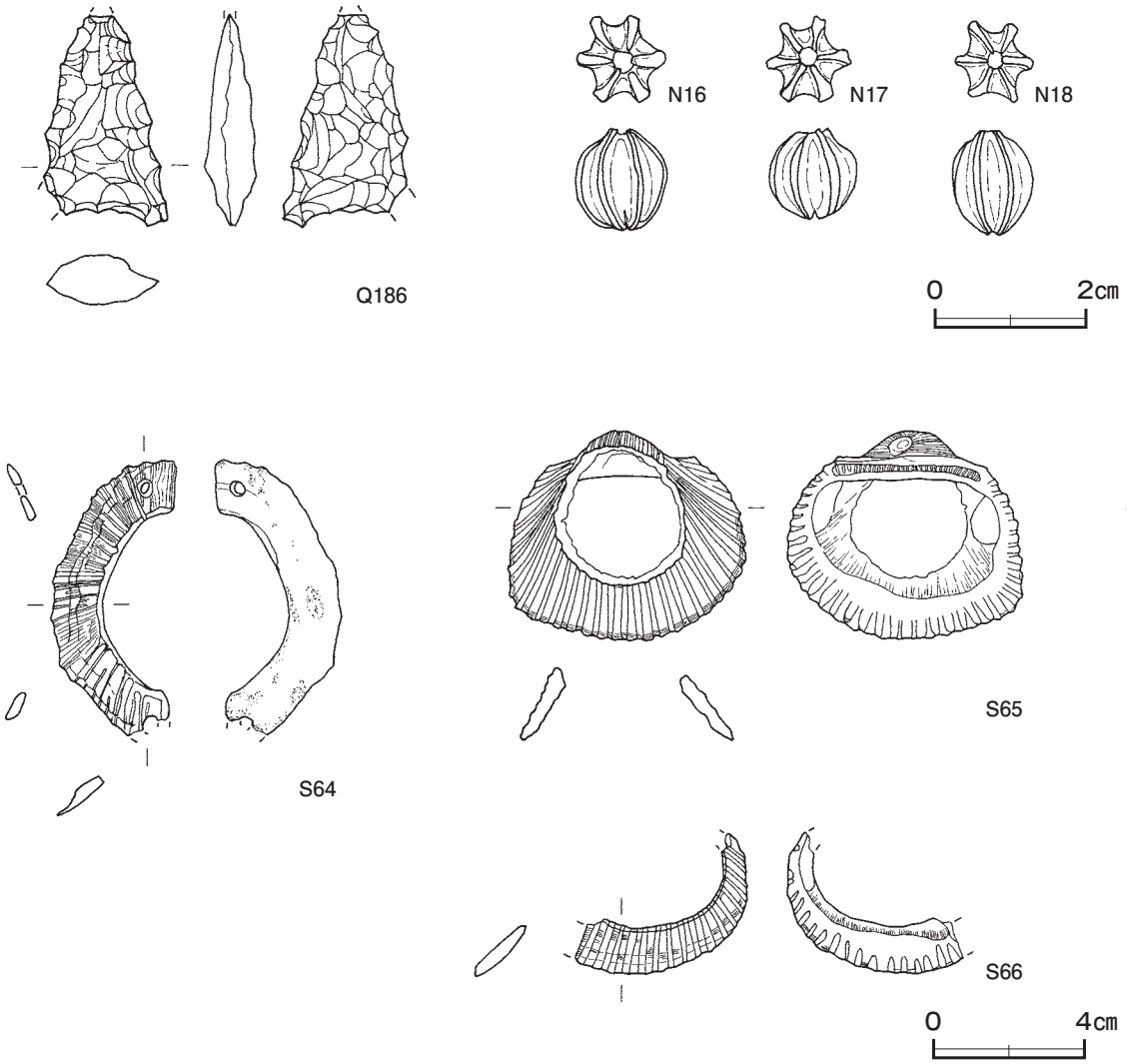
遺物出土状況　縄文土器片 680 点（10,998 g），土製品１点（耳飾り），石器２点（鏃，磨石），剥片６点（チャート３，黒曜石２，瑪瑙１），貝製品６点（貝輪２，貝輪未製品４）のほか，イノシシ・シカを主体とした獣骨類，スズキ・クロダイなどの魚骨，種実８点（センダン）も出土している。縄文土器片 680 点のうち６点（92.7g）が製塩土器片である。

出土土器のほとんどが破片または細片の状態であり，完形またはほぼ完形で出土した遺物は，小形の土器，土製品，石器などに限られる。また，土器片同士の接合関係はほとんどなく，近接して出土した２・３点が稀に接合する程度である。遺物は，相対的に３・４区の混土貝層中から集中して出土していることから，標高の高い南西側から標高の低い北東方向に向けて投棄されていたことが想定できる。遺物の種類としては，日常什器・狩猟具・装身具・食滓・自然遺物など多岐にわたっている。

所見　本貝層は，南西側に所在する保存区域内の貝層が連続しているものと考えられる。本貝層の１・４区はこれとの接点で，１・２区は本貝層の広がりの端部にあたる。本貝層は，層厚が薄く，確認できた範囲が小規模のため，層ごとの時期は明確にできないが，出土土器が後期中葉の加曽利Ｂ式から晩期前葉の安行３ｂ式まで確認できることから，後期中葉から晩期前葉にかけて連綿と形成された貝層の一部であると考えられる。



第 38 図　第３号貝層出土遺物実測図 (1)



第 39 図　第３号貝層出土遺物実測図 (2)

第３号貝層出土遺物観察表（第 38・39 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
360	縄文土器	注口土器	－	(3.8)	－	長石・石英	橙	普通	貼瘤→刻み目→無文部磨き　内面ナデ	Ｅトレンチ覆土中	５％
361	縄文土器	ミニチュア土器	[5.4]	(3.0)	－	長石	淡黄	普通	口縁部折り返し→口唇部貼瘤→沈線　内面ナデ	３区覆土中	10％

番号	種　別	器種	胎　土	色　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1579	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙 灰褐	普通	口唇部ナデ→弧状の条線文　内面磨き	４区覆土中	
TP1580	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐 にぶい褐	普通	口唇部ナデ→斜位の条線文→横位の沈線→横位の押引文 内面磨き	覆土中	
TP1581	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙 にぶい橙	普通	口唇部ナデ→紐線貼付→横位の条線→平行沈線→無文部磨き　内面磨き	４区覆土中	
TP1582	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口唇部ナデ→隆帯下押引文　沈線→無文部磨き　内面磨き	１区覆土中	
TP1583	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	口唇部ナデ→縦位の条線文→横位の沈線→口縁部押引文 内面磨き	４区覆土中	
TP1584	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→口縁部斜位の条線文　横位の沈線→沈線下横位の条線文	１区覆土中	
TP1585	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	灰褐	普通	口唇部ナデ→斜位の条線文　内面ナデ	Ｅトレンチ覆土中	
TP1586	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	口縁部紐線文→横位の条線文　内面磨き	Ｅトレンチ覆土中	
TP1587	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	普通	口唇部ナデ→口縁部斜位の刻み目→横位の沈線→縦位の平行沈線　内面磨き	２区覆土中	
TP1588	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→口縁部紐線貼付→横位の条線文　内面磨き	覆土中	
TP1589	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	横位の条線文　外面に流出痕	３区覆土中	

番号	種　別	器種	胎　土	色　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1590	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	沈線による区画→細密な沈線文充填→無文部磨き　内面磨き	４区覆土中	
TP1591	縄文土器	鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→横位の沈線→沈線下横位の条線文　内面磨き	１区覆土中	

番号	器　種	径	孔径	厚さ	重量	色調・胎土	特　　徴	出土位置	備　考
DP176	耳飾り	［4.8］	［2.9］	1.8	(7.35)	橙 長石・石英	側面・内面丁寧な磨き	４区覆土中	

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q 186	鏃	(2.8)	(1.6)	0.6	(2.69)	チャート	両面剥離調整	Ｅトレンチ覆土中	PL23

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	貝　種	特　　徴	出土位置	備　考
S 64	貝輪	(7.3)	3.4	1.1～1.6	(79.1)	オオツタノハ	丁寧な研磨整形　穿孔２か所	Ｅトレンチ内	PL25
S 65	貝輪	5.5	6.4	1.9	27.5	サルボウ属	殻頂部付近を欠く　未製品	１区覆土中	PL25
S 66	貝輪	(3.7)	(4.7)	1.3	(6.35)	サルボウ属	丁寧な研磨整形	４区覆土中	PL26

番号	種　類	長さ	幅	厚さ	重量	樹種（草種）	特　　徴	出土位置	備　考
N 16	種実	1.3	1.2	－	0.50	センダン	外皮に縦６条の稜線を持つ	４区覆土中	PL26
N 17	種実	1.2	1.2	－	0.40	センダン	外皮に縦６条の稜線を持つ	４区覆土中	PL26
N 18	種実	1.4	1.1	－	0.44	センダン	外皮に縦６条の稜線を持つ	Ｅトレンチ覆土中	PL26

第４号貝層（第 40 ～ 45 図）

位置　調査区南部のＦ４j0 ～Ｇ５a1 区，標高 22 ～ 23 ｍの台地斜面部に位置している。

確認状況　南部の調査区域際にＬ字状に設定したＥトレンチの北部の断面を観察したところ，厚く堆積する第５号包含層の上層で，層厚 40cmほどの貝層の存在を確認した。本貝層は，表土除去及び遺構確認により，南部の斜面部に広範囲にわたって堆積している第５号包含層の上層に形成されている。貝層の西部は調査区域外に広がっているものとみられる。北部はＦ４j0 区まで，南部はＧ５a1 区まで貝層の広がりが確認できた。第３号貝層と同様に，本貝層は，地形的に保存区域の貝層の北東端部とみられる。

重複関係　本貝層の下層に第５号包含層が形成されている。

調査の方法　精査後の確認面での遺物や貝の出土状況から，斜面の傾斜に沿って貝層が広がっていることが確認できた。そこで，傾斜に沿った方向とそれに直交するように，任意に十字のベルトを設定し，ベルト脇にトレンチを入れて貝層の堆積状況の観察を行った。トレンチ調査の結果，上層が削平されており，貝層の遺存状態が良好ではないことから，観察ベルトを利用して第３号貝層と同様な方法で調査を行うこととした。

貝層の広がりと堆積状況　本貝層は，北西部の標高が約 23 ｍと高い位置から，約 22 ｍである南東部に向かって下っている。西側に隣接する保存区域側の標高が高いことから，保存区域の貝層が本貝層まで連続しており，本貝層は，その東端の一部あたると考えられる。東西の幅は約４ｍ，南北の幅は約３ｍ，高低差は約１ｍで，確認面での傾斜角は約 15 度である。３層に分層でき，全体の層厚は 15 ～ 40cmである。第１層は第２層が流れ出した表土層であり，層厚は 10 ～ 20cm，第２層は混土貝層で，層厚は 10 ～ 30cmである。第３層はローム粒子を含む黒褐色土主体の混貝土層で，層厚は５～ 15cmである。上層は削平されているが，規則的な堆積状況を示していることから，一時期に一定量の廃棄が行われたものと考えられる。

本貝層から出土した貝の総数は 634 点で，貝種組成は表９のとおりである。第１優占種はハマグリで，399 点（1,757.0g）が出土しており，全体の 62.94％を占めている。第２優占種のヤマトシジミが 157 点（405.0g）

で 24.76％，次いでシオフキが 52 点（187.7g）で 8.20％と，内湾性の２枚貝の３種で 96％ほどを占めている。第３号貝層と同様に第１優占種がハマグリとなっている。

土層・貝層解説

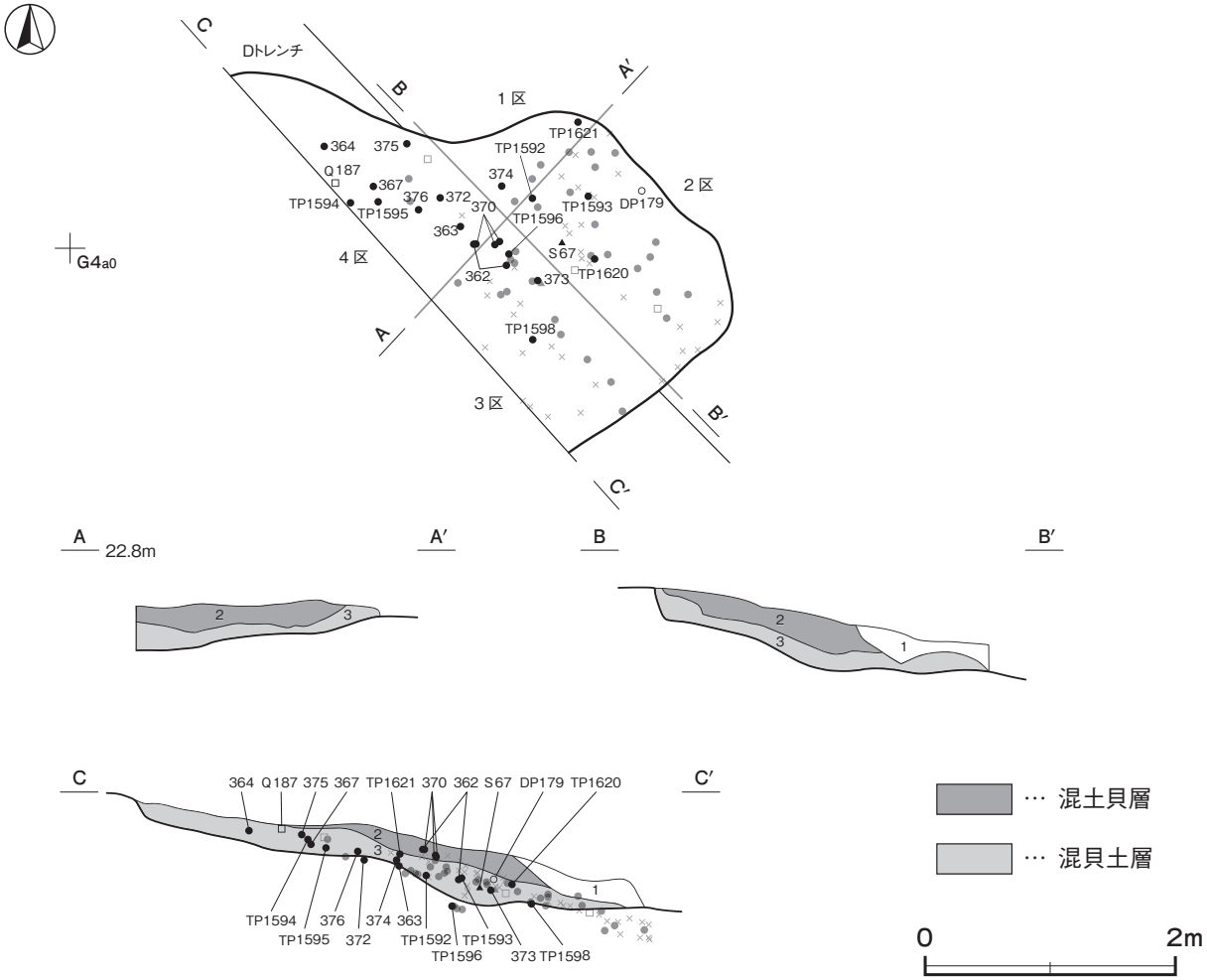
1　黒　褐　色　黒褐色土主体，ハマグリ・ヤマトシジミ・破砕貝・骨片微量

2　混 土 貝 層　ハマグリ・ヤマトシジミ主体，破砕貝・骨片少量

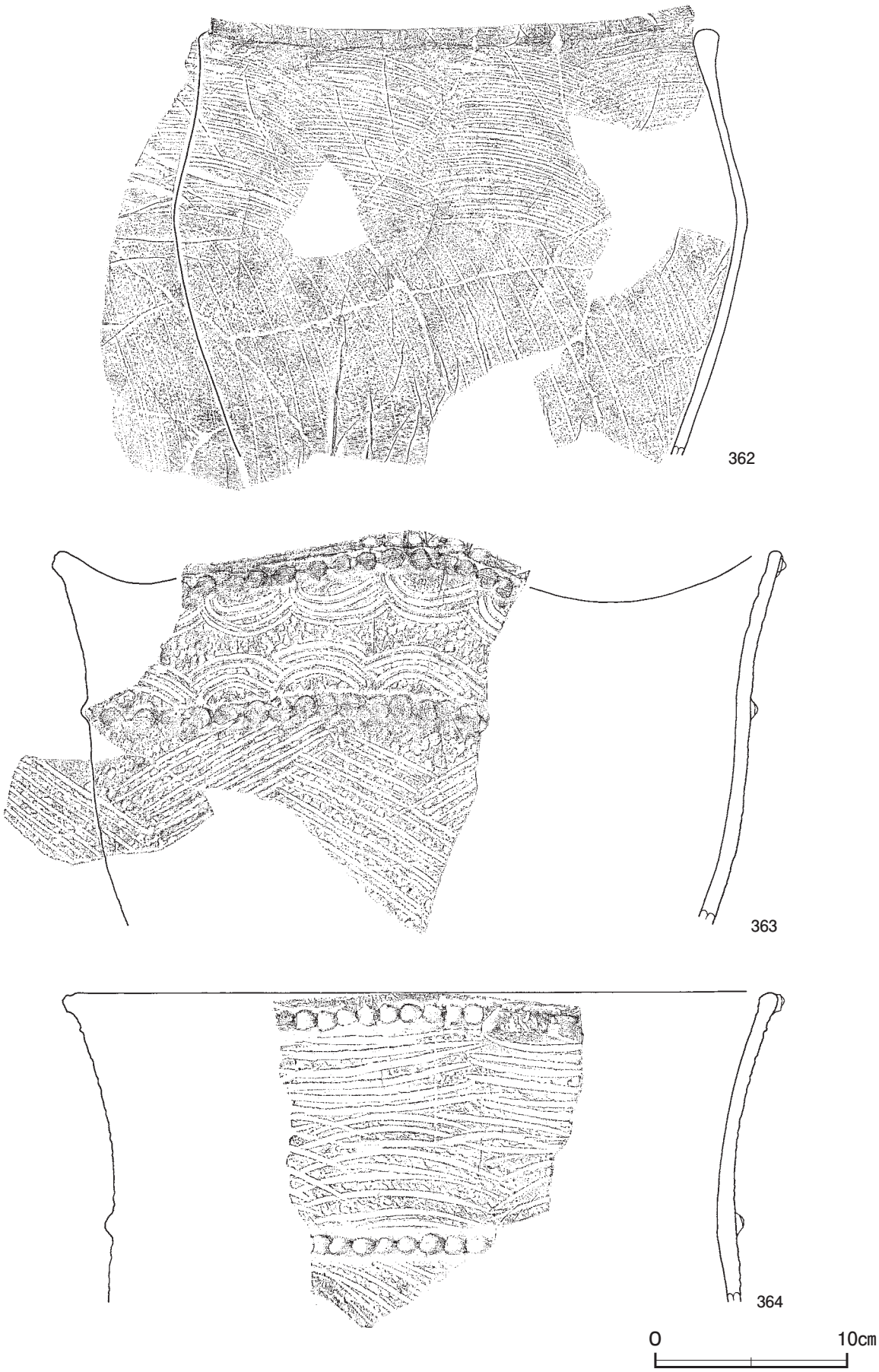
3　混 貝 土 層　黒褐色土主体，破砕貝少量，ハマグリ・ヤマトシジミ・骨片微量

表９　第４号貝層貝種組成表

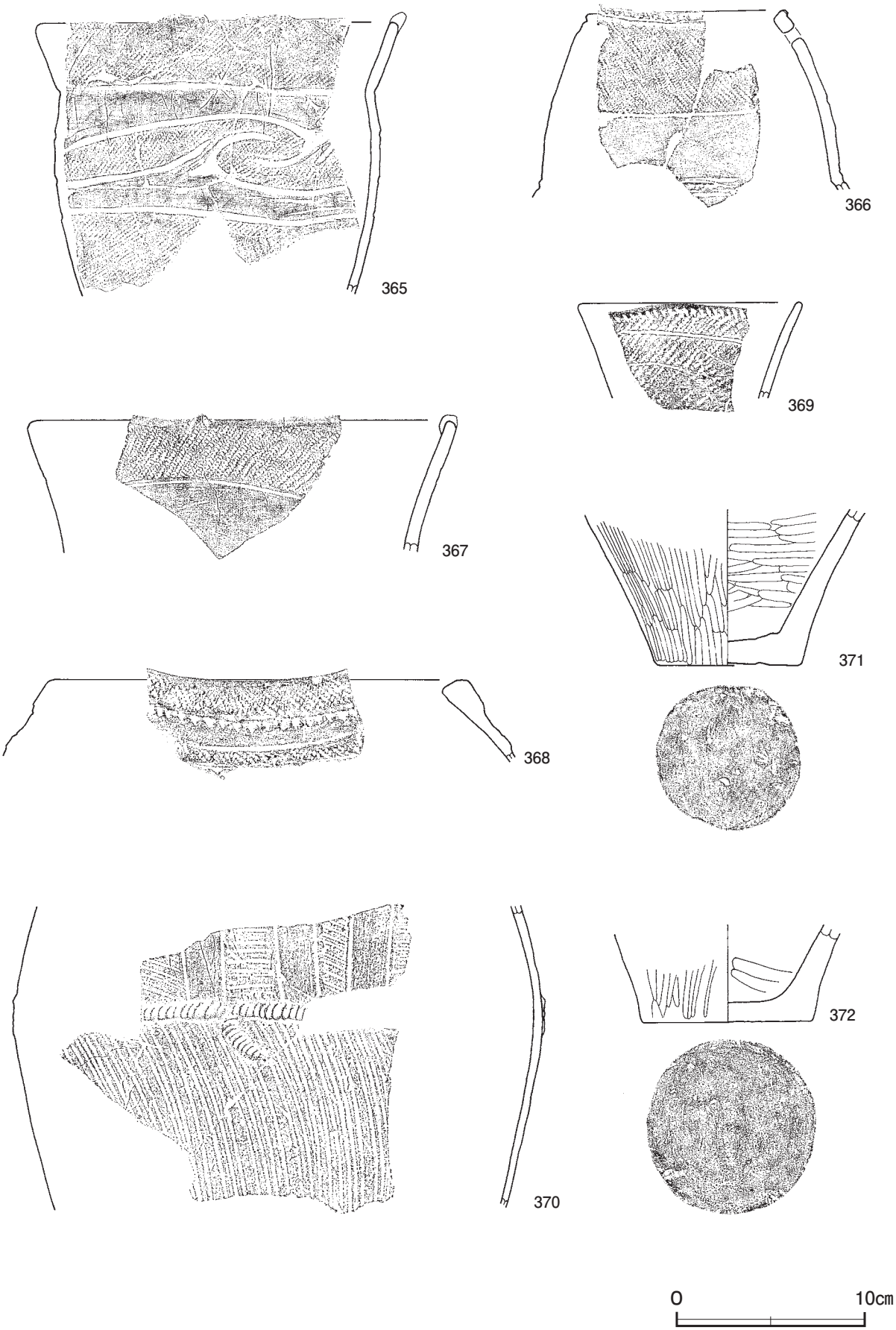
貝　　種	点数（点）	割合（％）	出土地点毎内訳（点）					総重量（g）	備　　考
			１区	２区	３区	４区	覆土中		
ハマグリ	399	62.94	52	27	67	251	2	1,757.0	
ヤマトシジミ	157	24.76	1	32	37	67	20	405.0	
シオフキ	52	8.20	0	5	4	36	7	187.7	
サルボウ	9	1.41	0	0	3	5	1	42.0	
アカニシ	7	1.10	1	3	2	0	1	180.6	
ウミニナ	5	0.79	0	0	2	3	0	2.2	
ツキガイ	2	0.32	0	0	0	0	2	3.3	
オオノガイ	2	0.32	0	0	2	0	0	4.9	
オオタニシ	1	0.16	0	0	0	1	0	1.4	
合計	634	100.00	54	67	117	363	33	2,584.1	



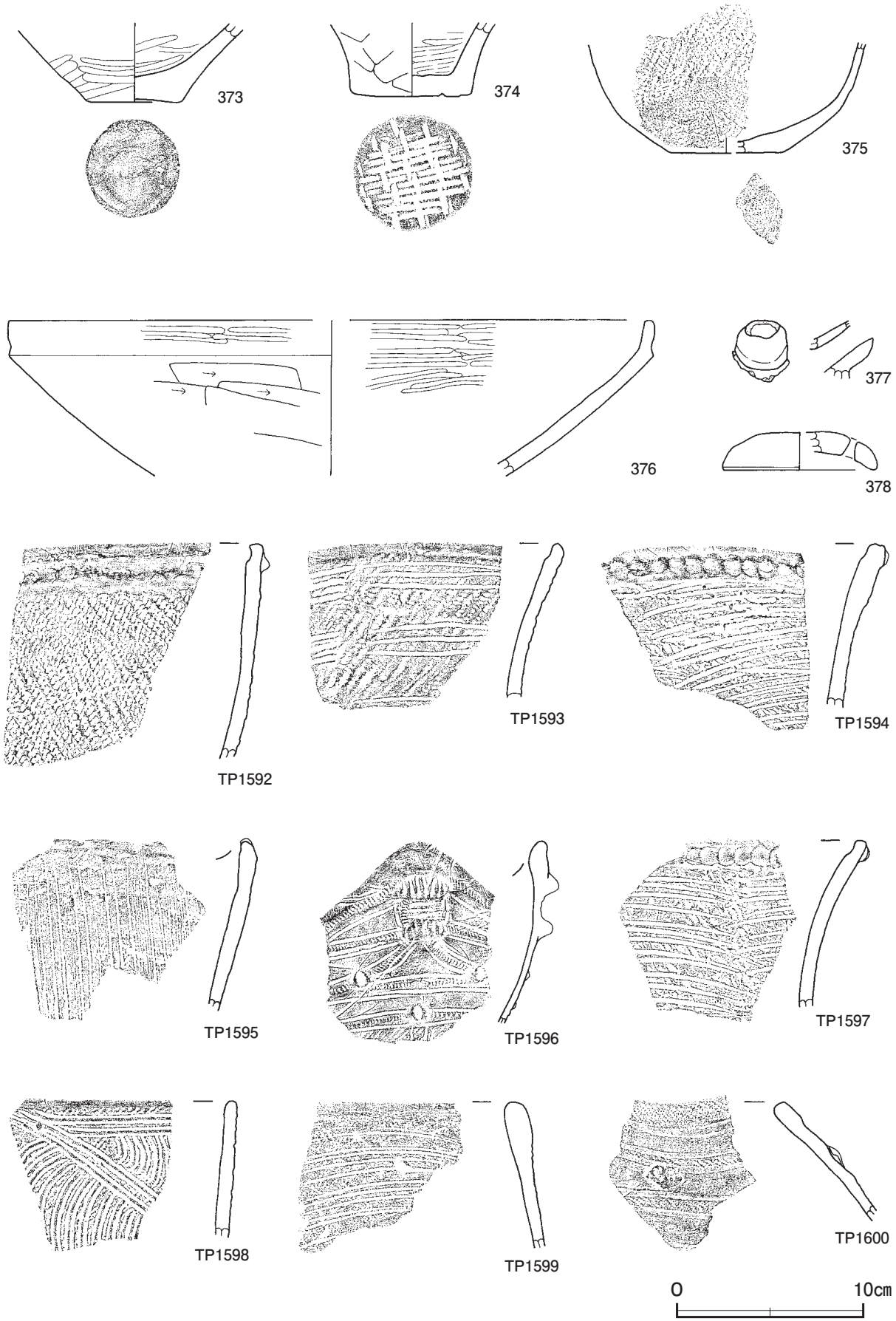
第 40 図　第４号貝層実測図



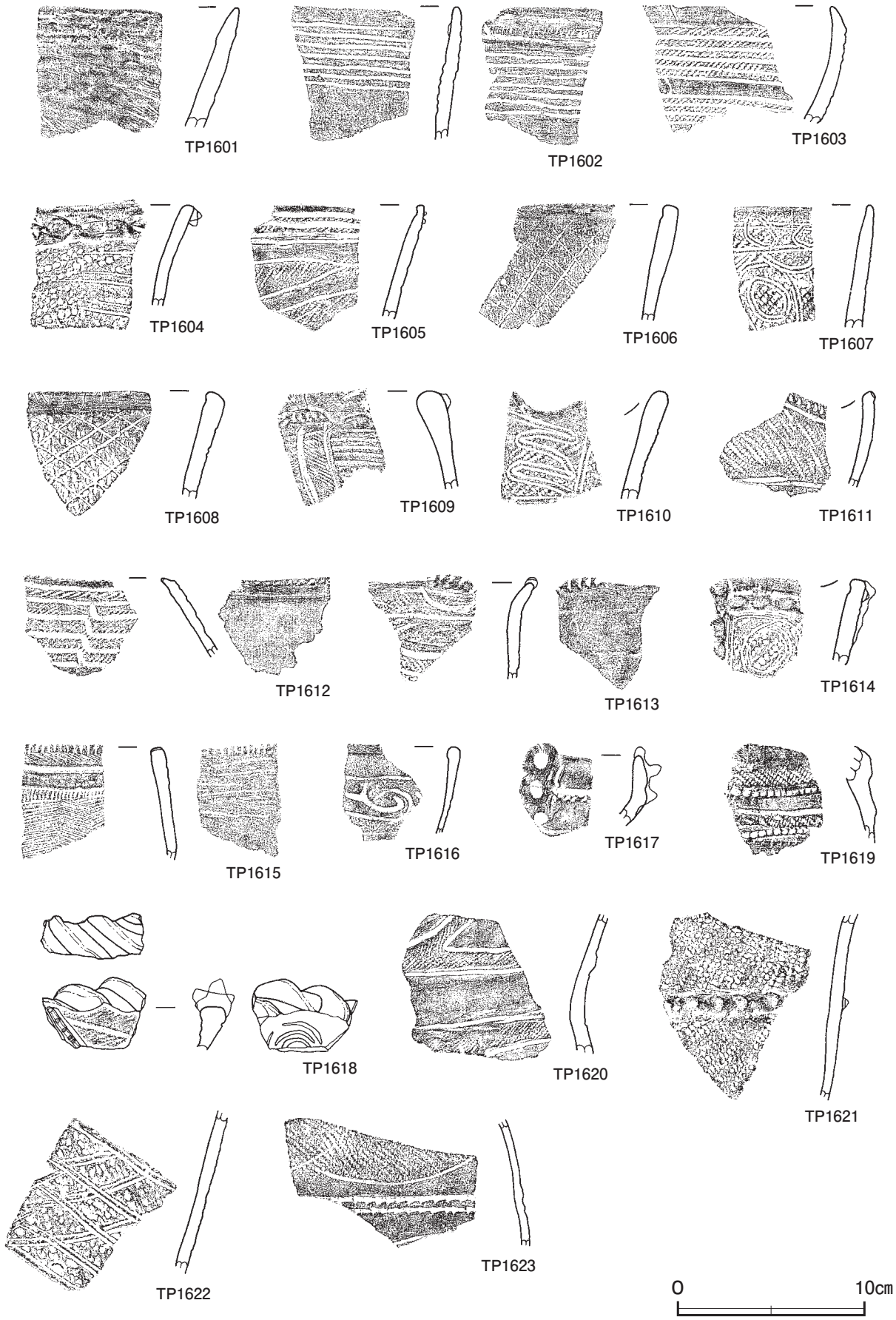
第41図　第４号貝層出土遺物実測図(1)



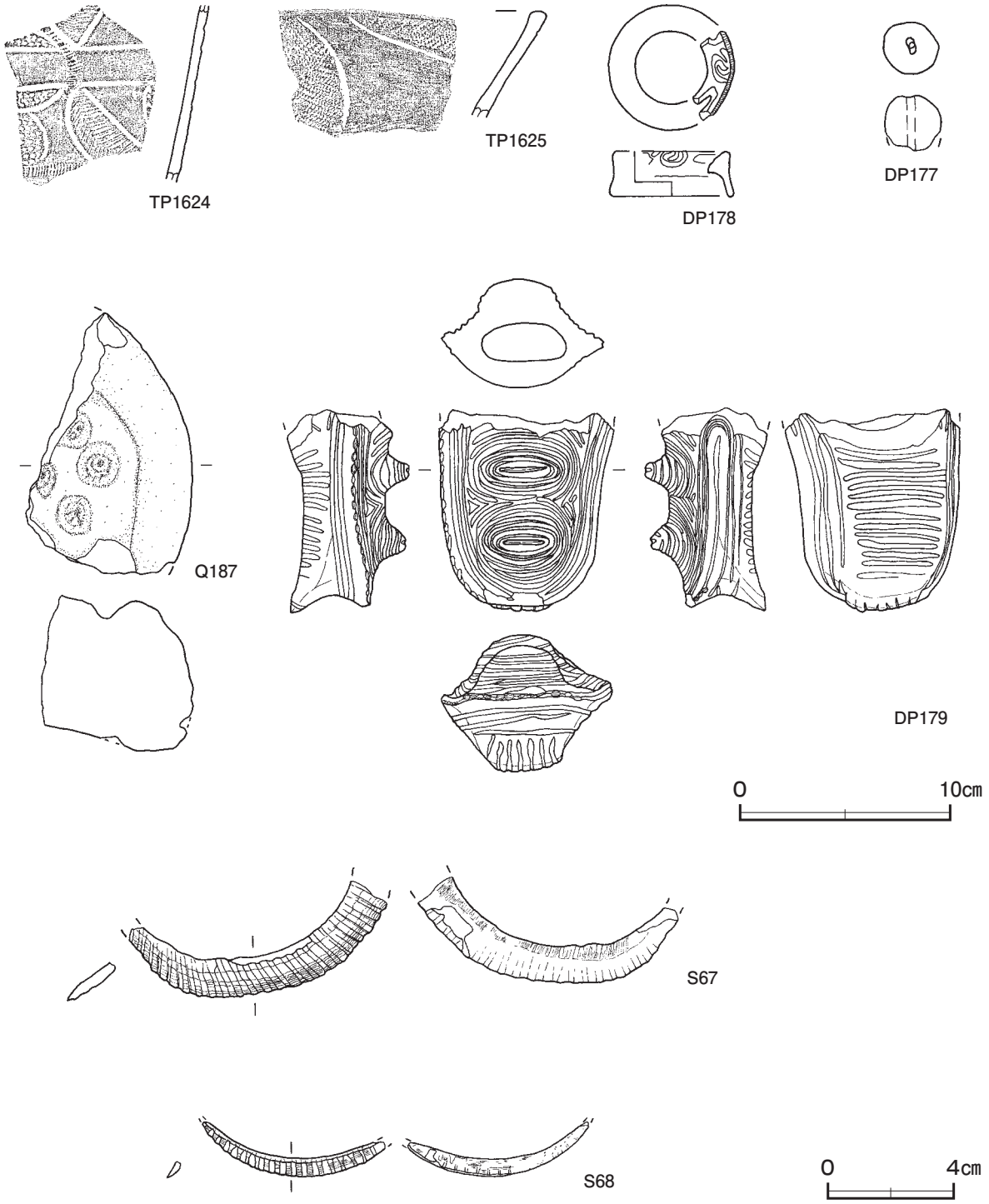
第 42 図　第 4 号貝層出土遺物実測図 (2)



第 43 図　第 4 号貝層出土遺物実測図 (3)



第 44 図　第 4 号貝層出土遺物実測図 (4)



第 45 図　第４号貝層出土遺物実測図 (5)

遺物出土状況　縄文土器片 1,497 点（35,317g), 土製品３点（土玉, 耳飾り, 海獣形土製品ヵ), 石器３点（磨石２, 凹石１），剥片１点（チャート），貝製品６点（貝輪３，貝輪未製品ヵ２，貝刃１）のほか，イノシシ・シカを主体とした獣骨類，スズキ・クロダイなどの魚骨も出土している。縄文土器片 1,497 点のうち 25 点（341.8g）が製塩土器片である。

遺物は，全域の下層である混貝土層中から多くが出土している。土器の大半は破片または小片であり，廃棄されたものと考えられる。上層の混土貝層中からも一定量出土しているが，下層より圧倒的に少なく，土器は細片

が多くなっている。土器の組成は，全体では第３号貝層と同様に，後期中葉の加曽利Ｂ式から安行３ｂ式まで確認できる。明確な線引きは困難であるが，出土土器群を上層の混土貝層中からの出土土器，下層の混貝土層中からの出土土器の２つに分けて考えることができる。出土量の多い上層の土器は，安行２・３式の出土量が多い。下層は加曽利Ｂ式・曽谷式・安行１式が中心で，称名寺式及び堀之内式の土器も極少量であるが見受けられる。

所見　本貝層は第３号貝層と同様に，南西側の保存区域と隣接している。第３号貝層及び本貝層は，保存区域の貝層と連続した一体の貝層とみられる。出土土器及び貝の組成もほぼ一致している。本貝層も第３号貝層と同様に層厚が薄く，一部分の調査であるため，遺物の廃棄単位や時期の詳細を把握することは難しいが，下層の破砕貝を少量含む黒褐色土主体の混貝土層中の遺物の方が古い様相が確認できた。本貝層は，後期中葉から晩期前葉にかけて連綿と形成されてきた貝層の一部である。

第４号貝層出土遺物観察表（第 41 ～ 45 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
362	縄文土器	深鉢	［26.4］	（22.4）	－	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口唇部ナデ→胴部上半横位の条線文　下半斜位の条線文　内面磨き	中央部 覆土中層	20%　PL11
363	縄文土器	深鉢	［37.8］	（19.6）	－	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	波状口縁　縄文 LR →紐線文→胴部上位半截竹管による波状文　胴部中位半截竹管による山形の沈線文　口縁部内面３条の凹線　内面磨き	中央部底面	５％
364	縄文土器	深鉢	［36.4］	（16.2）	－	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→口縁部・胴部紐線文→横位の条線文→口縁部内面凹線　内面磨き	西部 覆土中層	10%
365	縄文土器	深鉢	［19.7］	（15.0）	－	長石・石英	灰褐	普通	口唇部ナデ→貼瘤→縄文 LR →沈線文→無文部磨き　内面磨き	４区覆土中	20%　PL11
366	縄文土器	深鉢	［10.3］	（9.7）	－	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部刻み目→縄文 RL →横位の沈線→無文部磨き　内面磨き　口縁部下位に穿孔１か所	覆土中	５％
367	縄文土器	深鉢	［22.2］	（7.3）	－	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口唇部ナデ→貼瘤→横位の沈線→縄文 LR →無文部磨き　内面磨き	西部 覆土下層	10%
368	縄文土器	深鉢	［22.0］	（4.4）	－	長石・石英	明赤褐	普通	口唇部ナデ→隆帯縄文 RL →隆帯下押引文　沈線→無文部磨き　内面磨き	３区ベルト 覆土中	５％
369	縄文土器	深鉢	［11.8］	（5.2）	－	長石・石英・雲母	黒褐	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →口縁部押引文→横位の沈線→内面磨き	４区ベルト 覆土中	５％
370	縄文土器	深鉢	－	（16.2）	－	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	胴部上位縦位の沈線で区画→縦位後横位の条線を充填→無文部磨き→胴部下半斜位の条線文→胴部中位横位の紐線文　内面磨き	中央部 覆土中層	20%　PL11
371	縄文土器	深鉢	－	（8.3）	7.6	長石・石英	明赤褐	普通	胴部外面下位縦位の磨き　内面横位の磨き　底面多方向の磨き	覆土中	20%　PL12
372	縄文土器	深鉢	－	（5.1）	9.0	長石・石英・ 赤色粒子	明赤褐	普通	胴部外面下位縦位のヘラ磨き　内面横位のヘラナデ　底面多方向の磨き	中央部底面	20%　PL12
373	縄文土器	深鉢	－	（4.3）	5.1	長石・石英・雲母	褐灰	普通	胴部外面下位横位の磨き　内面多方向の磨き　底面多方向の磨き	中央部 覆土中層	10%
374	縄文土器	深鉢	－	（3.9）	6.4	長石・石英	にぶい橙	普通	胴部外面下端斜位のヘラ削り　内面横位の磨き　底面網代痕	中央部 覆土下層	10%
375	縄文土器	深鉢	－	（5.8）	［6.0］	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	胴部外面下位縄文 LR　下端磨き　内面磨き	西部 覆土中層	10%
376	縄文土器	鉢	［34.4］	（8.4）	－	長石・石英・雲母	褐灰	普通	口縁部横位の磨き　胴部外面ヘラ削り　内面磨き	中央部 覆土下層	10%
377	縄文土器	注口土器	－	（3.3）	－	長石・石英	にぶい赤褐	普通	ナデ→貼瘤	４区ベルト 覆土中	５％
378	縄文土器	蓋	［8.2］	2.0	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	ナデ調整　穿孔２か所	４区ベルト 覆土中	30%

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1592	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口唇部ナデ→口縁部紐線文→縄文 RL →口縁部内面横位の凹線　内面磨き	中央部 覆土下層	
TP1593	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →横位の平行沈線→口縁部内面横位の凹線　内面磨き	中央部 覆土中層	
TP1594	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→口縁部紐線文→縄文 RL →横位の条線文→口縁部内面横位の凹線　内面磨き	西部 覆土中層	
TP1595	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口唇部押圧による波状→縦位の条線文　内面ナデ	西部 覆土下層	
TP1596	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	波状口縁　貼瘤→隆帯刻み目→隆帯下沈線→無文部磨き　内面磨き	中央部底面	PL16
TP1597	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→口縁部紐線文→横位の条線文→口縁部内面横位の凹線　内面磨き	３区覆土中	
TP1598	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→半截竹管による沈線文　内面磨き	南部底面	PL16
TP1599	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→横位の条線文	３区覆土中	
TP1600	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	口唇部ナデ→隆帯縄文 RL →隆帯下沈線→貼瘤→無文部磨き　内面磨き	２区ベルト 覆土中	
TP1601	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	外面横位の条線文後ナデ　内面磨き	１区覆土中	
TP1602	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	灰褐 橙	普通	口唇部ナデ→外面横位の条線　内面隆帯刻み目　横位の条線→磨き	３区ベルト 覆土中	
TP1603	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	口縁部内湾　口唇部ナデ→縄文 LR →横位の平行沈線→無文部磨き　内面磨き	１区覆土中	
TP1604	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→口縁部紐線文→縄文 LR →横位の条線文　内面ナデ	４区覆土中	

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1605	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口唇部ナデ→隆帯縄文 LR・中央部に沈線→縄文 LR 沈線文→無文部磨き　内面磨き	１区覆土中	
TP1606	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→格子目状の沈線文→口縁部内面横位の凹線　内面磨き	１区覆土中	
TP1607	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	縄文 LR →半截竹管による渦巻文　内面磨き	４区ベルト覆土中	PL16
TP1608	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	口唇部ナデ→縄文→格子目状の沈線文　内面磨き	２区ベルト覆土中	
TP1609	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→貼瘤→縦位の平行沈線で区画→縄文 RL・横位の条線充填　内面磨き	２区覆土中	
TP1610	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	波状口縁　縄文 LR →半截竹管による蛇行沈線　内面磨き	４区ベルト覆土中	
TP1611	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒褐	普通	口縁部緩やかな波状　口唇部ナデ後刻み目→沈線→縄文 RL 充填　内面磨き	覆土中	
TP1612	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐	普通	口唇部・口縁部斜位の刻み目→縄文 LR →クランク状の沈線　口縁部内面横位の凹線　内面磨き	２区覆土中	
TP1613	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒褐	普通	口唇部ナデ後貼瘤→縄文 RL →沈線→無文部磨き　内面磨き	３区覆土中	
TP1614	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部緩やかな波状　縄文 LR →紐線文→半截竹管による渦巻文　口縁部内面横位の凹線　内面磨き	４区覆土中	
TP1615	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ後刻み目→横位の平行沈線→縦位の刻み目→矢羽状の条線文　内面磨き	２区ベルト覆土中	PL16
TP1616	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →沈線文→無文部磨き　内面磨き	４区覆土中	
TP1617	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黄灰	普通	口縁部くの字に屈曲　貼瘤→横位の沈線文→斜位の刻み目→無文部磨き　内面磨き	１区覆土中	
TP1618	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部螺旋状　隆帯刻み目→縄文 LR →沈線　内面渦巻状の沈線文	４区覆土中	PL16
TP1619	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	口唇部ナデ→隆帯縄文 RL →隆帯下押引文→無文部磨き　内面磨き	１区覆土中	
TP1620	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	隆帯縄文 LR →隆帯下沈線→無文部磨き　内面磨き	中央部覆土中層	
TP1621	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	縄文 LR →紐線文　内面磨き	北部覆土中層	
TP1622	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	粗い縄文 RL →半截竹管による斜位の沈線→横位の沈線　内面磨き	４区ベルト覆土中	PL16
TP1623	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	横位の押引文→縄文 RL →沈線文　内面磨き	１区覆土中	
TP1624	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	沈線による区画→矢羽状の沈線文・列点文充填　内面磨き	３区ベルト覆土中	PL16
TP1625	縄文土器	鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口唇部ナデ→沈線で区画→縄文充填→無文部磨き　内面磨き	４区ベルト覆土中	

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	色調・胎土	特　　徴	出土位置	備　考
DP177	土玉	径 0.9	孔径 0.1	(0.9)	(0.57)	にぶい橙 長石・石英	ナデ整形　中央部穿孔	３区ベルト覆土中	PL20
DP178	耳飾り	径 [5.7]	孔径 [3.5]	2.1	(8.89)	黒褐 長石・石英	内面沈線文→外・内面丁寧な磨き→端部刻み目	２区ベルト覆土中	PL22
DP179	海獣形土製品?	(9.7)	(8.3)	(5.9)	(282.3)	橙 長石・石英・赤色粒子	上部破損　中空　上面突起貼付後渦巻状の沈線　側面片側に列点文　下面下端にヒレ状突起貼付後刻み目	東部覆土中層	PL22

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q 187	凹石	(12.5)	(8.0)	7.4	(812.5)	安山岩	石皿転用　表面に凹痕４か所	西部覆土上層	PL24

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	貝　　種	特　　徴	出土位置	備　考
S 67	貝輪	(3.6)	(8.3)	1.2	(8.64)	サトウガイ	破面未加工　未製品?	中央部覆土中層	PL26
S 68	貝輪	(1.7)	(5.8)	(0.6)	(1.87)	サトウガイ	全面丁寧な磨き	４区覆土中	PL26

第９号貝層（第 46・47 図）

位置　調査区中央部のＦ５i3 ～Ｆ５j3 区，標高 21 ～ 22 mほどの台地斜面部に位置している。

確認状況　第５号包含層の北部をわずかに掘り下げたところ，凹凸のある斜面上に不定形に広がる貝層の存在を確認した。本貝層は，第５号包含層が斜面上に堆積を始める上限とほぼ同じ高さに形成されており，付近には，第１・３・４号地点貝塚が点在している。比較的傾斜のある斜面上に形成されたためか，上層は流出しているものとみられ，範囲は限定的である。

重複関係　本貝層の下層に第 218 号土坑及び第５号包含層が形成されている。

調査の方法　確認面での遺物や貝の出土状況から，斜面の傾斜に沿って貝層が広がっていることが確認できた。そこで，傾斜に沿った方向とそれに直交するように，任意に十字のベルトを設定し，ベルト脇にトレンチを入

れて貝層の堆積状況の観察を行った。トレンチの断面から，上層が流出しており，貝層の規模は小さく，遺存状態が良好ではないことから，観察ベルトを利用して第３号貝層と同様な方法で調査を行うこととした。

貝層の広がりと堆積状況　本貝層は，中央部の標高が約 22 mの位置から，南方向に下っている。不定形に広がっており，東西の幅は約 1.5 m，南北の幅は約３m，高低差は約１mで，確認面での傾斜角は約 20 度である。２層に分層でき，全体の層厚は５～ 50cmである。第１層は混土貝層で，層厚は５～ 30cmである。第２層は黒褐色土主体の混貝土層で，層厚は５～ 20cmである。上層は流出しているとみられ，上面は平坦ではない。下層に形成されている第５号包含層の上面にも凹凸が見られる。

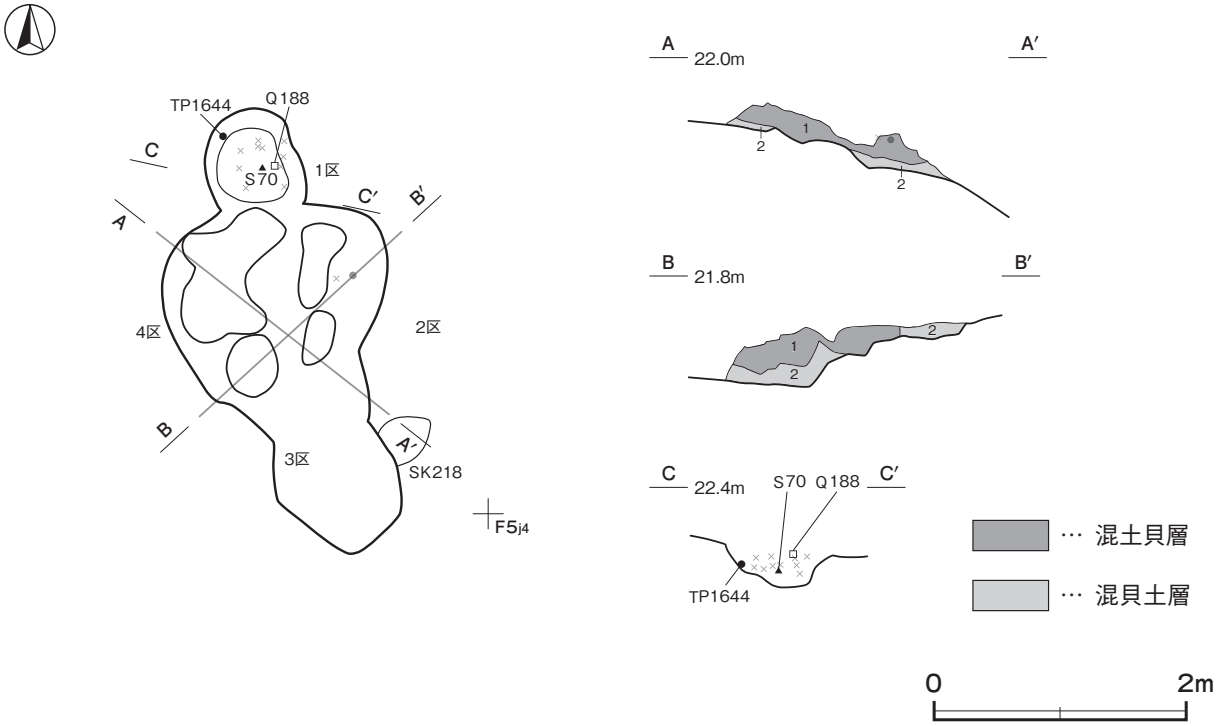
本貝層から出土した貝の総数は 82 点で，第３・４号貝層と比較して規模は小さい。貝種組成は表 10 のとおりである。第１優占種はシオフキで，31 点（119.3g）が出土しており，全体の 37.81％を占めている。第２優占種のヤマトシジミが 23 点（35.2g）で 28.05％，次いでハマグリが 22 点（75.7g）で 26.83％と，内湾性の２枚貝の３種で 93％ほどを占めている。第３・４号貝層とは異なり，第１優占種がシオフキとなっている。

土層・貝層解説

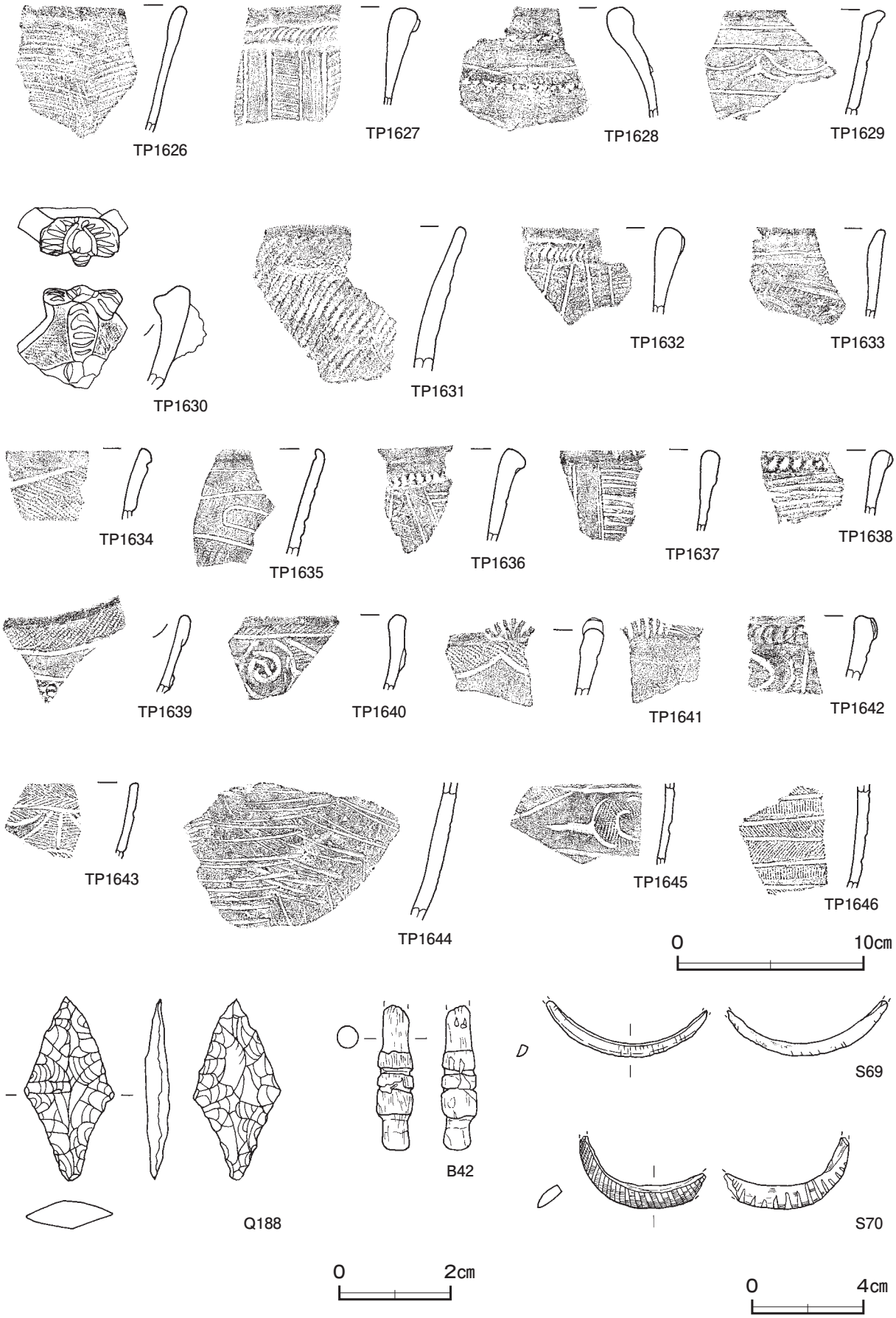
1　混 土 貝 層　シオフキ・ヤマトシジミ主体，破砕貝微量　　2　混 貝 土 層　黒褐色土主体，破砕貝少量，骨片微量

表 10　第９号貝層貝種組成表

貝　　種	点数（点）	割合（％）	出土地点毎内訳（点）				総重量（g）	備　　考
			1 区	2 区	3 区	4 区		
シオフキ	31	37.81	17	5	1	8	119.3	
ヤマトシジミ	23	28.05	12	7	0	4	35.2	
ハマグリ	22	26.83	15	0	3	4	75.7	
オキシジミ	3	3.64	3	0	0	0	9.1	
ウミニナ	2	2.44	1	0	0	1	0.7	
サルボウ	1	1.23	1	0	0	0	5.3	
合計	82	100.00	49	12	4	17	245.3	



第 46 図　第９号貝層実測図



第 47 図　第９号貝層出土遺物実測図

遺物出土状況　縄文土器片 593 点（9,635g），石器１点（鏃），剥片１点（チャート），骨角製品１点（刺突具ヵ），貝製品２点（貝輪）のほか，イノシシ・シカを主体とする獣骨類も出土している。縄文土器片 593 点のうち５点（31.2g）が製塩土器片である。

遺物の大半は，全域の上層にある混貝率の高い混土貝層から出土している。出土土器は，いずれも破片または小片が多く，貝や獣骨などとともに廃棄されたものと考えられる。ほかの貝層と同様に，下層である混貝土層中の土器の方が細片が多く，破砕された貝も多いことから，斜面上方から流れてきたものが再堆積した可能性が高い。また，上層の混土貝層の上面に凹凸が多く見られることから，上面も流出しているものとみられ，貝層全体の遺存状態は良好ではない。

所見　本貝層は遺存状態が良好ではなく，小規模であることから，層位ごとの廃棄単位や時期の詳細を把握することはできなかった。底面に凹凸が多いことから，窪みに不要な土器類や食滓を廃棄した地点貝塚が複数統合されて拡大した可能性があるが，廃棄単位が明確でないため詳細は不明である。出土土器の組成は後期後葉の安行１式から晩期前葉の安行３ｂ式まで確認することができるため，後期後葉から晩期前葉にかけて形成された貝層と考えられる。

第９号貝層出土遺物観察表（第 47 図）

番号	種　別	器種	胎　土	色　調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備　考
TP1626	縄文土器	深鉢	長石・石英	浅黄橙	普通	口唇部ナデ→横位の条線文　内面ナデ	覆土中	
TP1627	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→口縁部紐線文→横位の条線→縦位の沈線→無文部磨き→沈線文　内面磨き	２区覆土中	
TP1628	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	灰褐	普通	口唇部ナデ→隆帯縄文 RL →隆帯下刺突文・沈線→無文部磨き　内面ナデ	１区覆土中	
TP1629	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→沈線文→無文部磨き　内面磨き	覆土中	
TP1630	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	波状口縁　口唇部ナデ→貼瘤→隆帯下縄文 RL　内面磨き	４区ベルト覆土中	PL16
TP1631	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→縄文 LR　内面ナデ	３区覆土中	PL16
TP1632	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙 にぶい橙	普通	口唇部ナデ→横位の条線文→縦位の沈線→口縁部紐線文　内面磨き	４区ベルト覆土中	
TP1633	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄褐	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →沈線→無文部磨き　内面磨き	２区覆土中	
TP1634	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→縄文 RL →沈線　内面ナデ	覆土中	
TP1635	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	口縁部くの字に内湾　縄文 LR →沈線文→無文部磨き　内面磨き	１区覆土中	
TP1636	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→紐線文→弧状の条線文→沈線文　内面ナデ	２区覆土中	
TP1637	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→横位の条線→縦位の沈線→無文部磨き　内面磨き	２区覆土中	
TP1638	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	口唇部ナデ→口縁部紐線文→横位の条線文　内面ナデ	Ｆ５i3 区覆土中	
TP1639	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	波状口縁　口縁部縄文 LR →隆帯下沈線→無文部磨き　内面磨き	２区覆土中	
TP1640	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →貼瘤→沈線文→無文部磨き　内面磨き	１区覆土中	PL16
TP1641	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	口唇部ナデ→貼瘤後刻み目→沈線→縄文 RL 充填→無文部磨き　内面磨き	ベルト覆土中	
TP1642	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口唇部ナデ→口縁部紐線文→沈線文→無文部磨き　内面磨き	４区覆土中	
TP1643	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	沈線で区画→口縁部矢羽状の沈線文・胴部横位の条線文充填→無文部磨き　内面磨き	４区ベルト覆土中	
TP1644	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	外面ヘラ削り調整→斜位の条線文　内面ナデ	北部底面	
TP1645	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	沈線文→縄文 RL 充填→無文部磨き　内面磨き	３区覆土中	
TP1646	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	縦位及び斜位の条線文→横位の沈線文　内面ナデ	１区覆土中	

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
Q188	鏃	3.3	1.6	0.5	1.60	チャート	有茎鏃　両面剥離調整	北部上層	PL23

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
Ｂ 42	刺突具ヵ	(2.6)	0.7	0.4	(0.46)	鹿角ヵ	基部溝状の抉り	４区ベルト覆土中	PL25

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	貝　　種	特　　徴	出土位置	備　考
S 69	貝輪	(2.0)	(5.8)	0.5	(1.41)	サトウガイ$_{ヵ}$	全面丁寧な磨き　磨滅	4区 第1層中	PL26
S 70	貝輪	(2.6)	(4.6)	0.8	(3.25)	サルボウ属	全面丁寧な磨き	北部 覆土下層	PL26

(8)　地点貝塚

第1号地点貝塚（第48図）

位置　調査区中央部のＦ５i3区，標高22ｍほどの谷に向かう台地斜面部に位置している。

確認状況　第５号包含層の北端を確認中に，第５号包含層の上層に貝が露出している範囲を確認した。

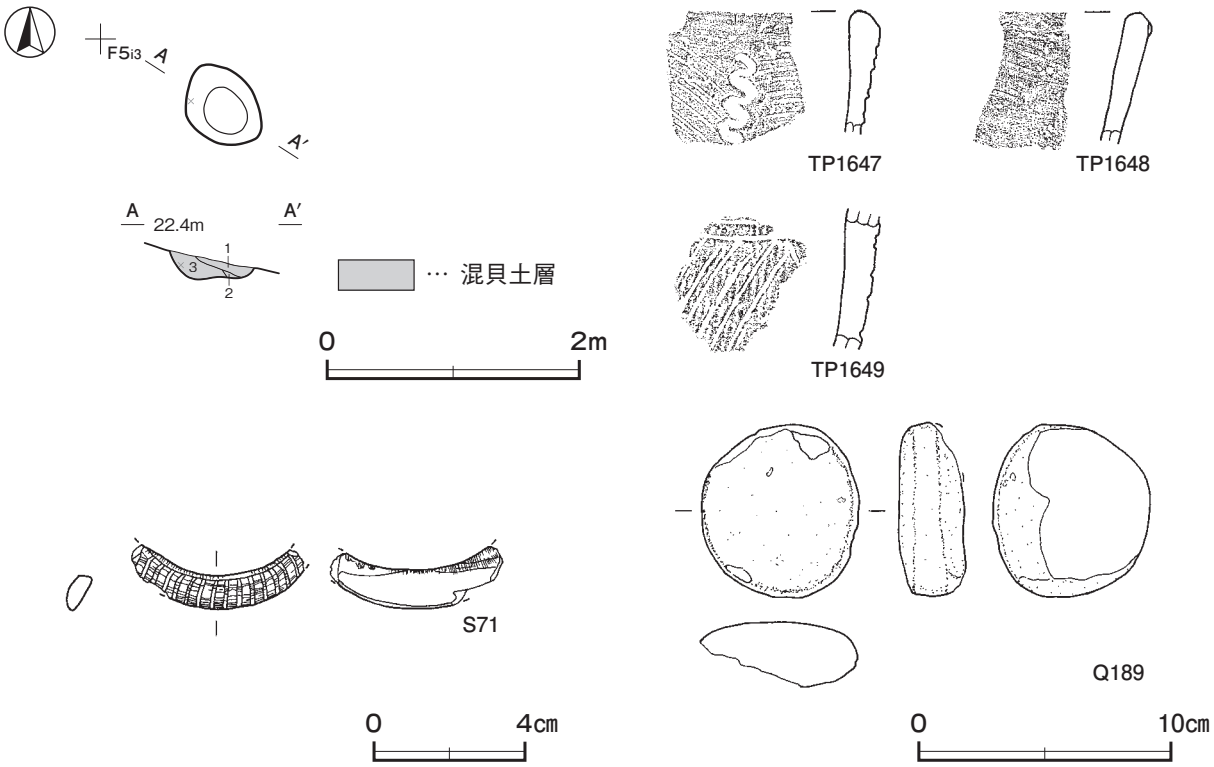
重複関係　下層に第５号包含層が形成されている。

貝層範囲　長径0.74ｍ，短径0.55ｍの不整楕円形で，確認面からの層厚は10～36㎝である。

貝層　第１～４号地点貝塚の土層・貝層解説では，前項の斜面貝層と同様に，混土貝層は混貝率が概ね50％を超えるもの，混貝土層は混貝率が概ね50％以下のものとした。また，貝の３分の１以上が欠損しているものを破砕貝とした。本地点貝塚は，３層に分層できる。両層とも破砕貝及び土器・石器・貝製品・獣骨などを含む黒褐色土が主体の混貝土層であり，斜面上方から流入して再堆積した状況を示していることから，自然堆積である。貝層中の貝の組成の詳細は捉えられなかったが，貝種は，ハマグリ，ヤマトシジミ，シオフキなどの内湾性の２枚貝が９割ほどを占めている。

土層・貝層解説

1　混貝土層　黒褐色土主体，破砕貝少量
2　混貝土層　黒褐色土主体，破砕貝・ハマグリ・ヤマトシジミ少量
3　混貝土層　黒褐色土主体，破砕貝・ハマグリ・ヤマトシジミ微量



第48図　第１号地点貝塚・出土遺物実測図

遺物出土状況　縄文土器片 62 点（830g），石器１点（磨石），貝製品１点（貝輪）のほか，イノシシの骨も出土している。出土土器はすべて小片である。石器・貝製品・獣骨類は，混貝土層中から混在した状態でそれぞれ出土している。

所見　浅い土坑状の様相を呈しており，層厚は厚い地点で 36cmと小規模であることや，貝層が破砕貝を含む黒褐色土主体であることから，遺物や破砕貝を含む土砂が窪みに堆積したとみられる。出土土器は，後期前葉の堀之内式から晩期前葉の安行３ｂ式まで確認できるが，貝層が再堆積土であることから，時期は，晩期前葉以降と考えられる。

第１号地点貝塚出土遺物観察表（第 48 図）

番号	種　別	器種	胎　土	色　調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備　考
TP1647	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	口唇部ナデ→斜位の条線文→縦位の蛇行沈線　内面ナデ	覆土中	PL16
TP1648	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口唇部ナデ→縄文→斜位の条線文　内面磨き	覆土中	
TP1649	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	縄文→横位の沈線→斜位の沈線　内面磨き	覆土中	

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
Q 189	磨石	6.8	6.2	2.7	(137.2)	安山岩	全面研磨	覆土中	

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	貝　種	特　徴	出土位置	備　考
S 71	貝輪	(1.7)	(4.6)	0.9	(2.70)	サルボウ属	全面丁寧な磨き	覆土中	PL26

第２号地点貝塚（第 49・50 図）

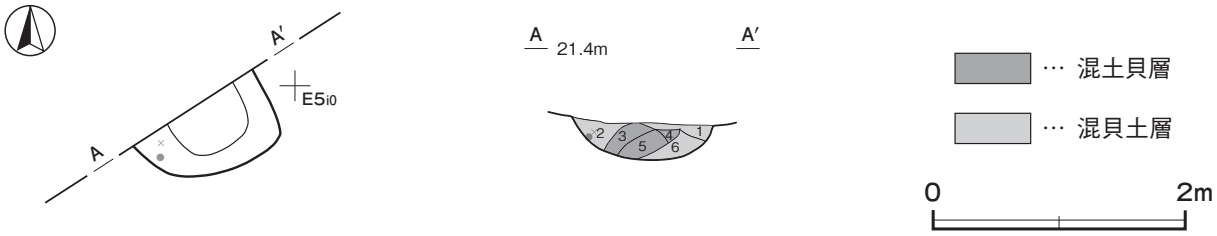
位置　調査区北部のＥ５i9 区，標高 21 ｍほどの谷に向かう緩やかな斜面部に位置している。

確認状況　土層観察のため，北部の調査区域際に設定したＢトレンチの断面で，貝を一定量含む混土貝層及び混貝土層を確認した。この貝層の上面の高さで調査区域内に向けて掘り込みを進めたところ，不整方形に広がっていることが分かった。

重複関係　下層に第 15 号竪穴建物跡が構築され，第 197 号土坑，第４号包含層が形成されている。

貝層範囲　確認できた長軸は 1.12 ｍ，短軸は 0.61 ｍの不整方形で，斜面上方にあたる調査区域外を起点に広がってきているものとみられる。確認面からの層厚は 20 ～ 49cmである。

貝層　６層に分層できる。第１・２・６層は混貝土層であり，周囲からの流入による自然堆積である。第３～５層は混土貝層で，貝や獣骨及び土器や石器などが廃棄された状態で堆積していることから，人為堆積である。貝層中の貝種は，ほかの斜面貝層や地点貝塚と同様に，ハマグリ，ヤマトシジミ，シオフキなどの内湾性の２枚貝が９割ほどを占めている。貝の組成についての詳細は捉えられなかったが，混土貝層を３つのブロックに



第 49 図　第２号地点貝塚実測図

分けることができたことから，その一つ一つが廃棄単位の可能性がある。

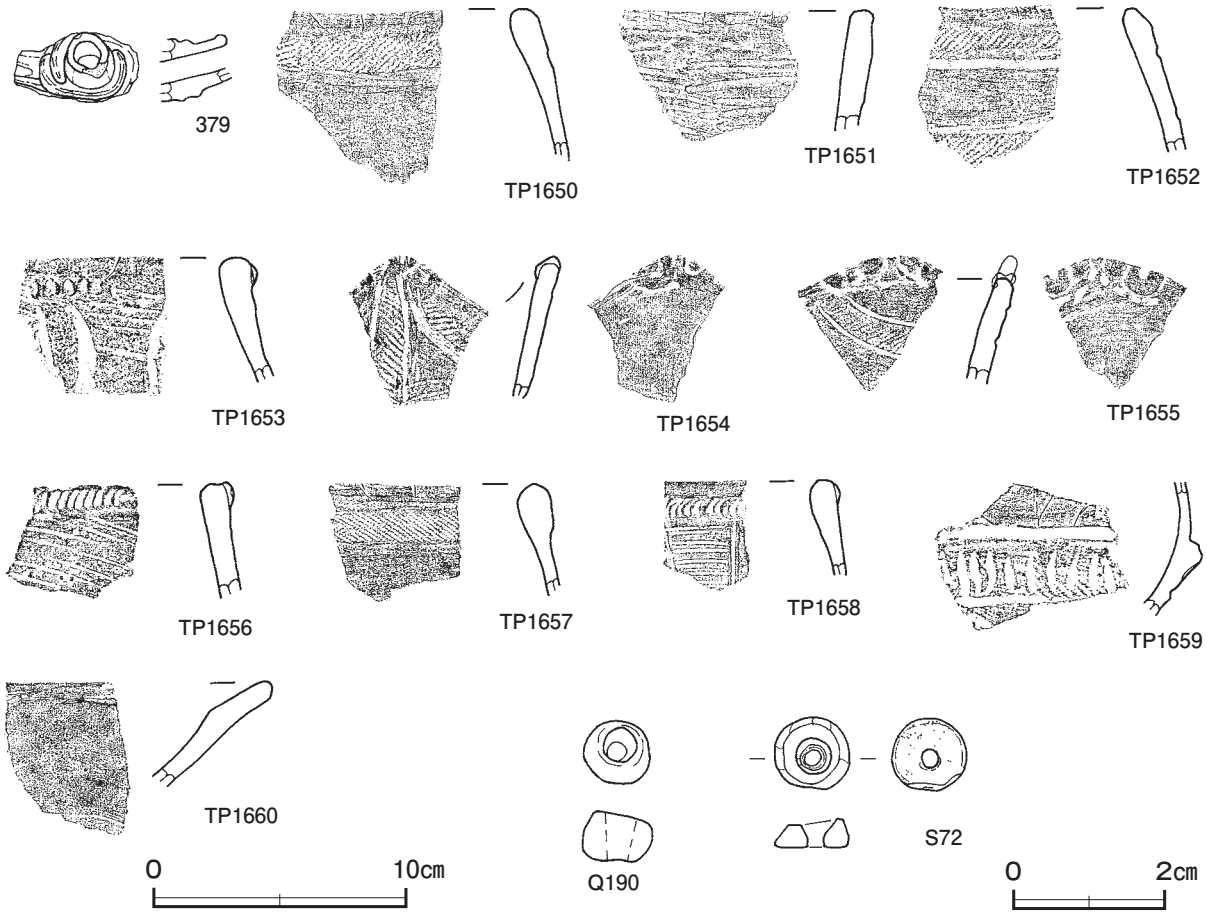
土層・貝層解説

1　混 貝 土 層　黒褐色土主体，焼土粒子・破砕貝・骨片少量
2　混 貝 土 層　黒褐色土主体，焼土粒子･炭化粒子少量，破砕貝･骨片微量
3　混 土 貝 層　ハマグリ・ヤマトシジミ・シオフキ主体，ローム粒子・焼土粒子・破砕貝・骨片微量
4　混 土 貝 層　ハマグリ・ヤマトシジミ・シオフキ主体，ローム粒子・炭化粒子・破砕貝・骨片微量
5　混 土 貝 層　ハマグリ・ヤマトシジミ・シオフキ主体，焼土粒子・炭化粒子・破砕貝・骨片微量
6　混 貝 土 層　黒褐色土主体，破砕貝中量，焼土粒子･炭化粒子･骨片微量

遺物出土状況　縄文土器片 306 点（5,429g），土製品１点（土偶），石製品１点（小玉），貝製品１点（有孔装身具）のほか，イノシシ・シカを主体とする獣骨類，クロダイ・スズキなどの魚骨も出土している。縄文土器片 305 点のうち１点（8.8g）が製塩土器片である。

遺物は，全域の貝層中から出土している。出土土器はすべて小片であり，土製品・石製品・貝製品・獣骨・魚骨が混在して出土していることから，複数回に分けて遺物や食滓が廃棄されたものとみられる。特に第３～５層の混土貝層からの出土遺物が多い。

所見　３層から成る混土貝層は廃棄単位と考えられ，遺存状態は良好である。また，クロダイやスズキの魚骨が出土していることから，漁労によって水揚げした魚類を摂取していたことが分かる。貝層は，混貝土層や混土貝層を境界に分層できることから，窪みへの自然堆積や人為堆積を繰り返しながら形成されたものと考えられる。出土土器は，後期中葉の加曽利Ｂ式から晩期前葉の安行３ｂ式まで確認できる。時期は，周囲から流入した再堆積層が存在することから，晩期前葉以降と考えられる。



第 50 図　第２号地点貝塚出土遺物実測図

第２号地点貝塚出土遺物観察表（第 50 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
379	縄文土器	注口土器	－	(2.8)	－	長石・石英	褐灰	普通	注口部貼付→隆帯を貼り付けて加飾	覆土中	５％

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1650	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→口縁部縄文 LR →横位の沈線→無文部磨き　内面ナデ	覆土中	
TP1651	縄文土器	深鉢	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→横位のヘラナデ　内面磨き	覆土中	
TP1652	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →横位の沈線→無文部磨き　内面ヘラナデ	覆土中	PL16
TP1653	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→口縁部紐線文→横位の沈線→縦位の沈線　内面磨き	覆土中	
TP1654	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	波状口縁　口唇部ナデ→頂部紐線文　縄文→沈線による区画→無文部磨き　内面磨き	覆土中	PL16
TP1655	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐	普通	口唇部ナデ→紐線文　口縁部内面列点文　外面沈線による区画→縄文 LR →無文部磨き　内面磨き	覆土中	
TP1656	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐灰	普通	口唇部ナデ→斜位の条線文→口縁部紐線文　内面ナデ	覆土中	
TP1657	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→口縁部縄文 RL →無文部磨き　内面磨き	覆土中	PL16
TP1658	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	褐灰	普通	口唇部ナデ→横位の条線紋→縦位の沈線→無文部磨き　内面磨き	覆土中	
TP1659	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐灰	普通	隆帯貼付→隆帯下沈線→縄文 RL →縦位の刻み目→無文部磨き　内面磨き	覆土中	
TP1660	縄文土器	浅鉢	長石・石英	黒褐	普通	外面ヘラ削り後ナデ　内面磨き	覆土中	

番号	器　種	径	孔径	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q 190	小玉	0.9	0.5	0.7	0.61	翡翠	表面研磨調整　一方向からの穿孔	覆土中	PL25

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	貝　　種	特　　徴	出土位置	備　考
S 72	有孔装身具	1.0	1.0	0.4	0.29	イモ貝類	殻頂部を切断して使用　表面研磨整形　中央部穿孔	覆土中	PL25

第３号地点貝塚（第 51 図）

位置　調査区北部のＦ５i2 区，標高 22 mほどの谷に向かう台地斜面部に位置している。

確認状況　調査区中央部で，第５号包含層の広がりを捉えるために上面の精査を行う段階で，貝が不整楕円形に散布している範囲を確認した。

重複関係　下層に第５号包含層，第 194 号土坑が形成されている。

貝層範囲　長径 0.67 m，短径 0.54 mの不整楕円形で，確認面からの層厚は８～ 18cmである。

貝層　２層に分層できる。両層ともに獣骨及び土器片を含む黒褐色土主体の混貝土層であり，斜面上方からの流入による堆積状況を示していることから，自然堆積である。貝層中の貝種は，ほかの貝層や地点貝塚と同様に，ハマグリ，ヤマトシジミなどの内湾性の２枚貝が主体である。それぞれ貝の組成についての詳細は捉えられなかったが，混貝率は低く貝の総量も少ない。

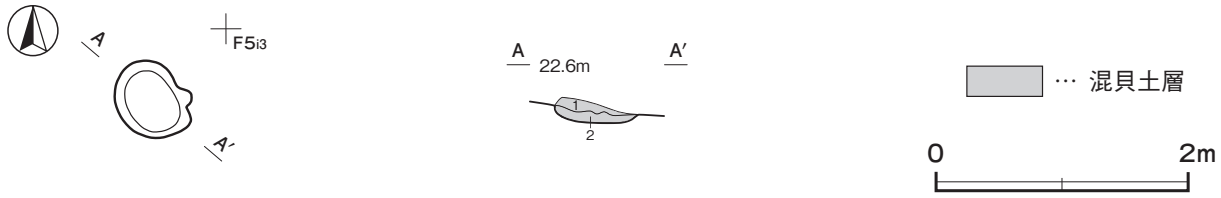
土層・貝層解説

1　混 貝 土 層　黒褐色土主体，ハマグリ・ヤマトシジミ・炭化粒子少量，破砕貝・焼土・粘土粒子微量

2　混 貝 土 層　黒褐色土主体，破砕貝・焼土粒子少量

遺物出土状況　縄文土器片 13 点（119g）のほか，獣骨も貝層中から出土している。土器は，いずれも混貝土層中から，獣骨や貝とともに投棄された状態で出土している。出土土器はいずれも細片のため図示できない。縄文土器片 13 点のうち１点（2.2g）が製塩土器片である。

所見　土器，貝，獣骨ともに出土量が少なく，貝塚としての規模も小さいため，流入した土砂によって短期間で形成されたものとみられる。出土土器はすべて細片であるが，ほかの地点貝塚と貝種がほぼ同一であることや貝層の堆積状況，及び第５号包含層との重複関係から，縄文時代晩期と考えられる。



第 51 図　第３号地点貝塚実測図

第４号地点貝塚（第 52 図）

位置　調査区中央部のＦ５j2 区，標高 22 mほどの谷に向かう台地斜面部に位置している。

確認状況　調査区中央部のやや南側で，第５号包含層の広がりを捉えるために上面の精査を行う段階で，貝が不整楕円形に散布している範囲を確認した。南西側に第４号貝層が所在するが，貝の散布が完全に途切れ，連続性が認められないため，単独の地点貝塚とした。

重複関係　下層に第５号包含層が形成されている。

貝層範囲　長径 0.89 m，短径 0.75 mの不整楕円形で，確認面からの層厚は 10 ～ 35cmである。

貝層　２層に分層できる。第１層は混土貝層で，第２層は混貝土層である。土器，貝，獣骨，魚骨が廃棄された状態で堆積していることや堆積状況から，人為堆積である。貝層中の貝種は，ほかの貝層や地点貝塚と同様に，ヤマトシジミ，ハマグリ，シオフキなどの内湾性の２枚貝が９割を占めている。貝層の遺存状態は比較的良好で，貝種の組成は表 11 のとおりであり，第３・４・９号貝層と傾向が類似している。

土層・貝層解説

１　混 土 貝 層　ヤマトシジミ・ハマグリ・シオフキ主体，破砕貝・骨片少量

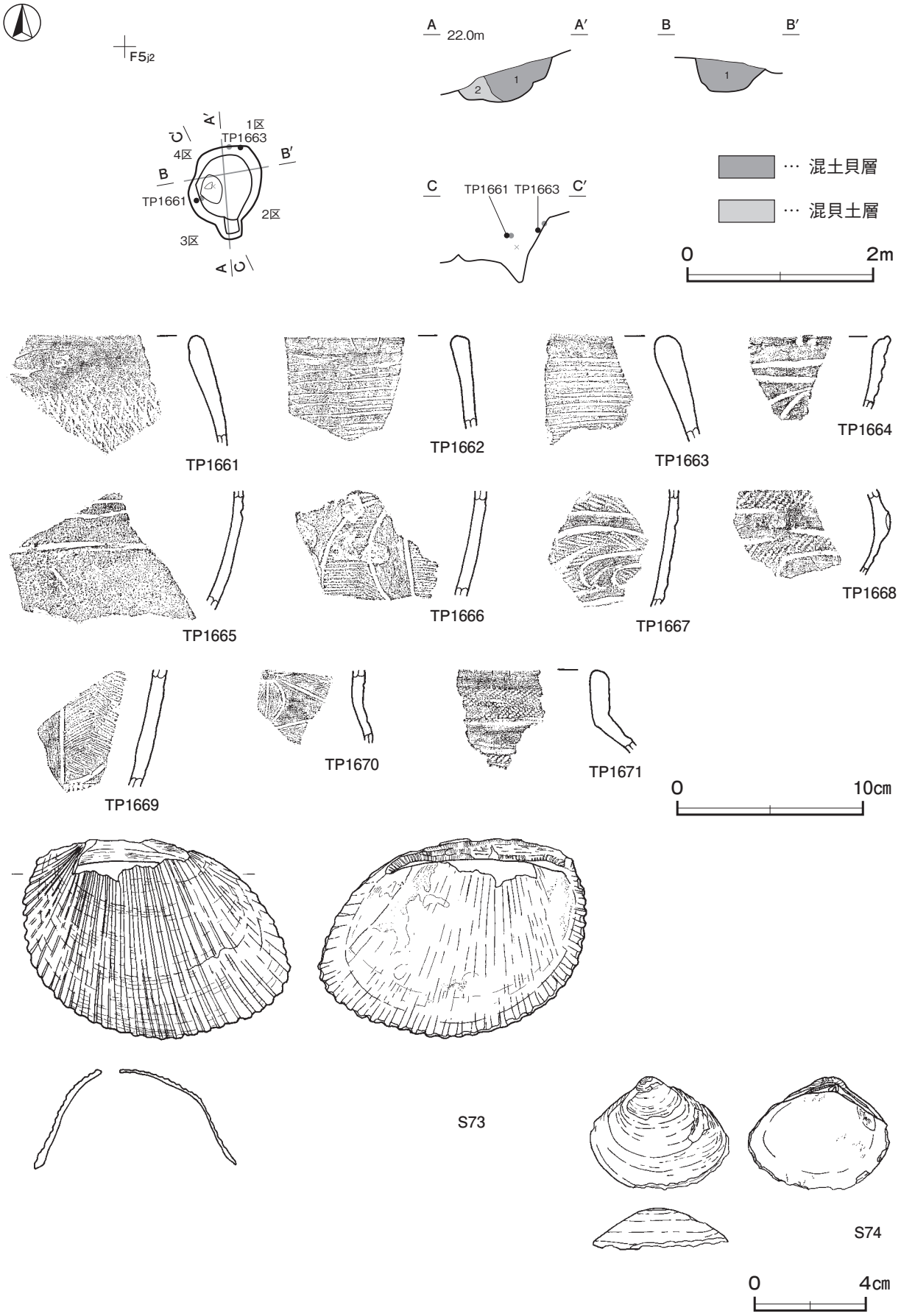
２　混 貝 土 層　黒褐色土主体，炭化粒子・破砕貝微量

表 11　第４号地点貝塚貝種組成表

貝　　種	点数（点）	割合（%）	出土地点毎内訳（点）					総重量（g）	備　　考
			１区	２区	３区	４区	覆土中		
ヤマトシジミ	80	37.92	53	0	0	26	1	194.0	
ハマグリ	62	29.38	3	4	35	20	0	486.4	
シオフキ	48	22.75	7	10	17	13	1	217.7	
ウミニナ	6	2.84	1	1	3	1	0	3.3	
ムラサキガイ	6	2.84	0	3	2	1	0	15.7	
アカニシ	5	2.37	0	4	1	0	0	107.8	
サルボウ	2	0.95	1	1	0	0	0	7.7	
ツキガイ	2	0.95	0	0	2	0	0	15.5	
合計	211	100.00	65	23	60	61	2	1,048.1	

遺物出土状況　縄文土器片 167 点（2,737g），貝製品２点（貝輪未製品，貝刃）のほか，イノシシ・シカを主体とした獣骨やスズキ・クロダイなどの魚骨も出土している。縄文土器片 167 点のうち１点（6.2g）が製塩土器片である。

遺物の大半は混土貝層中から出土している。出土土器はすべてが小破片であり，不要になった道具･装身具･食滓などを一括廃棄したものとみられる。



第 52 図　第 4 号地点貝塚・出土遺物実測図

所見　本地点貝塚は，小規模に掘り込むか，または自然の窪地を利用しての廃棄行為によって形成されたものとみられる。出土土器は，後期終末の安行２式から晩期前葉の安行３ｂ式を中心に出土していることから，時期は，後期終末から晩期前葉と考えられる。

第４号地点貝塚出土遺物観察表（第 52 図）

番号	種　別	器種	胎　土	色　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1661	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄橙	普通	網目状撚糸文→口縁部ナデ　内面ナデ	西部 覆土上層	
TP1662	縄文土器	深鉢	長石・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口唇部ナデ→外面横位の条線紋　内面磨き	４区覆土中	
TP1663	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→外面横位の条線紋　内面ナデ	北部 覆土上層	
TP1664	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	普通	口唇部ナデ→外面沈線文→無文部磨き　口縁部内面沈線	４区覆土中	
TP1665	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐灰	普通	胴部中位削り　横位の沈線　内面ナデ	２区覆土中	
TP1666	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐	普通	沈線で区画→横位の条線文充填→無文部磨き　内面磨き	４区覆土中	
TP1667	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	縄文 RL →沈線文→無文部磨き　内面磨き	２区覆土中	
TP1668	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	縄文 LR →沈線文→無文部磨き　内面磨き	４区覆土中	PL16
TP1669	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	沈線で区画→矢羽状の沈線文充填→無文部磨き　内面磨き	２区覆土中	
TP1670	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒褐	普通	沈線で区画→細密な沈線文充填→無文部磨き　内面磨き	２区覆土中	
TP1671	縄文土器	壺	長石	にぶい褐	普通	口縁部外面縄文 LR →口唇部ナデ→無文部磨き　内面ナデ	４区覆土中	

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	貝　種	特　　徴	出土位置	備　考
S 73	貝輪	(7.2)	9.8	3.6	(33.9)	サトウガイ	殻頂部付近を欠く　未製品	３区覆土中	
S 74	貝刃	(4.1)	(5.0)	1.5	(6.64)	ハマグリ	腹縁に連続する剥離痕	４区覆土中	

表 12　縄文時代地点貝塚一覧表

番号	位 置	堆積方向	平 面 形	規　　模		貝　層	主 な 出 土 遺 物	備　考
				(軸)　(軸) 長径×短径（m）	厚さ（cm）			重複関係(古→新)
1	F 5 i3	N－124°－E	不整楕円形	0.74 × 0.55	10 ～ 36	自然	縄文土器，石器，貝製品，獣骨	HG ５→本跡
2	E 5 i9	N－147°－E	［不整方形］	(1.12) × (0.61)	20 ～ 49	自然 人為	縄文土器，土製品，石製品，貝製品 獣骨，魚骨	HG ４，SI15，SK197 →本跡
3	F 5 i2	N－129°－E	不整楕円形	0.67 × 0.54	８～ 18	自然	縄文土器，獣骨	HG ５，SK194 →本跡
4	F 5 j2	N－174°－E	不整楕円形	0.89 × 0.75	10 ～ 35	人為	縄文土器，貝製品，獣骨，魚骨	HG ５→本跡

(9)　遺物集中地点

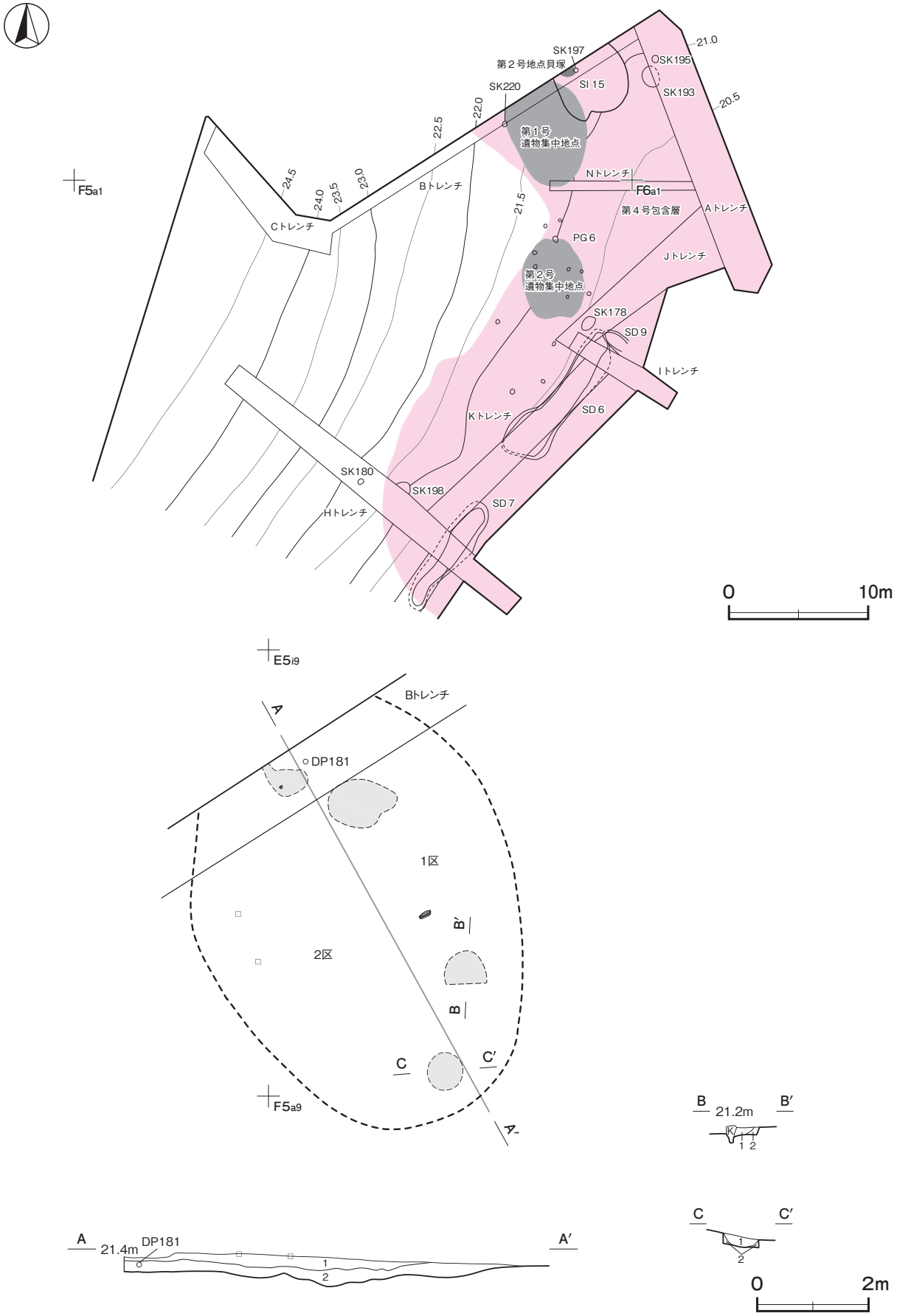
第１号遺物集中地点（第 53・54 図）

位置　調査区北部のＦ５i8 ～Ｆ５a9 区，標高 21 mほどの谷に向かう緩やかな斜面部に位置している。

確認状況　調査区北部の調査区域際で，第４号包含層の北部への広がりを捉えるために，上面の精査を行ったところ，土器片などが集中して出土し，焼土・炭化材が散布している範囲を確認した。第４号遺物包含層の範囲内であるが，その特異性から遺物集中地点として取り上げた。

重複関係　下層に第 15 号竪穴建物跡が構築され，第 220 号土坑，第４号包含層が形成されている。

遺物の広がりと覆土　本地点は，調査区北部の調査区域際のＥ５j9 区を中心に，北東･南西方向に約 1.5 m，北西･南東方向に約７mの楕円形の広がりを示し，調査区域の北西側にも延びているものとみられる。第４号包含層の上層には黒褐色土が堆積しているが，本地点の堆積土は周囲より黒色に近い様相を呈している。覆土は２層に分層できる。土器片や焼土・炭化材が，廃棄された状態で出土している。



第 53 図　第１号遺物集中地点実測図

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量，細礫微量

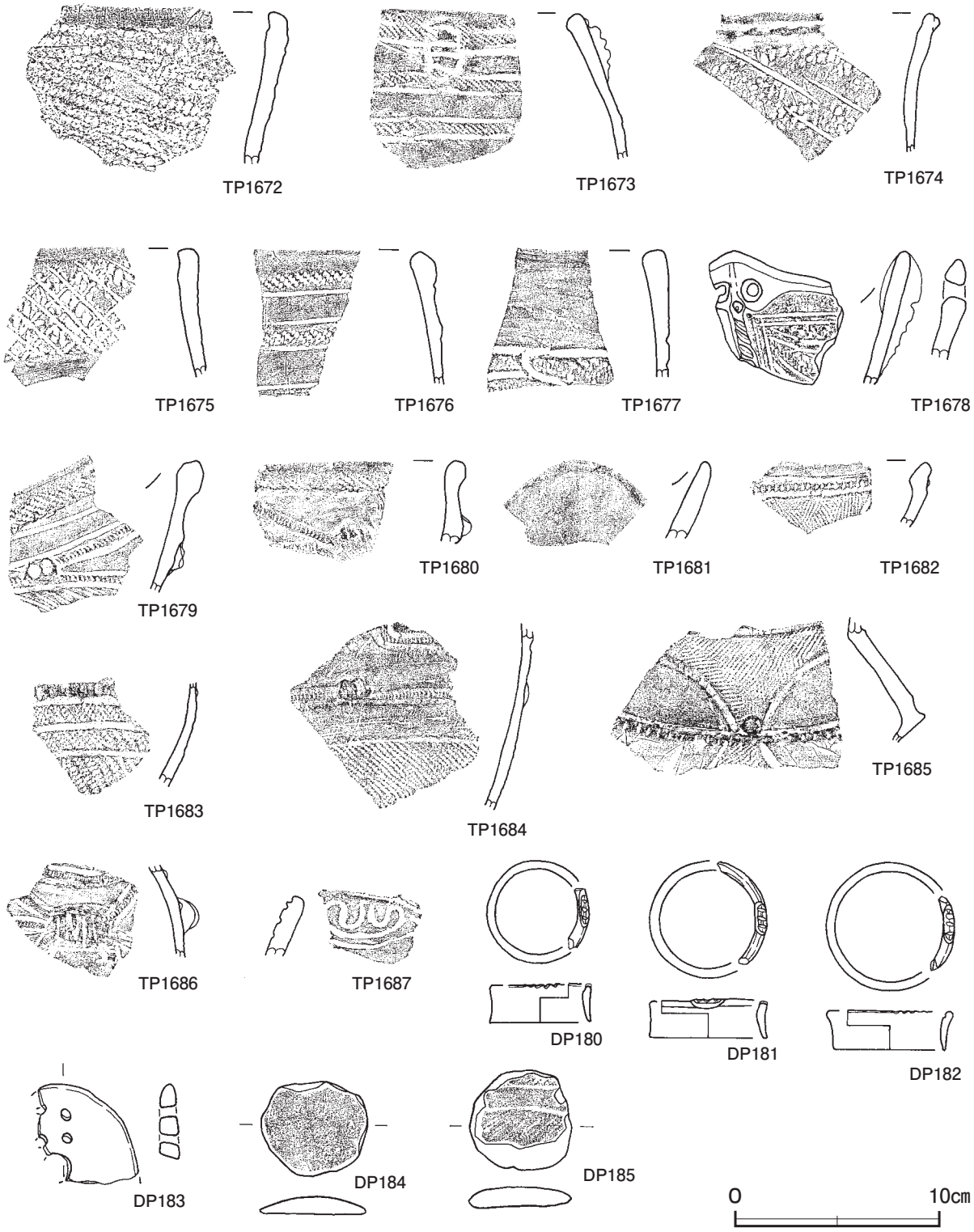
2　黒　褐　色　焼土ブロック・炭化物少量，ローム粒子・細礫微量

焼土土層解説（２か所共通）

1　黒　褐　色　焼土ブロック中量，細礫少量，ローム粒子・炭化粒子微量

2　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・細礫微量

遺物出土状況　縄文土器片 616 点（9,761g），土製品７点（耳飾り３，円盤１，土器片円盤２，不明１），石器１点（砥石）のほか，土師質土器片１点（小皿），イノシシ・シカを主体とした獣骨も出土している。縄文土



第 54 図　第１号遺物集中地点出土遺物実測図

器片 616 点のうち６点（48.0g）が製塩土器片である。

遺物は楕円形を呈する範囲からほぼ偏りなく出土している。土器はすべてが小破片であり，接合関係はほとんどない。谷に向かう縁辺部にあたる当地点で，不要になった日常什器・道具・装身具・食滓などを一括廃棄したものとみられる。

所見　本地点で確認した焼土については，竪穴建物に伴う炉としての状況は認められず，周囲や底面に赤変硬化した様子も確認できなかった。これらのことから，焼土は土器などとともに廃棄され，窪みに堆積したものとみられる。炭化材についても，焼土とともに廃棄されたものと考えられる。また，土器・土製品・石器などが集中して出土していることから，この地点で短期間に廃棄行為が行われた可能性がある。出土土器は，後期前葉の堀之内式から後期終末の安行２式までみられるが，安行２式を中心に出土していることから，時期は，後期終末と考えられる。

第１号遺物集中地点出土遺物観察表（第 54 図）

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1672	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口唇部ナデ→外面縄文 RL →口縁部内面凹線　内面ナデ	２区覆土中	
TP1673	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→隆帯縄文 RL →貼瘤→隆帯下沈線→無文部磨き　内面磨き	１区覆土中	
TP1674	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→縄文→口縁部紐線文→斜位の沈線　口縁部内面凹線　内面磨き	覆土中	
TP1675	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	普通	口唇部ナデ→縄文→格子目文（左下がりの条線→右下がりの条線）　口縁部内面凹線　内面磨き	１区覆土中	
TP1676	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口唇部ナデ→隆帯縄文 RL →隆帯下沈線→無文部磨き　内面磨き	１区覆土中	PL17
TP1677	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→縄文→沈線→無文部ナデ　内面ナデ	１区覆土中	
TP1678	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	波状口縁　縄文→隆帯貼付→斜位の刻み目→半截竹管による沈線文　穿孔３か所　内面ナデ	２区覆土中	PL17
TP1679	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	普通	波状口縁　口縁巣縄文 RL →貼瘤→隆帯刻み目→無文部磨き　内面磨き	覆土中	
TP1680	縄文土器	深鉢	長石・石英	浅黄橙	普通	口唇部ナデ→貼瘤→隆帯縄文・刻み目→無文部磨き　器面磨滅顕著	覆土中	
TP1681	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒褐	普通	波状口縁頂部　外・内面磨き	１区覆土中	
TP1682	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	口唇部ナデ→縄文→口縁部半截竹管による横位の沈線　沈線間刻み目　内面磨き	覆土中	
TP1683	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	普通	縄文 RL →横位の沈線→縦位の刻み目　内面磨き	覆土中	
TP1684	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	縄文 RL →沈線で区画→貼瘤→隆帯刻み目→無文部磨き　内面ヘラナデ	１区覆土中	
TP1685	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	ソロバン玉形　沈線で区画後円形の押圧文→縄文充填→無文部磨き→刻み目　内面磨き	２区覆土中	PL17
TP1686	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	隆帯で区画→貼瘤→隆帯刻み目→隆帯下押引文→無文部磨き　内面磨き	覆土中	
TP1687	縄文土器	鉢	長石・石英	灰褐	普通	波状口縁　内面沈線文→外・内面磨き	１区覆土中	

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	色調・胎土	特　　徴	出土位置	備　考
DP180	耳飾り	径 [5.0]	孔径 [4.1]	1.9	(3.31)	にぶい赤褐 長石・石英	端部沈線・刻み目　側面・内面丁寧な磨き	１区覆土中	
DP181	耳飾り	径 [5.8]	孔径 [4.7]	1.8	(6.64)	褐灰 長石・石英・雲母	端部沈線・刻み目　側面・内面丁寧な磨き	覆土中層	
DP182	耳飾り	径 [6.2]	孔径 [5.3]	1.9	(4.32)	にぶい赤褐 長石・石英	端部沈線・刻み目　側面・内面丁寧な磨き	１区覆土中	
DP183	円盤	(5.0)	(5.0)	(1.0)	(23.8)	橙 長石・石英	全面ナデ調整　穿孔５か所	覆土中	PL20
DP184	土器片円盤	4.7	5.3	0.9	19.2	にぶい黄褐 長石・石英	周縁部粗割り後研磨調整　断面山形	１区覆土中	
DP185	土器片円盤	5.0	5.0	1.1	22.4	にぶい橙 長石・石英	安行式土器利用　周縁部粗割り後研磨調整	１区覆土中	

第２号遺物集中地点（第 55 ～ 57 図）

位置　調査区北部のＦ５b9 ～Ｆ５c0 区，標高 21 mほどの谷に向かう緩やかな斜面部に位置している。

確認状況　調査区北部で，第４号包含層の南部への広がりを確認するため，上面の精査を実施している際，土器・石器などが集中して出土している範囲を確認した。第１号遺物集中地点と同様に，周囲と様相を異にすることから，遺物集中地点として取り上げた。

重複関係　下層に第４号包含層，第６号ピット群が形成されている。

遺物の広がりと覆土　本地点は，調査区北部のＦ５b9 区を中心に，東西約 4.5 m，南北約６mの楕円形の広がりを示す。第４号包含層が形成されている範囲内で，第１号遺物集中地点と同様に，黒褐色の包含層の堆積土がより黒色に近い様相を呈し，包含されている遺物の密度が高い。覆土は２層に分層できる。上方から流入した自然堆積土に，遺物が包含されている状況である。

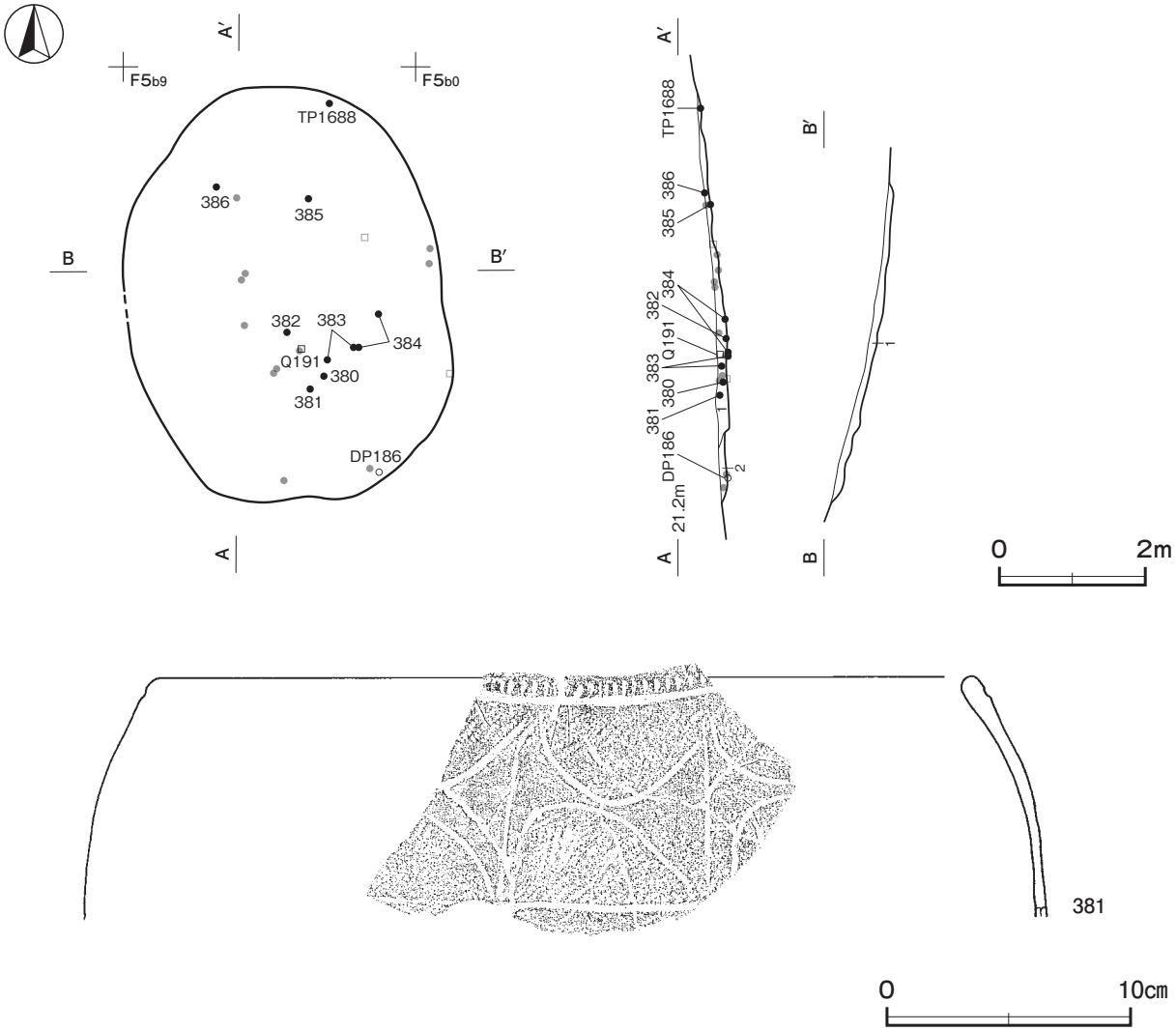
土層解説

１　黒　褐　色　細礫少量，ローム粒子微量　　２　黒　褐　色　砂粒中量，ローム粒子微量

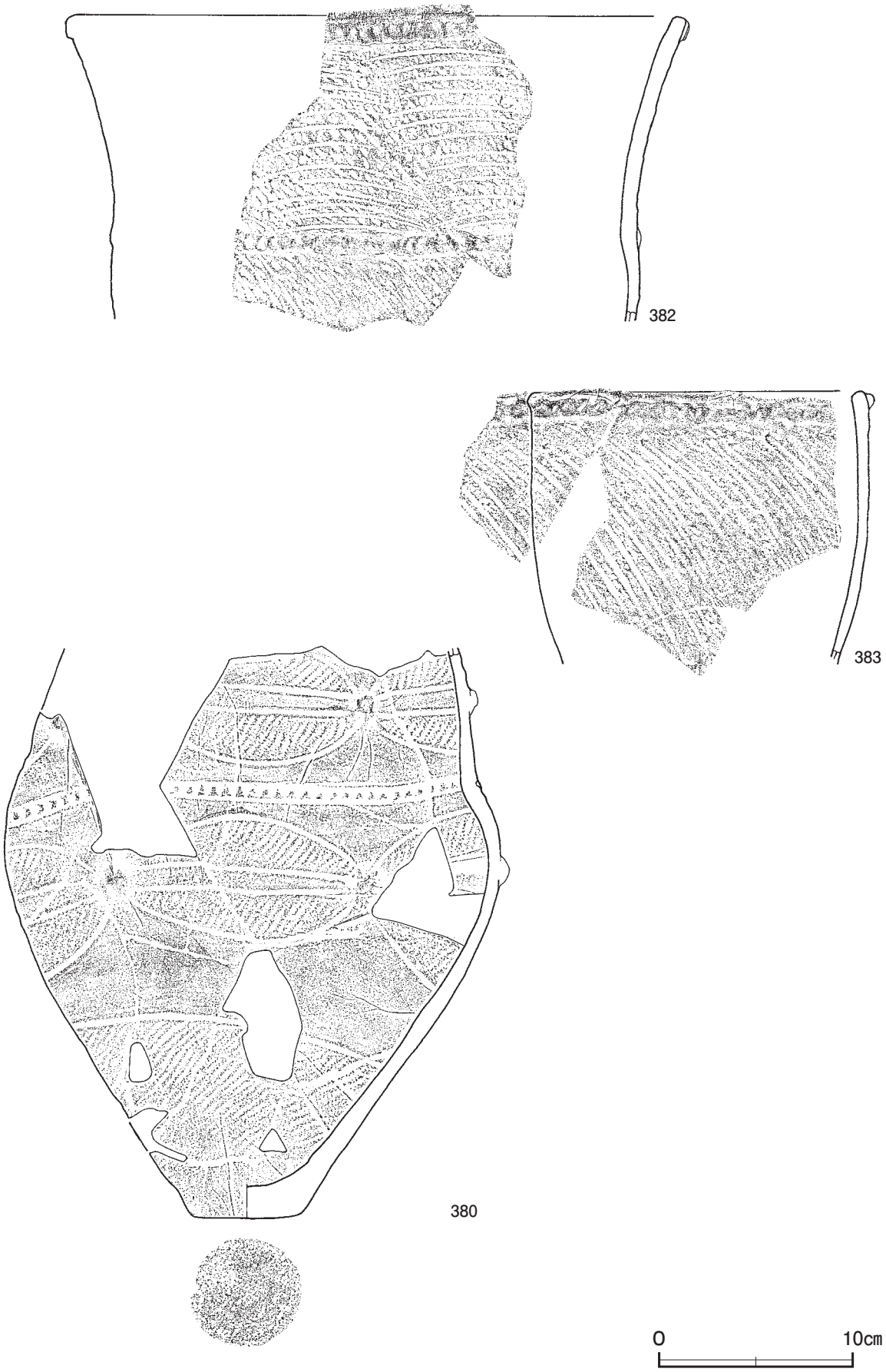
遺物出土状況　縄文土器片 36 点 (5,122g)，土製品１点（土器片円盤），石器１点（磨石），礫２点が出土している。

遺物は楕円形を呈する範囲からほぼ偏りなく出土している。土器は大半が破片であるが，完形に近いものもある。第１号遺物集中地点と同様に，谷に向かう縁辺部にあたる当地点で，不要になった日常什器・祭祀具・道具などを一括廃棄したものとみられる。

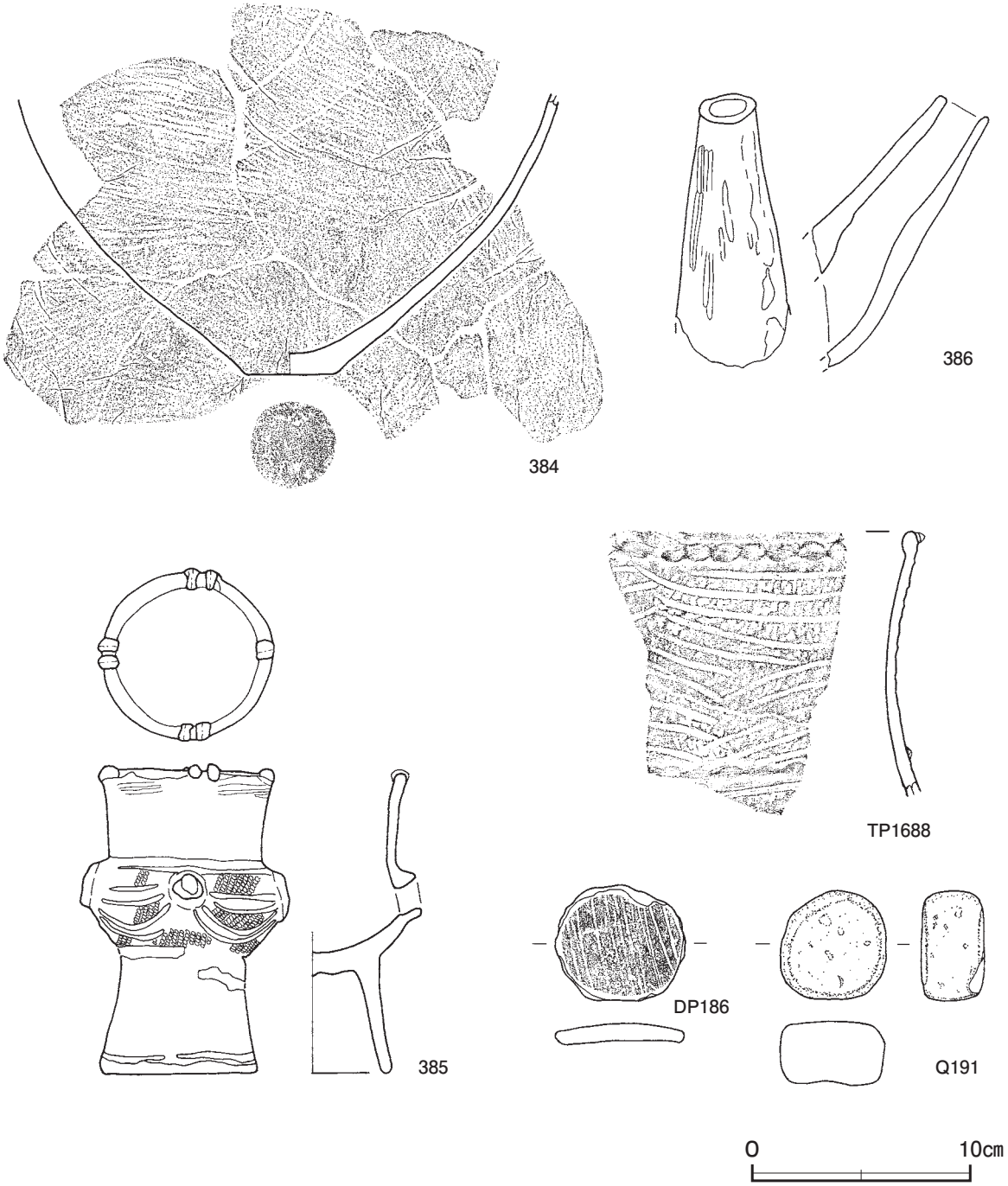
所見　本地点は，第４号包含層中に形成されており，特に土器・土製品・石器などが集中して出土し，遺存状態が良い土器も見られることから，第１号遺物集中地点と同様に，この地点で短期間に廃棄行為が行われた可能性がある。出土土器は，後期前葉の堀之内式から後期後葉の安行１式までみられる。安行１式を中心に出土していることから，時期は，後期後葉と考えられる。



第 55 図　第２号遺物集中地点・出土遺物実測図



第 56 図　第２号遺物集中地点出土遺物実測図 (1)



第 57 図　第２号遺物集中地点出土遺物実測図 (2)

第２号遺物集中地点出土遺物観察表（第 55 ～ 57 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
380	縄文土器	深鉢	－	(30.5)	5.6	長石・石英	明赤褐	普通	胴部中位２条の平行沈線→沈線間刻み目　貼瘤→沈線文→縄文 LR →無文部磨き　内面剥離顕著	覆土下層	50%　PL12
381	縄文土器	深鉢	[33.4]	(9.9)	－	長石・石英・赤色粒子	黄橙	普通	縄文 LR →沈線で区画→無文部磨き→口縁部横位の沈線→刻み目　内面磨き	覆土中層	5 %
382	縄文土器	深鉢	[31.0]	(15.8)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	縄文→口縁部・胴部紐線文→胴部上位弧状の条線文→中位斜位の条線文　内面磨き	底面	5 %
383	縄文土器	深鉢	[17.0]	(14.1)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部ナデ→口縁部紐線文→縄文→斜位の条線文　内面磨き	覆土下層 底面	30%　PL12
384	縄文土器	深鉢	－	(12.8)	3.9	長石・石英	明赤褐	普通	胴部外面中位斜位の条線文→下位ヘラナデ　内面ヘラナデ	底面	20%
385	縄文土器	異形 台付土器	7.3	14.2	6.8	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→突起貼付４か所　穿孔２か所　貼瘤→縄文 LR →沈線文→無文部磨き　内面ナデ	底面	90%　PL12
386	縄文土器	注口土器	－	(12.5)	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	縦位のヘラ磨き　器面磨滅顕著	覆土下層	20%

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1688	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→縄文→口縁部・胴部中位紐線文→弧状の条線文　口縁部内面凹線　内面ナデ	底面	PL17

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	色調・胎土	特　　徴	出土位置	備　考
DP186	土器片円盤	5.3	6.0	0.9	29.4	明赤褐 長石・石英	周縁部粗割り後研磨調整	底面	PL22

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q 191	磨石	5.0	4.9	2.9	104.7	凝灰岩	全面研磨	覆土中層	

⑽　遺物包含層

今回の調査区域である，東側の谷に面した斜面部のほぼ全面に，土器や石器などの遺物を多量に含む遺物包含層が厚く堆積していることを確認した。広範囲に及ぶことから，遺物の出土が少ないＦ５h6 区付近を境界とし，便宜上北東側を第４号包含層，南東側を第５号包含層として報告することとした。

第４号包含層（第 58 ～ 78・付図）

位置　調査区北部から中央部にかけてのＥ６h1 ～Ｆ５h7 区，標高 20 ～ 22 mほどの台地斜面部に位置している。

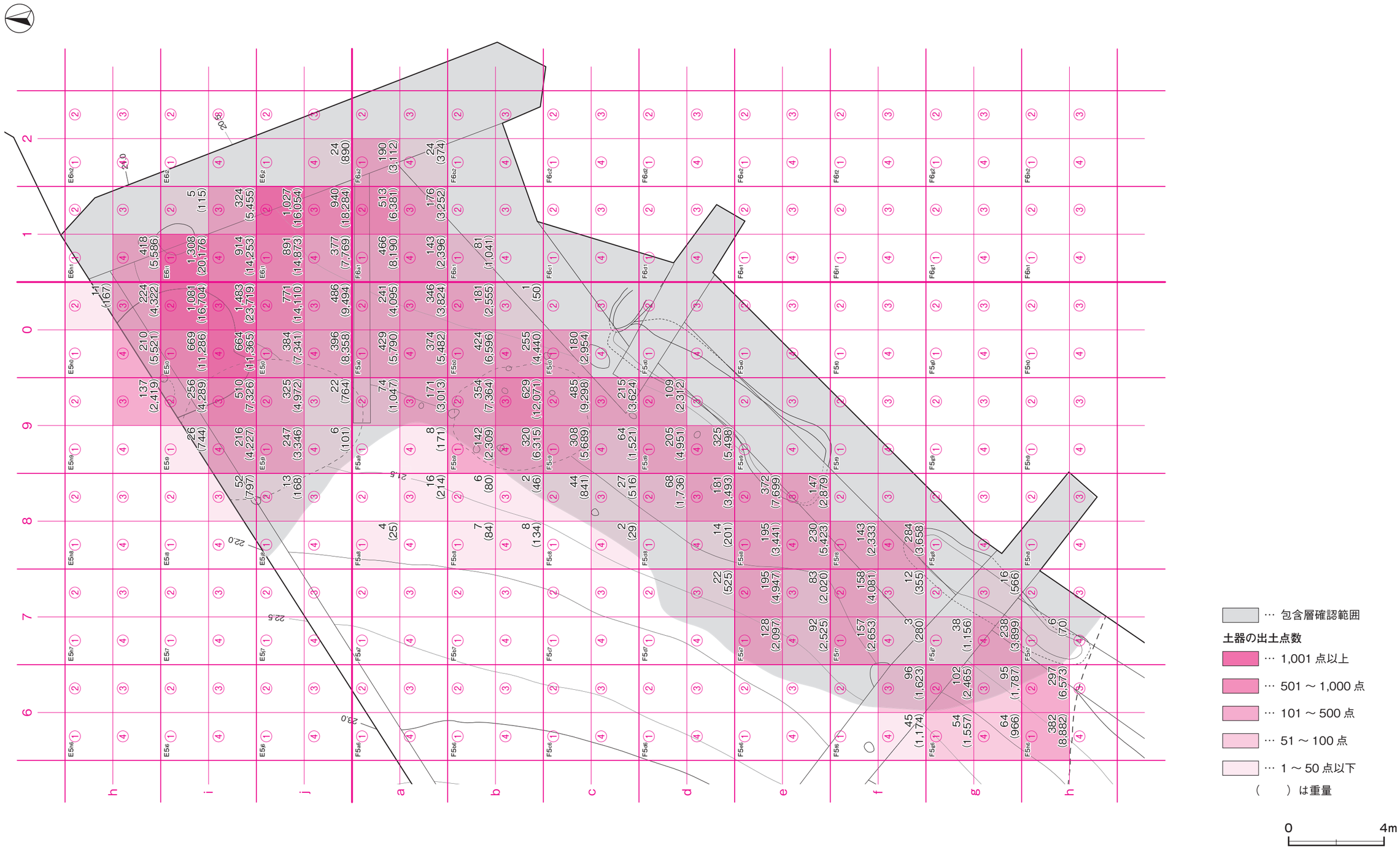
確認状況　調査区北部から中央部にかけて，等高線に直交するようにＡ・Ｂ及びＨ～Ｎトレンチを設定して掘削を行い，遺物包含層の所在を確認するとともに，その広がり及び堆積状況の調査を行った。斜面上方で表土を約 50cmほど，下方で１mほどの深さまで掘削したところ，黒色を呈し，遺物を多量に包含する層を確認した。この黒色土は，斜面上という特性から，上方では薄く，下方に行くに従い，厚く堆積している。

重複関係　第 15 号竪穴建物跡，第 178・193・195・197・198・220 号土坑，第６・７・９号溝，第６号ピット群に掘り込まれ，第２号地点貝塚，第１・２号遺物集中地点が上層に形成されている。

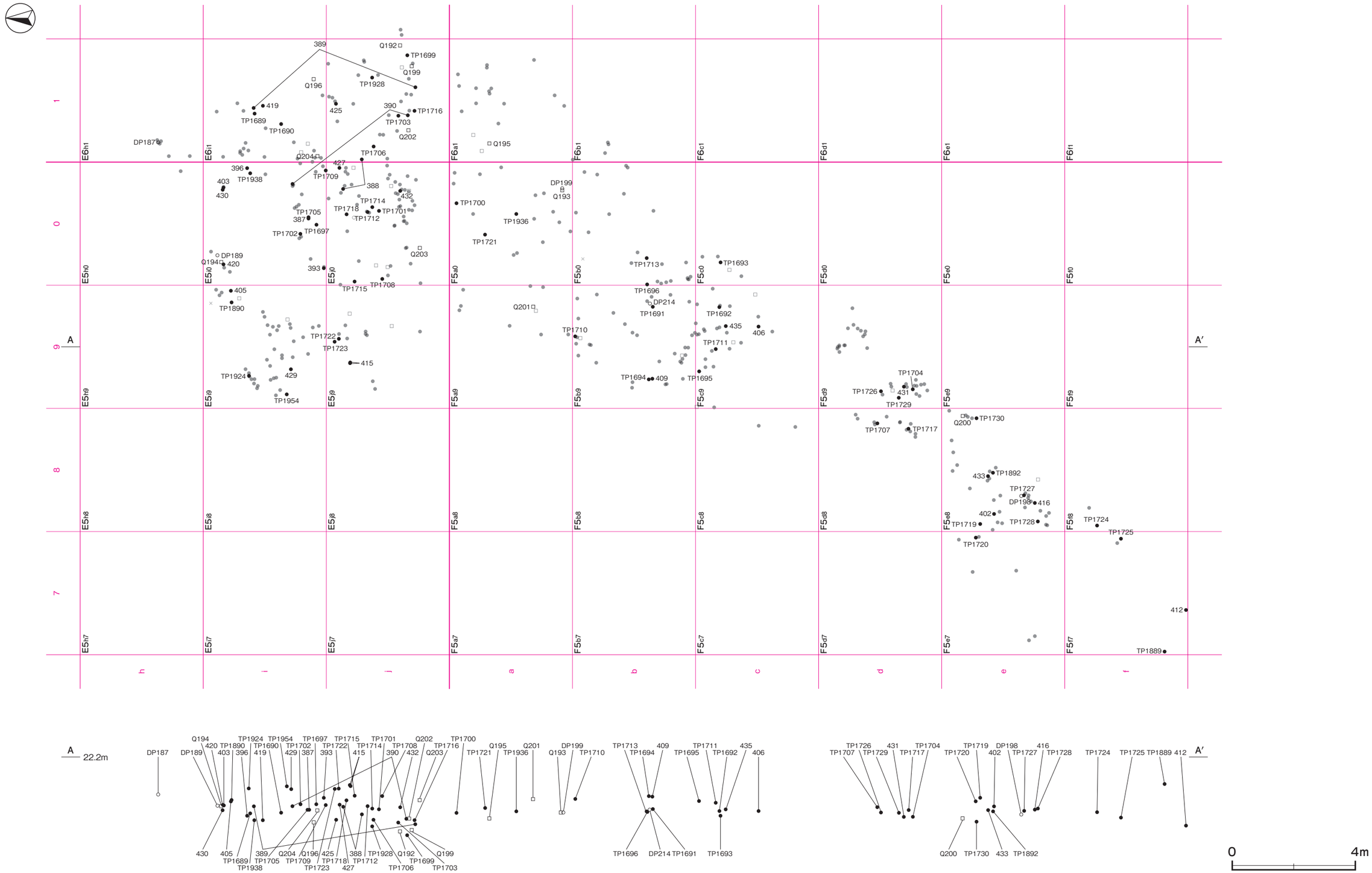
調査の方法　遺跡全体を網羅した広域グリッドをそのまま利用し，Ｅ５h6 区を北西隅の起点として包含層の確認範囲を４mの基本グリッドで覆った。更に，４mグリッド内を４分割し，北西隅から時計回りに①～④区とした。層位については，覆土の特徴から，黒色土層（第３～５層），暗褐色土層（第６～ 12 層），混礫暗褐色土層（第 13・14 層）の３層に分層し，層位ごとに取り上げを行った。

包含層の広がりと堆積状況　本包含層の遺物の分布域は，西から東に向かって下っている斜面部に対し，南北に弧状に広がる特徴を有している。東西の幅は約８～ 15 m，南北の長さは約 45 mである。高低差は約２mで，確認面での傾斜角は約 20 度である。14 層に分層でき，全体の層厚は 20 ～ 180cmである。第１層は表土層，第２層は包含層への漸移層で，第３～ 14 層が包含層となっている。底面は粘土層で，緩やかに下っており，最下位はほぼ水平である。底面の粘土層は，上方では細礫・砂粒を含む褐色，下方では水分を多く含む青灰色を呈している。

包含層はその色調や含有物から，上・中・下層に分けることができる。上層の黒色土を主体とする第３～５層は層厚 25 ～ 40cmで，中央部から東部にかけて南北に帯状に広がっており，遺物の出土量が最も多い層である。中層の暗褐色土を主体とする第６～ 12 層は層厚 20 ～ 100cmで，中央部の黒色土の下層に堆積している層である。下層の礫を含む暗褐色を呈する第 13・14 層は最も下層に堆積した層で，粘土層の直上に相当し，含まれる遺物は少ない。



第 58 図　第 4 号包含層実測図 (1)



第 59 図　第 4 号包含層実測図 (2)

第60図　第4号包含層実測図(3)

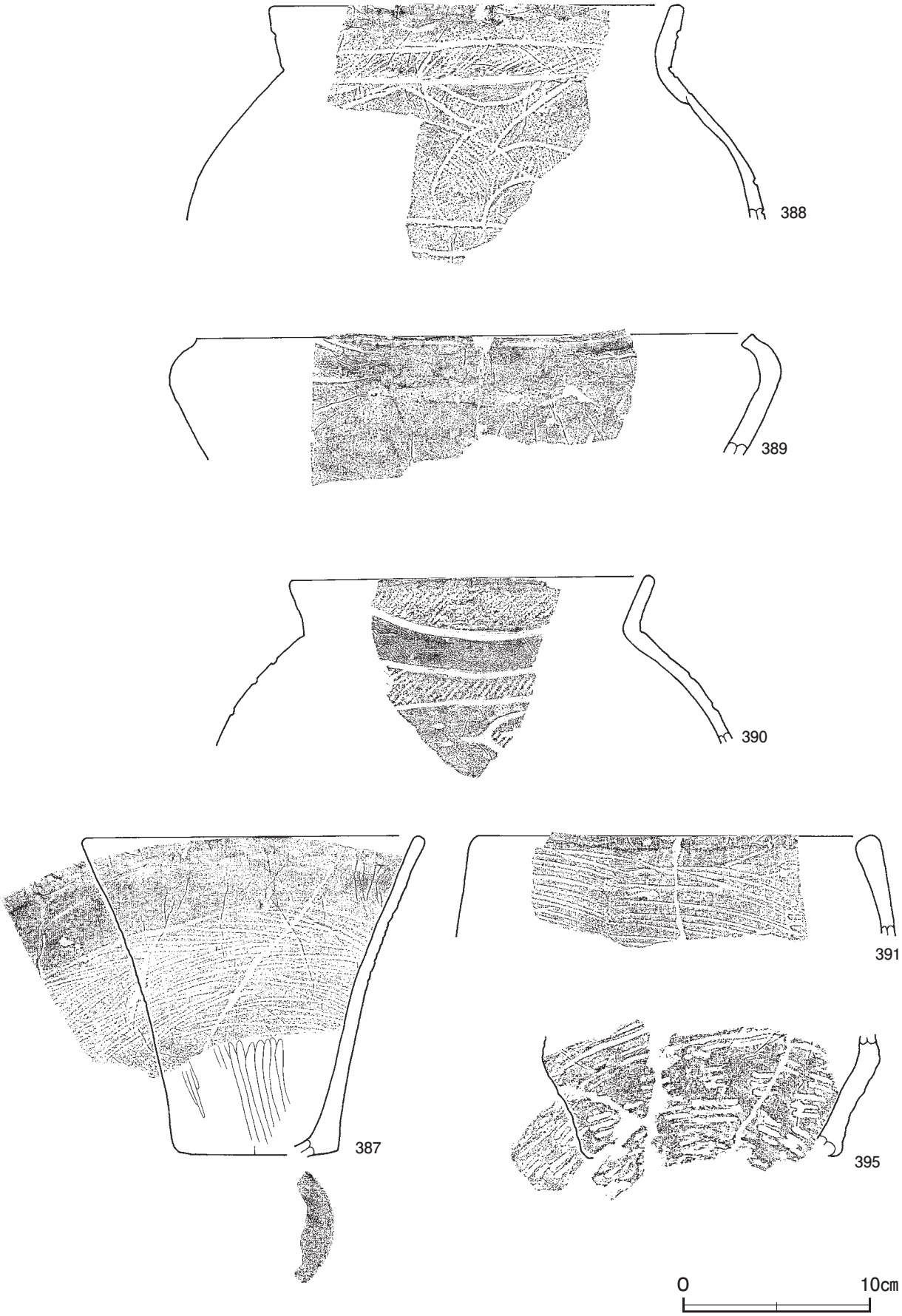
土層解説

1	暗褐色	ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化粒子・砂粒微量
2	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量，焼土ブロック・砂粒微量
3	黒色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量
4	黒色	焼土ブロック・炭化物少量，ローム粒子・骨片微量
5	黒褐色	砂粒中量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，骨片微量
6	暗褐色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子少量，細礫・骨片・破砕貝微量
7	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，砂粒・骨片・破砕貝微量
8	暗褐色	砂粒少量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
9	褐色	ローム粒子・砂粒少量，焼土粒子微量
10	暗褐色	砂粒少量，ローム粒子・焼土粒子微量
11	黄褐色	細礫中量，ローム粒子・粘土粒子少量
12	暗褐色	焼土ブロック・炭化粒子少量，ローム粒子・骨片・砂粒微量
13	暗褐色	細礫少量，ローム粒子・砂粒微量
14	暗褐色	細礫中量，砂粒少量，ローム粒子微量

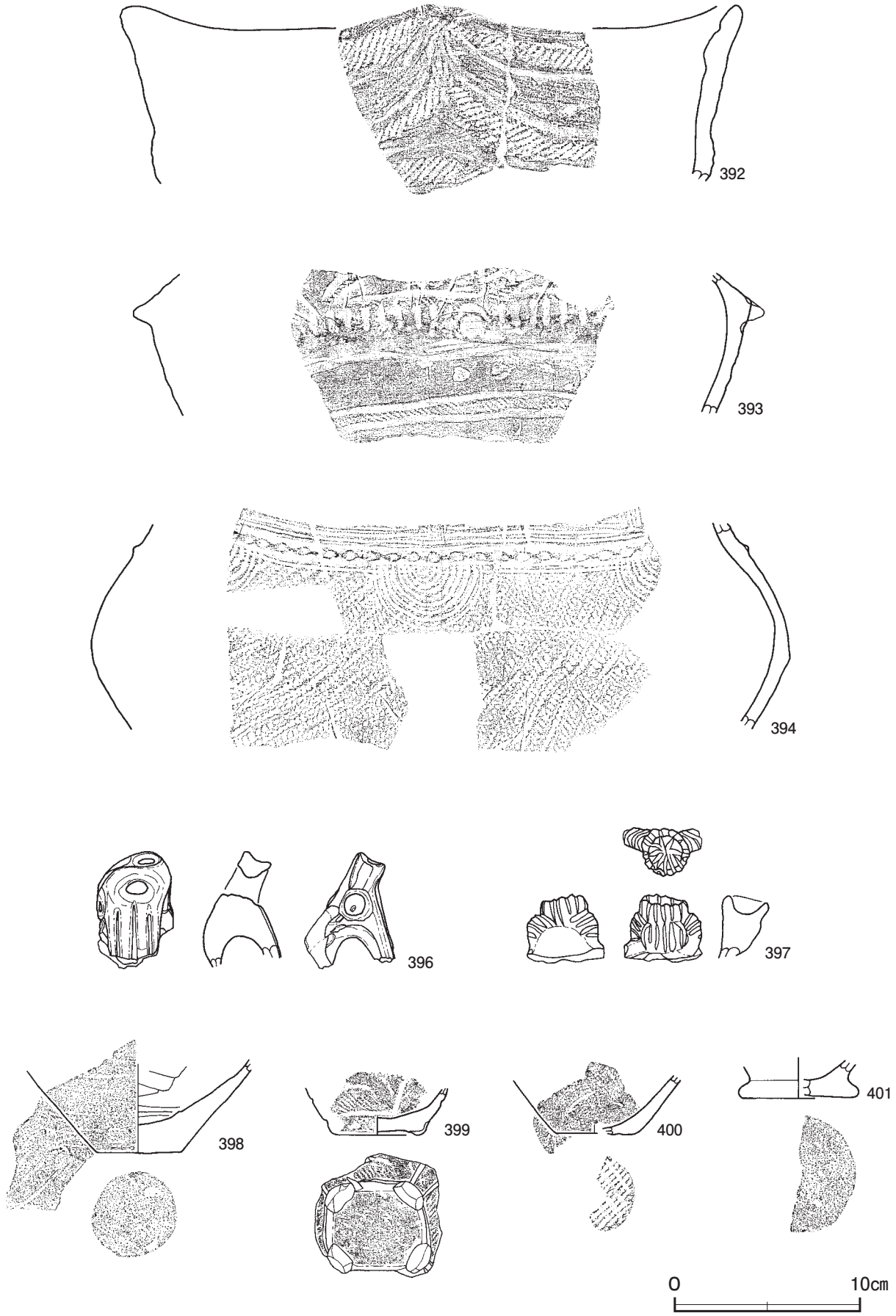
遺物出土状況　本包含層からは，土器を中心とする多量の遺物が出土している。縄文土器片 31,762 点（542,976.6g），土製品 49 点（土玉２，土錘１，耳飾り３，土版４，土偶６，円盤２，土器片円盤 25，不明６），石器 43 点（打製石斧５，磨製石斧１，石匙１，石皿７，磨石 17，敲石１，石錘２，凹石２，砥石７），石製品 17 点（石棒５，石剣６，独鈷石１，不明５），剥片 19 点（チャート 18，瑪瑙１），貝（ヤマトシジミ 5.1g，ハマグリ 1.9g），イノシシ・シカを主体とした獣骨のほか，土師器片２点（甕，小形甕），須恵器片３点（甕２，鉢１），土師質土器片９点（皿８，小皿１），陶磁器片 17 点（碗），瓦質土器片１点（鉢），瓦７点，焼成粘土塊１点，鉄製品５点（不明），珪化木１点も出土している。縄文土器片 31,762 点のうち 92 点（1,228.9g）が製塩土器片である。

遺物は，斜面下位を除くほぼ全域の上層（黒色土）から中層（暗褐色土）にかけて集中して出土している傾向が認められる。土器の大半は小片であり，台地縁辺部から斜面部に向けて廃棄されたものと考えられる。本包含層中で確認した第１・２号遺物集中地点のように，比較的完存率の高い土器片などが密集するように廃棄されている箇所は認められないため，廃棄単位を捉えることは困難である。中でも，北部の上層からの遺物の出土量が多いことから，第 15 号竪穴建物跡及びその周辺からの廃棄行為がより多くなされたものと考えられる。土器の形式は，各箇所・各層位ともに出土量の多寡はあるものの，後期前葉の堀之内式から晩期前葉の安行３式まで確認できる。上層の黒色土中からは，安行２～３式の土器が多く出土し，中層の暗褐色土中からは，曽谷式～安行２式の土器が中心に出土している。曽谷式～安行３式の土器が本包含層から出土した土器の大半を占める。下層の混礫暗褐色土中からは出土量が少ないが，一定量の堀之内式土器及び加曽利Ｂ式土器が出土している。

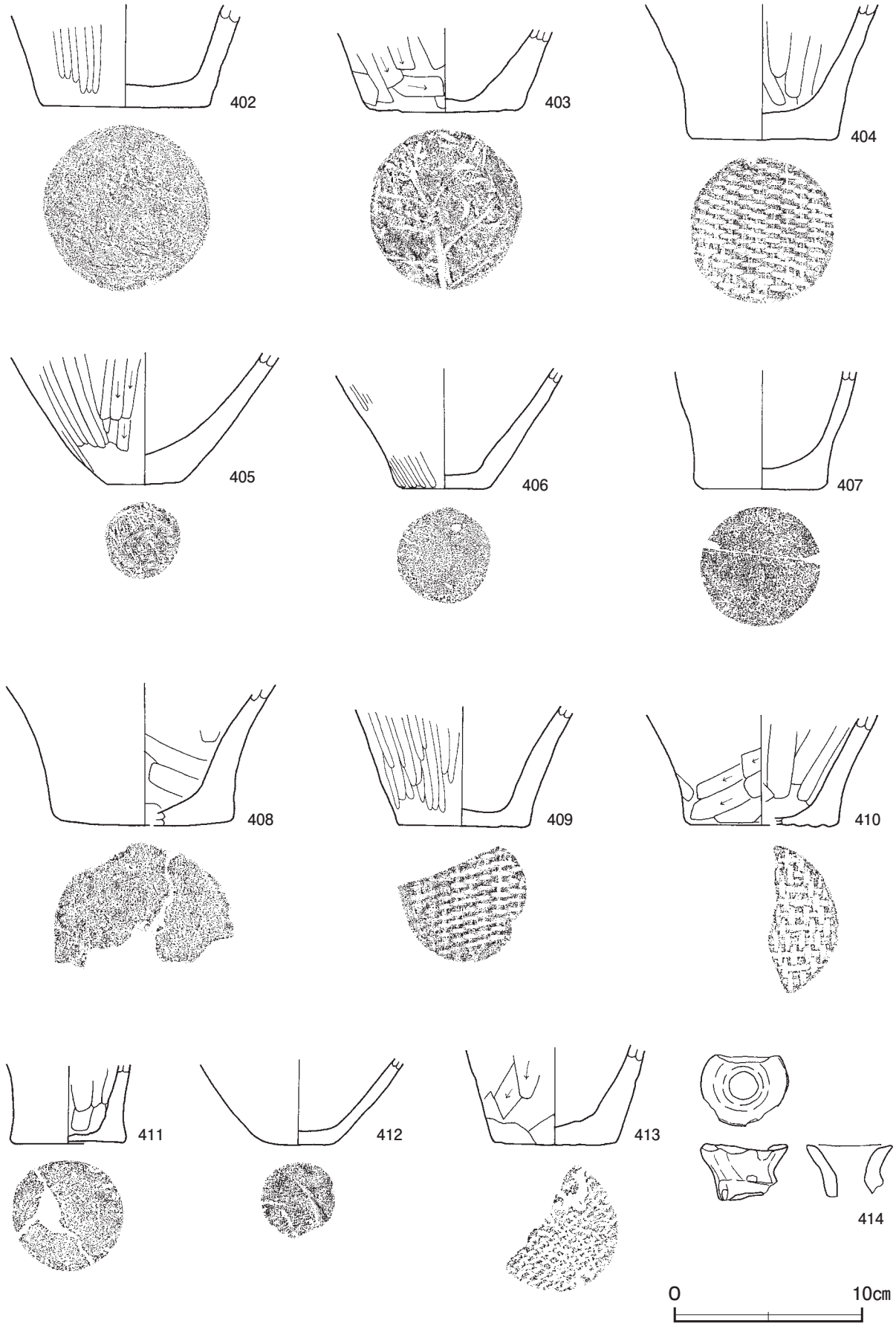
所見　当財団第 364・368 集では，本貝塚南側斜面部の第１～３号包含層について報告を行っている。斜面上部では，台地上の施設構築時の掘削土を土器などの遺物とともに廃棄することによって形成され，下部では，上部の包含層の土砂が流入し，遺物が集積することによって形成されたとしている。当包含層は，東側斜面部の下位に形成されているものである。西側の台地上及び台地縁辺部には第 15 号竪穴建物跡をはじめ，集落跡が形成されていたことが確認されていることや，斜面部の上位から中位にかけての遺物の出土量が多いこと，及び既報告の包含層出土の土器と当包含層出土の土器の形式がほぼ一致することから，第１～３号遺物包含層とともに形成されたものとみられる。時期は，第 15 号竪穴建物跡・第２号地点貝塚に掘り込まれ，第１・２号遺物集中地点が上層に形成されていることなどから，後期前葉から晩期前葉にかけて継続して形成されたものと思われる。



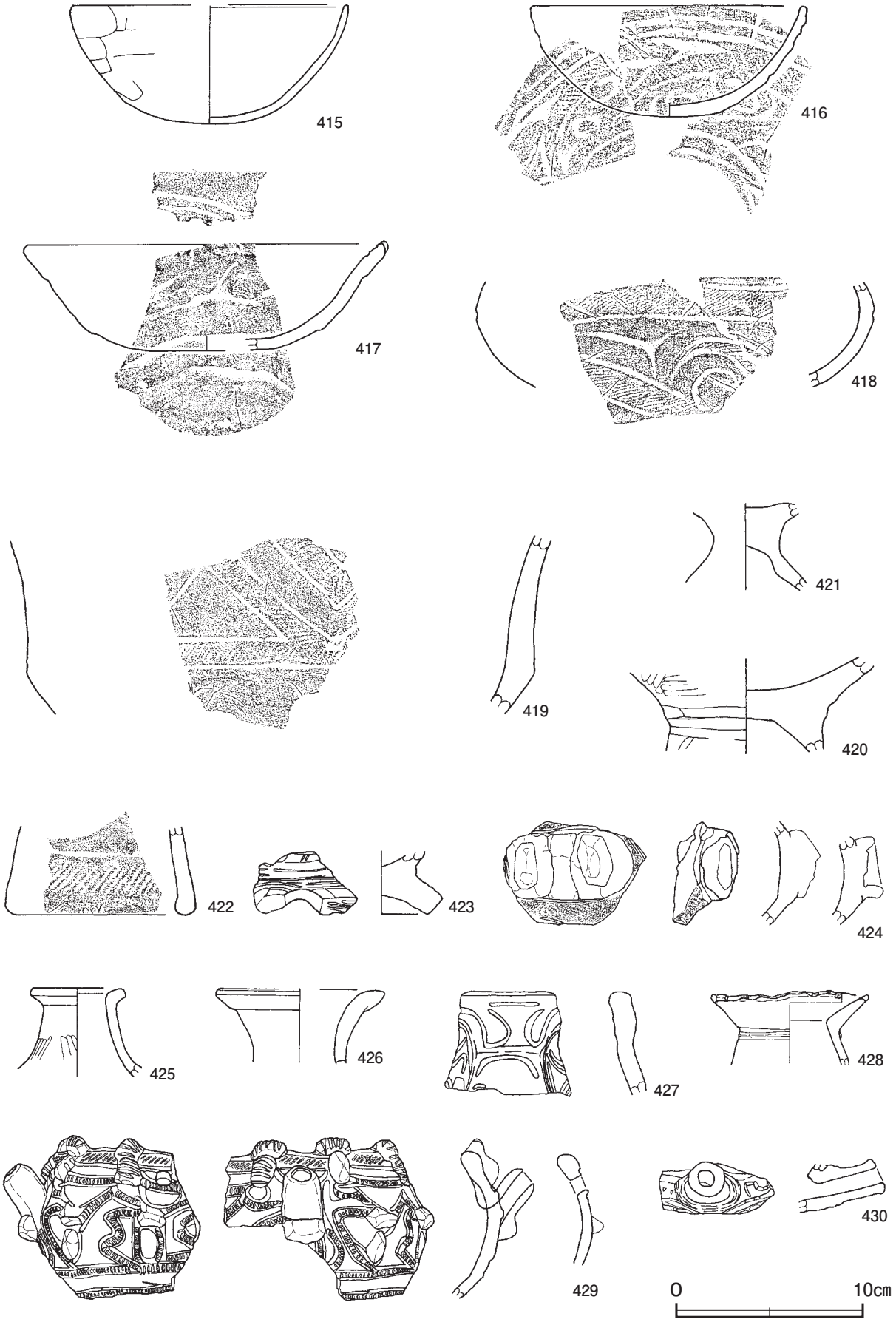
第61図　第４号包含層出土遺物実測図(1)



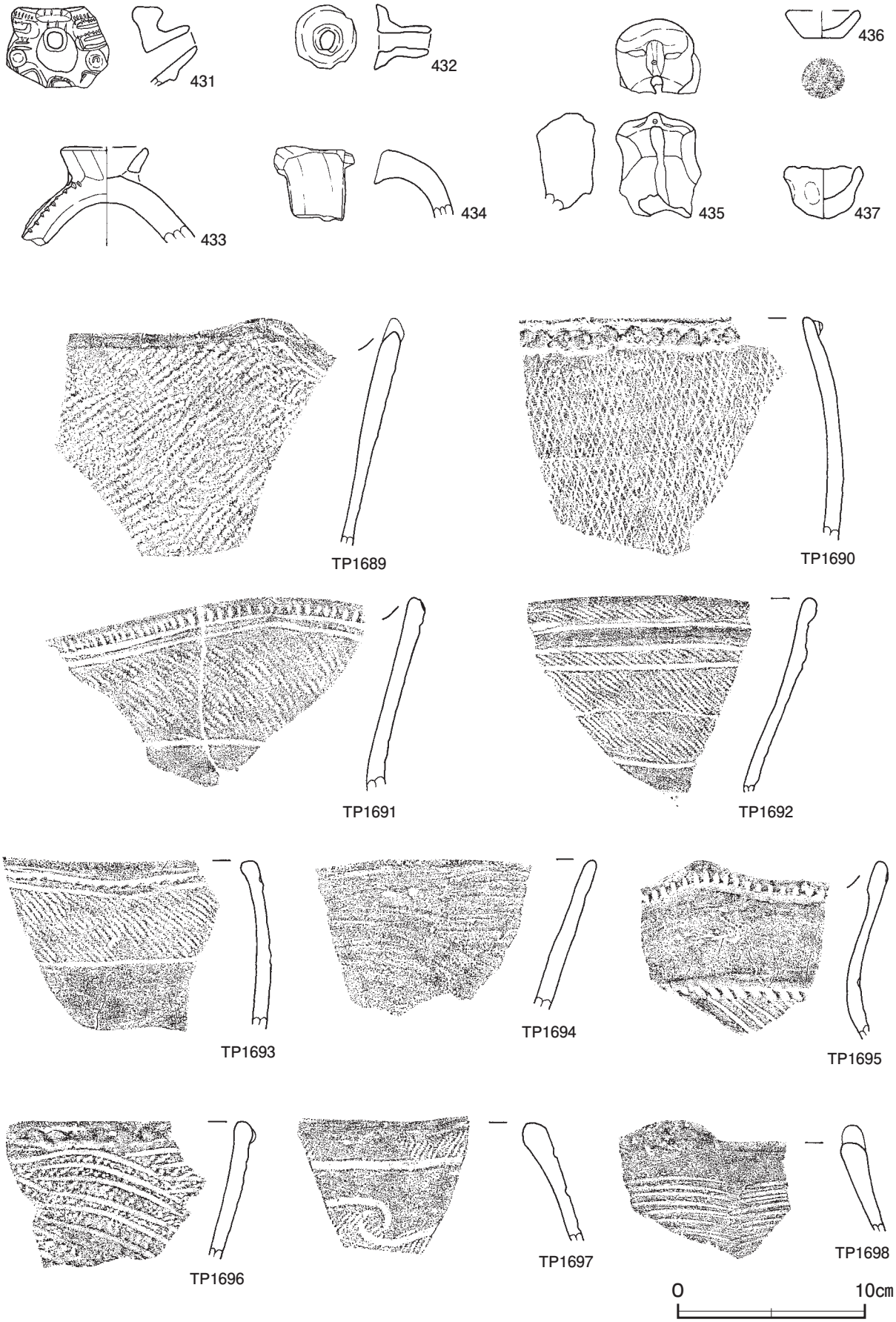
第 62 図　第 4 号包含層出土遺物実測図 (2)



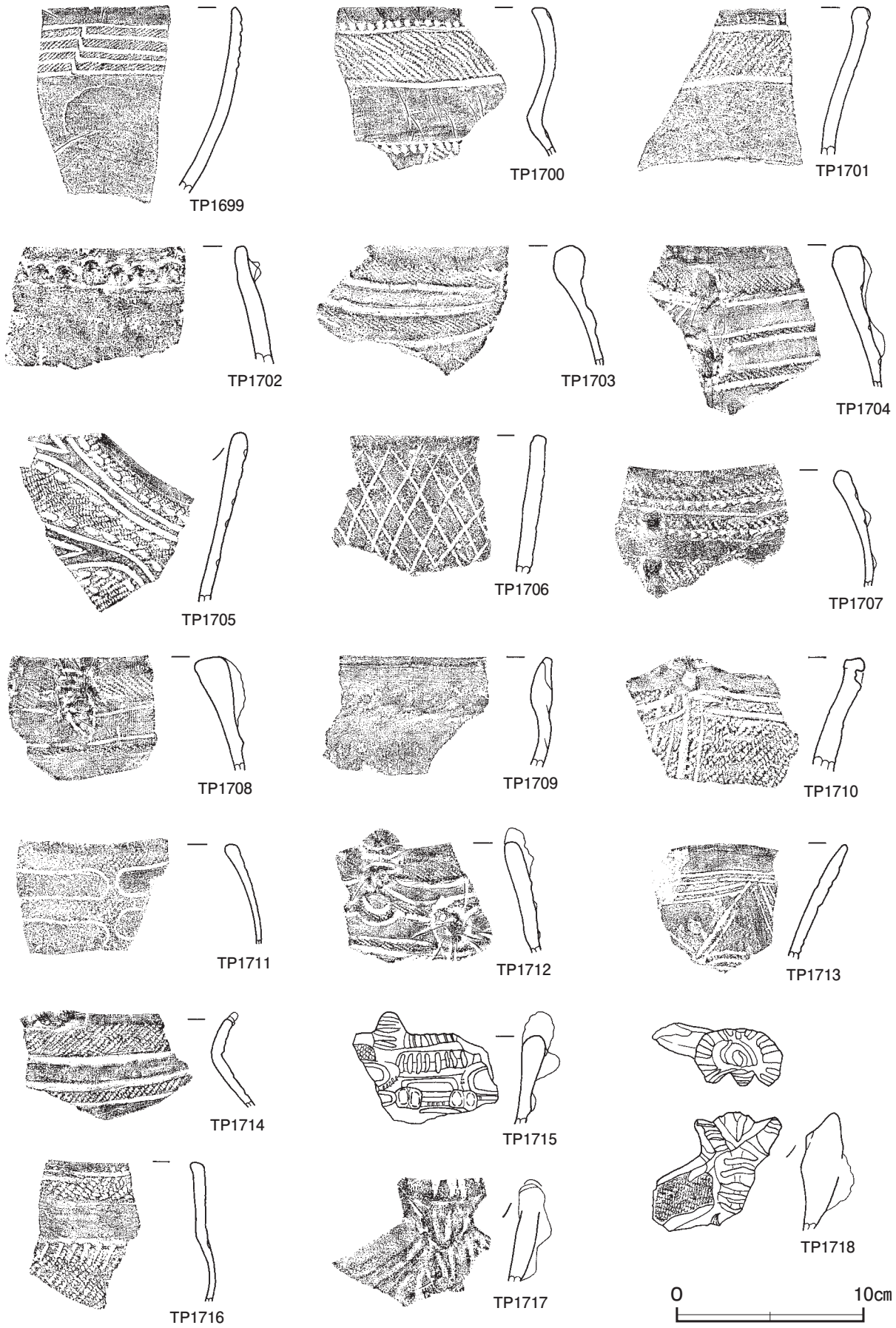
第63図　第４号包含層出土遺物実測図(3)



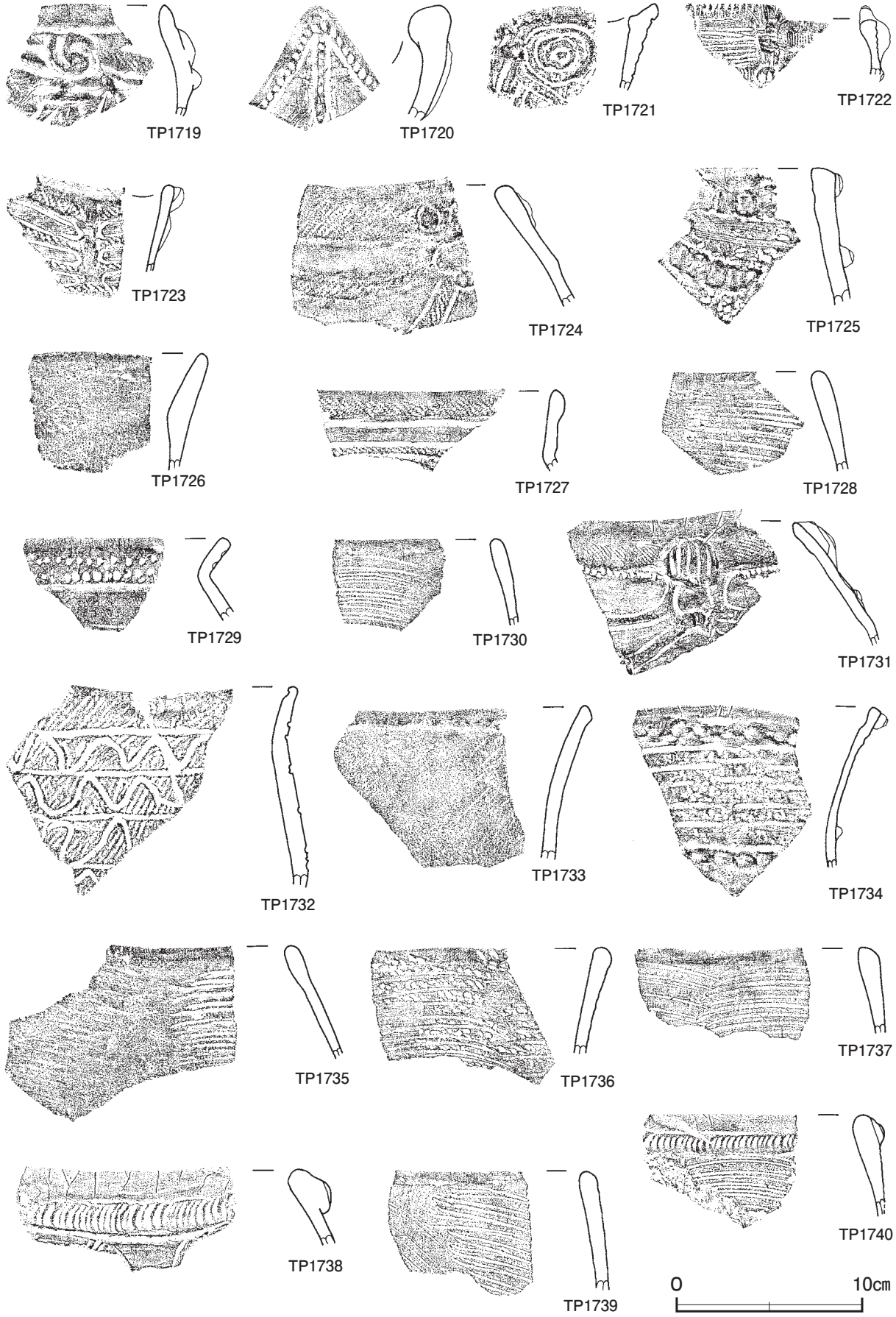
第 64 図　第 4 号包含層出土遺物実測図 (4)



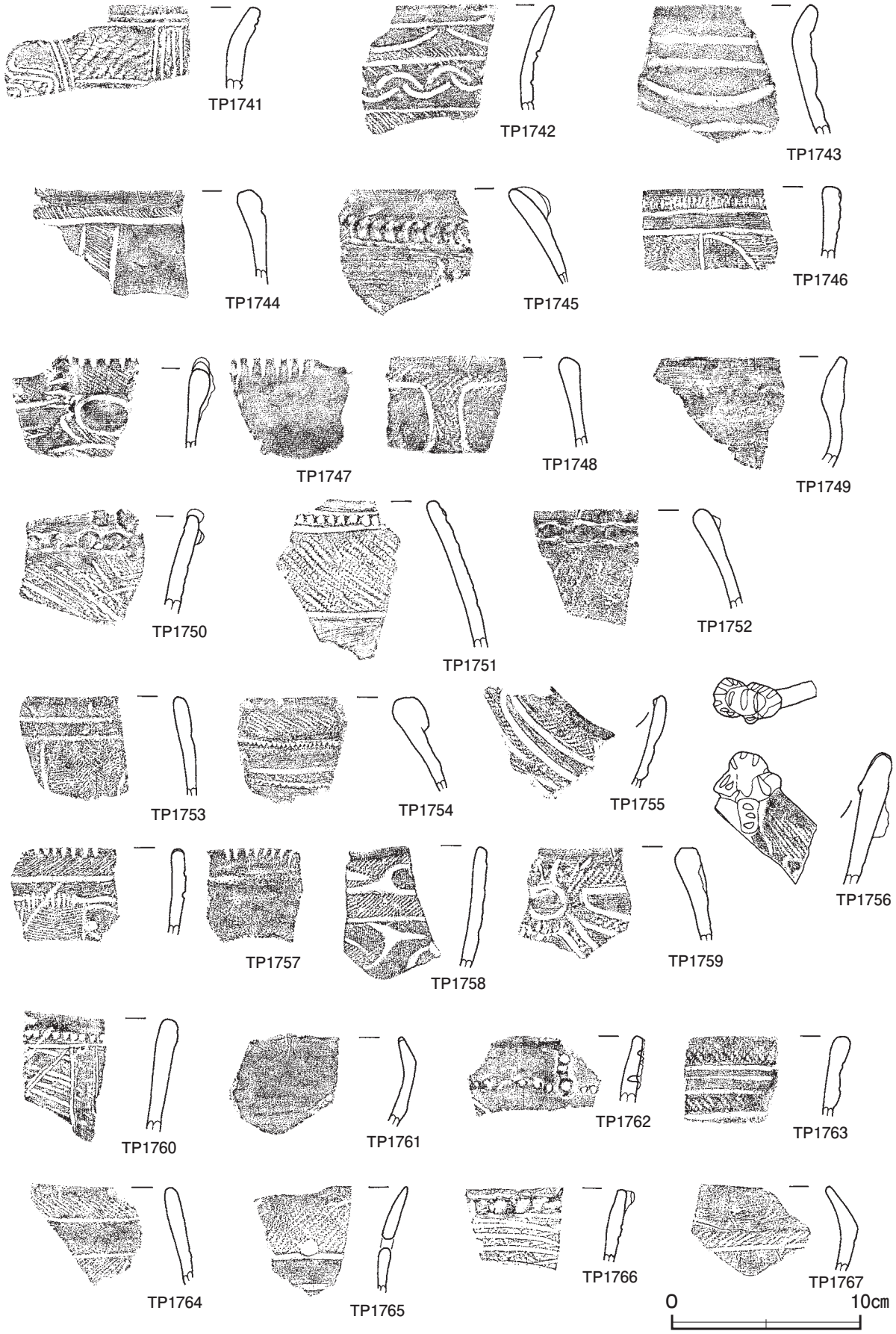
第65図　第４号包含層出土遺物実測図(5)



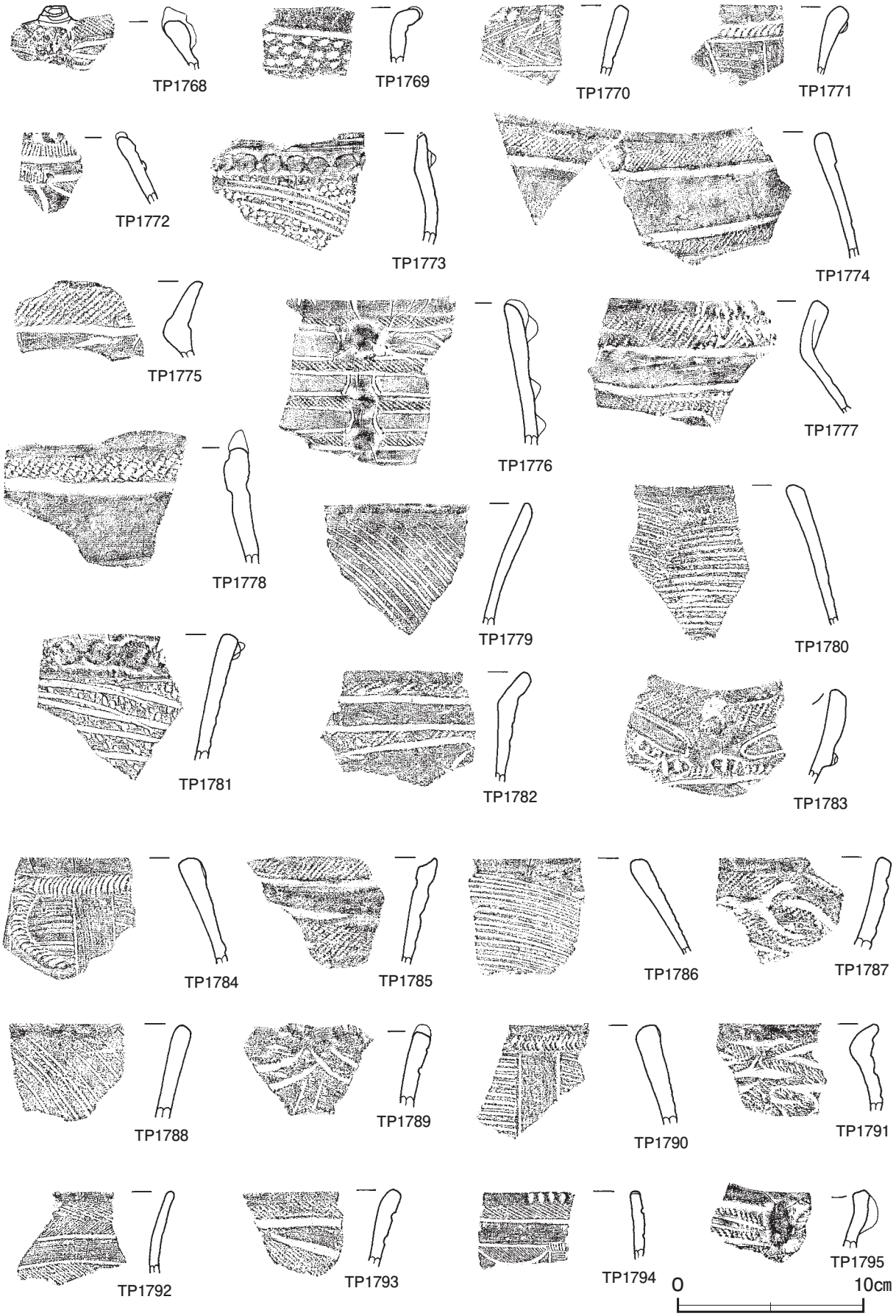
第 66 図　第 4 号包含層出土遺物実測図 (6)



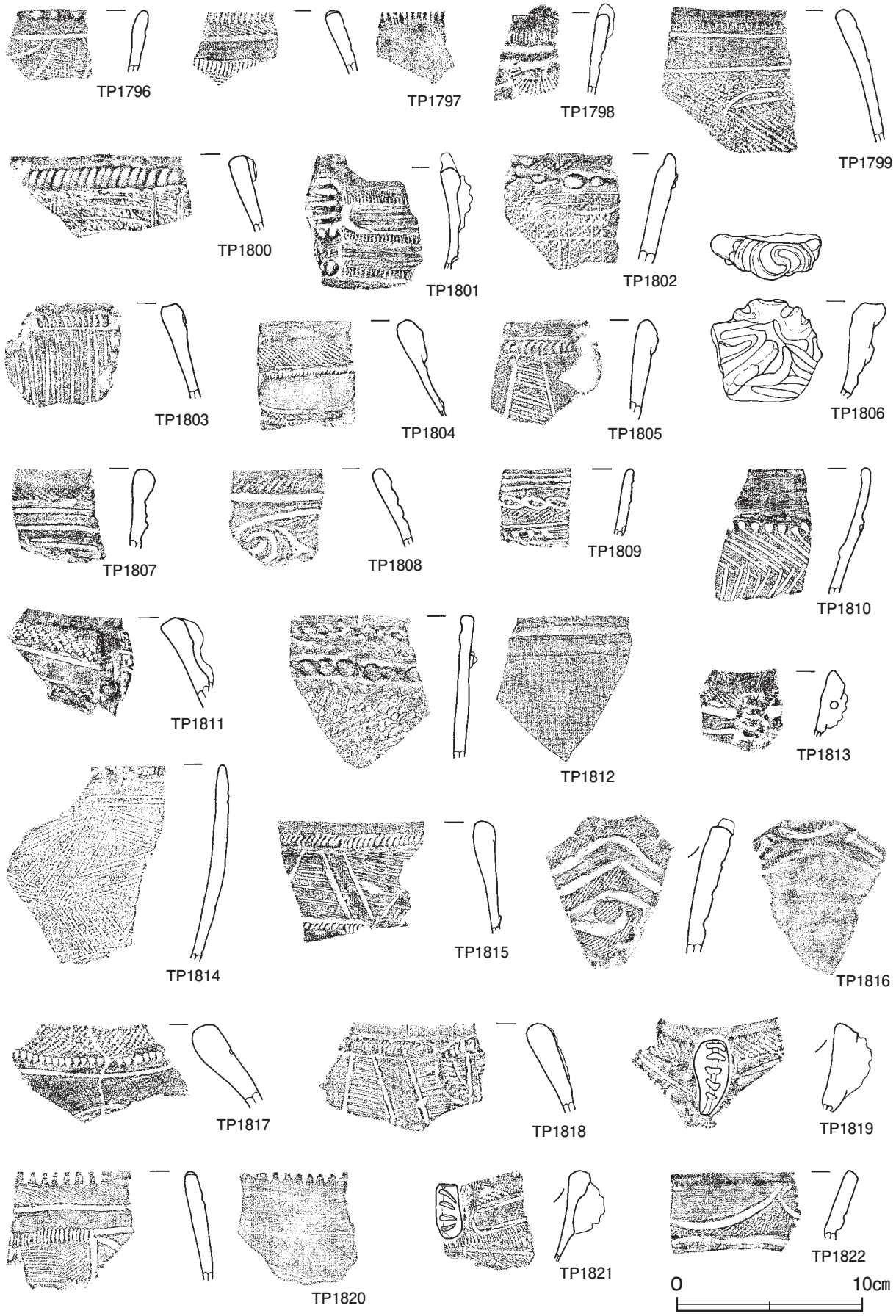
第67図　第４号包含層出土遺物実測図(7)



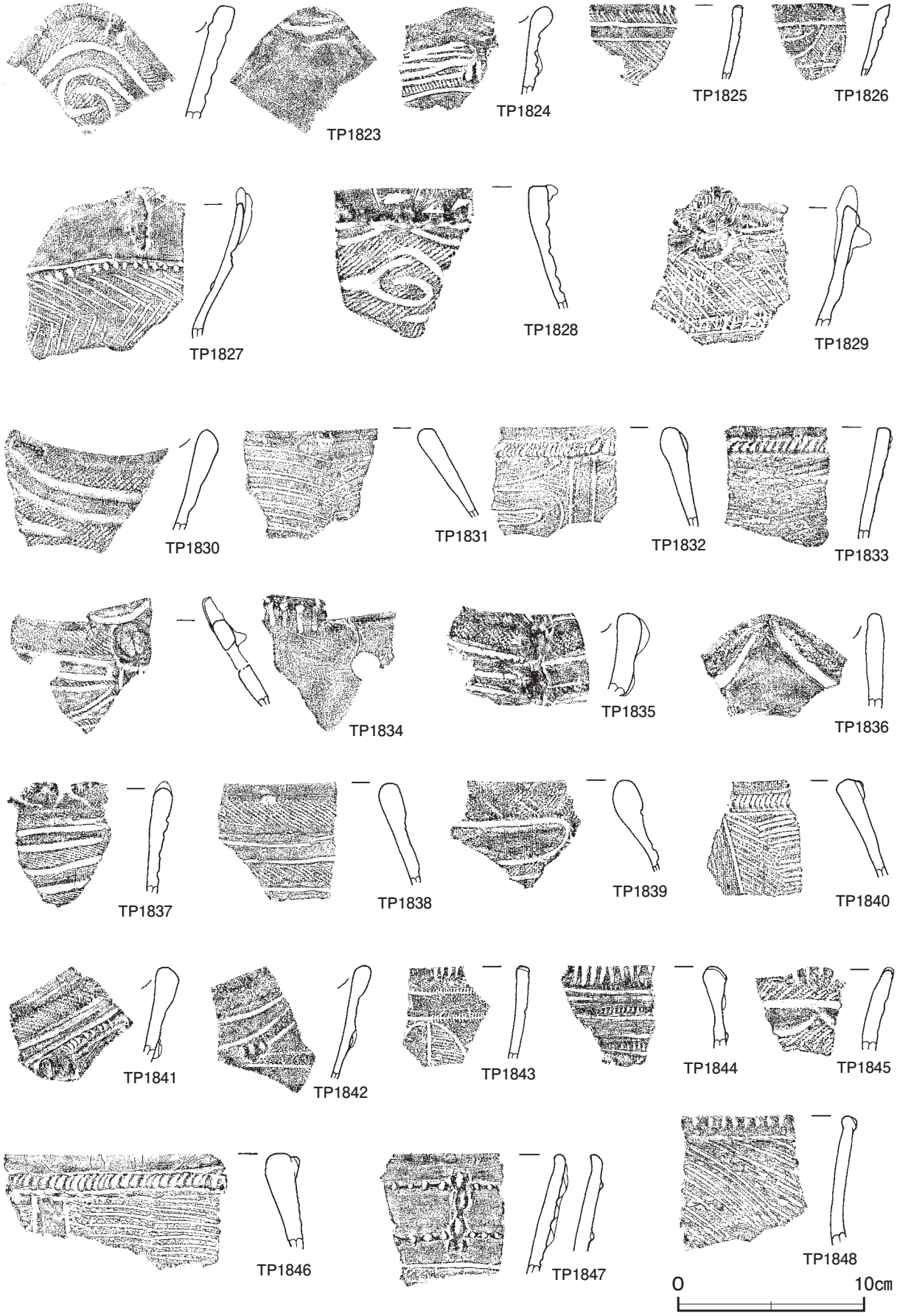
第 68 図　第 4 号包含層出土遺物実測図 (8)



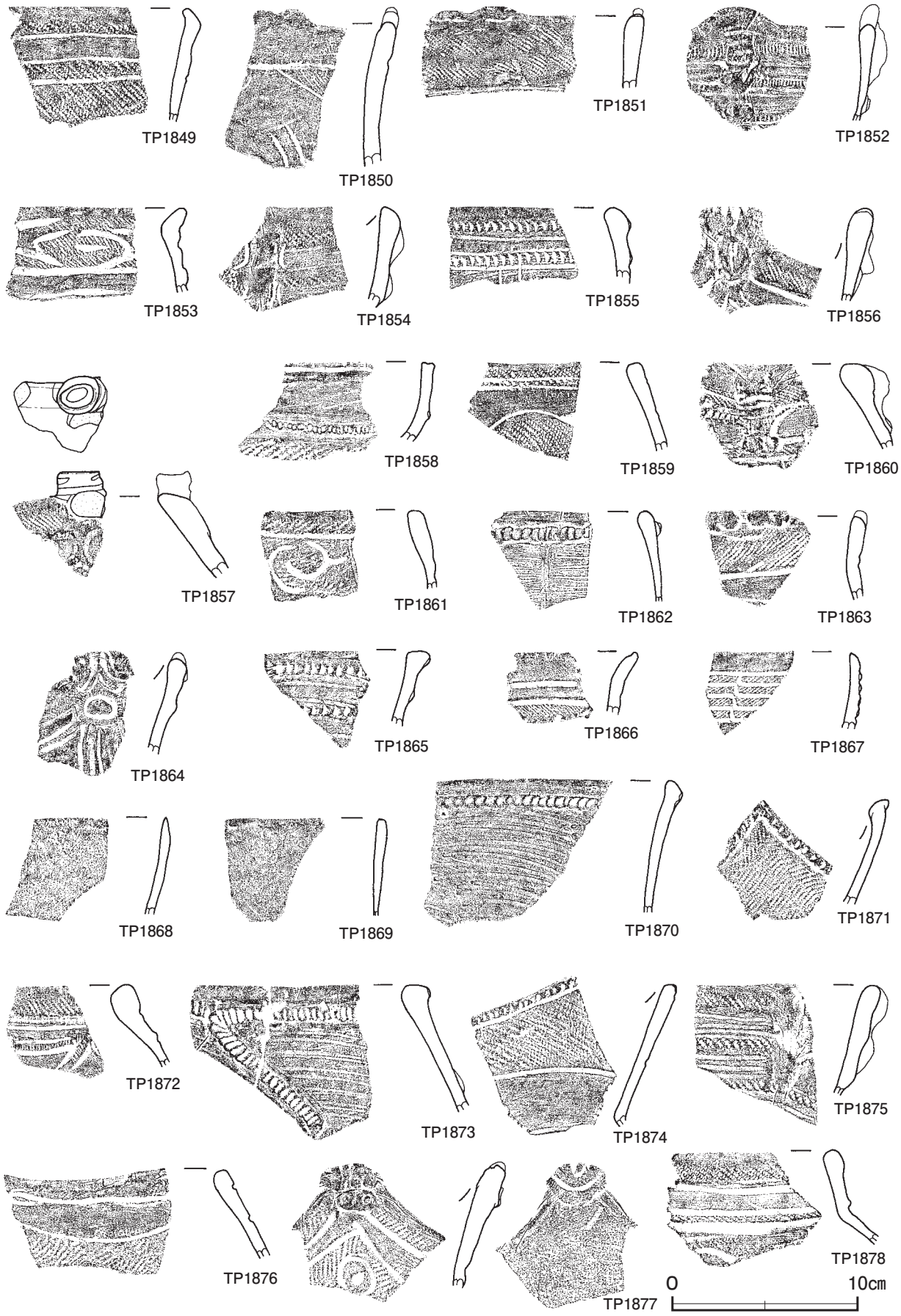
第69図　第４号包含層出土遺物実測図(9)



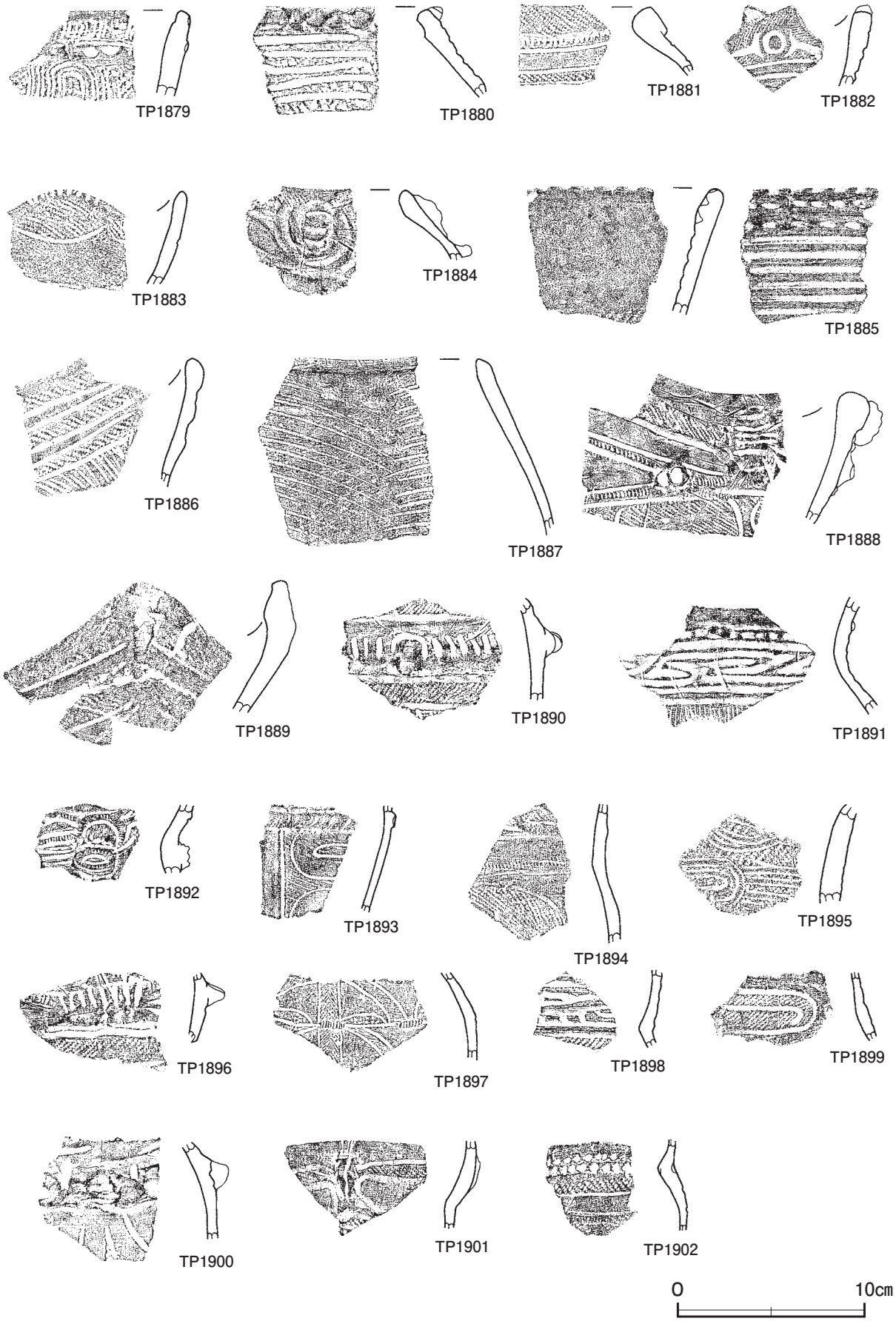
第 70 図　第 4 号包含層出土遺物実測図 ⑽



第71図　第４号包含層出土遺物実測図⑾

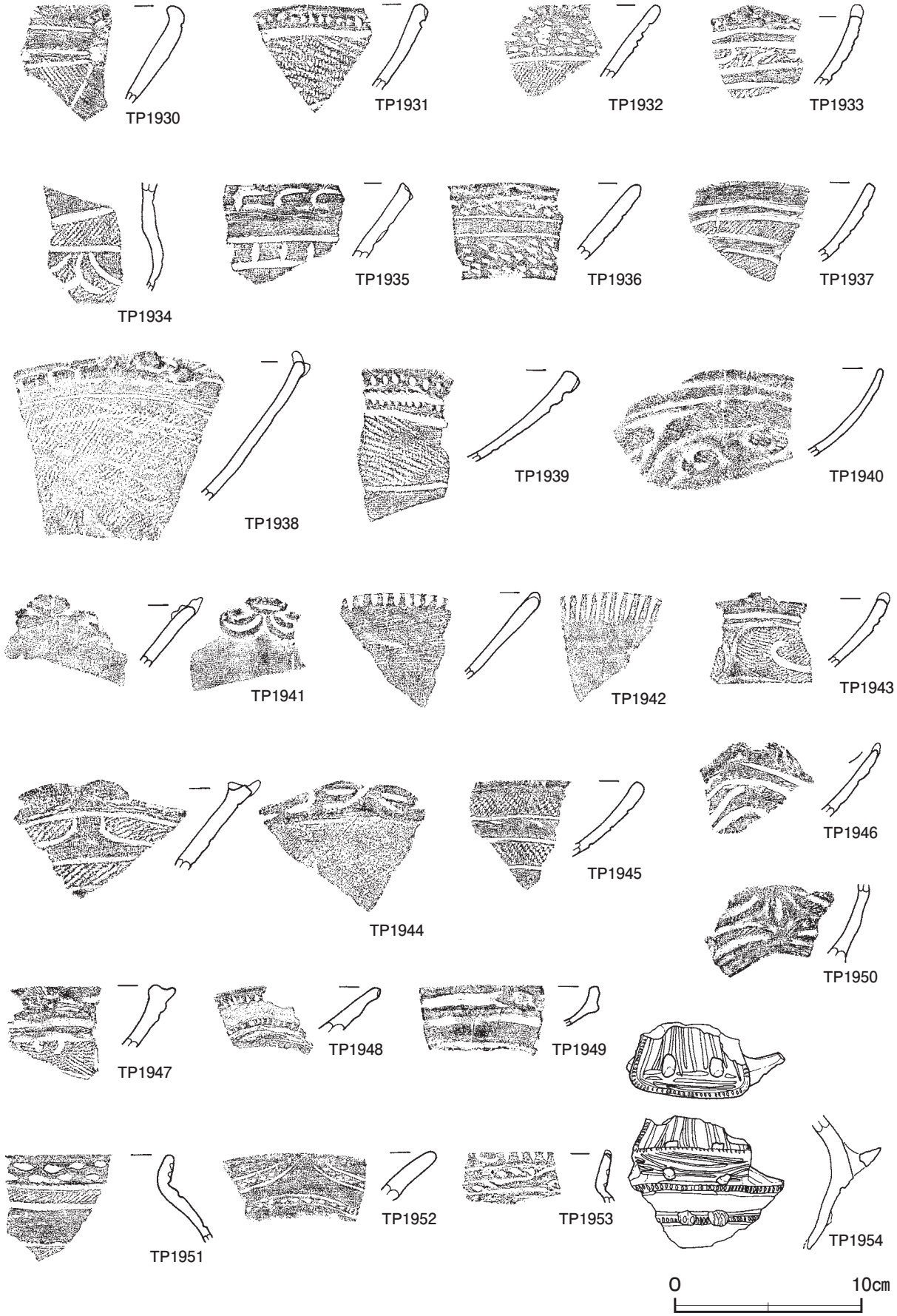


第 72 図　第 4 号包含層出土遺物実測図 ⑿



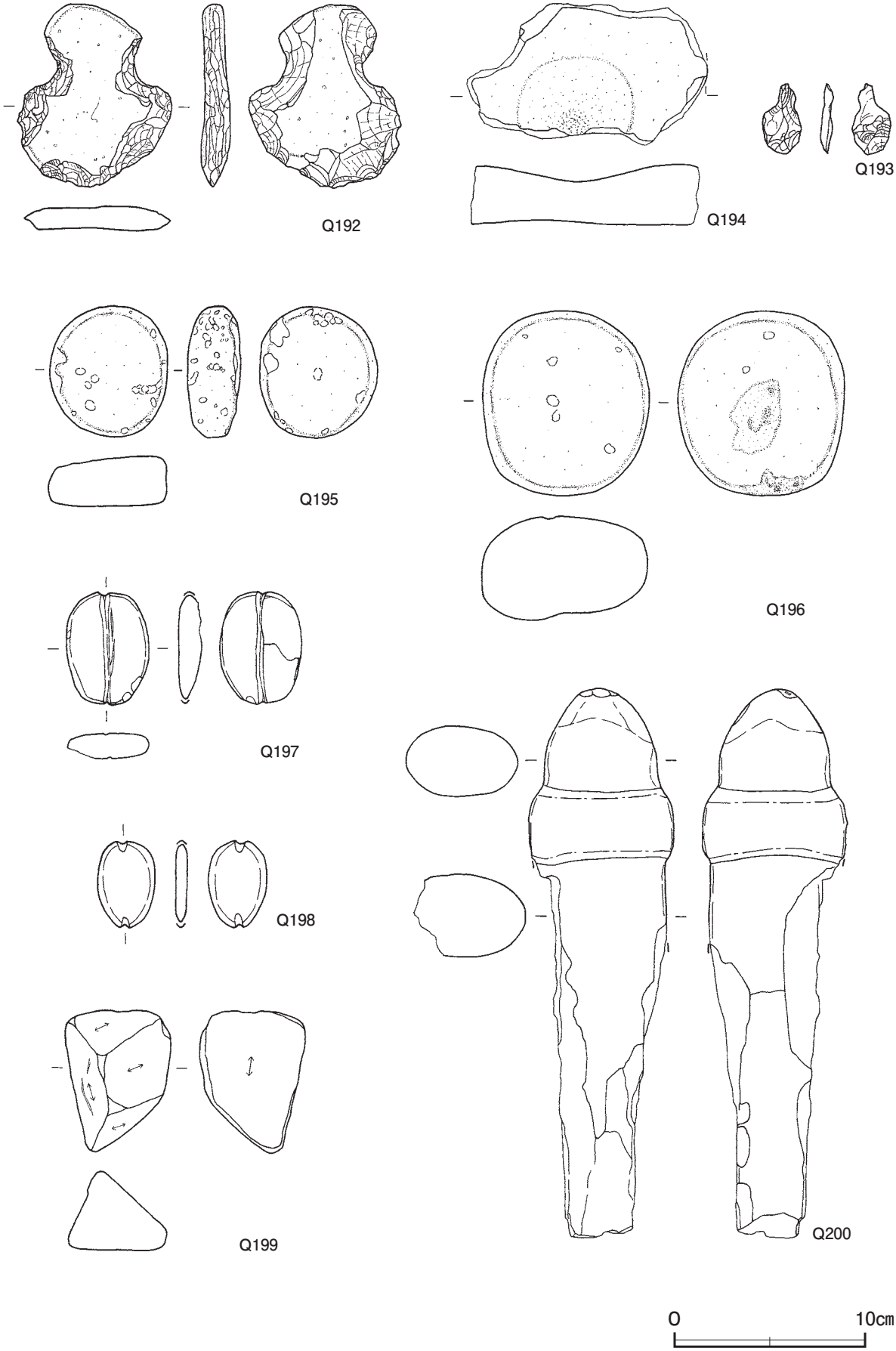
第73図　第４号包含層出土遺物実測図⑬

第 74 図　第 4 号包含層出土遺物実測図 ⑭

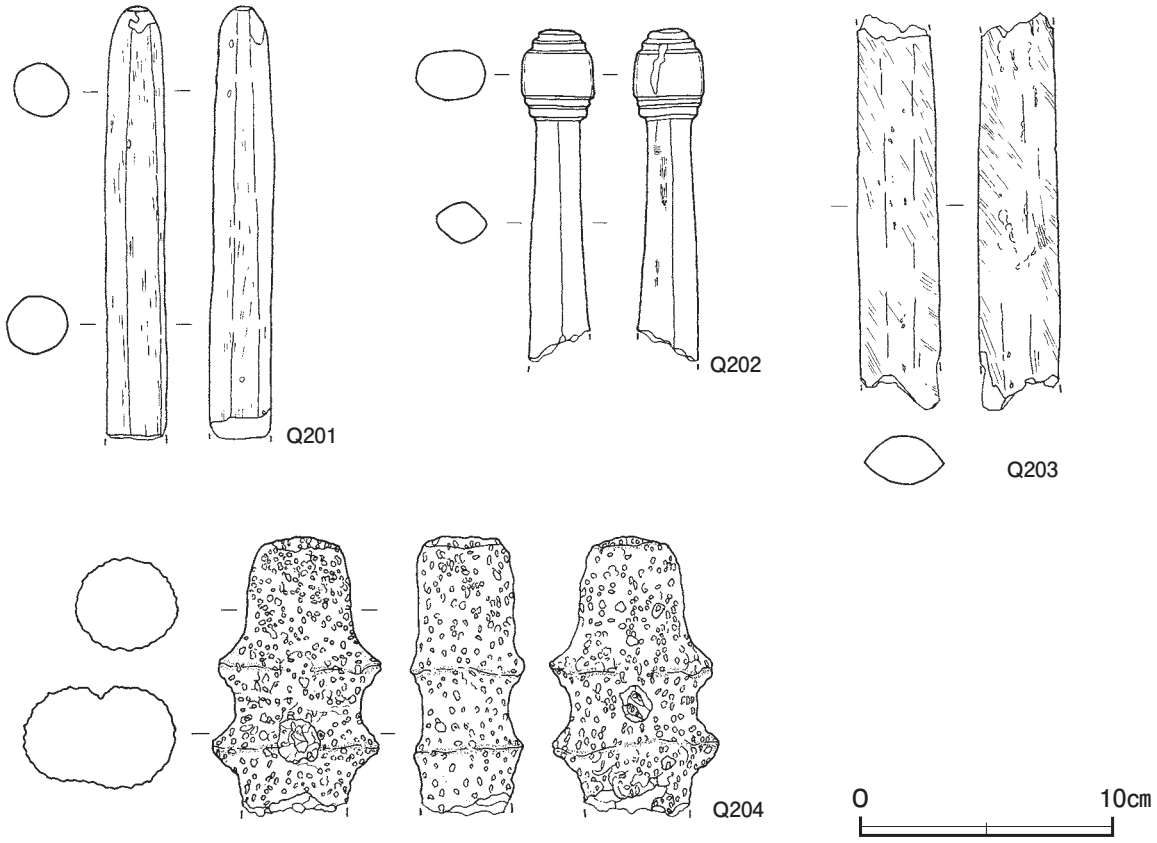


第75図　第４号包含層出土遺物実測図⑮

第 76 図　第 4 号包含層出土遺物実測図 ⑯



第77図　第4号包含層出土遺物実測図(17)



第 78 図　第 4 号包含層出土遺物実測図 ⒅

第 4 号包含層出土遺物観察表（第 61 ～ 78 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
387	縄文土器	深鉢	［17.8］	17.1	［8.6］	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口唇部ナデ→胴部中位横位の条線文→下端縦位のヘラ磨き　内面磨き	E 5 i0 区③ 暗褐色土中	40%　PL12
388	縄文土器	深鉢	［21.8］	（11.5）	－	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→口縁部平行沈線→斜位の条線文充填→胴部沈線で区画→条線文充填　内面磨き	E 5 j0 区② E 6 j1 区① 暗褐色土中	10%
389	縄文土器	深鉢	［30.0］	（6.5）	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部つまみ上げ後横位のナデ→胴部ナデ　内面磨き	E 6 i1 区① E 6 j1 区③ 暗褐色土中	10%
390	縄文土器	深鉢	［19.2］	（9.0）	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	口唇部ナデ→口縁部縄文 LR →胴部沈線文→縄文 LR 充填→無文部磨き　内面磨き	E 5 i0 区③ E 6 j1 区④ 暗褐色土中	10%
391	縄文土器	深鉢	［21.4］	（5.4）	－	長石・石英	褐灰	普通	口唇部ナデ→弧状の条線文　内面磨き	E 5 i0 区① 黒色土中	10%
392	縄文土器	深鉢	［33.0］	（9.5）	－	長石・石英・雲母	橙	普通	波状口縁　口唇部ナデ→縄文 LR →沈線→無文部磨き　口縁部内面２条の凹線　内面磨き	E 6 j1 区③ 黒色土中	15%
393	縄文土器	深鉢	－	（7.6）	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	胴部上位隆帯貼付→刻み目→胴部中位横位の沈線→縄文 RL 充填→無文部磨き　内面磨き	E 5 i0 区④ 黒色土中	10%
394	縄文土器	深鉢	－	（11.1）	－	長石・石英	にぶい赤褐	普通	紐線文→胴部上位沈線文・中位縄文 LR →横位の沈線→渦巻状の沈線文　内面ナデ	E 6 j1 区① E 6 j1 区③ 暗褐色土中	10%
395	縄文土器	深鉢	－	（6.5）	－	長石・石英	橙	普通	横位の粗い条線　内面ナデ	F 6 a1 区① 黒色土中	10%
396	縄文土器	深鉢	－	（6.3）	－	長石・石英	橙	普通	波状口縁頂部突起　中央部穿孔　左右及び上方からの刺突痕　把手部分３条の沈線	E 5 i0 区② 暗褐色土中	5 %
397	縄文土器	深鉢	－	（3.7）	－	長石・赤色粒子	橙	普通	波状口縁頂部加飾部分　貼瘤後刻み目　内面ナデ	B トレンチ 黒色土中	5 %
398	縄文土器	深鉢	－	（5.0）	4.4	長石・石英	にぶい褐	普通	体部下端弧状の条線文　内面ヘラナデ	E 5 i0 区③ 暗褐色土中	10%
399	縄文土器	深鉢	－	（2.5）	4.6	長石・石英	灰褐	普通	縄文 RL →沈線で区画→無文部磨き　底面隅丸長方形に整形→四隅に瘤状の脚貼付	F 5 e8 区② 覆土中	20%
400	縄文土器	深鉢	－	（2.9）	［4.2］	長石・石英・赤色粒子	浅黄橙	普通	外面下端縄文 RL →底部外面網代痕　内面ナデ	黒色土中	5 %
401	縄文土器	深鉢	－	（2.0）	［6.2］	長石・石英・雲母	赤褐灰	普通	ナデ調整　底部円盤状	E 6 j1 区④ 黒色土中	15%
402	縄文土器	深鉢	－	（5.5）	8.8	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	胴部下端縦位のヘラ磨き　内面ナデ	F 5 e8 区① 黒色土中	20%
403	縄文土器	深鉢	－	（4.5）	8.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	胴部下端縦位のヘラ削り 内面ナデ，底部木葉痕	E 5 i0 区② 暗褐色土中	20%
404	縄文土器	深鉢	－	（7.2）	7.4	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	外面磨滅顕著　底部外面網代痕　内面ヘラナデ	E 6 j2 区④ 暗褐色土中	10%
405	縄文土器	深鉢	－	（7.0）	4.0	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	胴部下端ヘラ削り　内面ヘラナデ	E 5 i9 区② 黒色土中	20%
406	縄文土器	深鉢	－	（6.4）	5.0	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	胴部下端ヘラ磨き→内面ナデ	F 5 c9 区③ 黒色土中	20%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
407	縄文土器	深鉢	−	(6.3)	6.4	長石・石英	橙	普通	器面磨滅顕著　外・内面ナデ	F 5 g7 区③ 覆土中	20%
408	縄文土器	深鉢	−	(7.5)	9.6	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	外面磨滅顕著　内面ヘラナデ	H トレンチ 暗褐色土中	20%
409	縄文土器	深鉢	−	(6.4)	6.8	長石・赤色粒子	浅黄橙	普通	胴部下端縦位のヘラ磨き　底部外面網代痕　内面ナデ	F 5 b9 区④ 黒色土中	20%
410	縄文土器	深鉢	−	(5.9)	[8.2]	長石・石英	にぶい橙	普通	外面下端斜位のヘラ削り　底部外面網代痕　内面ヘラナデ	E 5 j0 区② 黒色土中	10%
411	縄文土器	深鉢	−	(4.2)	5.8	長石・石英	にぶい橙	普通	外面ナデ　内面ヘラナデ	E 6 j1 区④ 黒色土中	10%
412	縄文土器	深鉢	−	(4.3)	4.0	長石・石英	にぶい橙	普通	外・内面磨滅顕著	F 5 f7 区④	10%
413	縄文土器	深鉢	−	(5.3)	6.8	長石・石英・赤色粒子	褐灰	普通	外面下端斜位のヘラ削り　底部外面網代痕　内面ナデ	B トレンチ 黒色土中	10%
414	縄文土器	深鉢	−	(3.0)	−	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	波状口縁頂部の突起部分　ナデ調整　上方に向かってラッパ状に開く	E 5 j0 区④ 黒色土中	5 %
415	縄文土器	浅鉢	[14.7]	6.4	−	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	外・内面ナデ	E 5 j9 区① 黒色土中	40%　PL12
416	縄文土器	浅鉢	[14.6]	6.0	−	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口唇部ナデ→口縁部２条の平行沈線→縄文 RL →沈線文→無文部磨き　内面磨き	F 5 e8 区④ 黒褐色土中	30%　PL12
417	縄文土器	浅鉢	[19.2]	(5.7)	−	長石・石英	にぶい黄橙	普通	外面磨滅顕著　沈線文　内面ナデ後沈線	E 5 h0 区③ 黒色土中	15%
418	縄文土器	浅鉢	−	(5.7)	−	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	縄文 LR →沈線文→無文部磨き　内面ナデ	試掘トレンチ 黒色土中	10%
419	縄文土器	台付鉢	−	(9.7)	−	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	胴部沈線文で区画→縄文 LR 充填　内面磨き	E 6 i1 区① 暗褐色土中	10%
420	縄文土器	台付鉢	−	(5.1)	−	長石・石英	浅黄橙	普通	鉢部下位横位の磨き　内面磨き	E 5 i0 区① 黒褐色土中	20%
421	縄文土器	台付土器	−	(4.7)	−	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	脚部　ナデ調整　器面磨滅顕著	B トレンチ 黒色土中	20%
422	縄文土器	台付土器	−	(4.8)	[9.0]	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	横位の沈線→縄文 LR 充填→無文部磨き　内面ナデ	E 6 j1 区① 暗褐色土中	10%
423	縄文土器	台付土器	−	(3.4)	−	長石・石英	にぶい褐	普通	脚部　脚部四つ足〃ナデ調整後横位の沈線を巡らす	F 5 f7 区② 黒色土中	15%　PL13
424	縄文土器	異形台付土器	−	(5.5)	−	長石・石英	にぶい橙	普通	胴部突起貼付→縄文 RL →沈線で区画　内面ナデ	E 6 j1 区③ 黒色土中	20%
425	縄文土器	壺	4.8	(4.8)	−	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口唇部ナデ→頸部縦位の磨き　内面ナデ	E 6 j1 区① 暗褐色土中	20%　PL13
426	縄文土器	壺	[8.5]	(4.0)	−	長石・石英	橙	普通	口縁部折り返し　外・内面ナデ	B トレンチ 黒色土中	15%
427	縄文土器	壺	4.6	(5.6)	−	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→隆帯で区画後ナデ調整→隆帯下及び無文部沈線文　内面ナデ	E 5 j0 区② 暗褐色土中	30%　PL13
428	縄文土器	壺	[8.4]	(3.9)	−	長石・石英	黒褐	普通	口唇部突起貼付→外・内面ナデ調整	E 5 j0 区② 黒色土中	10%
429	縄文土器	注口土器	[9.2]	(8.7)	−	長石・石英	黒褐	普通	口縁部縄文 LR →隆帯で区画後刻み目→貼瘤後刻み目→隆帯下沈線　口縁部に穿孔１か所	E 5 i9 区④ 黒褐色土中	30%　PL13
430	縄文土器	注口土器	−	(2.9)	−	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	注口部貼付後ナデ調整→沈線文→列点文	E 5 i0 区② 黒褐色土中	10%
431	縄文土器	注口土器	−	(4.3)	−	長石・石英・雲母	褐灰 明赤褐	普通	貼瘤→隆帯刻み目→隆帯下沈線→無文部磨き　内面ナデ	F 5 d9 区④ 黒褐色土中	5 %　PL13
432	縄文土器	注口土器	−	(3.4)	−	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	注口部分剥離　ナデ調整	E 5 j0 区③ 黒褐色土中	5 %
433	縄文土器	釣手土器	[4.4]	(5.2)	−	長石・石英	にぶい橙	普通	アーチ状の釣手部分　ナデ調整→刻み目　頂部容器状　穿孔２か所	F 5 e8 区① 黒褐色土中	30%　PL12
434	縄文土器	深鉢	−	(3.6)	−	長石・石英	橙	普通	把手部分　ナデ調整	F 5 b9 区② 暗褐色土中	5 %
435	縄文土器	深鉢	−	4.6	−	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	波状口縁把手部　ナデ調整　上面に人面風の刻み文	F 5 c9 区② 黒色土中	10%
436	縄文土器	ミニチュア土器	[3.8]	1.5	2.2	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	外・内面ナデ調整	E 6 j1 区② 黒色土中	70%
437	縄文土器	手捏土器	3.7	2.8	−	長石	浅黄橙	普通	外面指頭痕　内面ナデ	E 6 j1 区② 黒色土中	100%　PL13

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP1689	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	緩やかな波状口縁　口唇部ナデ→頂部貼瘤→縄文 LR　内面ナデ	E 6 i1 区① 暗褐色土中	
TP1690	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口唇部ナデ→口縁部紐線文→外面網目状撚糸文　内面ヘラナデ	E 6 i1 区④ 暗褐色土中	
TP1691	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	緩やかな波状口縁　口唇部ナデ→口縁部紐線文→紐線文下二条の平行沈線→縄文 RL　内面磨き	F 5 b9 区③ 暗褐色土中	
TP1692	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰褐 橙	普通	口唇部ナデ→縄文 RL →隆帯下沈線→無文部磨き　内面磨き	F 5 c9 区② 黒色土中	
TP1693	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→口縁部押引文→縄文 RL →横位の沈線→無文部磨き　内面磨き	F 5 c0 区① 暗褐色土中	
TP1694	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	外面横位のヘラナデ→口唇部ナデ　内面磨き	F 5 b9 区④ 黒色土中	
TP1695	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黒褐	普通	緩やかな波状口縁　口唇部ナデ→口縁部刻み目→胴部斜位の条線文→無文部磨き　内面磨き	F 5 c9 区① 黒色土中	
TP1696	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→口縁部紐線文→縄文 LR →条線紋	F 5 b0 区④ 暗褐色土中	
TP1697	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	褐	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →口縁部横位の沈線　胴部入り組み文→無文部磨き　内面磨き	E 5 i0 区④ 暗褐色土中	
TP1698	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰褐	普通	口唇部ナデ後突起貼付→弧状の条線文　内面ナデ	F 5 g7 区④ 覆土中	
TP1699	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒褐	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →胴部上位横位のクランク状沈線文	E 6 j1 区③ 暗褐色土中	
TP1700	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	胴部横位の沈線で区画→口縁部列点文→縄文 RL →無文部磨き	F 5 a0 区② 黒色土中	
TP1701	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→胴部上位横位の沈線→口縁部刻み目　沈線間縄文 LR 充填→無文部磨き　内面磨き	E 5 j0 区② 黒色土中	
TP1702	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部紐線文→口唇部ナデ→胴部縦位のヘラナデ　内面ナデ	E 5 i0 区④ 黒色土中	

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1703	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→隆帯縄文 RL →隆帯下横位の沈線→無文部磨き　内面磨き	E 6 j1 区④ 暗褐色土中	
TP1704	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐灰	普通	口唇部ナデ→隆帯縄文 RL →貼瘤→隆帯下押引文→無文部磨き　内面磨き	F 5 d9 区④ 黒色土中	
TP1705	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	緩やかな波状口縁　口唇部ナデ→沈線で区画→縄文 LR 充填・列点文→無文部磨き　内面磨き	E 5 i0 区③ 黒色土中	
TP1706	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→格子目文（右下がり→左下がり）　内面ナデ	E 6 j1 区① 暗褐色土中	
TP1707	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口唇部ナデ→隆帯縄文 RL →貼瘤→無文部磨き→隆帯下押引文　内面磨き	F 5 d8 区② 黒色土中	
TP1708	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→口縁部縄文 RL →貼瘤→隆帯下沈線→無文部磨き　内面磨き	E 5 j0 区① 黒色土中	
TP1709	縄文土器	深鉢	長石・石英	赤褐	普通	口縁部折り返し後ナデ→外・内面ナデ	E 5 i0 区③ 暗褐色土中	
TP1710	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部貼瘤後半截竹管による穿孔 1 か所→縄文 LR →縦位の沈線→横位の沈線　内面ナデ	F 5 b9 区② 黒色土中	
TP1711	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →沈線で区画→無文部磨き　内面磨き	F 5 c9 区① 黒色土中	
TP1712	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	隆帯で区画→隆帯縄文 RL →貼瘤→隆帯下沈線→無文部磨き　内面磨き	E 5 j0 区② 黒色土中	
TP1713	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→半截竹管による沈線で区画→無文部磨き　内面磨き	F 5 b0 区④ 暗褐色土中	
TP1714	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→貼瘤→縄文 LR →横位の沈線で区画→無文部磨き　内面磨き	E 5 j0 区② 黒色土中	
TP1715	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙 赤灰	普通	隆帯で区画→貼瘤→刻み目　縄文 RL →隆帯下沈線	E 5 j0 区① 黒色土中	
TP1716	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口唇部ナデ→横位の沈線→縄文 LR →斜位の刻み目→無文部磨き　内面磨き	E 6 j1 区④ 暗褐色土中	
TP1717	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・角閃石・赤色粒子	橙	普通	波状口縁頂部　貼瘤→刻み目→沈線→無文部磨き　内面磨き	F 5 d8 区③ 黒色土中	
TP1718	縄文土器	深鉢	長石・石英・角閃石・赤色粒子	橙	普通	波状口縁頂部　貼瘤→刻み目→沈線→縄文 RL 充填　内面磨き	E 5 j0 区② 黒色土中	
TP1719	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙 にぶい橙	普通	口唇部ナデ→貼瘤→沈線→無文部磨き　内面磨き	F 5 e8 区① 黒色土中	
TP1720	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	波状口縁頂部　隆帯押圧文→無文部磨き　内面磨き	F 5 e7 区② 黒色土中	
TP1721	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	波状口縁頂部→沈線による渦巻文→穿孔 1 か所　内面磨き	F 5 a0 区① 黒色土中	
TP1722	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	貼瘤→刻み目→横位の条線　内面磨き	E 5 j9 区② 黒色土中	
TP1723	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	緩やかな波状口縁　隆帯縄文 RL →貼瘤→隆帯下沈線→無文部磨き　内面磨き	E 5 j9 区② 黒色土中	
TP1724	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→隆帯縄文→貼瘤→無文部磨き　内面磨き	F 5 f8 区① 黒色土中	
TP1725	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	縄文→紐線文　内面ナデ	F 5 f7 区② 黒色土中	
TP1726	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→外面削り後ナデ　内面ナデ	F 5 d9 区④ 黒色土中	
TP1727	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→隆帯縄文 RL →隆帯下沈線→無文部磨き　内面磨き	F 5 e8 区④ 黒色土中	
TP1728	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	浅黄橙	普通	口唇部ナデ→弧状の条線文　内面磨き	F 5 e8 区④ 黒色土中	
TP1729	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部くの字に外反　口唇部ナデ→口縁部 2 条の列点文　内面ナデ	F 5 d9 区④ 黒色土中	
TP1730	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→弧状の条線文　内面磨き	F 5 e8 区② 暗褐色土中	
TP1731	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→口縁部縄文 RL →貼瘤→隆帯下沈線→列点文→無文部磨き　内面ナデ	黒色土中	
TP1732	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	縄文 LR →横位の沈線→横位の波状沈線　内面ナデ	A トレンチ 黒色土中	
TP1733	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	口唇部ナデ→口縁部紐線文→斜位の条線　内面ナデ	I トレンチ 黒色土中	
TP1734	縄文土器	深鉢	長石・石英	浅黄橙	普通	口唇部ナデ→口縁部・胴部紐線文→縄文→横位の沈線→器面磨滅顕著	I トレンチ 黒色土中	
TP1735	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→横位の条線文　内面ナデ	I トレンチ 黒色土中	
TP1736	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部ナデ→縄文→横位の条線　内面ナデ	B トレンチ 黒色土中	
TP1737	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙 にぶい橙	普通	口唇部ナデ→弧状の条線文　内面磨き	B トレンチ 黒色土中	
TP1738	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部折り返し後ナデ→紐線文→沈線→無文部磨き　内面磨き	B トレンチ 黒色土中	
TP1739	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	口唇部ナデ→斜位の条線文　内面磨き	A トレンチ 黒色土中	
TP1740	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口唇部ナデ→口縁部紐線文→横位の条線文　内面磨き	A トレンチ 黒色土中	
TP1741	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →半截竹管による平行沈線で区画　内面ナデ	F 6 a1 区① 黒色土中	
TP1742	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒褐	普通	口唇部ナデ→縄文 RL →横位の平行沈線→入組文→無文部磨き　内面磨き	A トレンチ 黒色土中	
TP1743	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →沈線→無文部磨き　内面磨き	F 6 a1 区① 黒色土中	
TP1744	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部横位の沈線→胴部縦位の平行沈線で区画→斜位の条線充填→口唇部・無文部磨き　内面磨き	B トレンチ 黒色土中	
TP1745	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→口縁部紐線文→無文部磨き　内面磨き	A トレンチ 黒色土中	
TP1746	縄文土器	深鉢	長石・石英・角閃石	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→口縁部横位の沈線→刻み目→胴部沈線で区画→条線文充填→無文部磨き　内面磨き	黒色土中	
TP1747	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	隆帯縄文 RL →貼瘤→口唇部一部刻み目→隆帯下沈線→無文部磨き　内面磨き	B トレンチ 黒色土中	
TP1748	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→縄文→沈線で区画→無文部磨き　内面ナデ	F 5 e1 区① 黒色土中	
TP1749	縄文土器	深鉢	長石・石英	赤褐	普通	口唇部及び口縁部ナデ→胴部ヘラナデ　内面ナデ	E 5 j0 区② 黒色土中	

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1750	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口唇部ナデ後貼瘤→口縁部紐線文→縄文 RL →斜位の条線 口縁部内面凹線　内面ナデ	B トレンチ 黒色土中	
TP1751	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→縄文 RL →横位の沈線で区画→列点文　無文部磨き　内面磨き	B トレンチ 黒色土中	
TP1752	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→口縁部紐線文→胴部ヘラナデ　内面ナデ	F 5 e1 区① 黒色土中	
TP1753	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→沈線で区画→細密な条線文充填　内面ナデ	B トレンチ 黒色土中	
TP1754	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→隆帯縄文 RL →隆帯下刻み目→無文部磨き 内面磨き	F 5 c9 区① 黒色土中	
TP1755	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	波状口縁　口唇部ナデ→縄文 LR →沈線で区画→無文部磨き	黒色土中	
TP1756	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	波状口縁頂部　貼瘤後刻み目→縄文 RL　内面磨き	B トレンチ 黒色土中	
TP1757	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→横位の沈線→細密な沈線文充填→無文部磨き 内面ナデ	B トレンチ 黒色土中	
TP1758	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →沈線・三叉文→無文部磨き　内面磨き	E 5 i0 区④ 黒色土中	
TP1759	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→隆帯縄文 LR →隆帯下沈線→無文部磨き　内面ナデ	B トレンチ 黒色土中	
TP1760	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→沈線　口縁部列点文→無文部磨き　内面ナデ	F 5 e8 区① 黒色土中	
TP1761	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部・内面磨き	A トレンチ 黒色土中	
TP1762	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	外面ヘラナデ→縦位・横位の刺突文　内面磨き	A トレンチ 黒色土中	
TP1763	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	普通	口唇部ナデ→隆帯縄文 RL →隆帯下沈線→無文部磨き　内面ナデ	F 6 a1 区① 黒色土中	
TP1764	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐 褐灰	普通	口唇部ナデ→横位の沈線→斜位の細密な沈線充填	A トレンチ 黒色土中	
TP1765	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐灰	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →横位の沈線→無文部磨き　内面磨き→穿孔 1 か所	E 5 j0 区② 黒色土中	
TP1766	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口唇部ナデ→口縁部紐線文→横位の条線文　内面磨き	E 6 j1 区② 黒色土中	
TP1767	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部内湾　胴部上位縄文 LR →沈線→口縁部・無文部磨き　内面磨き	黒色土中	
TP1768	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	褐灰	普通	口唇部ナデ→貼瘤後刻み目→口縁部縄文 RL →隆帯下沈線→無文部磨き　内面磨き	B トレンチ 黒色土中	
TP1769	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	口縁部外反　口唇部ナデ→貼瘤→横位の沈線　列点文　内面ナデ	F 5 a0 区① 黒色土中	
TP1770	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→横位の沈線→口縁部矢羽状の条線文　内面磨き	A トレンチ 黒色土中	
TP1771	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→口縁部紐線文→横位の条線文→縦位の沈線→無文部磨き　内面磨き	F 5 a0 区① 黒色土中	
TP1772	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部貼瘤→沈線で区画→細密な条線充填→無文部磨き 内面磨き	B トレンチ 黒色土中	
TP1773	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	縄文 LR →紐線文→口縁部・胴部半截竹管による沈線　内面磨き	B トレンチ 黒色土中	
TP1774	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口唇部ナデ→隆帯縄文 LR 充填→隆帯下沈線→無文部磨き 内面磨き	E 5 i0 区④ 黒色土中	
TP1775	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部ナデ→沈線→口縁部縄文 LR →無文部磨き　口縁部内面磨き	E 5 i0 区④ 黒色土中	
TP1776	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→貼瘤→隆帯縄文 RL →隆帯下沈線→無文部磨き　内面ナデ	E 5 j0 区① 黒色土中	PL17
TP1777	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外反　折り返し→縄文 LR →沈線→無文部磨き　内面ナデ	E 6 j1 区① 黒色土中	
TP1778	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口唇部ナデ→貼瘤→縄文 LR →横位の沈線→無文部磨き口縁部内面凹線　内面磨き	E 5 i0 区④ 黒色土中	
TP1779	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口唇部ナデ→斜位の条線文　内面磨き	F 5 b9 区③ 黒色土中	
TP1780	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→弧状の条線文　内面ナデ	E 5 j0 区① 黒色土中	
TP1781	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→縄文→紐線文→横位の沈線　内面ナデ	E 5 j0 区② 黒色土中	
TP1782	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →横位の沈線→無文部磨き　内面ナデ	E 5 j0 区① 黒色土中	
TP1783	縄文土器	深鉢	長石	浅黄橙	普通	波状口縁　隆帯縄文 RL・刻み目→貼瘤→隆帯下沈線→無文部磨き　内面ナデ	F 5 b0 区④ 黒色土中	
TP1784	縄文土器	深鉢	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→紐線文→縦位の沈線→横位の条線→無文部磨き　内面ナデ	E 5 i0 区③ 黒色土中	
TP1785	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	隆帯縄文 LR →沈線間磨き→口縁部内面凹線　内面ナデ	E 6 j1 区① 黒色土中	
TP1786	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→弧状の条線文　内面ナデ	E 5 j9 区① 黒色土中	
TP1787	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	縄文 LR →入組三叉文　内面磨き	E 5 i0 区③ 黒色土中	
TP1788	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→外面斜位の条線文　内面ナデ	F 5 b9 区③ 黒色土中	
TP1789	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部ナデ後貼瘤→沈線文　内面ナデ	E 5 j0 区② 黒色土中	
TP1790	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→口縁部紐線文→縦位の沈線で区画→横位の条線文充填→無文部磨き　内面ナデ	E 5 i0 区④ 黒色土中	
TP1791	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙 黒褐	普通	口唇部ナデ→縄文 RL →沈線文　内面ナデ	E 6 j1 区② 黒色土中	
TP1792	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐灰	普通	口唇部ナデ→横位の沈線→矢羽状の細密な条線文充填→無文部磨き　内面磨き	E 5 i9 区④ 黒色土中	
TP1793	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口唇部ナデ→縄文 RL →沈線で区画→無文部磨き　内面ナデ	E 6 j1 区① 黒色土中	
TP1794	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部ナデ→口縁部一部刻み目→沈線で区画→細密な条線文充填　内面磨き	E 5 i0 区③ 黒色土中	
TP1795	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒褐	普通	緩やかな波状口縁　口唇部ナデ→隆帯縄文 RL →貼瘤→隆帯下沈線→無文部磨き　内面磨き	F 5 a0 区④ 黒色土中	
TP1796	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口唇部小波状に押圧→沈線で区画→細密な条線文→無文部磨き　内面ナデ	E 6 j1 区① 黒色土中	

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1797	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部刻み目→細密な沈線・刻み目→沈線→無文部磨き　内面ナデ	E 5 j0 区① 黒色土中	
TP1798	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→突起貼付→刻み目　内面ナデ	F 6 a1 区② 黒色土中	
TP1799	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口唇部ナデ→横位の沈線で区画→口縁部縦位の刻み目　縄文 RL →沈線文→無文部磨き　内面ナデ	E 6 i1 区① 黒色土中	
TP1800	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→口縁部紐線文→縄文→弧状の条線文→半截竹管による縦位の沈線　内面ナデ	E 6 i1 区① 黒色土中	
TP1801	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	灰褐	普通	口唇部ナデ→貼瘤→隆帯刻み目→隆帯下沈線→無文部磨き　内面磨き	E 5 i0 区③ 黒色土中	
TP1802	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →口縁部紐線文→横位の沈線→縦位の沈線　口縁部内面凹線　内面ナデ	E 5 i0 区② 黒色土中	
TP1803	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	灰褐 明赤褐	普通	口唇部ナデ→口縁部横位の沈線→刻み目充填→胴部縦位の条線　内面磨き	E 5 j0 区② 黒色土中	
TP1804	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	口唇部ナデ→隆帯縄文 RL →隆帯下沈線・刻み目→無文部磨き　内面磨き	E 5 i0 区③ 黒色土中	
TP1805	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口唇部ナデ→紐線文→縦位の沈線→横位の沈線→無文部磨き　内面ナデ	F 5 a0 区② 黒色土中	
TP1806	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	普通	口唇部ナデ→貼瘤→沈線文　内面ナデ	F 5 c9 区① 黒色土中	
TP1807	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	口唇部ナデ→口縁部縄文 RL →隆帯下沈線→無文部磨き　内面ナデ	E 5 j0 区② 黒色土中	
TP1808	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →沈線文→無文部磨き　内面ナデ	E 5 i0 区③ 黒色土中	
TP1809	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口唇部ナデ→横位の沈線→撚糸文→列点文　内面磨き	E 5 i0 区② 黒色土中	
TP1810	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐灰	普通	口唇部ナデ→矢羽状の条線文→列点文　内面磨き	E 5 j9 区② 黒色土中	
TP1811	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰褐	普通	口唇部ナデ→貼瘤→隆帯縄文 RL →隆帯下沈線→無文部磨き　内面磨き	E 5 j9 区② 黒色土中	
TP1812	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	粗い縄文→口縁部紐線文→口縁部内面凹線　内面磨き	F 5 a0 区① 黒色土中	
TP1813	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→貼瘤後刻み目→口縁部縄文 RL →横位の沈線（瘤下貫通）　隆帯刻み目　内面磨き	F 5 b0 区① 黒色土中	
TP1814	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	普通	口唇部ナデ→半截竹管による沈線文　内面磨き	F 5 a0 区① 黒色土中	
TP1815	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→横位の条線→口縁部・胴部紐線文後刻み目→山形の平行沈線　内面磨き	E 6 j1 区③ 黒色土中	
TP1816	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい赤褐	普通	波状口縁頂部　口唇部ナデ後沈線→突起貼付後内面に沈線→縄文 LR →山形及び入組文　内面磨き	E 6 j1 区④ 黒色土中	PL17
TP1817	縄文土器	深鉢	長石・石英	淡橙	普通	口唇部ナデ→口縁部縄文 LR →下位に列点文・沈線→無文部磨き	E 5 i0 区① 黒色土中	
TP1818	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→弧状の条線文→縦位及び斜位の平行沈線→紐線文　内面ナデ	覆土中	
TP1819	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	波状口縁　口唇部ナデ→口縁部縄文 RL →貼瘤後刻み目→隆帯下沈線→無文部刻み目　内面磨き	E 5 h0 区③ 黒色土中	
TP1820	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ後一部刻み目→沈線で区画→細密な矢羽状の条線文充填→無文部磨き→一部縦位の刻み目　内面磨き	E 5 h0 区④ 黒色土中	PL17
TP1821	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	灰褐	普通	波状口縁　口唇部ナデ→口縁部縄文 RL →隆帯刻み目→貼瘤後刻み目→隆帯下沈線→下位斜位の条線　内面磨き	E 5 i0 区② 黒色土中	
TP1822	縄文土器	深鉢	長石・石英	赤褐	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →沈線で区画→無文部磨き　内面磨き	E 5 i0 区① 黒色土中	
TP1823	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	橙	普通	波状口縁頂部　口唇部ナデ→縄文 LR →頂部紐線貼付後内面に沈線→入組文→無文部磨き　内面磨き	E 6 j1 区④ 黒色土中	
TP1824	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	波状口縁　口唇部ナデ→隆帯刻み目→貼瘤→沈線文　内面磨き	E 6 i1 区③ 黒色土中	
TP1825	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	普通	２条の平行沈線→口縁部斜位の刻み目→沈線下矢羽状の条線文充填→沈線間磨き　内面磨き	E 5 i0 区② 黒色土中	
TP1826	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	沈線で区画→細密な条線文充填　内面ナデ	E 5 j0 区③ 黒色土中	
TP1827	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口唇部突起貼付後ナデ→口縁部貼瘤後ナデ→横位の沈線→矢羽状の条線文→列点文　内面磨き	E 5 j0 区③ 黒色土中	
TP1828	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口唇部ナデ後紐線文→縄文 LR　沈線文　内面ナデ	E 5 j0 区④ 黒色土中	PL17
TP1829	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰褐	普通	口唇部ナデ後突起貼付→口唇部貼瘤→斜位の条線→横位の沈線→刻み目　内面ナデ	F 5 e8 区③ 黒色土中	
TP1830	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	波状口縁　縄文 LR →沈線文　内面磨き	F 5 e8 区① 黒色土中	
TP1831	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→弧状の条線文　内面磨き	F 5 e8 区② 黒色土中	
TP1832	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口唇部ナデ→弧状の条線文→紐線文→平行沈線→沈線間磨き　内面磨き	E 5 h0 区④ 黒色土中	
TP1833	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	灰褐	普通	口唇部ナデ→弧状の条線文→口縁部紐線文　内面磨き	E 5 i0 区① 黒色土中	
TP1834	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ後突起貼付→口縁部及び隆帯縄文 RL →隆帯下沈線→無文部磨き　穿孔１か所　内面ナデ	F 5 e8 区④ 黒色土中	
TP1835	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	波状口縁　口唇部ナデ→口縁部縄文 RL →貼瘤→隆帯下列点文→無文部磨き　内面磨き	E 5 i9 区② 黒色土中	
TP1836	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	波状口縁頂部　口縁部縄文→沈線→無文部磨き　内面磨き	E 5 h0 区④ 黒色土中	
TP1837	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐灰	普通	口唇部ナデ後突起貼付→縄文 RL →横位の沈線→無文部磨き　内面ナデ	F 5 d9 区④ 黒色土中	
TP1838	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口唇部ナデ→縄文 RL →隆帯下沈線→無文部磨き　内面磨き	F 5 e8 区③ 黒色土中	
TP1839	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→口縁部及び隆帯縄文 LR →隆帯下沈線→無文部磨き　内面磨き	F 5 e8 区② 黒色土中	
TP1840	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→紐線文→弧状の条線文→斜位の沈線→磨き　内面ナデ	E 5 i0 区① 黒色土中	
TP1841	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	普通	波状口縁　口唇部ナデ→口縁部縄文 RL →貼瘤→隆帯刻み目→無文部磨き　内面磨き	E 6 j1 区③ 黒色土中	
TP1842	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	波状口縁　貼瘤→沈線文→無文部磨き　器面磨滅顕著	F 5 e8 区② 黒色土中	
TP1843	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ後一部刻み目→沈線で区画→条線紋充填→横位の沈線上に一部刻み目　内面ナデ	F 5 d9 区④ 黒色土中	

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1844	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口唇部ナデ後刻み目→隆帯刻み目→隆帯間磨き　内面磨き	F 5 e8 区③ 黒色土中	
TP1845	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口唇部突起貼付後刻み目→縄文 LR →沈線→無文部磨き 内面磨き	F 5 e8 区② 黒色土中	
TP1846	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部ナデ→粗い縄文→弧状の条線文→口縁部紐線文→縦位の平行沈線→沈線間磨き　内面磨き	F 5 d8 区③ 暗褐色土中	
TP1847	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→横位の紐線２条後縦位の紐線１条→横位の沈線　口縁部内面凹線　内面磨き	E 6 j1 区③ 暗褐色土中	
TP1848	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部ナデ→斜位の条線文→口縁部紐線文　内面磨き	F 5 b9 区③ 暗褐色土中	
TP1849	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部くの字に折り返し　口縁部ナデ→縄文 RL →横位の沈線→沈線間磨き　内面ナデ	F 5 b9 区③ 暗褐色土中	
TP1850	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	口唇部突起貼付後ナデ→口縁部横位・胴部斜位の沈線　内面ヘラナデ	F 5 e7 区② 暗褐色土中	
TP1851	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ後突起貼付→口縁部縄文 RL →胴部横位の沈線 内面ナデ	F 5 b9 区④ 暗褐色土中	
TP1852	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口唇部突起貼付後ナデ→貼瘤→隆帯刻み目→隆帯間磨き 内面磨き	E 6 i1 区③ 暗褐色土中	
TP1853	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部くの字に外反　口唇部ナデ→縄文 RL →沈線文→無文部磨き　内面ナデ	E 6 i1 区① 暗褐色土中	
TP1854	縄文土器	深鉢	長石・石英	浅黄橙	普通	波状口縁　口唇部ナデ→縄文 RL →貼瘤→隆帯下沈線→無文部磨き　内面磨き	E 6 i1 区③ 暗褐色土中	
TP1855	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→隆帯刻み目→隆帯下沈線→無紋部磨き→縦位の平行沈線　内面磨き	F 5 b9 区③ 暗褐色土中	
TP1856	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	波状口縁頂部　口唇部ナデ→貼瘤→口縁部縄文 RL →沈線→無文部磨き　内面磨き	F 5 d8 区③ 暗褐色土中	
TP1857	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口唇部ナデ後突起貼付→突起側面及び上面に沈線→口縁部縄文 RL →隆帯間磨き　内面磨き	E 6 j1 区③ 暗褐色土中	
TP1858	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	胴部縄文 LR →口縁部ナデ→隆帯列点文　口唇部中央に凹線　内面ナデ	E 6 j1 区② 暗褐色土中	
TP1859	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	普通	口唇部ナデ→縄文 RL →口縁部横位の沈線→胴部沈線文→無文部磨き　内面磨き	E 5 j0 区④ 暗褐色土中	
TP1860	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→貼瘤後刻み目→口縁部・隆帯縄文 RL →口縁部下位列点文→隆帯下沈線→無文部磨き　内面磨き	E 5 j0 区④ 暗褐色土中	
TP1861	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →口縁部横位の沈線　胴部上位三叉文　内面磨き	E 6 i1 区③ 暗褐色土中	
TP1862	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→口縁部紐線文→横位の条線　内面磨き	E 5 i8 区③ 暗褐色土中	
TP1863	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐	普通	口唇部ナデ後突起貼付→縄文 LR →口縁部下位横位の沈線→無文部磨き　内面ナデ	E 6 j1 区③ 暗褐色土中	
TP1864	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	波状口縁頂部　口唇部ナデ→口縁部縄文 RL →頂部突起貼付後沈線→隆帯刻み目→隆帯間磨き　内面磨き	E 6 i1 区① 暗褐色土中	
TP1865	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部ナデ→紐線文→紐線下沈線→無文部磨き　内面ナデ	E 6 i1 区③ 暗褐色土中	
TP1866	縄文土器	深鉢	長石・石英	明褐	普通	口縁部外反　口唇部ナデ→横位の沈線→斜位の細密な条線文充填　内面磨き	F 5 e7 区② 暗褐色土中	
TP1867	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →横位の平行沈線→区切り文　内面磨き	E 6 j1 区② 暗褐色土中	
TP1868	縄文土器	深鉢	長石・石英	浅黄橙	普通	全面ナデ調整　器面磨滅顕著	E 6 j1 区② 暗褐色土中	製塩土器 PL19
TP1869	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	全面ナデ調整	E 6 j1 区① 暗褐色土中	製塩土器 PL19
TP1870	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部くの字に内傾　口唇部ナデ→口縁部紐線文→弧状の条線文　内面ナデ	F 5 b0 区① 混礫暗褐色土中	
TP1871	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	波状口縁頂部　口唇部ナデ後外側に刻み目→縄文 LR　内面磨き	F 5 e8 区④ 混礫暗褐色土中	
TP1872	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→口縁部縄文 RL →口縁部下位列点文→隆帯刻み目→隆帯下沈線→無文部磨き　内面ナデ	F 5 b0 区① 混礫暗褐色土中	
TP1873	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口唇部ナデ→弧状の条線文→紐線文　内面磨き	F 5 f7 区② 黒色土中	
TP1874	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	波状口縁　口唇部ナデ→口縁部沈線後刻み目→胴部上位横位の沈線→縄文 RL 充填→無文部磨き　内面磨き	F 5 e8 区③ 黒色土中	
TP1875	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口唇部ナデ→隆帯縄文 RL →貼瘤→隆帯下沈線→隆帯間磨き　内面磨き	黒色土中	
TP1876	縄文土器	深鉢	長石・石英	浅黄橙	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →横位の沈線→無文部磨き　内面ナデ	F 5 f7 区② 黒色土中	
TP1877	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	明褐	普通	波状口縁頂部　口唇部ナデ→貼瘤→縄文→沈線文→無文部磨き　内面磨き	F 5 f6 区③ 黒色土中	
TP1878	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→縄文 RL →隆帯下沈線→無文部磨き　内面磨き	F 5 f7 区② 黒色土中	
TP1879	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐灰	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →口縁部紐線文→半截竹管による沈線文　口縁部内面凹線　内面磨き	黒色土中	
TP1880	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	普通	口唇部ナデ→粗い縄文→口縁部紐線文→横位の沈線　口縁部内面凹線　内面磨き	黒色土中	
TP1881	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部折り返し後ナデ→縄文 RL →口縁部下位刻み目→無文部磨き　内面磨き	F 5 f7 区① 黒色土中	
TP1882	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	波状口縁頂部　口唇部ナデ→縄文→三叉文・円形沈線文横位の沈線　内面磨き	F 5 e8 区① 黒色土中	
TP1883	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	波状口縁頂部　口唇部ナデ後頂部刻み目→縄文 RL →弧状の沈線文→無文部磨き　内面磨き	F 5 e8 区② 黒色土中	
TP1884	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口唇部ナデ→貼瘤→三叉文→口縁部縄文 RL　内面ナデ	F 5 f7 区① 黒色土中	
TP1885	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	内面複数条の平行沈線→口縁部刻み目　２条の列点文	F 5 g6 区① 第１層中	
TP1886	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	明赤褐	普通	波状口縁　口唇部ナデ→縄文 RL →隆帯下沈線→無文部磨き・斜位の条線　内面ナデ	F 5 e8 区② 黒色土中	
TP1887	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→弧状の条線文　内面磨き	黒色土中	
TP1888	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	波状口縁　口唇部ナデ→貼瘤後刻み目→口縁部・胴部縄文 RL →隆帯刻み目→隆帯間磨き　胴部沈線文　内面磨き	F 5 g6 区③ 覆土中	
TP1889	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・ 赤色粒子・細礫	橙	普通	波状口縁　器面磨滅顕著　口唇部ナデ→縄文 RL →貼瘤→沈線で区画→列点文　無文部磨き　内面磨き	F 5 f7 区④	
TP1890	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	灰褐	普通	隆帯貼付→刻み目→縄文 LR →横位の沈線　内面ナデ	E 5 i9 区② 黒色土中	

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1891	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒褐	普通	横位の平行沈線→沈線間工字文・列点文　内面磨き	E 6 j1 区② 黒色土中	
TP1892	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	橙	普通	隆帯で区画→貼瘤→刻み目→隆帯下沈線→無文部磨き　内面ナデ	F 5 e8 区① 黒色土中	
TP1893	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	紐線文→斜位の条線→沈線文→無文部磨き　内面ナデ	E 5 i0 区③ 黒色土中	
TP1894	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	縄文 RL →沈線で区画→無文部磨き→斜位の細密な刻み目 内面ナデ	A トレンチ 黒色土中	
TP1895	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	縄文 LR →半截竹管による沈線文　内面ナデ	E 6 h1 区④ 暗褐色土中	
TP1896	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	隆帯貼付後刻み目→縄文 LR →沈線　内面ナデ	A トレンチ 黒色土中	
TP1897	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰黄褐	普通	沈線で区画→細密な条線文・列点文充填→無文部磨き　内面磨き	F 5 a9 区③ 黒色土中	
TP1898	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	縄文 LR →沈線文→隆帯磨き　内面磨き	A トレンチ 黒色土中	
TP1899	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰褐	普通	縄文 LR →沈線文　内面磨き	E 5 i8 区③ 黒色土中	
TP1900	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰褐	普通	貼瘤→沈線文　内面磨き	E 5 i0 区③ 黒色土中	
TP1901	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	貼瘤→縄文 RL →沈線文→無文部磨き　内面ナデ	E 5 j9 区② 黒色土中	
TP1902	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部２条の列点文　胴部縄文 RL →平行沈線→無文部磨き　内面ナデ	F 5 a0 区③ 黒色土中	
TP1903	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	縄文 LR →横位の沈線→入組文や無文部磨き　内面磨き	覆土中	
TP1904	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒	普通	沈線で区画→唐草文　列点文　内面ナデ	E 5 i0 区② 黒色土中	
TP1905	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐灰	普通	縄文 LR →横位の沈線→沈線間列点文・区画文→無文部磨き　内面ヘラナデ	E 5 i0 区① 黒色土中	
TP1906	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰黄褐	普通	縄文 LR →半截竹管による沈線文（横位→弧状→縦位） 内面ナデ	E 6 j1 区④ 黒色土中	
TP1907	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	隆帯刻み目→隆帯間縄文 RL →隆帯下沈線→無文部磨き→貼瘤　内面磨き	覆土中	
TP1908	縄文土器	深鉢	長石	灰黄褐	普通	波状口縁　縄文 RL →沈線文→無文部磨き　内面ナデ	E 5 i0 区① 黒色土中	
TP1909	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	貼瘤後刻み目→唐草文・刻み目→無文部磨き　内面磨き	F 5 d9 区④ 黒色土中	
TP1910	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	縄文 LR →沈線文→器面磨滅顕著	F 5 b9 区① 黒色土中	
TP1911	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	隆帯縄文 RL →貼瘤→無文部磨き　内面磨き	F 5 e8 区② 黒色土中	
TP1912	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	普通	縦位の沈線→細密な矢羽状の条線文→横位の刻み目　内面ナデ	E 5 i0 区④ 暗褐色土中	
TP1913	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	縄文 LR →沈線文→無文部磨き　器面磨滅	E 6 j1 区④ 黒色土中	
TP1914	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	横位の平行沈線→沈線間列点文→下位縄文 LR →沈線文後磨き　内面磨き	E 5 h0 区④ 黒色土中	
TP1915	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	縄文 LR →入組文→無文部磨き　器面磨滅顕著	F 5 b9 区③ 暗褐色土中	
TP1916	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	褐灰	普通	波状口縁　隆帯下沈線→無文部磨き　器面磨滅	F 5 e8 区② 黒色土中	
TP1917	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	波状口縁　口唇部ナデ後中央に沈線→縄文→斜位及び渦巻状の沈線文→縦位の平行沈線後刻み目　竹管による穿孔	E 5 j9 区② 暗褐色土中	
TP1918	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	縄文 RL →貼瘤→沈線文→無文部磨き　内面ナデ	F 5 e8 区② 黒色土中	
TP1919	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	貼瘤→隆帯刻み目　縄文 RL →沈線文→無文部磨き→隆帯下押引文　内面磨き	F 5 g7 区④ 覆土中	
TP1920	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	深鉢把手部　把手貼付→穿孔１か所→沈線文　内面ナデ	F 5 f6 区④ 第１層中	
TP1921	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	ナデ後沈線文　内面ナデ	F 5 g6 区② 第１層中	
TP1922	縄文土器	鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	口唇部ナデ→横位の沈線→沈線間刻み目　内面磨き	B トレンチ 黒色土中	
TP1923	縄文土器	鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →口縁部３条の横位の沈線→無文部磨き　内面磨き	E 5 i0 区③ 黒色土中	
TP1924	縄文土器	鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	口唇部ナデ後磨き　口縁部有段や外面ヘラナデ　内面磨き	E 5 i9 区① 黒色土中	
TP1925	縄文土器	鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ後突起貼付→縄文 LR →横位の押引文・沈線→無文部磨き　口唇部中央に沈線　内面磨き	E 6 j1 区③ 黒色土中	
TP1926	縄文土器	鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	縄文 LR →横位の沈線→無文部磨き　内面磨き	A トレンチ 黒色土中	
TP1927	縄文土器	鉢	長石・石英	灰褐	普通	口唇部突起貼付・胴部貼瘤→縄文 LR →斜位の紐線文→三叉入組文→無文部磨き　口唇部中央に沈線　内面磨き	E 5 i0 区④ 黒色土中	PL17
TP1928	縄文土器	鉢	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部突起貼付→沈線文　穿孔３か所→胴部縄文 LR →斜位の条線→縦位の条線	E 6 j1 区② 暗褐色土中	
TP1929	縄文土器	鉢	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口唇部小波状　口唇部ナデ→縄文 LR →口縁部２条の平行沈線→沈線間列点文→胴部沈線文→無文部磨き　内面磨き	E 6 j1 区① 黒色土中	
TP1930	縄文土器	鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口唇部内湾　縄文 RL →沈線→無文部磨き　内面磨き	E 5 j0 区② 黒色土中	
TP1931	縄文土器	鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→縄文 RL →口縁部横位の沈線→刻み目　内面磨き	E 5 j0 区② 黒色土中	
TP1932	縄文土器	鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →横位の沈線　口縁部列点文　内面磨き	E 5 j0 区③ 黒色土中	
TP1933	縄文土器	鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部三角形に突出　粗い縄文→横位の沈線→無文部磨き 内面磨き	E 5 i0 区① 黒色土中	
TP1934	縄文土器	鉢	長石・石英	にぶい赤褐	普通	縄文 LR →沈線文→無文部磨き　内面磨き	F 5 g6 区① 第１層中	
TP1935	縄文土器	浅鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	口唇部ナデ後沈線→横位の平行沈線→沈線間刻み目　内面磨き	E 5 h0 区④ 黒色土中	
TP1936	縄文土器	浅鉢	長石・石英	橙	普通	横位の沈線　列点文　内面ナデ	F 5 a0 区③ 黒色土中	
TP1937	縄文土器	浅鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →横位の沈線→無文部磨き　内面磨き	E 5 i9 区③ 黒色土中	

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1938	縄文土器	浅鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐灰	普通	口唇部貼瘤→縄文 LR →横位の沈線　内面磨き	E 5 i0 区②暗褐色土中	
TP1939	縄文土器	浅鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ後刻み目→縄文 RL →口縁部・胴部横位の沈線→沈線上に一部刻み目　内面磨き	A トレンチ黒色土中	
TP1940	縄文土器	浅鉢	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口唇部ナデ→縄文 RL →口縁部横位の沈線・胴部三叉入組文　内面磨き	E 5 j0 区②黒色土中	PL17
TP1941	縄文土器	浅鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐灰	普通	口唇部及び口縁部内面貼瘤→外面ヘラナデ　内面ナデ	I トレンチ黒色土中	
TP1942	縄文土器	浅鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	外・内面ヘラナデ→口唇部外面からの刻み目	覆土中	
TP1943	縄文土器	浅鉢	長石・雲母	灰褐	普通	口唇部突起貼付後ナデ→縄文→口縁部横位の沈線→胴部沈線文→無文部磨き　内面磨き	E 5 i0 区④黒色土中	
TP1944	縄文土器	浅鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口唇部ナデ後突起貼付→突起内面沈線→縄文 LR →沈線で区画→無文部磨き　内面磨き	E 5 i0 区③黒色土中	PL17
TP1945	縄文土器	浅鉢	長石・石英	褐灰	普通	口唇部ナデ→縄文 RL →横位の沈線→無文部磨き　内面磨き	E 5 j9 区①黒色土中	
TP1946	縄文土器	浅鉢	長石・石英	暗褐	普通	波状口縁　頂部二瘤状に突出　口唇部ナデ→沈線文　内面磨き	覆土中	
TP1947	縄文土器	浅鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部突起貼付後ナデ→縄文→口縁部横位の沈線→胴部沈線文　内面磨き	覆土中	
TP1948	縄文土器	浅鉢	長石・石英	灰褐	普通	口唇部ナデ→隆帯刻み目→隆帯間磨き　内面磨き	F 6 a1 区②黒色土中	
TP1949	縄文土器	浅鉢	長石・石英・雲母	明褐灰	普通	口縁部真上に立ち上がる　口縁部中央に横位の凹線→一部凹線を入れずに沈線文　内面磨き	E 5 i0 区④黒色土中	PL17
TP1950	縄文土器	台付鉢ヵ	長石・石英	にぶい褐	普通	隆帯縄文 LR →無文部磨き　内面ナデ	E 6 i1 区③黒色土中	
TP1951	縄文土器	壺	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→口縁部２条の列点文　胴部上位縄文 LR →横位の沈線→無文部磨き　内面ナデ	E 5 i0 区②黒色土中	
TP1952	縄文土器	壺	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→口縁部平行沈線→沈線間列点文　内面ナデ	F 5 c0 区①黒色土中	
TP1953	縄文土器	壺	長石・石英	褐灰	普通	口唇部ナデ後一部刻み目→口縁部沈線→沈線間列点文　内面ナデ	E 5 i0 区②黒色土中	
TP1954	縄文土器	釣手土器	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口唇部釣手貼付→穿孔２か所　貼瘤→隆帯刻み目→隆帯下沈線→無文部磨き　内面磨き	E 5 i9 区④黒色土中	PL17

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	色調・胎土	特　　徴	出土位置	備　考
DP187	土玉	径 2.5	孔径 0.7	2.5	13.2	にぶい橙 長石・石英・雲母	ナデ調整　一方向からの穿孔	E 6 h1 区④黒色土中	PL20
DP188	土玉	径 2.7	孔径 0.5～0.6	2.8	20.9	褐灰 長石・石英	ナデ調整　一方向からの穿孔	E 6 j1 区②黒色土中	PL20
DP189	土錘	3.4	2.1	1.4	10.3	橙 長石・石英	ナデ調整　周囲に溝が全周	E 5 i0 区①黒色土中	PL22
DP190	耳飾り	径 [3.6]	孔径 [2.6]	1.2	(3.95)	にぶい橙 長石・石英	外・内面丁寧な磨き	E 6 j1 区①黒色土中	
DP191	耳飾り	径 [5.0]	孔径 [4.0]	1.8	(5.43)	にぶい赤褐 長石・石英	内面沈線文→外面丁寧な磨き→端部刻み目	E 5 i9 区④黒色土中	PL22
DP192	耳飾り	径 [7.0]	孔径 [5.8]	1.8	(3.18)	にぶい赤褐 長石・石英	内面沈線文→外・内面丁寧な磨き	A トレンチ黒色土中	
DP193	土版	(6.1)	(4.8)	(2.0)	(51.9)	にぶい橙 長石・石英	表・裏面ナデ調整→沈線文	F 5 e7 区②黒色土中	PL21
DP194	土版	(4.7)	(4.2)	1.2	(30.8)	灰褐 長石・石英	表・裏面ナデ調整→沈線文→沈線間刺突文充填	E 5 i0 区②黒色土中	PL21
DP195	土版	(5.0)	(3.1)	(2.4)	(27.7)	にぶい橙 長石・石英	表・裏面ナデ調整→沈線文→沈線間刺突文充填　側面に穿孔１か所	B トレンチ黒色土中	
DP196	土版	(5.1)	(4.5)	1.5	(39.6)	にぶい赤褐 長石・石英	表・裏面ナデ調整→沈線文	E 5 j9 区①黒色土中	PL21
DP197	土偶	(5.1)	(6.0)	(2.6)	(52.3)	橙 長石・石英	ミミズク土偶の胸部～腹部　ナデ調整　隆帯上・下刺突文で加飾	F 6 a1 区①黒色土中	PL20
DP198	土偶	(4.2)	(5.6)	(3.6)	(58.8)	橙 長石・石英	山形土偶の左足ヵ　削り後ナデ調整　足首部横位の条線	F 5 e8 区④黒色土中	PL21
DP199	土偶	(4.9)	(2.0)	(1.9)	(16.2)	灰褐 長石・石英	山形土偶の脚部ヵ　ナデ調整	F 5 a0 区③暗褐色土中	PL21
DP200	土偶	(4.6)	(2.9)	(1.7)	(22.2)	にぶい橙 長石・石英	ミミズク土偶の左足ヵ　縄文→沈線・刻み目で加飾	E 6 j1 区④黒色土中	PL21
DP201	土偶	(5.4)	(2.8)	(3.2)	(32.1)	にぶい褐 長石・石英	土偶の脚部ヵ　中空　外面ナデ調整	試掘トレンチ覆土中	
DP202	円盤	[7.9]	(5.5)	(2.7)	(96.0)	にぶい橙 長石・石英	全面ナデ調整　穿孔痕１か所	E 5 i0 区①黒色土中	
DP203	土器片円盤	2.8	2.9	0.6	6.42	にぶい赤褐 長石・石英	周縁部粗割り後研磨調整	E 6 j1 区①黒色土中	
DP204	土器片円盤	3.7	3.9	1.4	19.4	にぶい橙 長石・石英	周縁部粗割り後一部研磨調整	黒色土中	
DP205	土器片円盤	4.6	4.5	1.1	22.3	にぶい赤褐 長石・石英	縄文土器深鉢底部利用　周縁部粗割り後研磨調整	A トレンチ黒色土中	
DP206	土器片円盤	4.3	4.3	0.9	16.9	橙 長石・石英	安行３式土器深鉢利用　周縁部粗割り後研磨調整	E 5 h9 区③暗褐色土中	
DP207	土器片円盤	4.7	4.6	1.4	28.8	にぶい赤褐 長石・石英	周縁部粗割り後一部研磨調整	B トレンチ黒色土中	
DP208	土器片円盤	5.0	5.0	1.0	23.7	にぶい褐 長石・石英	周縁部粗割り後一部研磨調整	F 5 f7 区②黒色土中	
DP209	土器片円盤	5.1	4.8	0.9	24.8	にぶい褐 長石・石英	周縁部粗割り後研磨調整	E 6 j1 区④暗褐色土中	
DP210	土器片円盤	5.1	5.2	0.8	25.4	にぶい褐 長石・石英	周縁部粗割り後研磨調整	F 5 e8 区②黒色土中	
DP211	土器片円盤	5.7	5.5	1.2	33.5	明赤褐 長石・石英	安行１式土器深鉢利用　周縁部粗割り後研磨調整	F 5 d8 区④黒色土中	
DP212	土器片円盤	7.1	7.1	1.6	59.7	にぶい赤褐 長石・石英・赤色粒子	安行１式土器深鉢利用　周縁部粗割り後研磨調整	F 6 a1 区②黒色土中	
DP213	土器片円盤	8.5	8.1	2.0	96.9	にぶい橙 長石・石英・赤色粒子	縄文土器深鉢利用　周縁部粗割り後研磨調整	A トレンチ黒色土中	
DP214	土器片円盤	(8.0)	8.8	1.4	(108.5)	にぶい赤褐 長石・石英・赤色粒子	縄文土器深鉢底部利用　周縁部粗割り後研磨調整	F 5 b9 区③暗褐色土中	

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q 192	打製石斧	9.6	8.1	1.5	111.1	安山岩	分銅形　扁平な礫を素材として両面剥離調整	Ｅ６j1 区③ 暗褐色土中	PL23
Q 193	石匙	3.8	2.0	0.7	3.29	チャート	縦長石匙　表面剥離調整　裏面下部に打点１か所	Ｆ５a0 区③ 黒色土中	PL23
Q 194	石皿	(12.7)	(7.5)	(3.2)	(429.8)	安山岩	表・裏面研磨により皿状に凹む	Ｅ５i0 区① 黒色土中	
Q 195	磨石	6.9	6.3	2.7	188.6	安山岩	全面研磨	Ｆ６a1 区① 黒色土中	
Q 196	磨石	9.8	8.7	5.5	770.3	安山岩	全面研磨　裏面凹１か所　下部に敲打痕	Ｅ６i1 区③ 暗褐色土中	PL24
Q 197	石錘	5.9	4.3	1.3	(51.4)	粘板岩	扁平な楕円形の礫を利用　表・裏面研磨調整　表・裏面の長軸方向に直線的な紐掛け部を刻む	Ｅ６j1 区② 黒色土中	PL23
Q 198	石錘	4.6	3.1	0.7	14.6	砂岩	扁平な楕円形の礫を利用　表・裏面研磨調整　長軸方向の上・下に抉り状の紐掛け部を刻む	Ｆ５e7 区② 黒色土中	PL23
Q 199	砥石	7.5	5.6	4.2	164.7	砂岩	砥面５面	Ｅ６j1 区③ 暗褐色土中	
Q 200	石棒	(28.8)	7.7	4.4	(1,334)	雲母片岩	大形で粗い磨き　断面楕円形	Ｆ５e8 区② 暗褐色土中	PL24
Q 201	石棒	(17.3)	2.5	2.1 ～ 2.4	(190.7)	緑泥片岩	全面研磨調整　断面円形　下端部欠損	Ｆ５a9 区③ 黒色土中	
Q 202	石剣	(13.2)	(2.9)	1.7 ～ 2.0	(94.1)	粘板岩	有頭　全面研磨調整　先端部段状に研磨　先端部断面楕円形　下部断面菱形	Ｅ６j1 区④ 暗褐色土中	PL24
Q 203	石剣	(15.8)	3.1	2.0	(166.9)	緑泥片岩	表・裏面研磨調整　断面紡錘形	Ｅ５j0 区② 黒色土中	
Q 204	独鈷石	(11.1)	(6.8)	4.6	(291.4)	安山岩	片側端部欠損　中央部に２条の突帯　表の突帯上・裏の突帯間に凹１か所ずつ	Ｅ６i1 区④ 暗褐色土中	PL24

第５号包含層（第 79 ～ 103・付図）

位置　調査区中央部から南部にかけてのＦ４j0 ～Ｇ５f5 区，標高 20 ～ 23 mほどの台地斜面部に位置している。

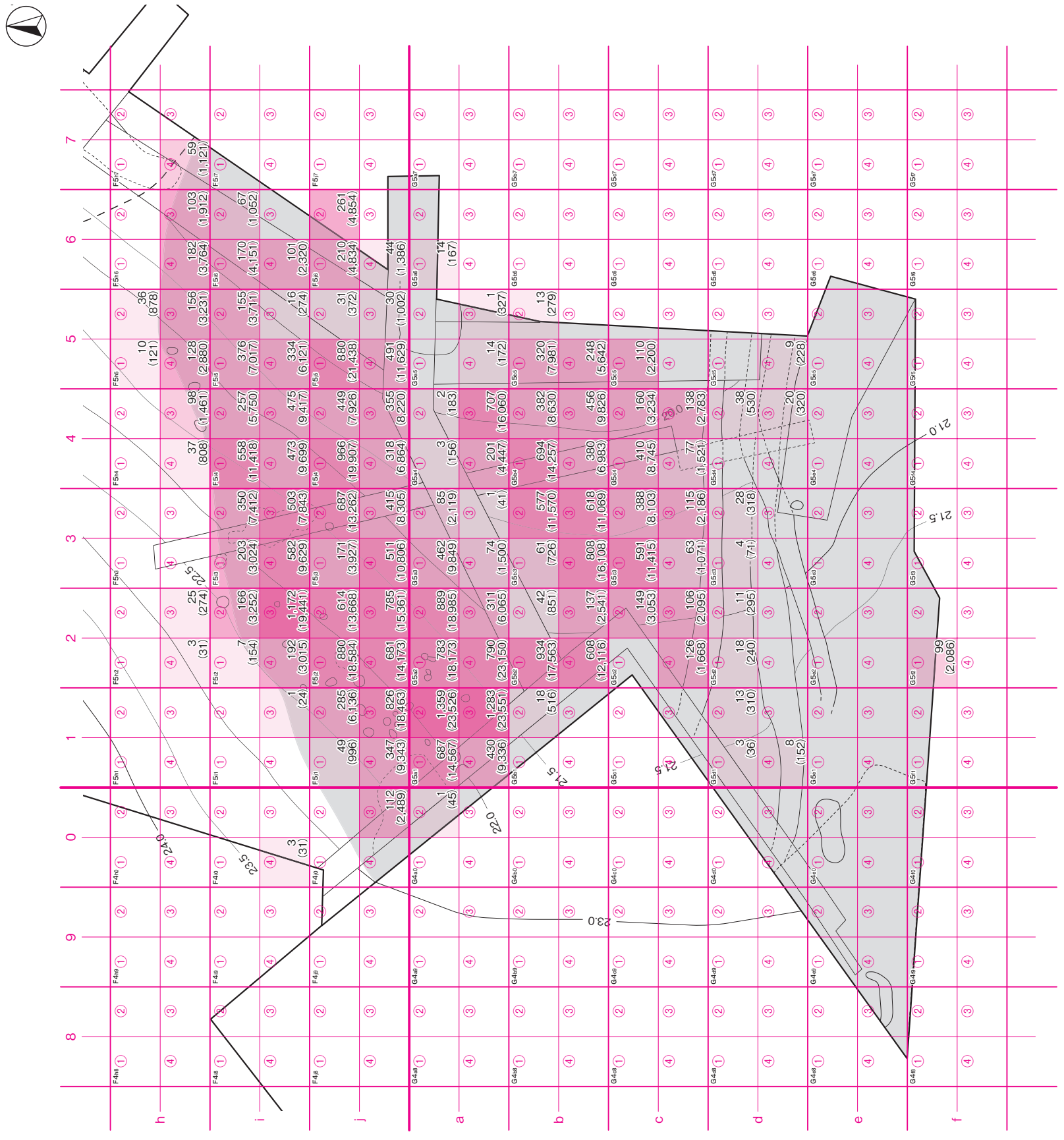
確認状況　調査区中央部から南部にかけて，等高線に直交するようにＤ～Ｇトレンチを設定して掘削を行ったところ，中央部から南部にかけて厚く堆積した包含層が広がっていることを確認し，第５号包含層として調査を進めることとした。包含層は，南側の調査区域外にも更に拡大している。

重複関係　下層に第 296 号土坑が所在し，第２号陥し穴，第 182・183・185・186・194・196・199 ～ 219 号土坑，第１号柱穴列，第５・８・10・11 号溝に掘り込まれ，第３・４・９号貝層及び第１・３・４号地点貝塚が上層に形成されている。

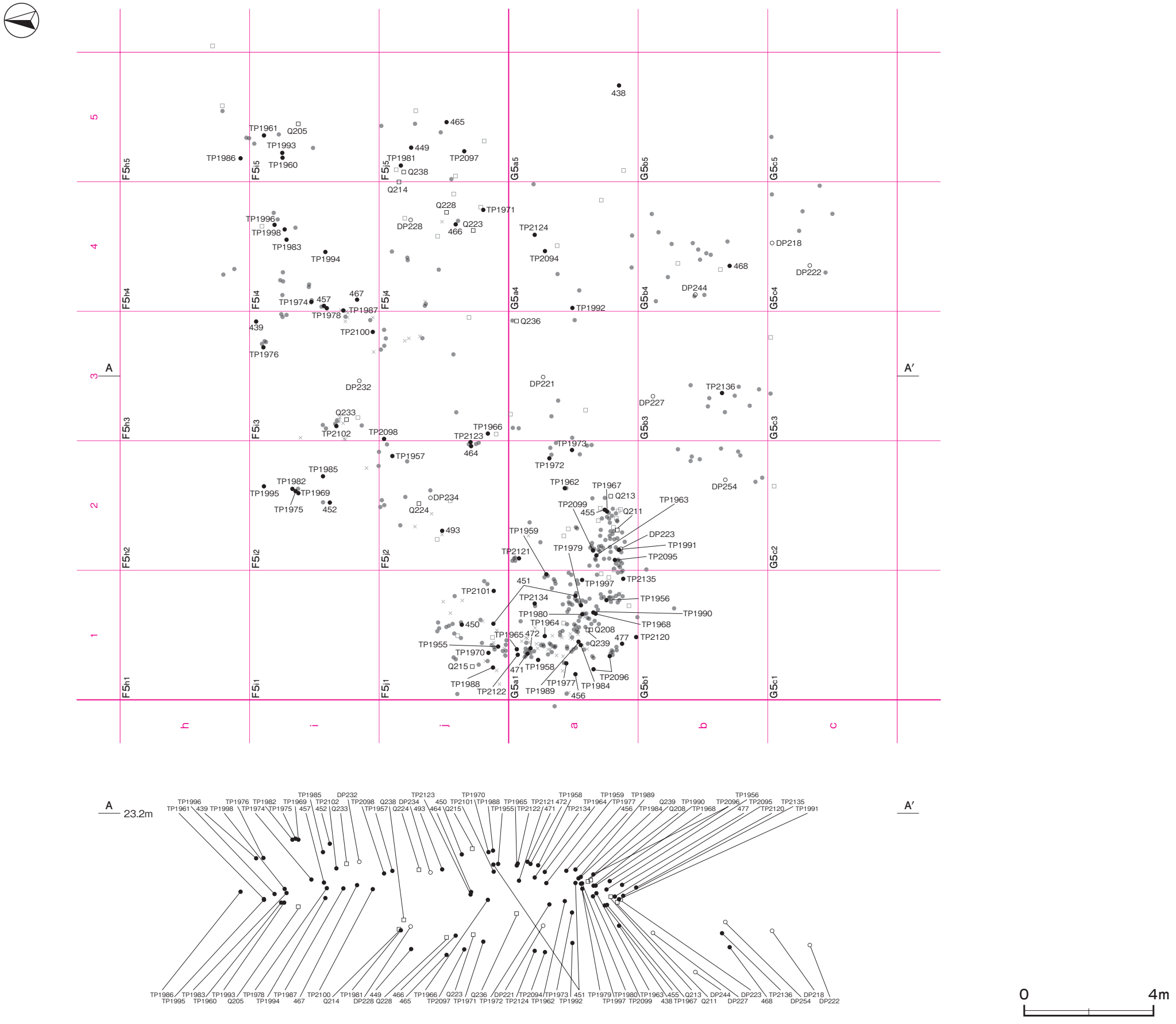
調査の方法　Ｆ４j0 区を起点とし，第４号包含層と同様な方法で調査を行った。層位については，黒色土層（第３・４層），暗褐色土層（第５・６層），混礫暗褐色土層（第７・８層）の３層に分層し，層位ごとに遺物の取り上げを行った。含有物に多少の差異が認められるが，土色及び堆積状況については，第４号包含層と類似している点が多い。

包含層の広がりと堆積状況　包含される遺物の分布状況は，中央部から北部にかけて密であり，ほぼ均等に出土しているが，特に標高 21 ～ 22 m付近に集中している傾向が認められる。南部からは遺物の出土が少ない。東西の幅は約 15 ～ 30 m，南北の長さは約 30 mである。高低差は約３mで，確認面での傾斜角は約 10 度である。８層に分層でき，確認できた範囲の全体の層厚は 140 ～ 200㎝である。第１層は表土層，第２層は包含層への漸移層で，第３～８層が包含層となっている。底面は粘土層で，確認面と同様に緩やかに下っている。粘土層は，上方では細礫・砂粒を含んだ褐色，下方では水分を多く含む青灰色を呈し，第４号包含層の地山とほぼ同様の土質とみられる。

本包含層は，第４号包含層と同様に上・中・下層に分けることが可能である。上層は黒色を呈する第３・４層で，層厚は 40 ～ 70㎝で，遺物が最も多く出土している。中層は暗褐色を呈する第５・６層で，層厚は 20 ～ 70㎝である。下層は礫を含む暗褐色を呈する第７・８層で，層厚は 75 ～ 100㎝で，遺物の出土量は最も少ない。それぞれ層厚の差異はあるが，ほぼ均一に堆積している状況が確認できた。



第 79 図　第５号包含層実測図 (1)



第 80 図　第５号包含層実測図 (2)

第 81 図　第５号包含層実測図 (3)

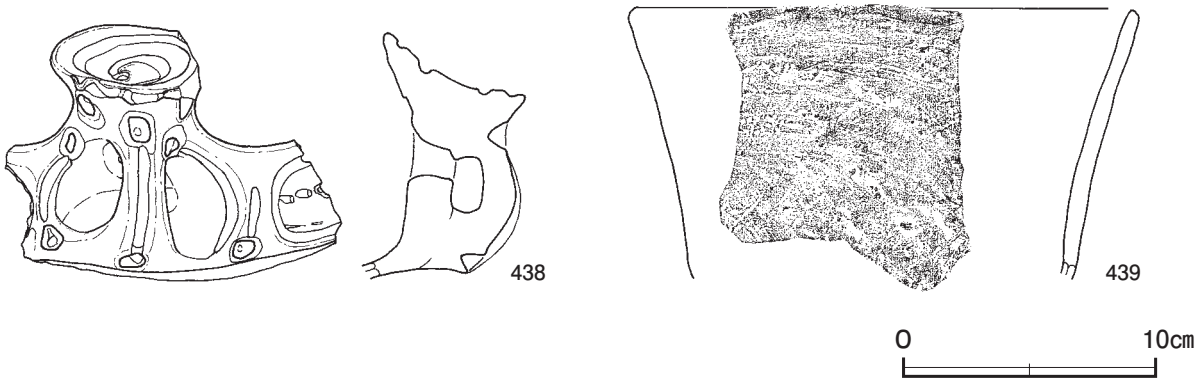
土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化粒子・砂粒微量
2　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量，焼土ブロック・砂粒微量
3　黒　　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量
4　黒　　色　炭化物・焼土粒子少量，ローム粒子・骨片微量
5　暗　褐　色　焼土ブロック・炭化粒子少量，ローム粒子・砂粒・骨片微量
6　暗　褐　色　炭化物・ローム粒子少量，細礫・砂粒微量
7　黄　褐　色　細礫中量，ローム粒子・粘土粒子少量
8　暗　褐　色　細礫中量，焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量

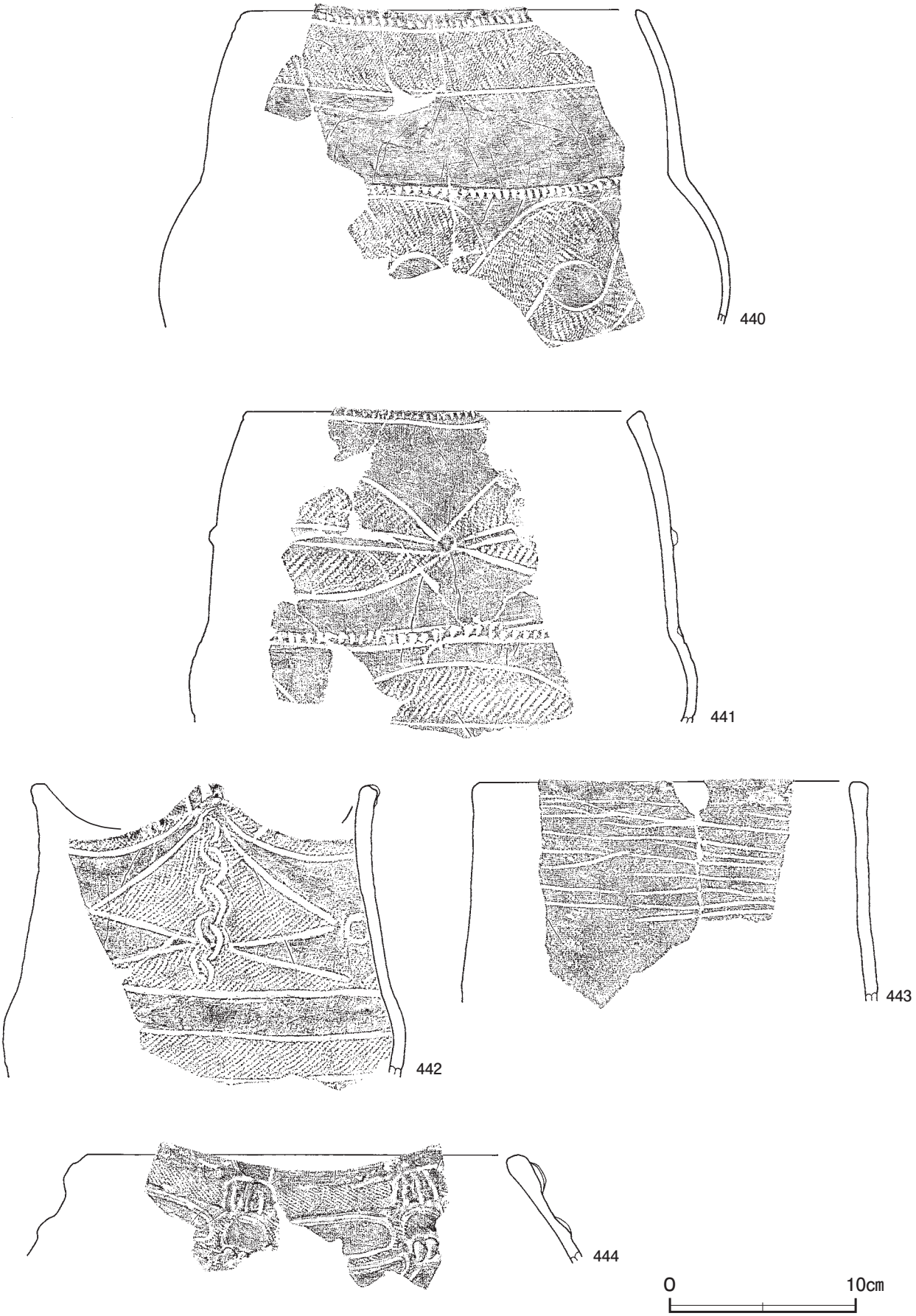
遺物出土状況　本包含層からは，北側に広がる第４号包含層と同様に，土器を中心とする多量の遺物が出土している。縄文土器片 47,574 点（947,727.6g），土製品 115 点（土玉１，垂飾品２，土版３，土偶 23，円盤５，土器片錘１，土器片錘ヵ１，土器片円盤 74，不明５），石器 145 点（鏃３，打製石斧８，磨製石斧 12，石皿 12，磨石 59，敲石 23，石錘４，凹石 11，ヘラ状石器１，砥石 10，不明２），石製品 23 点（円盤１，石版ヵ２，石棒８，石剣４，不明８），石核７点（チャート），剥片 52 点（チャート 43，黒曜石５，頁岩２，瑪瑙１，石灰岩１），貝（ヤマトシジミ 116.06g，ハマグリ 1.55g，アカニシ 68.73g），イノシシ・シカを主体とした獣骨のほか，土師器片６点（坏１，高台付椀２，高坏１，不明２），須恵器片７点（坏１，甕３，不明３），土師質土器片 20 点（皿４，小皿 10，不明６），陶磁器片 22 点（鉢１，甕３，不明 18），瓦４点，石塔１点，不明鉄製品３点も出土している。縄文土器片 47,574 点のうち 498 点（5,557g）が製塩土器片である。

遺物は，中央部から北部の黒色土層下部から暗褐色土層上部にかけて集中して出土している。土器の大半は小片であることから，上方から廃棄された土器の大半が砕け，集積したものとみられる。土器の他に，土製品及び石器が多く出土していることが特徴としてあげられる。石器は日常生活における道具類が主であり，土製品は土器を再利用した土器片円盤が多い。土器の形式は，第４号包含層と同様に，堀之内式から安行３ｂ式まで確認できる。これらの土器が各層から混在して出土していることから，上方の台地上から縁辺部にかけて広がっている集落では，後期前葉から晩期前葉にかけて，遺物の廃棄及び整地や施設構築に伴う土地の掘削などの行為が繰り返されたことが想定される。なお，下層から一定量の堀之内式土器及び加曽利Ｂ式土器が出土していることは，第４号包含層と同様である。

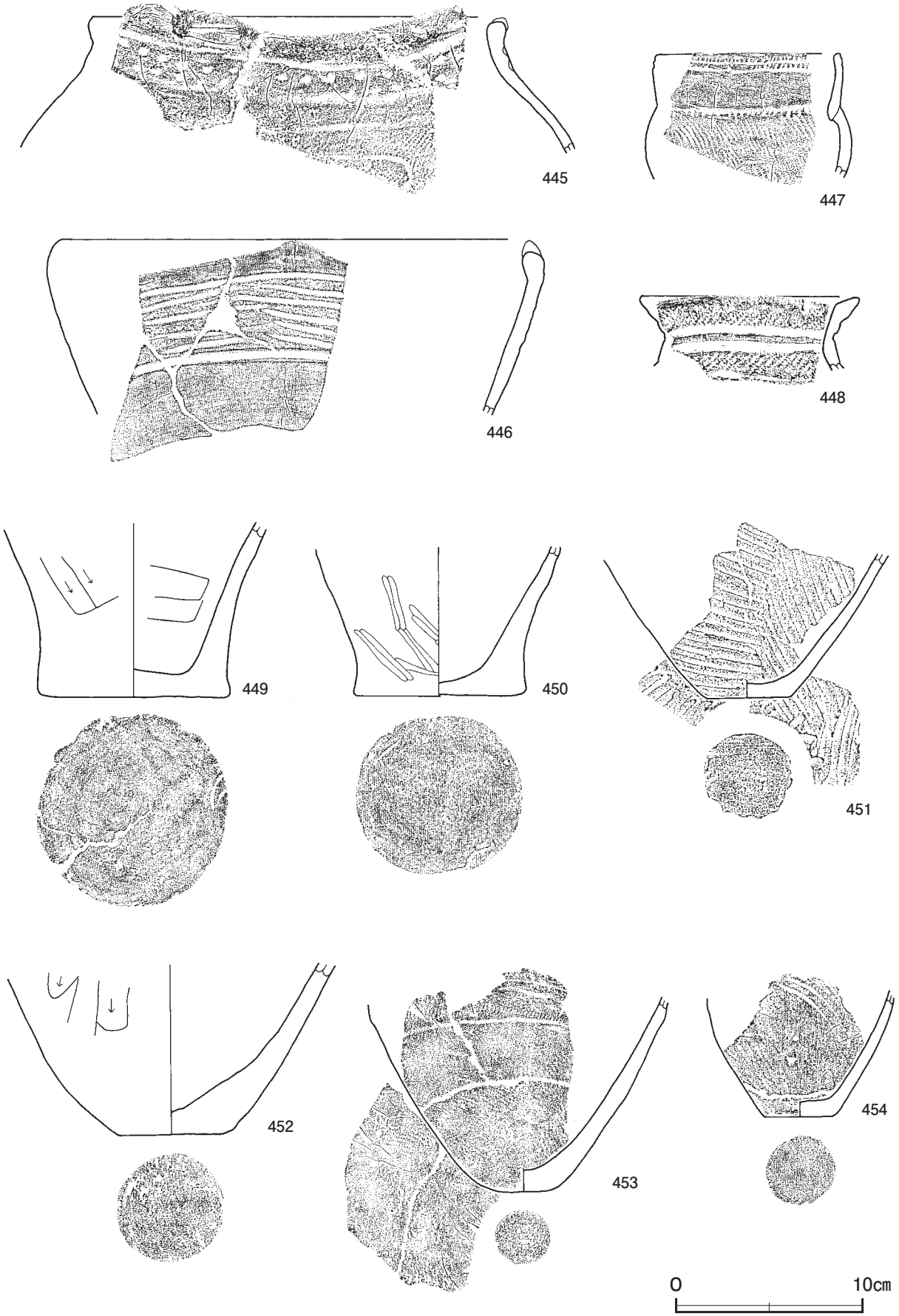
所見　当包含層は，第４号包含層と同一斜面の南部に形成されている。斜面上方には保存区域とされた純貝層及びその端部とみられる第３・４号貝層や，当財団第 368 集で報告されている第１号貝層が形成されている。更に，それらの上方には複数の竪穴建物跡が所在している。本包含層は，上方の集落から廃棄された遺物及び施設などの構築時の掘削土やそれに伴う遺物が下方に流出し，集積することによって形成されたものと考えられる。出土土器は，後期前葉の堀之内式から晩期前葉の安行３式までみられることから，第４号包含層とともに形成されたものとみることができる。中でも，安行１式から安行３ｂ式の土器が大半を占めることから，後期後葉から晩期前葉の時期に，集落の規模が最も大きかったものと想定される。



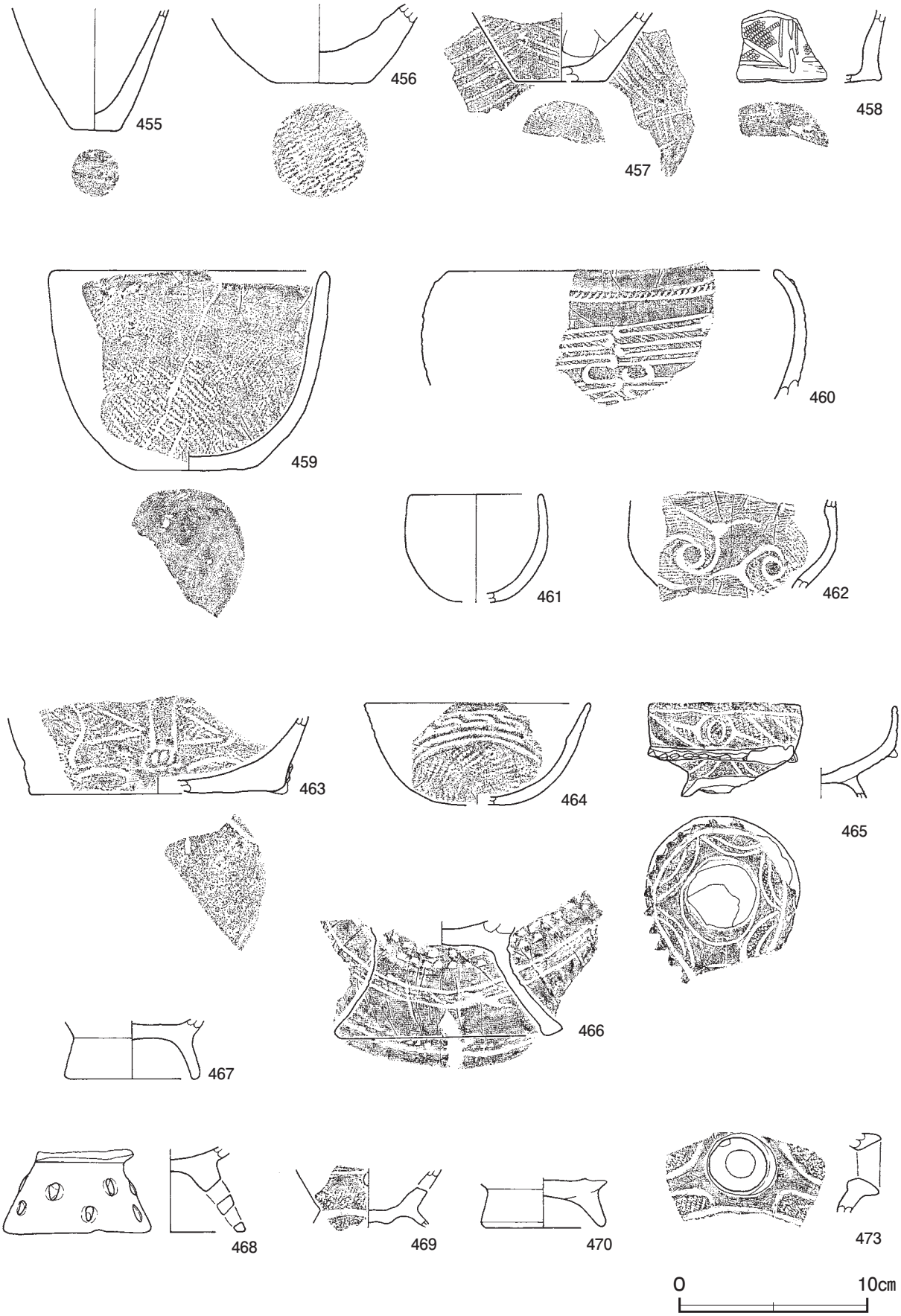
第 82 図　第５号包含層出土遺物実測図 (1)



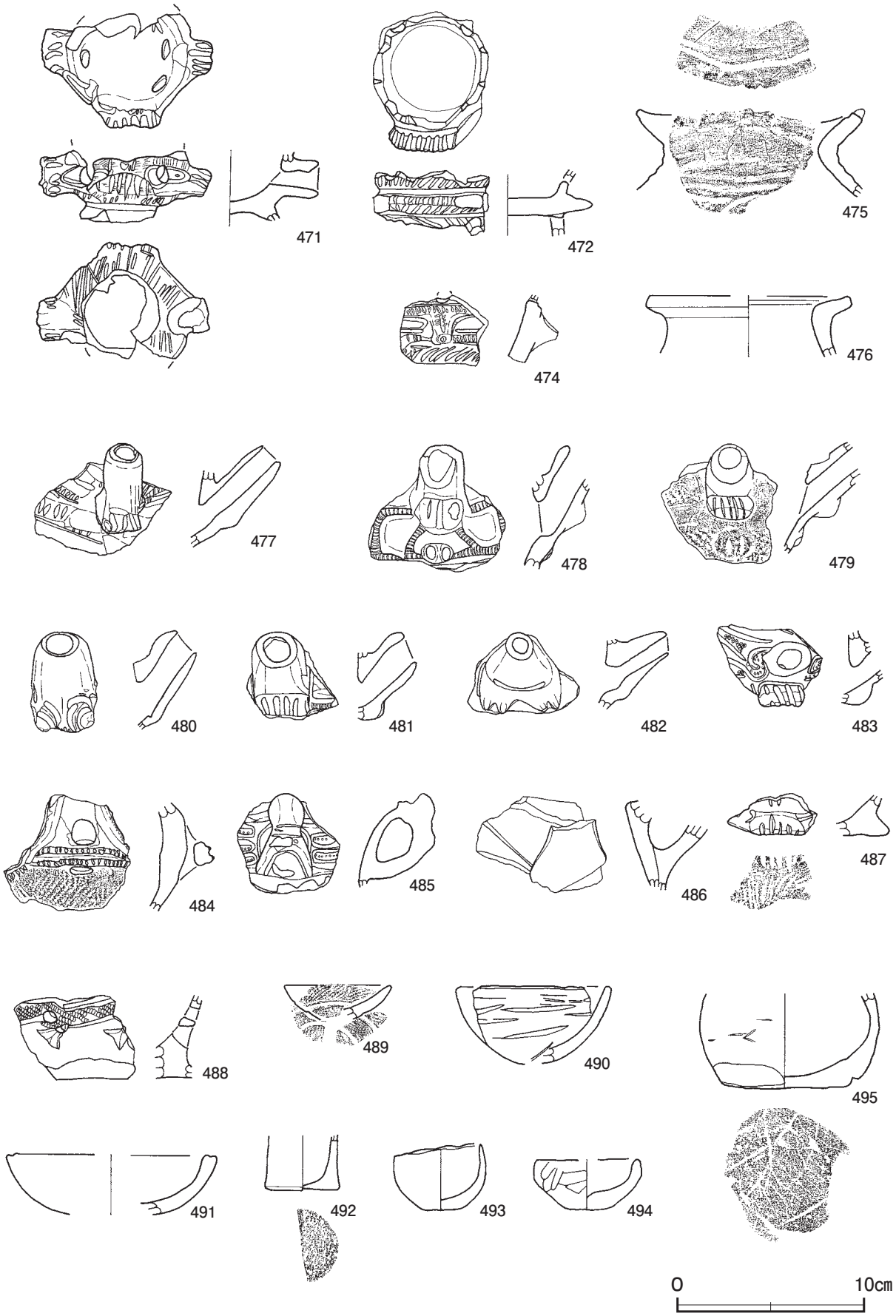
第83図　第５号包含層出土遺物実測図(2)



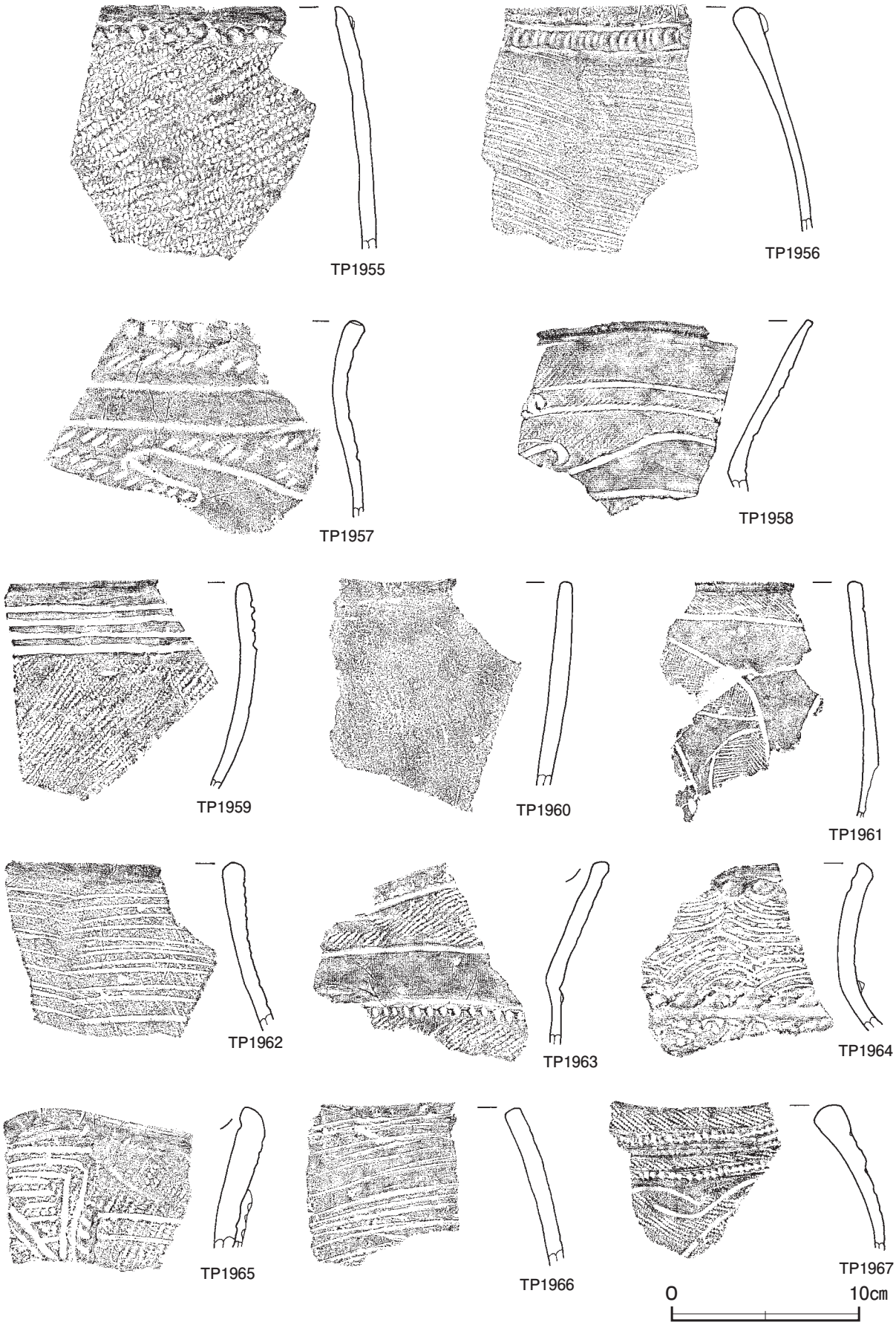
第 84 図　第５号包含層出土遺物実測図 (3)



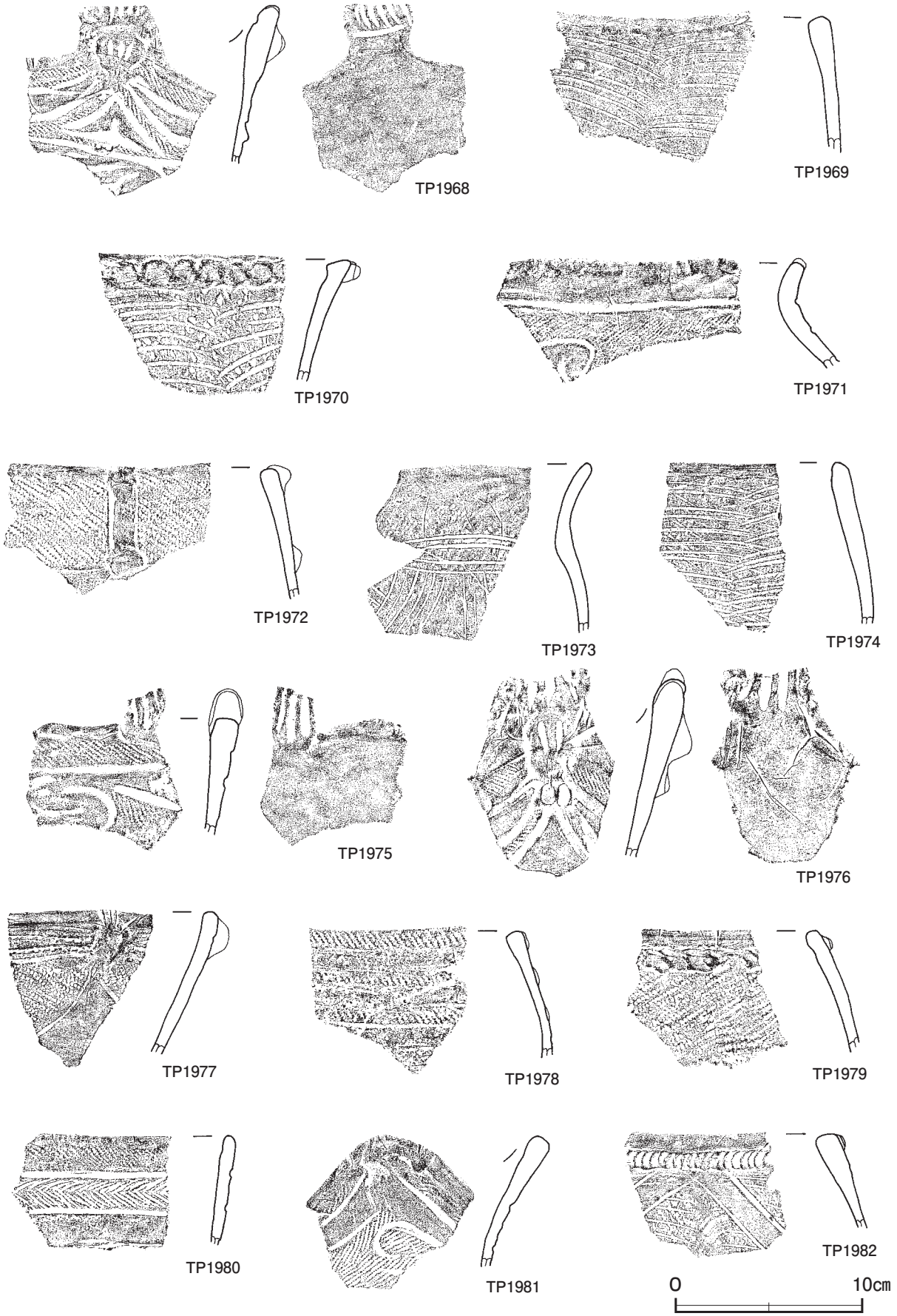
第85図　第５号包含層出土遺物実測図(4)



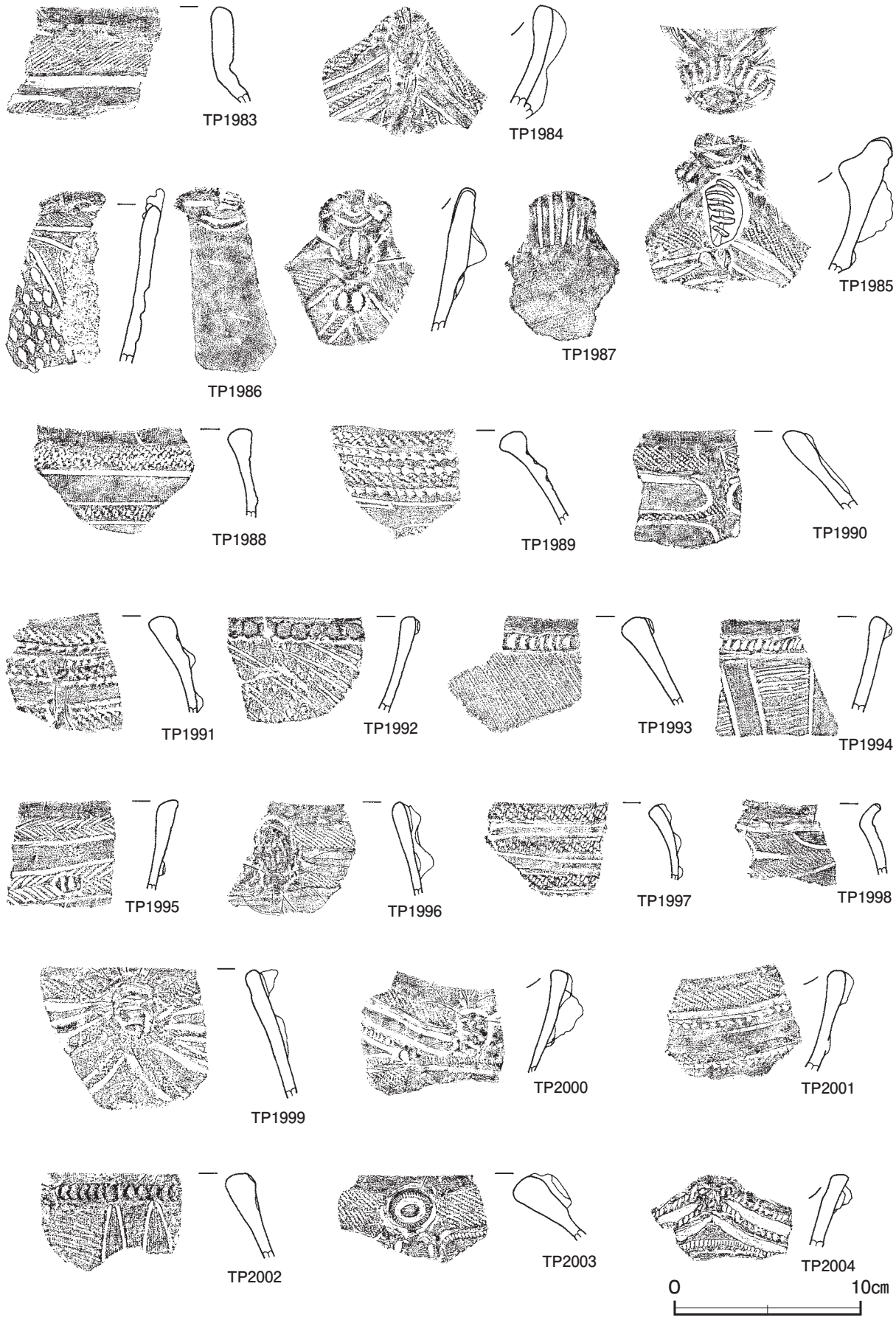
第 86 図　第５号包含層出土遺物実測図 (5)



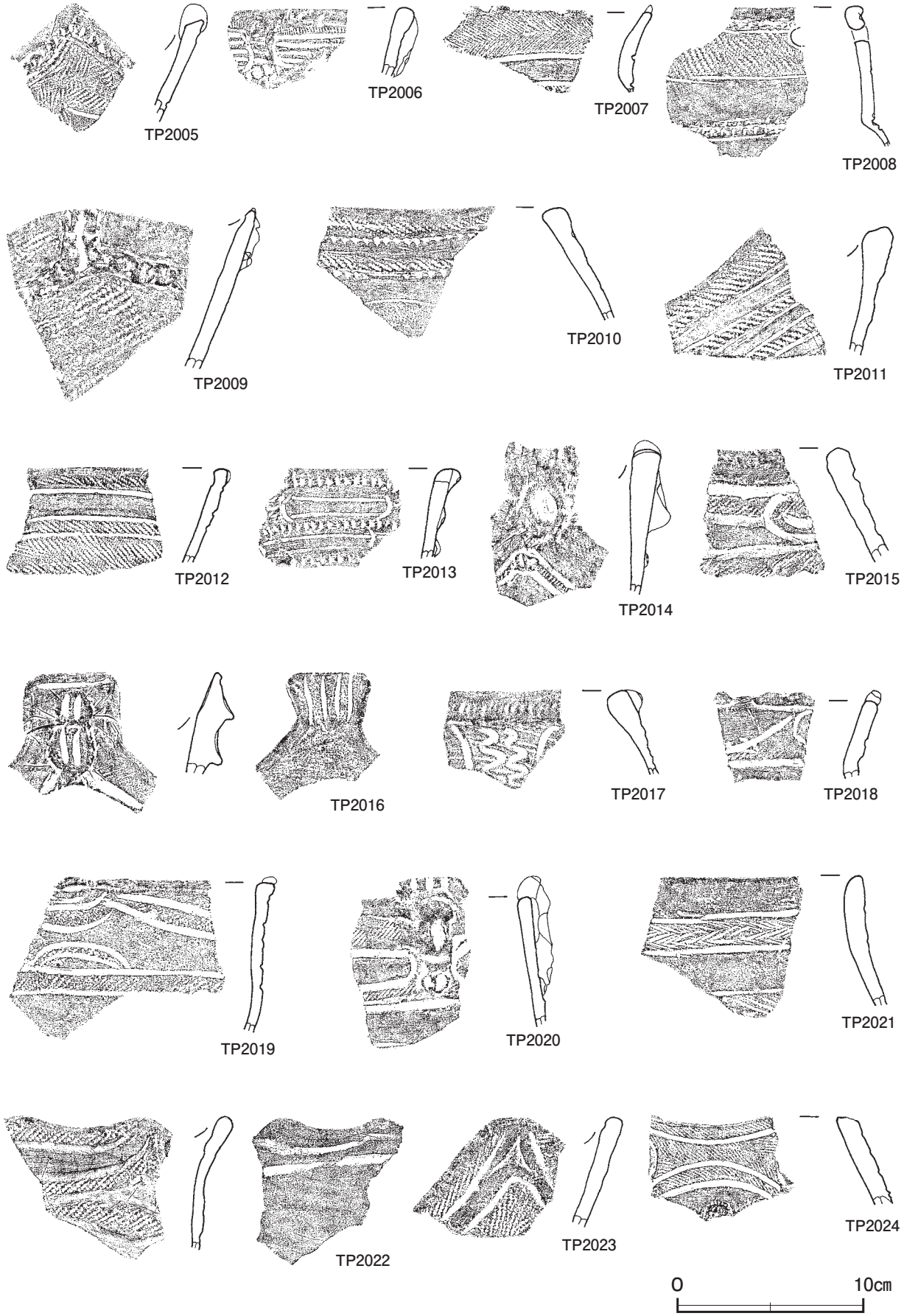
第87図　第５号包含層出土遺物実測図(6)



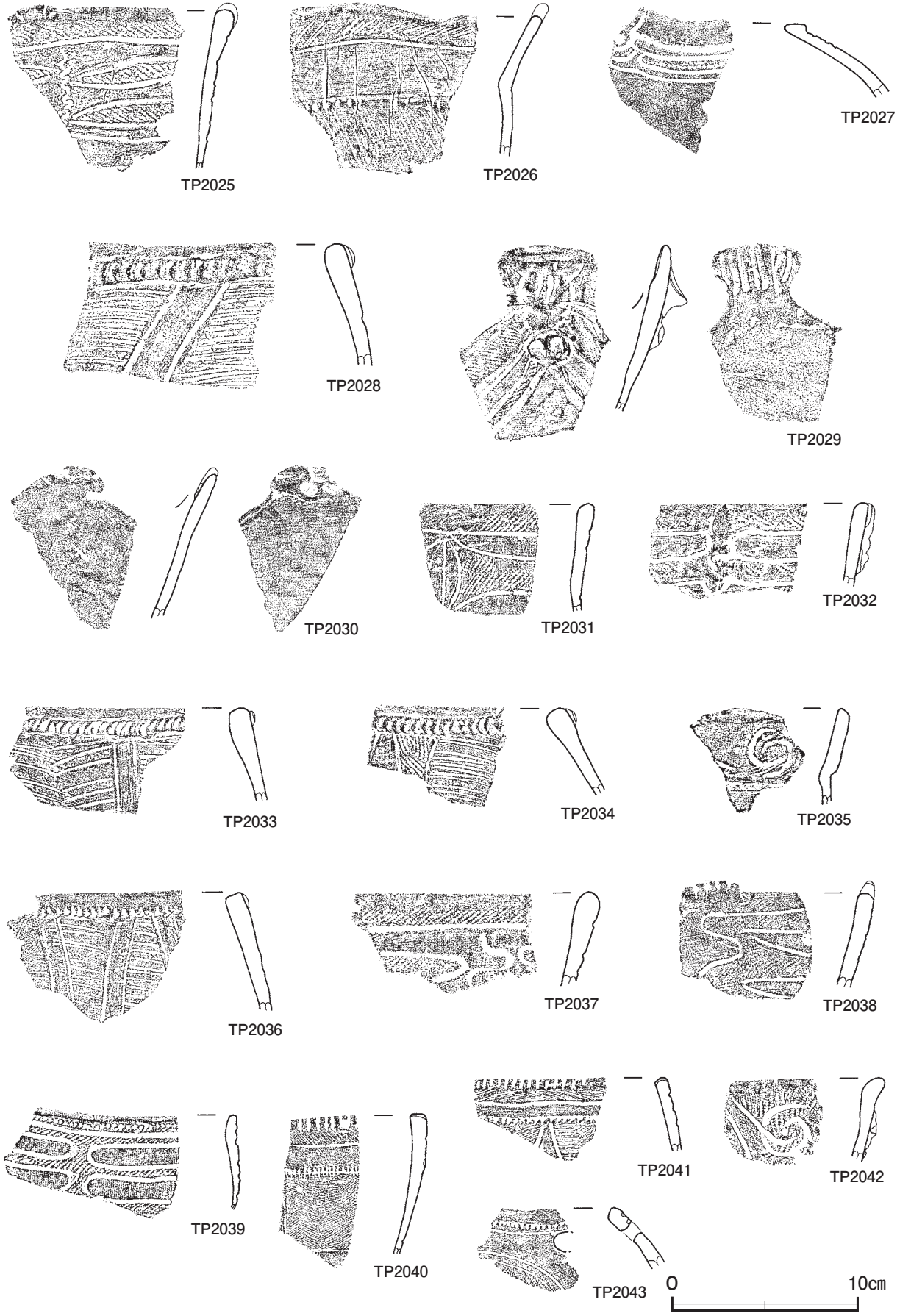
第 88 図　第５号包含層出土遺物実測図 (7)



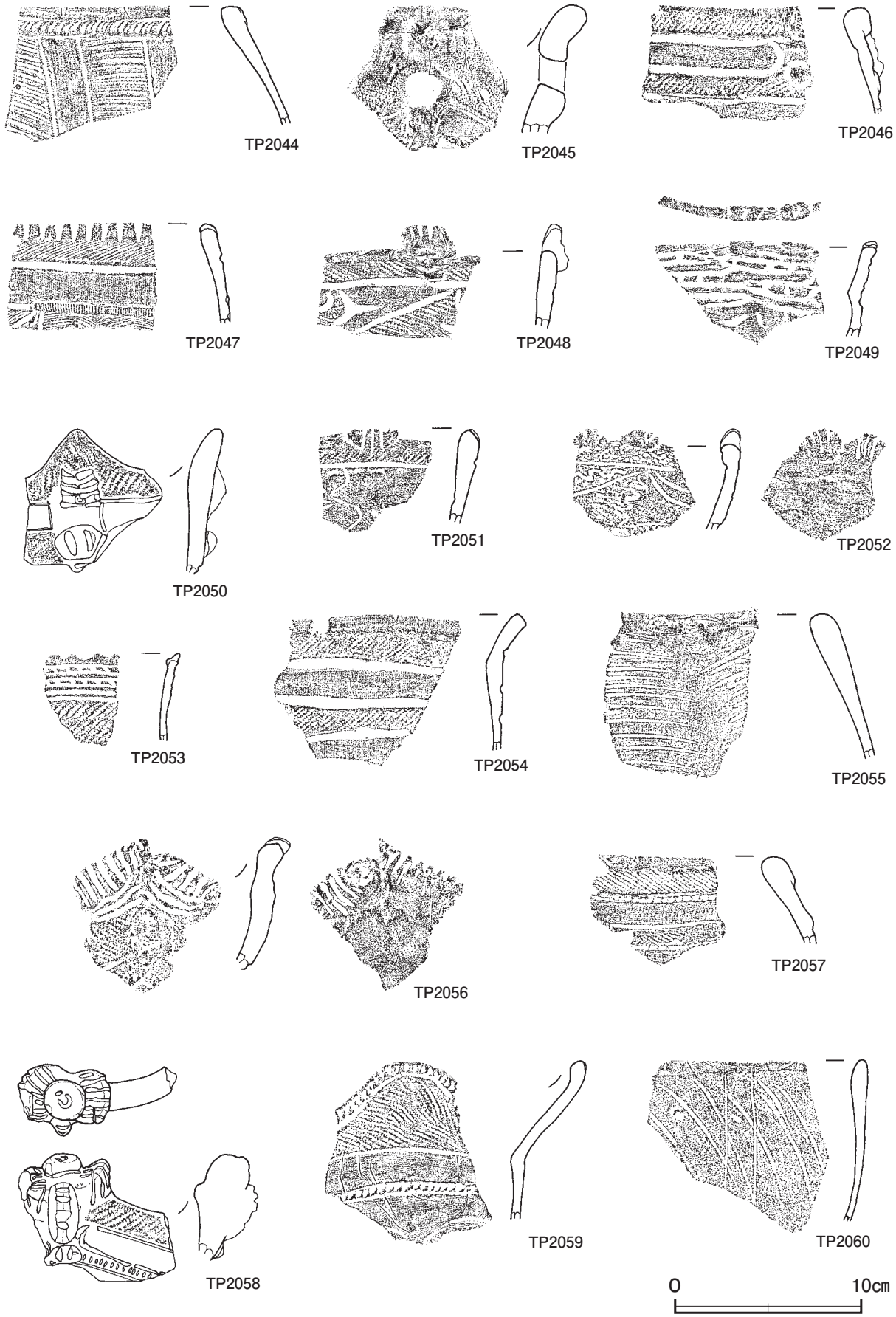
第89図　第５号包含層出土遺物実測図(8)



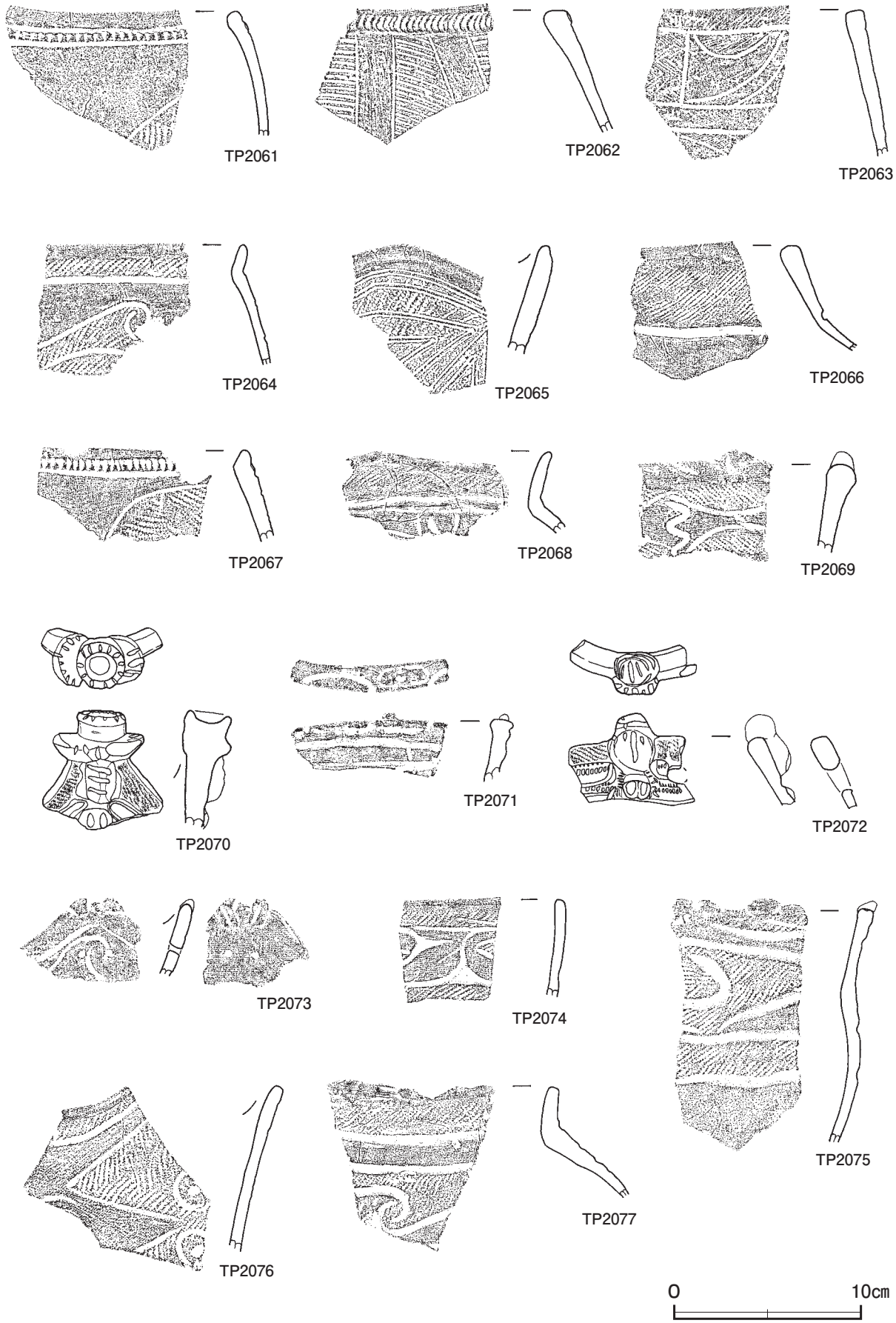
第 90 図　第５号包含層出土遺物実測図 (9)



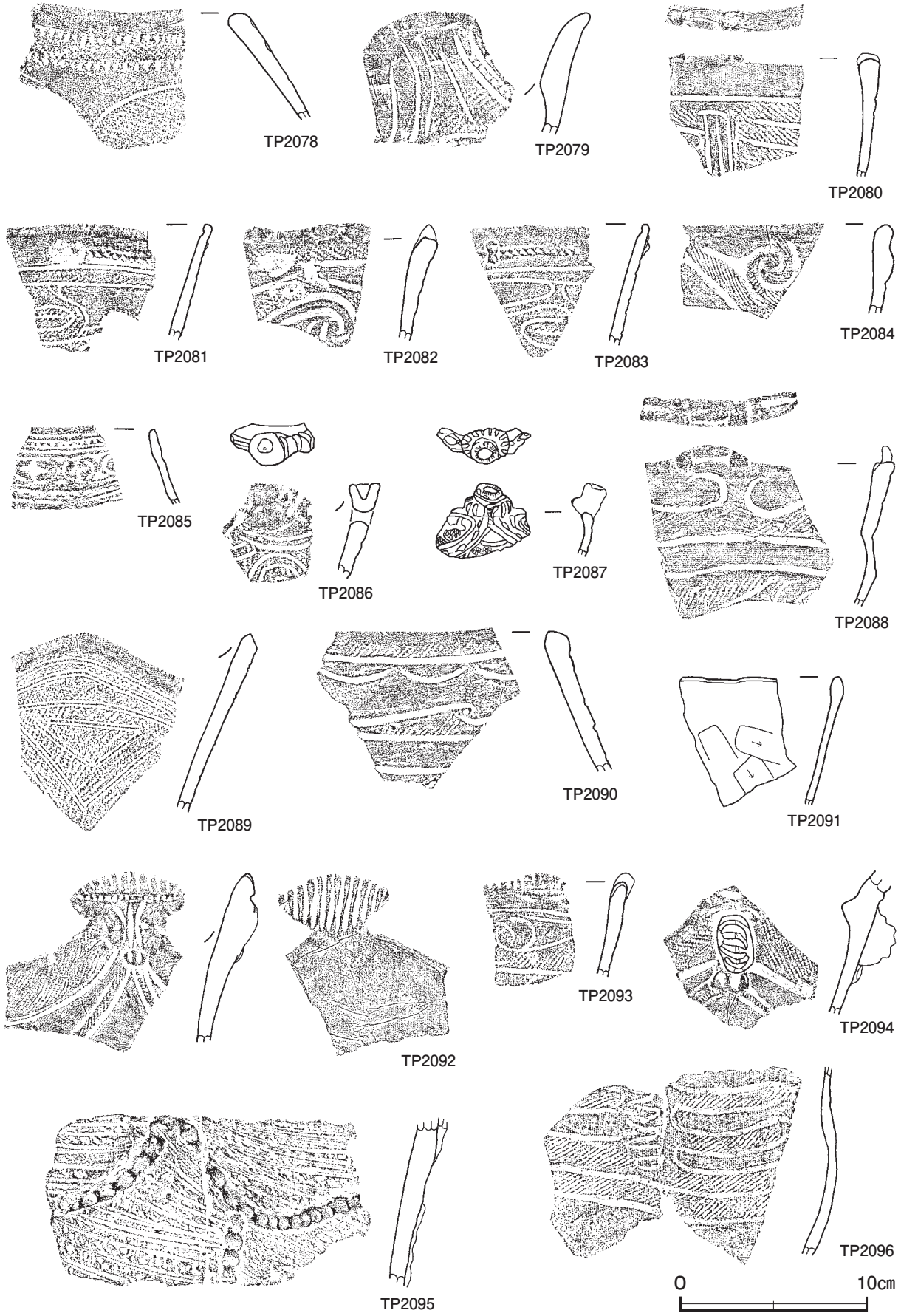
第 91 図　第５号包含層出土遺物実測図 ⑽



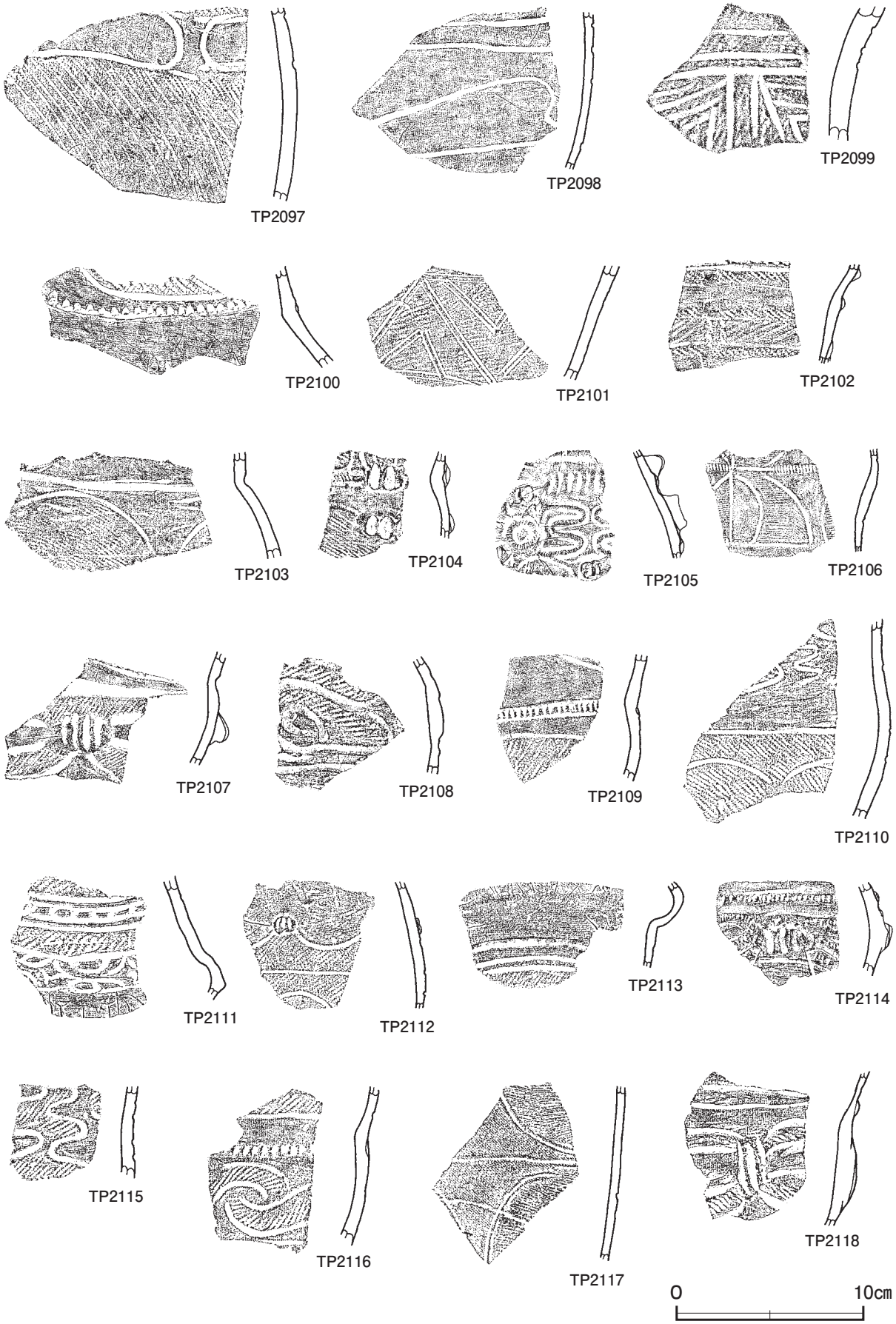
第 92 図　第５号包含層出土遺物実測図 ⑾



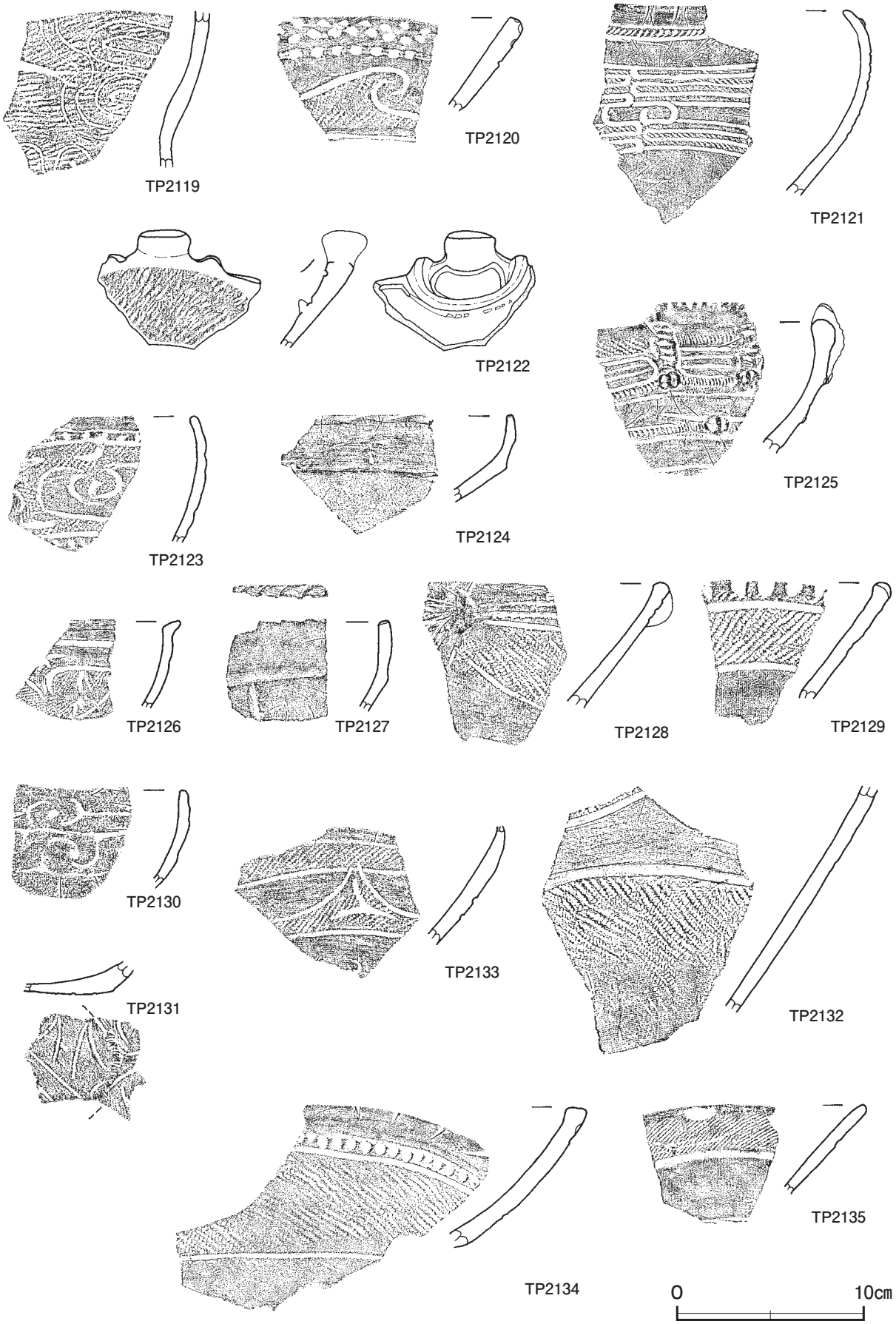
第93図　第５号包含層出土遺物実測図⑫



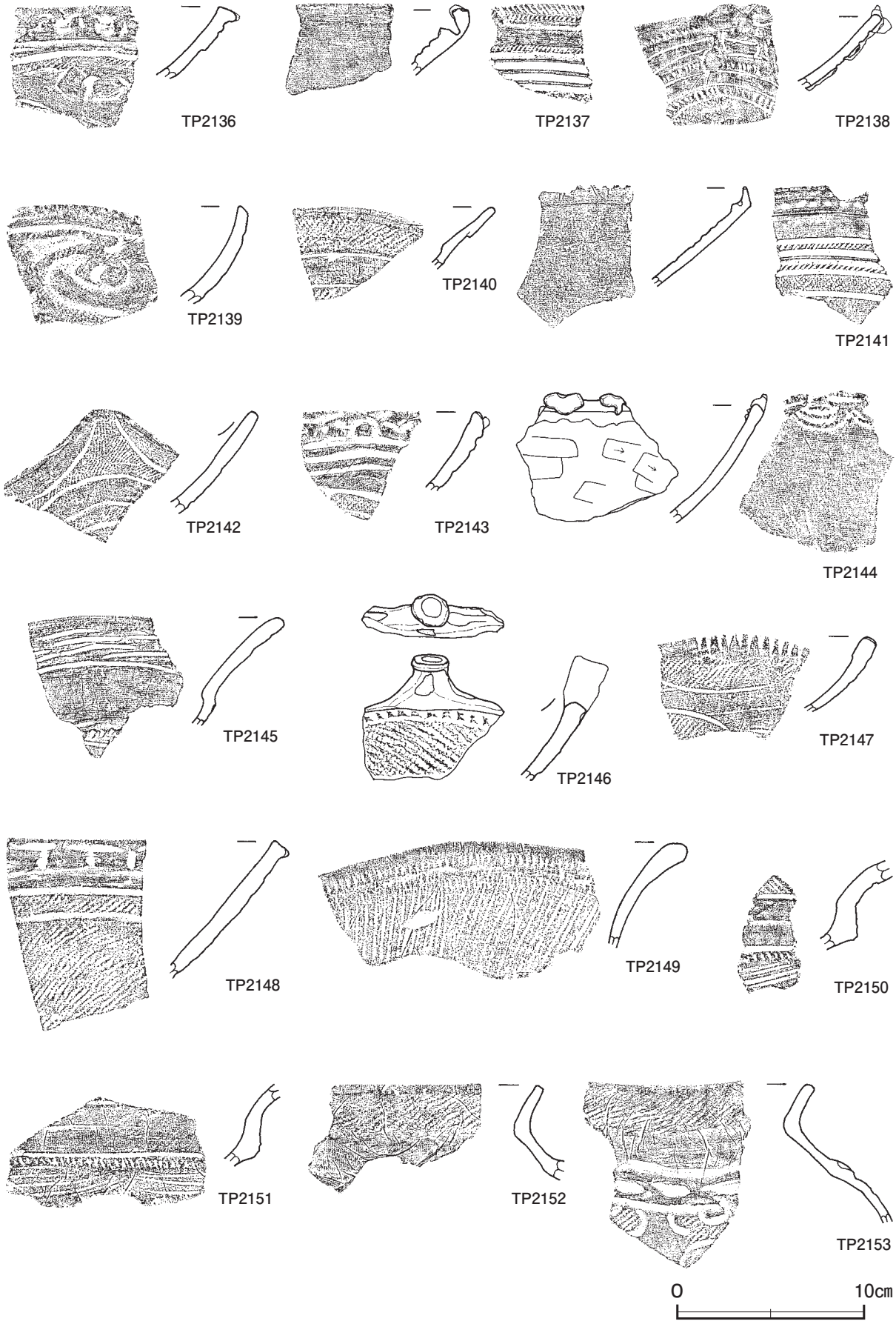
第 94 図　第５号包含層出土遺物実測図 ⒀



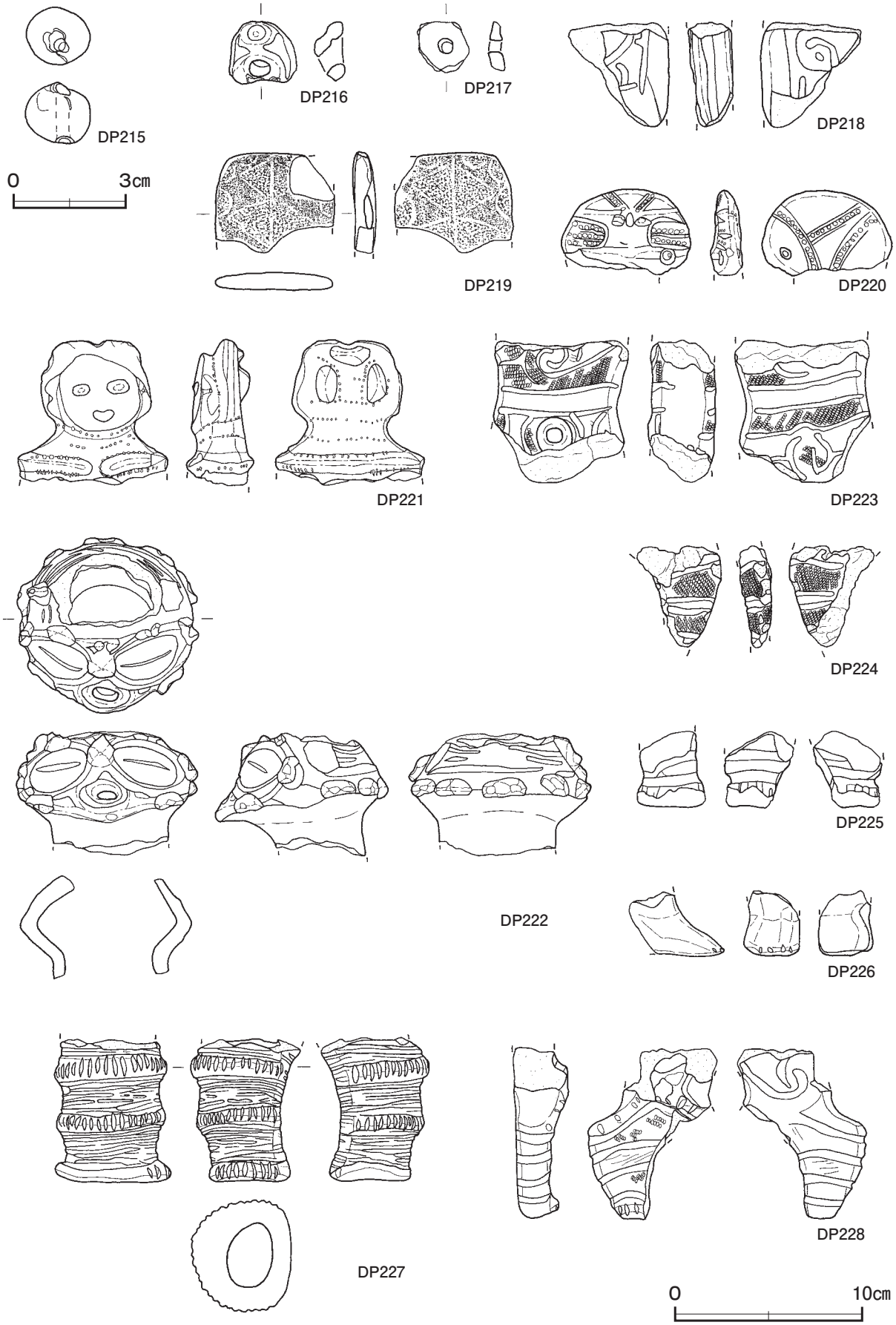
第95図　第５号包含層出土遺物実測図⑭



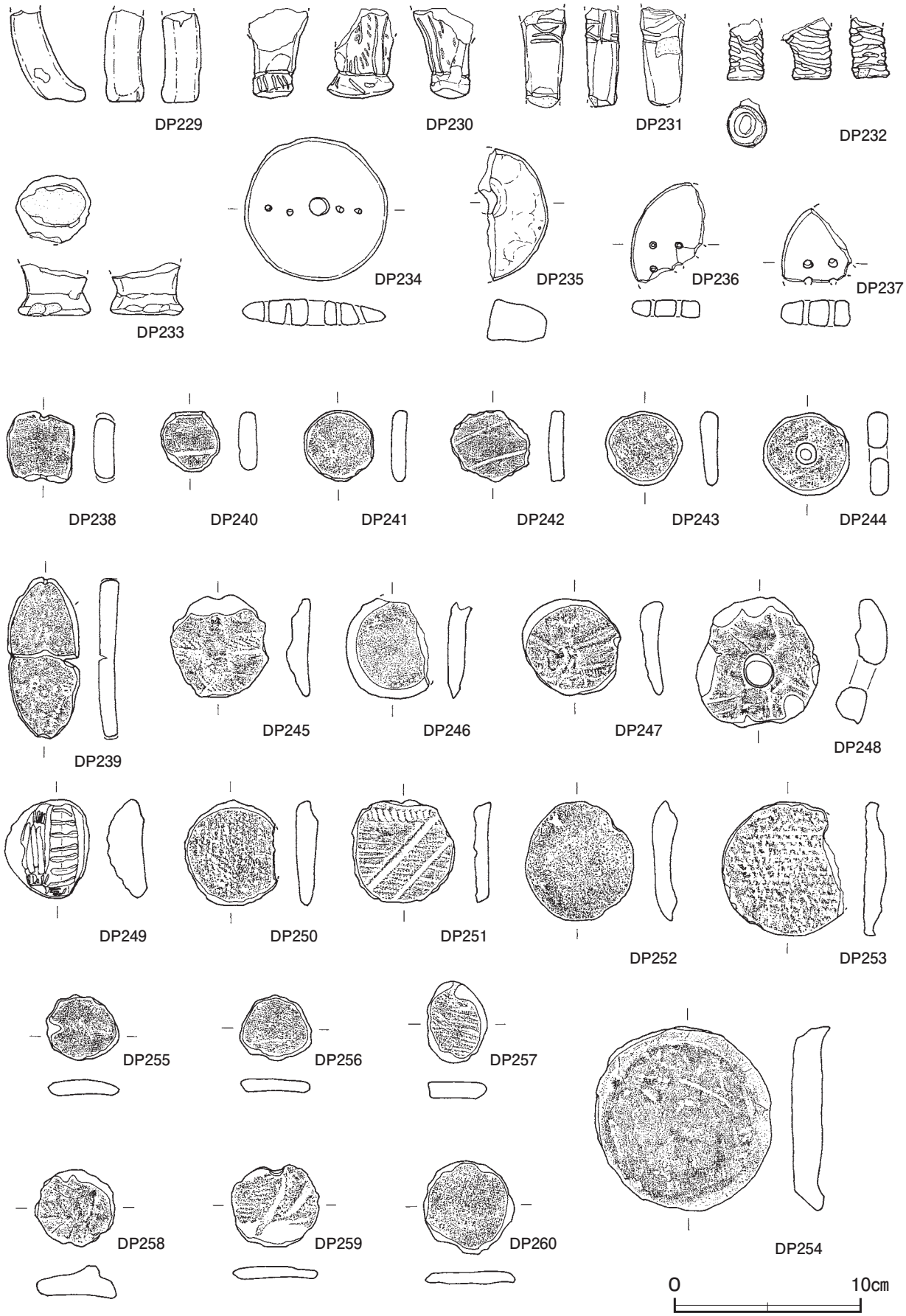
第 96 図　第５号包含層出土遺物実測図 ⑮



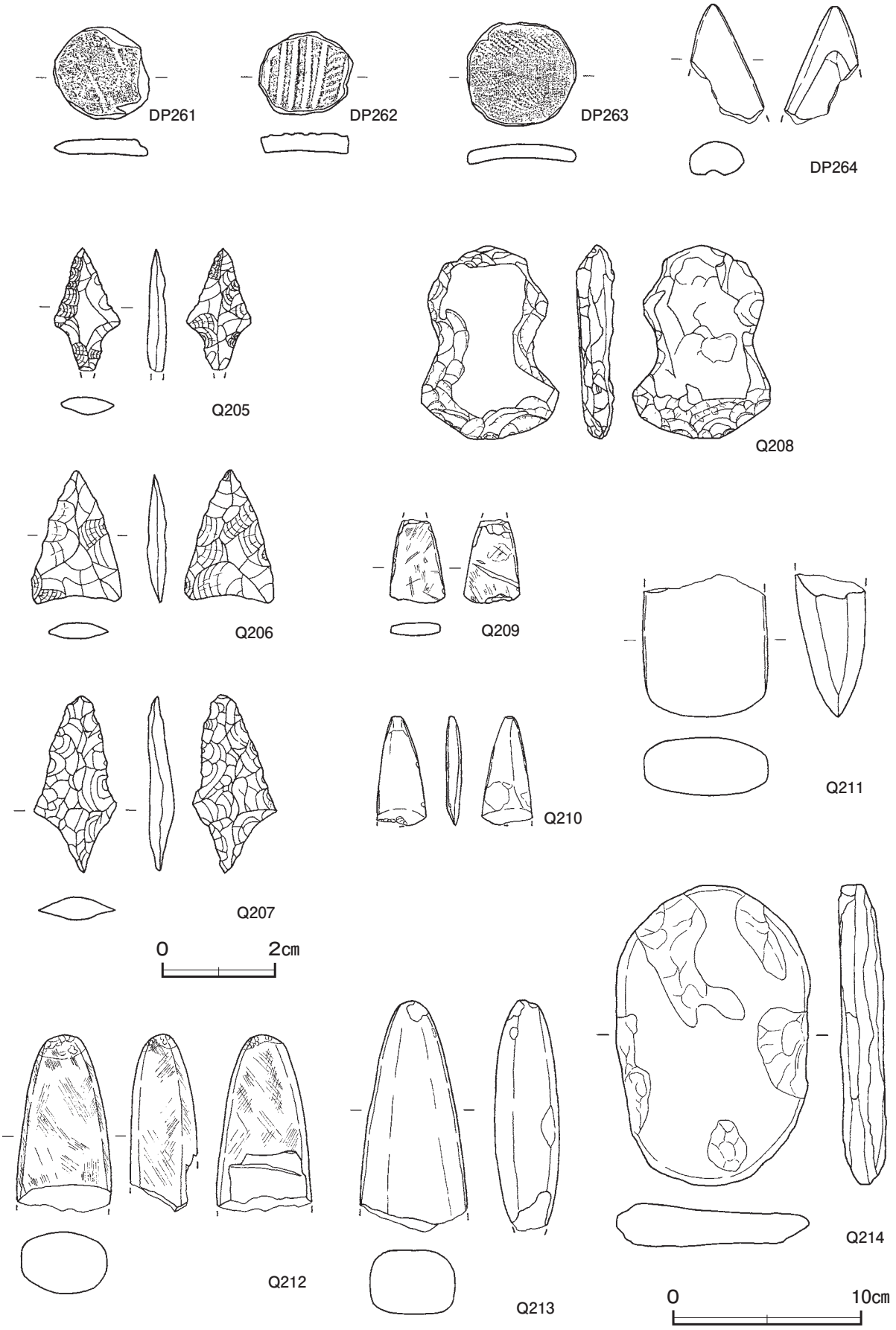
第97図　第５号包含層出土遺物実測図⑯



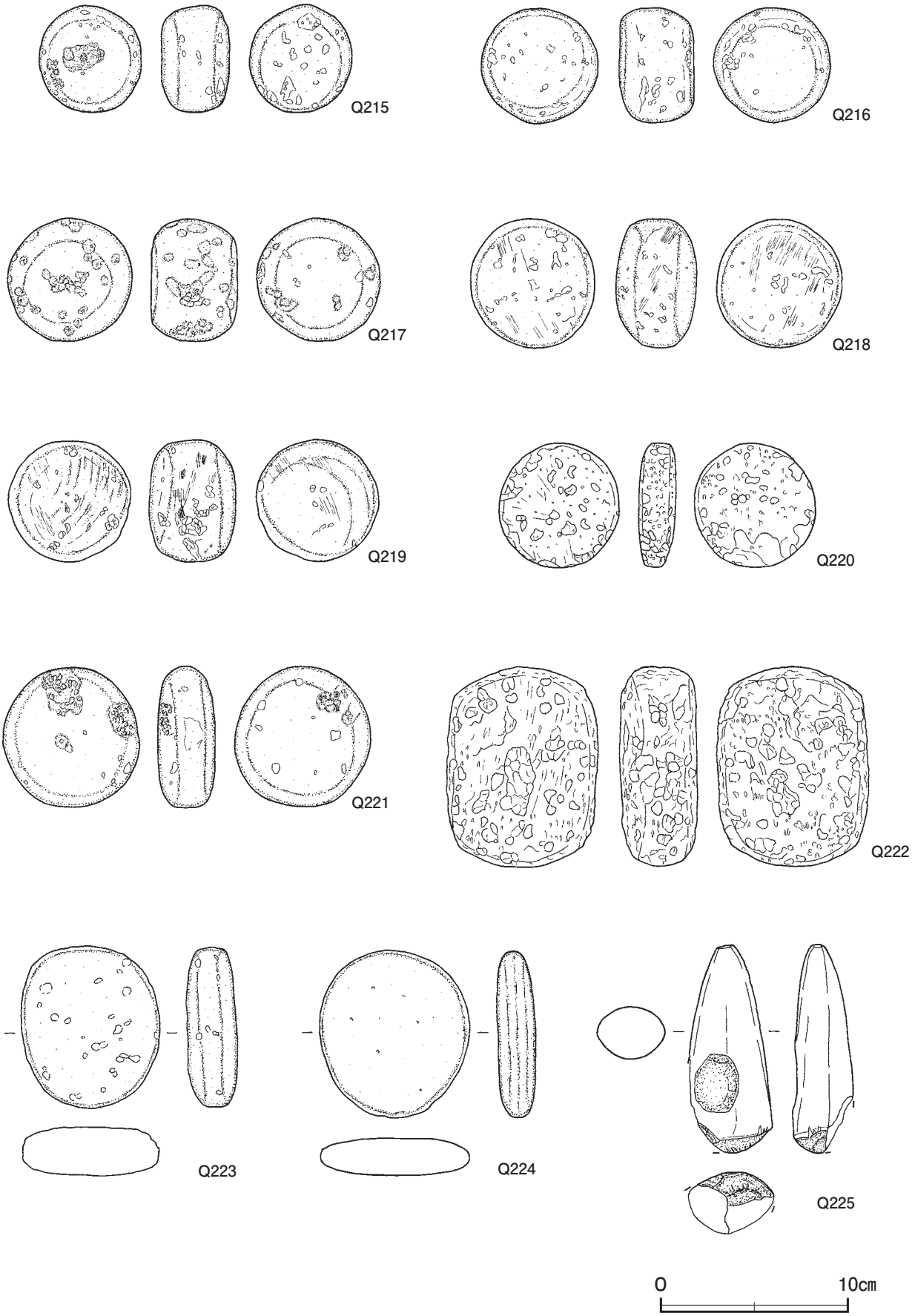
第 98 図　第５号包含層出土遺物実測図 (17)



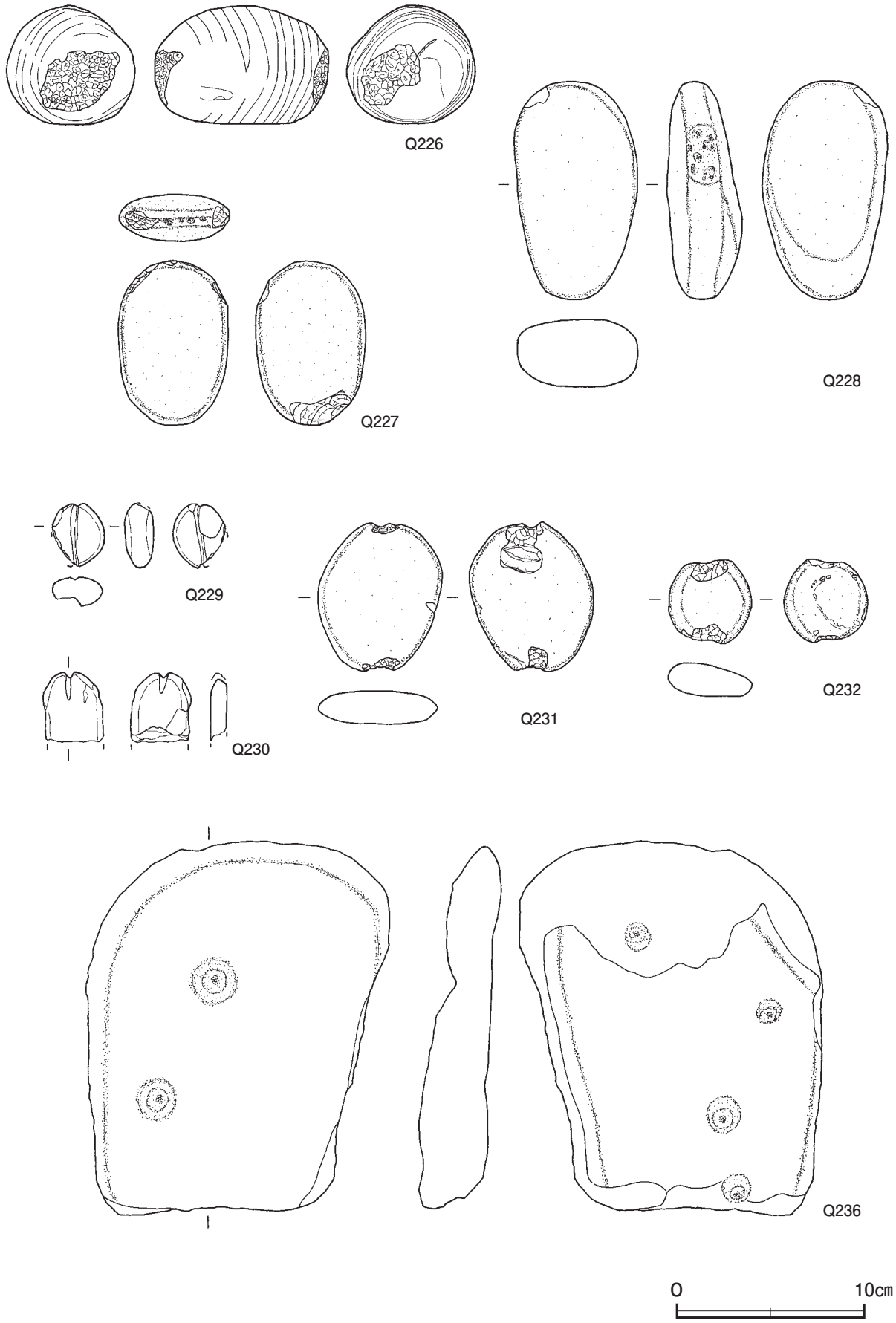
第99図　第５号包含層出土遺物実測図⑱



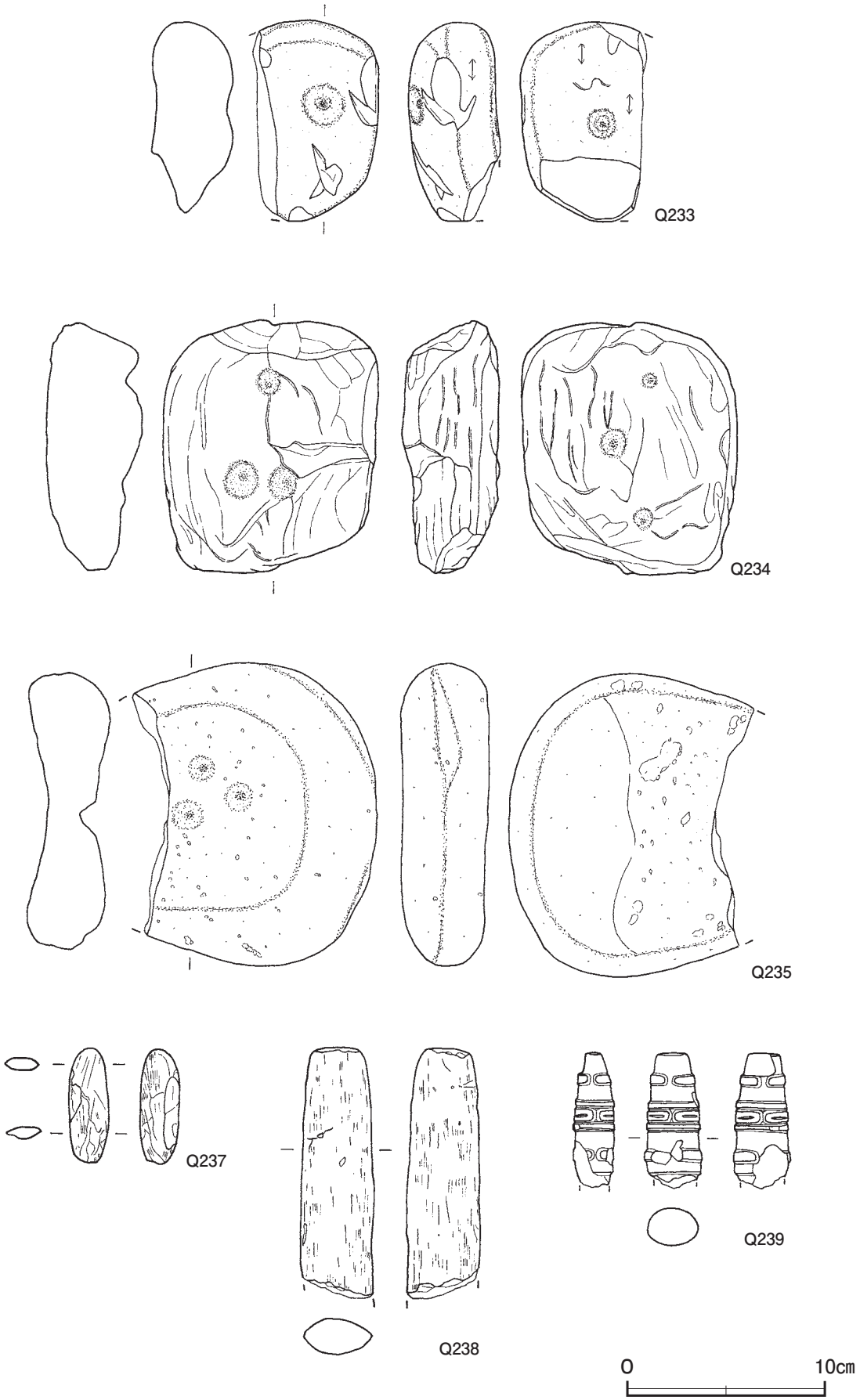
第 100 図　第５号包含層出土遺物実測図 ⑲



第 101 図　第５号包含層出土遺物実測図 ⑳



第 102 図　第５号包含層出土遺物実測図 ㉑



第 103 図　第５号包含層出土遺物実測図 ㉒

第５号包含層出土遺物観察表（第 82 ～ 103 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
438	縄文土器	深鉢	－	(10.1)	－	長石・石英	にぶい褐	普通	波状口縁頂部　頂部沈線による渦巻文・刺突文 口縁部・把手沈線による区画・刺突文　内面磨き	Ｇ５a5 区③	５％　PL13
439	縄文土器	深鉢	[19.8]	(10.8)	－	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	外・内面ヘラナデ	Ｆ５i3 区②	10%　PL13
440	縄文土器	深鉢	[20.7]	(17.1)	－	長石・石英	褐灰	普通	口縁部刻み目→縄文 RL →胴部沈線文→無文部磨き→括部横位の刻み目　内面磨き	Ｇトレンチ 第４層中	20%
441	縄文土器	深鉢	[21.1]	(16.8)	－	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部刻み目→弧線文→縄文 LR 充填→無文部磨き→小突起貼付　括部刻み目　内面刻み目	Ｇトレンチ 第７層中	５％
442	縄文土器	深鉢	[18.2]	(15.8)	－	長石・石英	黒褐	普通	波状口縁　口唇部ナデ→縄文 LR →波状口縁頂部紐線巻付→沈線文→縄文磨消　内面磨き	Ｇトレンチ 第３・４層中	５％
443	縄文土器	深鉢	[20.4]	(11.9)	－	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→上位横位の条線　内面磨き	Ｇトレンチ 第７層中	５％
444	縄文土器	深鉢	[23.0]	(5.9)	－	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口唇部ナデ→口縁部貼瘤後刻み目→口縁部・隆帯縄文 RL →隆帯間磨き　内面磨き	Ｆ５j2 区④ 第３層中	５％
445	縄文土器	深鉢	[22.2]	(7.3)	－	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ後紐線貼付　口縁部沈線・列点文 胴部縄文 LR →沈線で区画　内面磨き	覆土中	10%
446	縄文土器	深鉢	[25.0]	(9.4)	－	長石・石英・ 赤色粒子	橙	普通	口唇部突起貼付後ナデ→胴部中位凹線→上位横位の条線→下位磨き　内面磨き	Ｇ５a1 区④ 第４層中	５％
447	縄文土器	深鉢	[9.8]	(6.7)	－	長石・石英	にぶい橙	普通	外面ナデ→口縁部・括部横位の沈線後縦位の刻み目→縄文 RL　内面ナデ	Ｇ５b2 区① 第４層中	10%
448	縄文土器	深鉢	[11.6]	(3.9)	－	長石・石英・雲母	褐灰	普通	外面ナデ→縄文 LR →横位の沈線　内面ナデ	Ｆ５j5 区④ 第４層中	10%
449	縄文土器	深鉢	－	(9.4)	10.4	長石・石英	にぶい赤褐	普通	外面ヘラ削り後ナデ　内面ヘラナデ	Ｆ５j5 区①	20%　PL13
450	縄文土器	深鉢	－	(8.0)	9.0	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	外面下端ヘラ磨き　内面ナデ	Ｆ５j1 区③	20%
451	縄文土器	深鉢	－	(7.6)	4.5	長石・石英	明赤褐	普通	外面斜位の条線文　内面ナデ	Ｆ５j1 区③ Ｇ５a1 区③	10%
452	縄文土器	深鉢	－	(9.1)	5.8	長石・石英	にぶい橙	普通	外面ヘラ削り後ナデ　内面ナデ	Ｆ５i2 区③	30%　PL13
453	縄文土器	深鉢	－	(10.4)	3.0	長石・石英・ 赤色粒子	明赤褐	普通	縄文 RL →沈線文→内面ナデ	Ｄトレンチ 覆土中	30%
454	縄文土器	深鉢	－	(6.8)	3.7	長石・石英	黒褐 灰白	普通	胴部下端縦位のヘラナデ　内面ナデ	Ｇトレンチ 覆土中	20%
455	縄文土器	深鉢	－	(6.5)	2.5	長石・石英	にぶい褐	普通	外面ヘラ削り後ナデ　内面ナデ	Ｇ５a2 区④	10%
456	縄文土器	深鉢	－	(4.2)	5.0	長石・石英・ 赤色粒子	明赤褐	普通	外面ヘラ削り後ナデ　底部外面網代痕　内面ナデ	Ｇ５a1 区④	10%
457	縄文土器	深鉢	－	(3.8)	[4.6]	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい褐	普通	外面条線文　底部外面ヘラ削り　内面ヘラナデ	Ｆ５i4 区④	５％
458	縄文土器	深鉢	－	(3.8)	－	長石・石英	にぶい橙	普通	体部下端縄文 LR →沈線で区画　内面ナデ　底面多角形。	Ｆ５i3 区③ 第２層中	５％
459	縄文土器	鉢	[14.6]	10.7	6.0	長石・石英・ 赤色粒子	橙	普通	ナデ調整→縄文 RL　内面ナデ	Ｆ５i6 区④ 第５・６層中	40%
460	縄文土器	鉢	[17.6]	(6.8)	－	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部２条の沈線→沈線間斜位の刻み目　胴部縄文 RL →横位の沈線→区切り文　内面磨き	Ｇ５a2 区① 第４層中	５％
461	縄文土器	鉢	[6.8]	(5.7)	－	長石・石英	にぶい褐	普通	ナデ調整	Ｇ５b3 区③ 第５層中	20%
462	縄文土器	鉢	－	(4.9)	－	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	浅黄橙	普通	縄文→玉抱き三叉文　内面ナデ	Ｆ５j5 区① 第５層中	10%
463	縄文土器	鉢	－	(4.1)	[11.6]	長石・石英	橙	普通	胴部下端突起・瘤貼付後刻み目→縄文 LR →沈線で区画　内面ナデ	Ｇ５c4 区① 第５層中	10%
464	縄文土器	浅鉢	[11.8]	5.4	－	長石・石英	にぶい褐	普通	縄文 LR →口縁部横位及びクランク状の沈線文 内面ナデ	Ｆ５j2 区③	20%
465	縄文土器	台付鉢	7.8	(5.0)	－	長石・石英	にぶい赤褐	普通	胴部紐線貼付後鋸歯状に整形→縄文→沈線文→無文部磨き　内面磨き	Ｆ５j5 区④	70%　PL14
466	縄文土器	台付鉢	－	(6.2)	[11.0]	長石・石英	にぶい褐	普通	脚部沈線→沈線間列点文→無文部磨き　脚部内面ナデ	Ｆ５j4 区③	10%　PL14
467	縄文土器	台付鉢	－	(3.2)	7.0	長石・石英・ 赤色粒子	橙	普通	脚部外・内面ナデ	Ｆ５i4 区④	10%
468	縄文土器	台付土器	－	(4.5)	7.6	長石・石英	明赤褐	普通	脚部外・内面ナデ→外面からの穿孔２段 10 か所	Ｇ５b4 区④	20%　PL14
469	縄文土器	台付土器	－	(3.1)	－	長石・石英	橙	普通	胴部下端・脚部縄文 RL　内面ナデ	Ｇトレンチ 覆土中	40%
470	縄文土器	台付土器	－	(2.6)	[6.2]	長石・石英	橙	普通	脚部ナデ調整	Ｆ５j5 区① 第５層中	30%
471	縄文土器	異形 台付土器	－	(3.9)	－	長石・石英	橙	普通	沈線→隆帯刻み目→穿孔５か所　内面ナデ	Ｇ５a1 区①	30%　PL14
472	縄文土器	異形 台付土器	－	(3.5)	－	長石・石英	にぶい橙	普通	縄文 RL →沈線→刻み目　内面ナデ　穿孔痕	Ｇ５a1 区①	20%　PL14
473	縄文土器	異形 台付土器	－	(4.3)	－	長石・石英	黒褐	普通	縄文 LR →沈線で区画→突起貼付→外側からの穿孔→無文部磨き→内面ナデ	Ｄトレンチ 覆土中	10%
474	縄文土器	異形 台付土器。	－	(3.8)	－	長石・石英	にぶい橙	普通	突起貼付後隆帯刻み目→隆帯下沈線→下位斜位の沈線　内面ナデ　穿孔１か所	Ｆ５j2 区④ 第３層中	５％　PL14
475	縄文土器	壺	[12.0]	(4.7)	－	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ後突起貼付　器面磨滅顕著	Ｇトレンチ 第３・４層中	５％　PL14
476	縄文土器	壺	[10.6]	(3.3)	－	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口唇部ナデ→外・内面磨き	Ｆ５j2 区③ 第２・３層中	５％
477	縄文土器	注口土器	－	(6.0)	－	長石・石英	にぶい橙	普通	貼瘤後刻み目　隆帯上刻み目　隆帯下沈線　無文部磨き　内面磨き	Ｇ５a2 区④ 第４層中	５％
478	縄文土器	注口土器	－	(6.7)	－	長石・石英・ 赤色粒子	橙	普通	貼瘤→隆帯刻み目→無文部磨き　内面ナデ	Ｇ５a1 区④	10%
479	縄文土器	注口土器	－	(5.9)	－	長石・石英・雲母	褐灰	普通	注口貼付後穿孔→ナデ後縄文 RL →貼瘤後刻み目　内面ナデ	Ｆ５j1 ④ 覆土中	５％
480	縄文土器	注口土器	－	(5.4)	－	長石・石英	明赤褐	普通	貼瘤・注口削り後ナデ→沈線文	Ｆ５i4 区① 第２層中	５％
481	縄文土器	注口土器	－	(4.7)	－	長石・石英・ 赤色粒子	橙 灰褐	普通	注口貼付後ナデ→隆帯で区画→隆帯上刻み目 隆帯下沈線→無文部磨き　内面ナデ	Ｍトレンチ 覆土中	５％
482	縄文土器	注口土器	－	(4.3)	－	長石・石英	黒褐	普通	沈線→無文部磨き　内面ナデ	Ｇ５b2 区④ 第４層中	５％
483	縄文土器	注口土器	－	(4.4)	－	長石・石英	明赤褐	普通	貼瘤後刻み目→縄文 RL →沈線文→沈線間列点文　内面ナデ	Ｇ５b2 区① 第５層中	５％

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
484	縄文土器	釣手土器	－	(5.8)	－	長石・石英	にぶい赤褐	普通	縄文→沈線→刻み目　内面ナデ　穿孔１か所	Ｆ５j3 区④ 第５層中	５％
485	縄文土器	把手付土器	－	(5.3)	－	長石・石英	にぶい褐	普通	把手部分　沈線で区画→沈線間列点文　内面磨き	Ｆ５j4 区① 第５層中	５％
486	縄文土器	把手付土器	－	(5.1)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	把手貼付→外面ナデ→沈線文　内面ナデ	Ｇトレンチ 覆土中	５％
487	縄文土器	手燭形土器。	－	(2.2)	－	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	橙	普通	体部下端突起貼付後刻み目→底部外面沈線文	Ｇ５a1 区① 第３層中	５％　PL14
488	縄文土器	手燭形土器。	－	(4.4)	－	長石・石英	灰褐	普通	ナデ調整→縄文 RL →横位の沈線→三叉形・円形の透かし	Ｆ５j4 区① 第３層中	10％　PL14
489	縄文土器	ミニチュア土器	[5.6]	(1.9)	－	長石・石英・ 赤色粒子	明赤褐	普通	外面縄文→横位の沈線　内面ナデ	Ｆ５j1 区④ 第３層中	30％
490	縄文土器	ミニチュア土器	[7.8]	(4.1)	－	長石・石英	橙	普通	器面磨滅顕著　外面横位及び斜位の沈線	Ｇ５b2 区① 第５層中	20％
491	縄文土器	ミニチュア土器	[10.0]	(3.1)	－	長石・石英	にぶい黄橙 橙	普通	口唇部中央に沈線　外・内面ナデ	Ｆ５i4 区④ 第３層中	30％
492	縄文土器	ミニチュア土器	－	(2.9)	[4.0]	長石・石英	橙	普通	外・内面ナデ	Ｇ５a4 区④ 覆土中	30％
493	縄文土器	手捏土器	4.7	3.5	1.8	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	全面ナデ調整	Ｆ５j2 区①	100％　PL14
494	縄文土器	手捏土器	[5.3]	2.7	1.6	長石・石英	にぶい褐	普通	ヘラ削り後ナデ調整	Ｇ５a2 区② 第４層中	40％
495	縄文土器	手捏土器	－	(5.1)	6.8	長石・石英	橙	普通	ナデ調整　一部ヘラ削り　底部木葉痕	Ｄトレンチ 覆土中	80％　PL14

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1955	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐 黒褐	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →口縁部紐線文　口縁部内面凹線 内面磨き	Ｆ５j1 区④	
TP1956	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	口唇部ナデ→弧状の条線文→口縁部紐線文　内面ナデ	Ｇ５a1 区③	PL18
TP1957	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	橙	普通	口唇部ヘラ状工具による押圧文　胴部上位２条の平行沈線 →胴部中位沈線文→口縁部斜位の刻み目　内面ナデ	Ｆ５j2 区②	
TP1958	縄文土器	深鉢	長石・石英	浅黄橙	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →横位の平行沈線→沈線文・刺突文 →無文部磨き　内面磨き	Ｇ５a1 区④	
TP1959	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →口縁部４条の平行沈線　内面ナデ	Ｇ５a1 区②	PL18
TP1960	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい黄褐	普通	器面磨滅顕著　全面ナデ調整	Ｆ５i5 区①	
TP1961	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→沈線で区画→口縁部斜位・胴部羽状の細密な 沈線文充填　内面磨き	Ｆ５i5 区①	
TP1962	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口唇部ナデ→弧状の条線文　内面磨き	Ｇ５a2 区②	
TP1963	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	波状口縁　口唇部ナデ→縄文 LR →沈線で区画→口縁部・ 胴部刻み目　無文部磨き　内面磨き	Ｇ５a2 区④	
TP1964	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口唇部ナデ→粗い縄文→口縁部弧状の条線文→口縁部・胴 部上位紐線文　口縁部内面２条の凹線　内面磨き	Ｇ５a1 区①	
TP1965	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	褐	普通	波状口縁　口唇部ナデ→縄文 LR →沈線文→隆帯貼付後斜 位の刻み目　口縁部内面凹線　内面磨き	Ｇ５a1 区①	PL17
TP1966	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐	普通	口唇部ナデ→弧状の条線文　内面磨き	Ｆ５j3 区④	
TP1967	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口唇部ナデ→縄文 RL →隆帯下沈線後刺突文→胴部中位沈 線文　内面ナデ	Ｇ５a2 区④	PL18
TP1968	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	橙	普通	波状口縁頂部　口唇部ナデ→貼瘤後刻み目→縄文 RL →隆 帯下沈線→三叉文→無文部磨き　内面磨き	Ｇ５a1 区③	PL18
TP1969	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部ナデ→弧状の条線文　内面磨き	Ｆ５i2 区②	
TP1970	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐	普通	口唇部ナデ→粗い縄文→弧状の条線文→口縁部紐線文　口 縁部内面凹線　内面磨き	Ｆ５j1 区④	
TP1971	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・ 細礫	にぶい橙	普通	口唇部突起貼付後ナデ→胴部縄文 LR →横位の沈線・沈線 文→無文部磨き　内面ナデ	Ｆ５j4 区③	
TP1972	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒褐	普通	口唇部ナデ→縄文 RL →貼瘤後ナデ　内面磨き	Ｇ５a2 区②	
TP1973	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐	普通	ナデ調整→半截竹管による横位の沈線→斜位の沈線　内面 磨き	Ｇ５a2 区②	
TP1974	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・ 細礫	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→弧状の条線文　内面ナデ	Ｆ５i4 区①	
TP1975	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部突起貼付後刻み目→縄文 RL →沈線文→無文部磨き 内面ナデ	Ｆ５i2 区②	
TP1976	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	波状口縁頂部　口唇部ナデ→縄文→貼瘤後刻み目→隆帯下 沈線→無文部磨き　内面磨き	Ｆ５i3 区②	
TP1977	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	灰黄褐 にぶい褐	普通	口唇部ナデ→貼瘤→縄文 RL →口縁部押引文→胴部沈線で 区画→無文部磨き　内面磨き	Ｇ５a1 区①	
TP1978	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口唇部ナデ→隆帯縄文 RL →隆帯間磨き　内面磨き	Ｆ５i4 区④	
TP1979	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →口縁部紐線文　口縁部内面凹線 内面磨き	Ｇ５a1 区③	
TP1980	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→体部上位横位の平行沈線　口縁部縄文 RL 充 填　沈線間羽状の沈線文充填　内面ナデ	Ｇ５a1 区③	
TP1981	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	波状口縁　口唇部ナデ後頂部紐線巻付→縄文 LR →沈線文 →無文部磨き　内面磨き	Ｆ５j5 区①	
TP1982	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→粗い縄文→弧状の条線文→口縁部紐線文→斜 位の平行沈線　内面ナデ	Ｆ５i2 区②	
TP1983	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口縁部折り返し→縄文 LR →沈線文　内面磨き	Ｆ５i4 区②	
TP1984	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐	普通	波状口縁頂部　口唇部ナデ→貼瘤→隆帯縄文→隆帯間磨き 内面磨き	Ｇ５a1 区④	
TP1985	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	波状口縁頂部　貼瘤後刻み目→隆帯縄文 LR →隆帯下沈線 →無文部磨き　内面磨き	Ｆ５i2 区③	PL18
TP1986	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	口唇部突起貼付→沈線で区画→口縁部斜位の細密な沈線充 填　胴部列点充填	Ｆ５h5 区④	
TP1987	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部ナデ→貼瘤→口縁部縄文 RL →隆帯下沈線→無文部 磨き　内面磨き	Ｆ５i4 区④	

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP1988	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→隆帯縄文 RL →隆帯下沈線→無文部磨き　内面ナデ	F 5 j1 区④	
TP1989	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子・針状鉱物	にぶい褐	普通	口唇部ナデ→隆帯縄文 RL →隆帯下列点文　胴部沈線文内面磨き	G 5 a1 区④	
TP1990	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	褐	普通	口唇部ナデ→隆帯縄文 RL →隆帯下枠状区画文→区画内磨き　内面磨き	G 5 a1 区③	
TP1991	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄褐	普通	隆帯縄文 RL →貼瘤→隆帯下押引文　内面磨き	G 5 a2 区④	
TP1992	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐	普通	口唇部ナデ→粗い縄文→斜位の条線文→口縁部紐線文　内面磨き	G 5 a4 区①	
TP1993	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	褐	普通	口唇部ナデ→斜位の条線→口縁部紐線文　内面ナデ	G トレンチ	
TP1994	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部ナデ→縦位の平行沈線→沈線間横位の条線　内面ナデ	F 5 i4 区④	
TP1995	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部ナデ→横位の平行沈線→沈線間羽状の沈線文充填　貼瘤　内面磨き	F 5 i5 区①	
TP1996	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐	普通	口唇部ナデ→貼瘤→隆帯縄文 RL →隆帯下沈線→無文部磨き　内面磨き	F 5 i4 区②	
TP1997	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黒褐	普通	口唇部ナデ→隆帯縄文 RL →隆帯下沈線→隆帯間磨き　内面磨き	G 5 a1 区③	
TP1998	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐	普通	口縁部外反　口唇部ナデ→胴部縄文 RL →沈線文→無文部磨き　内面磨き	F 5 i4 区②	
TP1999	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	暗灰黄	普通	器面磨滅顕著　口唇部ナデ→貼瘤→隆帯縄文 RL →隆帯間磨き　内面磨き	D トレンチ 覆土中	
TP2000	縄文土器	深鉢	長石・石英	暗褐	普通	波状口縁　口唇部ナデ→貼瘤後刻み目　口縁部縄文 RL 隆帯刻み目→隆帯間磨き　内面磨き	D トレンチ 覆土中	
TP2001	縄文土器	深鉢	長石・石英・小礫	にぶい赤褐	普通	波状口縁　口唇部ナデ→隆帯縄文 RL →隆帯下方押引文→隆帯間磨き　内面磨き	F 5 i2 区③ 覆土中	
TP2002	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口唇部ナデ→弧状の条線文→紐線文→逆 V 字状の沈線→沈線間磨き　内面磨き	D トレンチ 覆土中	
TP2003	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐	普通	口唇部ナデ→吸盤状の瘤貼付後刻み目→隆帯縄文 RL →隆帯下一部押引文→隆帯間磨き　内面磨き	D トレンチ 覆土中	
TP2004	縄文土器	深鉢	長石・石英・細礫	にぶい褐	普通	波状口縁頂部　隆帯上紐線文→隆帯下沈線→三角区画内キャタピラ状の押圧文　内面磨き	D トレンチ 覆土中	
TP2005	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	波状口縁　口唇部ナデ→口縁部刻み目→縄文→沈線文　内面磨き	D トレンチ 覆土中	
TP2006	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐	普通	口唇部ナデ→隆帯刻み目→隆帯間沈線文　内面磨き	D トレンチ 覆土中	
TP2007	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	褐	普通	口唇部突起貼付後ナデ→横位の沈線→口縁部細密な羽状の沈線文充填　内面磨き	D トレンチ 覆土中	
TP2008	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→縄文 RL →横位の沈線で区画→口縁部・胴部沈線間列点文→無文部磨き　内面磨き　穿孔 1 か所	G トレンチ 覆土中	
TP2009	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	緩やかな波状口縁　口唇部ナデ→縄文 LR →紐線文　内面ナデ	G トレンチ 覆土中	
TP2010	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口唇部ナデ→隆帯縄文 RL →隆帯下方押引文→胴部沈線文→無文部磨き　内面磨き	G トレンチ 覆土中	
TP2011	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙 灰褐	普通	波状口縁　口唇部ナデ→隆帯縄文 RL →隆帯間磨き　内面磨き	G トレンチ 覆土中	
TP2012	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰黄褐	普通	口唇部ナデ→縄文 RL →横位の沈線→無文部磨き　口縁部内面凹線　内面磨き	G トレンチ 覆土中	
TP2013	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	赤褐	普通	口唇部ナデ→隆帯刻み目→隆帯下沈線→無文部磨き　内面磨き	G トレンチ 覆土中	
TP2014	縄文土器	深鉢	長石・石英・小礫	灰黄褐	普通	波状口縁頂部　口唇部ナデ→貼瘤→口縁部縄文　隆帯刻み目→隆帯間磨き　内面磨き	G トレンチ 覆土中	
TP2015	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →沈線文→無文部磨き　内面ナデ	G トレンチ 第 1 層中	
TP2016	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐	普通	波状口縁頂部　口唇部ナデ後貼瘤　頂部外面横位の沈線・内面縦位の沈線　口縁部縄文　内面磨き	G トレンチ 覆土中	
TP2017	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口唇部ナデ→口縁部紐線文→外面沈線文　内面磨き	G トレンチ 覆土中	
TP2018	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	普通	口唇部ナデ後突起貼付→縄文 LR →沈線で区画→無文部磨き　内面磨き	第 2 層中	
TP2019	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	口唇部ナデ後突起貼付→粗い縄文 LR →沈線文→無文部磨き　内面磨き	G トレンチ 第 3・4 層中	
TP2020	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→貼瘤後刻み目→隆帯縄文 LR →隆帯下沈線→無文部磨き　内面磨き	G トレンチ 第 3・4 層中	
TP2021	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→横位の平行沈線→沈線間羽状の沈線文充填と磨きを交互に施す　内面ナデ	G トレンチ 第 3・4 層中	
TP2022	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	波状口縁　口唇部ナデ→縄文 LR →沈線文→縄文磨消　口縁部内面 2 条の凹線　内面ナデ	G トレンチ 第 3・4 層中	
TP2023	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	波状口縁　器面磨滅顕著　口唇部ナデ→縄文 LR →沈線文	G トレンチ 第 3・4 層中	
TP2024	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子・細礫	にぶい褐	普通	縄文 RL →沈線文→無文部磨き→列点文　内面ナデ	G トレンチ 第 3・4 層中	
TP2025	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	口唇部ナデ後突起貼付→縄文 RL →沈線文→無文部磨き→縦位の蛇行沈線　内面磨き	G トレンチ 第 5 層中	
TP2026	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒褐	普通	胴部上位・括部横位の沈線→口縁部・胴部中位斜位の条線→無文部磨き　内面磨き	G トレンチ 第 7 層中	
TP2027	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	暗灰黄	普通	口唇部ナデ後紐線貼付→沈線文→列点充填　内面ナデ	G トレンチ 第 7 層中	
TP2028	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	口唇部ナデ→弧状の条線文→紐線文→斜位の平行沈線→沈線間磨き　内面磨き	覆土中	
TP2029	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	波状口縁頂部　口唇部ナデ後貼瘤→隆帯縄文→隆帯間磨き　頂部外・内面沈線　内面ナデ	覆土中	
TP2030	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰黄褐	普通	波状口縁　頂部紐線巻付　内面磨き	覆土中	
TP2031	縄文土器	深鉢	長石・石英・細礫	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →沈線文→一部縄文磨消　内面ナデ	覆土中	
TP2032	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐	普通	口唇部ナデ→貼瘤→隆帯縄文 LR →隆帯下沈線→無文部磨き　内面ナデ	覆土中	
TP2033	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐	普通	口唇部ナデ→紐線文→弧状の条線文→縦位の平行沈線→沈線間磨き　内面磨き	F 5 j1 区④ 覆土中	
TP2034	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口唇部ナデ→弧状の条線文→紐線文→縦位の沈線→沈線間縄文充填　内面ナデ	F 5 i3 区① 覆土中	

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP2035	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→口縁部縄文 LR →入組沈線文　内面磨き	F 5 i2 区③ 覆土中	
TP2036	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい黄褐	普通	口唇部ナデ→斜位の条線文→縦位の平行沈線→沈線間磨き 内面磨き	F 5 i3 区② 第 1 層中	
TP2037	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →沈線文→一部縄文磨消　内面ナデ	F 5 i2 区③ 第 1 層中	
TP2038	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰黄褐	普通	口唇部ナデ→突起貼付後刻み目→縄文 LR →沈線文→一部縄文磨消　内面ナデ	F 5 i3 区② 第 1 層中	
TP2039	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →沈線文→縄文磨消　口縁部列点文 内面磨き	F 5 j1 区④ 第 1 層中	
TP2040	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰黄褐	普通	口唇部ナデ後刻み目→横位の沈線→羽状の細密な沈線文充填→横位の沈線上刻み目→無文部磨き　内面ナデ	F 5 h5 区④ 第 1 層中	
TP2041	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	褐	普通	口唇部ナデ後一部刻み目→沈線で区画→細密な沈線充填→沈線上刻み目→無文部磨き　内面磨き	F 5 i3 区② 第 1 層中	
TP2042	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→縄文→入組沈線文→無文部磨き　刺突 1 か所 内面磨き	F 5 j1 区④ 第 1 層中	
TP2043	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	口唇部ナデ→縄文 RL →半截竹管による沈線文→無文部磨き→口縁部列点文 1 条　穿孔 1 か所　内面磨き	G 5 a1 区③ 第 1 層中	
TP2044	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→弧状の条線文→紐線文→縦位の平行沈線→沈線間磨き　内面ナデ	F 5 i4 区② 第 2 層中	PL18
TP2045	縄文土器	深鉢	長石・赤色粒子	橙	普通	波状口縁頂部　穿孔後貼瘤→隆帯縄文 RL →隆帯間磨き 内面磨き	F 5 j2 区① 第 2 層中	
TP2046	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ→貼瘤→隆帯縄文 LR →隆帯間磨き後沈線で区画　内面磨き	F 5 h4 区③ 第 2 層中	
TP2047	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ後刻み目→沈線で区画→細密な沈線・刻み目充填　内面ナデ	F 5 i4 区② 第 2 層中	PL19
TP2048	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰褐	普通	口唇部ナデ後突起貼付→縄文 RL →貼瘤後刻み目→沈線文→一部縄文磨消　内面ナデ	F 5 i5 区④ 第 2 層中	PL19
TP2049	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ後突起貼付→口縁部羊歯状文　内面磨き	F 5 i4 区① 第 2 層中	
TP2050	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	波状口縁　口唇部ナデ→貼瘤後刻み目→縄文→隆帯下沈線 内面ナデ	F 5 j1 区③ 第 2 層中	
TP2051	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→口縁部縄文 LR →口唇部突起貼付後刻み目→沈線文　内面ナデ	F 5 h4 区③ 第 2 層中	
TP2052	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→突起貼付後刻み目→縄文→沈線文→口縁部列点文　内面ナデ	F 5 i4 区② 第 2 層中	
TP2053	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部小波状に押圧→口縁部半截竹管による横位の平行沈線→沈線間斜位の列点 2 条　中位縄文 LR　内面磨き	F 5 i3 区④ 第 2 層中	
TP2054	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →横位の沈線→縄文磨消　内面磨き	F 5 j2 区③ 第 2 ・ 3 層中	
TP2055	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	口唇部ナデ→弧状の条線文　内面ナデ	G 5 a2 区② 第 2 ・ 3 層中	
TP2056	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	波状口縁　口縁部外・内面刻み目→外面縄文 RL →沈線文 内面ナデ	F 5 j3 区④ 第 2 ・ 3 層中	
TP2057	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→隆帯縄文 RL →隆帯下方列点→隆帯間磨き 内面磨き	F 5 j3 区④ 第 2 ・ 3 層中	
TP2058	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	波状口縁頂部　貼瘤後刻み目→口縁部縄文 LR →隆帯刻み目→隆帯下沈線→隆帯間磨き　内面磨き	F 5 j3 区① 第 2 ・ 3 層中	
TP2059	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	波状口縁　縄文 RL →沈線文→口縁部・括部押引文→無文部磨き　内面磨き	G 5 a2 区① 第 3 層中	PL18
TP2060	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口唇部ナデ→斜位の条線→縦位の平行沈線　内面ナデ	G 5 a2 区③ 第 3 層中	
TP2061	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→口縁部横位の平行沈線→沈線間押引文　胴部沈線文→縄文充填　内面磨き	G 5 a2 区① 第 3 層中	
TP2062	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口唇部ナデ→弧状の条線文→縦位の平行沈線→沈線間磨き→紐線文　内面磨き	F 5 i3 区③ 第 3 層中	
TP2063	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部ナデ→沈線で区画→細密な沈線充填　内面ナデ	F 5 i3 区③ 第 3 層中	
TP2064	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →横位の沈線で区画→入組文→縄文磨消　内面磨き	F 5 i5 区② 第 3 層中	PL19
TP2065	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	緩やかな波状口縁　口唇部ナデ→縄文 LR →半截竹管による沈線文　内面磨き	F 5 j6 区② 第 3 層中	PL18
TP2066	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	普通	口唇部ナデ→口縁部縄文 LR →括部横位の沈線　内面磨き	G 5 a2 区④ 第 3 層中	
TP2067	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	普通	口唇部ナデ→口縁部横位の沈線後刻み目　胴部縄文→沈線文→縄文磨消　内面磨き	G 5 a1 区③ 第 3 層中	
TP2068	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	褐灰	普通	口唇部突起貼付後ナデ→括部沈線　胴部沈線文　内面磨き	G 5 a2 区① 第 3 層中	
TP2069	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ後突起貼付→縄文 RL →沈線文→縄文磨消　内面磨き	G 5 b1 区② 第 3 層中	
TP2070	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙 褐灰	普通	波状口縁頂部　口唇部ナデ→貼瘤後刻み目→口縁部縄文→沈線→沈線間磨き　内面磨き	F 5 i3 区④ 第 3 層中	
TP2071	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	口唇部ナデ後突起貼付・沈線　口縁部横位の沈線　内面磨き	G 5 a1 区③ 第 3 層中	
TP2072	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→突起・瘤貼付→口縁部縄文 RL　隆帯刻み目→隆帯下方列点文→穿孔 1 か所　内面磨き	F 5 i4 区③ 第 3 層中	PL18
TP2073	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	波状口縁頂部　口唇部ナデ→縄文→沈線文→無文部磨き 頂部紐線巻付　内面磨き　穿孔 2 か所	G 5 a1 区② 第 3 層中	
TP2074	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部ナデ→横位の沈線で区画→沈線間三叉文→口縁部・胴部中位縄文 LR 充填　内面磨き	F 5 i2 区③ 第 3 ・ 4 層中	PL19
TP2075	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ後突起貼付→縄文 LR →沈線文→無文部磨き 内面磨き	F 5 j4 区① 第 4 層中	PL19
TP2076	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	波状口縁　口唇部ナデ→縄文→沈線による区画文　円形沈線文・中央に列点→縄文磨消　内面磨き	G 5 b2 区④ 第 4 層中	
TP2077	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →胴部上位横位の沈線 2 条　中位入組文→縄文磨消　内面ナデ	F 5 j3 区② 第 4 層中	PL19
TP2078	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部ナデ→縄文 RL →口縁部横位の列点文 2 条　胴部沈線による区画→無文部磨き　内面磨き	G 5 a1 区④ 第 4 層中	
TP2079	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	波状口縁頂部　口唇部ナデ→縄文 LR →沈線文・押引文 内面磨き	G 5 b2 区④ 第 4 層中	
TP2080	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部ナデ後突起貼付→縄文 RL →沈線文　内面磨き	G 5 a2 区① 第 4 層中	
TP2081	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐 褐	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →沈線文→縄文磨消→紐線文　口縁部内面凹線　内面磨き	G 5 a2 区① 第 4 層中	

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP2082	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙 にぶい赤褐	普通	口唇部ナデ後突起貼付→縄文 RL →沈線文→無文部磨き 内面磨き	G５a2 区④ 第４層中	
TP2083	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→縄文→沈線文→縄文磨消→紐線文　口縁部内面凹線　内面磨き	G５a2 区③ 第４層中	
TP2084	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→三叉文・渦巻文→縄文充填→無文部磨き　内面磨き	F５j4 区① 第４層中	
TP2085	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→横位の沈線→沈線間列点文・羊歯状文　内面ナデ	F５i5 区① 第４層中	
TP2086	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	波状口縁頂部　口唇部中央に沈線→外面縄文→沈線文　口縁部及び頂部に穿孔　内面ナデ	G５a1 区④ 第４層中	
TP2087	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口唇部突起貼付後刻み目　外面隆帯貼付後列点文→縄文→沈線文　内面ナデ	F５j5 区③ 第４層中	
TP2088	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部ナデ後突起貼付→口縁部羽状の沈線→沈線文　胴部縄文 LR →沈線文　内面磨き	F５j6 区① 第５層中	
TP2089	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	波状口縁　口唇部ナデ→縄文 LR →半截竹管による沈線文 内面磨き	G５a2 区④ 第５層中	
TP2090	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →横位の沈線で区画→弧状の沈線・唐草文充填→無文部磨き　内面磨き	F５j5 区① 第５層中	PL18
TP2091	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙 橙	普通	口唇部ナデ→外面削り後ナデ　内面ナデ	F５j4 区① 第５層中	製塩土器
TP2092	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙 褐	普通	波状口縁頂部　貼瘤後頂部刻み目・沈線・列点文→隆帯縄文→隆帯下沈線→無文部磨き　内面磨き	F５i6 区④ 第５・６層中	PL19
TP2093	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部突起貼付後刻み目→横位沈線　入組文→縄文 LR 充填　内面磨き	F５i6 区④ 第５・６層中	
TP2094	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	波状口縁頂部　貼瘤後刻み目→口縁部縄文 RL →隆帯刻み目→無文部磨き　口縁部内面隆帯貼付　内面磨き	G５a4 区①	
TP2095	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	粗い縄文→条線→紐線文　内面ナデ	G５a2 区④	
TP2096	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	縄文 LR →沈線文→一部縄文磨消　内面磨き	G５a1 区④	
TP2097	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	縄文 RL →枠状区画文→胴部下半斜位の条線文　内面ナデ	F５j5 区④	
TP2098	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	沈線文→無文部磨き　内面磨き	F５j3 区①	
TP2099	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	縄文 LR →沈線文　内面ナデ	G５a2 区④	
TP2100	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐	普通	縄文 RL →沈線文→列点文→無文部磨き　内面磨き	F５i3 区③	
TP2101	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明褐 褐灰	普通	縄文 LR →半截竹管による区画文　内面ナデ	F５j1 区③	
TP2102	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄褐	普通	器面磨滅顕著　隆帯縄文 RL →貼瘤→無文部磨き　内面磨き	F５i3 区④	
TP2103	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐	普通	縄文 RL →沈線文→無文部磨き　内面ナデ	D トレンチ 覆土中	
TP2104	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰黄褐	普通	縄文 RL →沈線文→隆帯刻み目→貼瘤→無文部磨き　内面磨き	D トレンチ 覆土中	
TP2105	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	貼瘤後刻み目→隆帯刻み目→無文部磨き　内面ナデ	D トレンチ 第４層中	
TP2106	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄橙	普通	沈線で区画→沈線上に刻み目→細密な沈線充填→無文部磨き　内面磨き	第１層中	
TP2107	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	貼瘤後刻み目→隆帯縄文 LR →隆帯下沈線→無文部磨き 内面ナデ	M トレンチ 覆土中	
TP2108	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子・細礫	橙	普通	縄文 LR →沈線文→無文部磨き　内面ナデ	覆土中	
TP2109	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	縄文 LR →沈線文→括部２条の平行沈線後縦位の刻み目→無文部磨き　内面磨き	G５a4 区④ 覆土中	
TP2110	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	縄文 RL →横位の沈線で区画→無文部磨き→沈線文　内面磨き	G５a1 区② 第１層中	
TP2111	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	縄文 LR →横位の沈線で区画→沈線間羊歯状文　内面ナデ	F５j2 区① 第１層中	PL19
TP2112	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	普通	縄文 LR →沈線文→無文部磨き→貼瘤　内面磨き	F５h5 区③ 第１層中	
TP2113	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口縁部ナデ→縄文 LR →横位の沈線　内面ナデ	F５i3 区② 第１層中	
TP2114	縄文土器	深鉢	長石・石英	黄橙	普通	貼瘤→隆帯刻み目→隆帯間磨き　内面磨き	F５i2 区③ 第１層中	
TP2115	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄橙	普通	縄文 LR →縦位の蛇行沈線→一部縄文磨消　内面磨き	F５j2 区④ 第１層中	
TP2116	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	入組文→縄文充填→括部列点文　内面磨き	F５j2 区② 第２・３層中	
TP2117	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	外面沈線で区画→細密な羽状の沈線文充填→無文部磨き 内面磨き	G５b2 区① 第４層中	
TP2118	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	普通	胴部上位隆帯下沈線　中位隆帯一部縄文 RL →隆帯下沈線→無文部磨き　内面ナデ	F５j3 区② 第４層中	
TP2119	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	縄文→半截竹管による蛇行沈線　内面磨き	F５j5 区④ 第５層中	
TP2120	縄文土器	鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→口唇部から口縁部にかけて列点文３条　縄文 LR →入組沈線文	G５a1 区④	PL19
TP2121	縄文土器	鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部内傾　口縁部隆帯貼付後刻み目　胴部中位縄文 RL →横位の平行沈線→区切り文付加　内面磨き	G５a2 区①	PL18
TP2122	縄文土器	鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	波状口縁頂部　口唇部突起貼付→縄文　内面隆帯貼付→沈線	G５a1 区①	PL18
TP2123	縄文土器	鉢	長石・石英・小礫	灰黄褐	普通	縄文 LR →口縁部２条の平行沈線→沈線間列点文→一部縄文磨消　内面磨き	F５j2 区③	PL19
TP2124	縄文土器	鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄褐	普通	口縁部に稜　外・内面磨き	G５a4 区②	
TP2125	縄文土器	鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部ナデ→貼瘤後刻み目→隆帯縄文 LR・刻み目→隆帯間沈線・磨き　内面磨き	G トレンチ 第３・４層中	
TP2126	縄文土器	鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →沈線文→無文部磨き　内面磨き	F５h6 区④ 第１層中	
TP2127	縄文土器	鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	口縁部に稜　口唇部工具による斜位の押圧→外・内面磨き	G５f2 区① 第２層中	
TP2128	縄文土器	鉢	長石・石英	褐灰	普通	口唇部ナデ→貼瘤→口縁部押引文　胴部沈線文→縄文 RL 充填→無文部磨き　内面磨き	G５a1 区① 第３層中	

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP2129	縄文土器	鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →口唇部太い刻み目→横位の沈線→無文部磨き　内面磨き	G 5 a1 区③ 第３層中	
TP2130	縄文土器	鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部ナデ→沈線文　内面ナデ	G 5 a2 区① 第３層中	
TP2131	縄文土器	鉢	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	胴部から底部沈線文→胴部帯羽状の沈線文→下端刻み目　内面ナデ　底部外面方形ヵ	G トレンチ 第５層中	
TP2132	縄文土器	鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	波状口縁　縄文 RL →沈線で区画→縄文磨消　内面磨き	D トレンチ 覆土中	
TP2133	縄文土器	鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	縄文 LR →沈線で区画　三叉文→縄文磨消　内面磨き	G 5 a2 区④ 第３層中	
TP2134	縄文土器	浅鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口唇部ナデ→縄文 RL →口縁部・胴部中位横位の沈線→口縁部列点文　胴部下位磨き　内面磨き	G 5 a1 区②	
TP2135	縄文土器	浅鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部ナデ→縄文 LR →横位の沈線→無文部磨き　内面磨き	G 5 a1 区③	
TP2136	縄文土器	浅鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部ナデ後突起貼付→縄文→口縁部２条の平行沈線　胴部沈線文　内面磨き	G 5 b3 区④	
TP2137	縄文土器	浅鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部貼瘤後羽状の刻み目　口縁部内面階段状の凹線　外・内面磨き	D トレンチ 覆土中	
TP2138	縄文土器	浅鉢	長石・石英	明赤褐	普通	口唇部ナデ後貼瘤→隆帯刻み目→隆帯下沈線→胴部下端縄文充填→無文部磨き　内面磨き	G トレンチ 覆土中	PL18
TP2139	縄文土器	浅鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	器面磨滅顕著　口唇部ナデ→縄文 LR →沈線文	D トレンチ 第４層中	
TP2140	縄文土器	浅鉢	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部折り返し→縄文 LR →横位の沈線→無文部磨き　内面磨き	F 5 i3 区② 第１層中	
TP2141	縄文土器	浅鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部押圧による小波状　口縁部内面に稜→列点文１条　中位横位の平行沈線５条→沈線間刻み目・縄文 LR 充填	G 5 f2 区① 第２層中	
TP2142	縄文土器	浅鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	波状口縁　口唇部ナデ→縄文 LR →沈線文→一部縄文磨消　内面磨き	F 5 h5 区④ 第２層中	
TP2143	縄文土器	浅鉢	長石・石英・雲母	灰褐	普通	口唇部ナデ後突起貼付→縄文 LR →沈線文→無文部磨き　口縁部内面凹線　内面磨き	F 5 j3 区④ 第２・３層中	
TP2144	縄文土器	浅鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	口唇部ナデ後突起・紐線貼付→外面削り後ナデ→口縁部弧状の条線文　内面ナデ	G 5 a1 区② 第３層中	
TP2145	縄文土器	浅鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	口唇部ナデ→外面上位横位の沈線　中位有段･刻み目　外･内面磨き	F 5 j2 区④ 第３層中	
TP2146	縄文土器	浅鉢	長石・石英・赤色粒子	淡橙 灰褐	普通	波状口縁頂部　口唇部ナデ→縄文 RL →口縁部平行沈線→沈線間刻み目　内面磨き	F 5 j2 区④ 第３層中	
TP2147	縄文土器	浅鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口唇部ナデ後刻み目→沈線文→縄文 LR 充填→無文部磨き　内面磨き	G 5 a2 区② 第４層中	
TP2148	縄文土器	浅鉢	長石・石英・雲母	黒褐	普通	口唇部中央に沈線　口縁部幅の広い刻み目→縄文 LR →横位の沈線　内面ナデ	G 5 b4 区① 第５層中	
TP2149	縄文土器	台付鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部　口唇部ナデ後刻み目→胴部斜位の条線　内面磨き	F 5 j2 区① 第２層中	
TP2150	縄文土器	台付鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	横位の沈線→斜位の条線文→鉢部下端刻み目　内面磨き	D トレンチ 覆土中	
TP2151	縄文土器	台付鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	鉢部下位弧状の条線文→斜位の刻み目　無文部磨き　内面磨き	G 5 b2 区④ 第４層中	
TP2152	縄文土器	壺	長石・石英・赤色粒子	褐灰	普通	口縁部縄文 LR →外・内面磨き	F 5 j2 区② 第２・３層中	
TP2153	縄文土器	壺	長石・石英	褐灰	普通	口縁部くの字に外反　口唇部ナデ→口縁部縄文 LR →胴部上位鎖状の隆帯　中位縄文 LR →沈線文　内面ナデ	G 5 a2 区④ 第４層中	

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	色調・胎土	特　　徴	出土位置	備　考
DP215	土玉	径 1.8	孔径 0.3 ～ 0.4	1.6	4.11	にぶい橙 長石・石英	ナデ調整　一方向からの穿孔	G トレンチ 覆土中	PL20
DP216	垂飾品	3.4	3.6	1.6	15.3	にぶい褐 長石・石英	堀之内式土器穿孔部分利用　周縁部粗割り後研磨調整	G トレンチ 覆土中	
DP217	垂飾品	2.7	2.8	0.9	6.43	橙 長石・石英・赤色粒子	縄文土器穿孔部分利用　周縁部粗割り後研磨調整	G トレンチ 覆土中	
DP218	土版	(5.6)	(5.4)	2.4	(61.7)	褐灰 長石・石英	ナデ成形→沈線文	G 5 c4 区①	
DP219	土版	(5.4)	6.4	1.2	(40.6)	にぶい黄橙 長石・石英	ナデ調整→沈線文→列点充填	G 5 b2 区 第５層中	PL21
DP220	土偶	(4.5)	(7.0)	(1.8)	(22.1)	橙 長石・石英	山形土偶頭部　ナデ成形→目・鼻貼付　沈線で区画→列点充填　両方向からの穿孔１か所（未貫通）	F 5 i5 区① 第１層中	PL20
DP221	土偶	(7.8)	(8.1)	(3.7)	(149.1)	橙 長石・石英	ミミズク土偶頭部　ナデ成形後隆帯貼付→隆帯下を中心に列点文	G 5 a3 区①	PL20
DP222	土偶	(6.6)	9.7	9.2	(197.5)	にぶい橙 長石・石英	遮光器土偶頭部　中空構造　ナデ成形→隆帯・瘤貼付　沈線で目・口・頭髪を表現　口部穿孔	G 5 c4 区①	PL22
DP223	土偶	(7.6)	(7.3)	(3.7)	(204.5)	にぶい橙 長石・石英・雲母	胴部　ナデ調整→縄文→沈線文	G 5 a2 区④	PL20
DP224	土偶	(5.4)	(4.5)	(1.3)	(25.5)	明赤褐 長石・石英	ミミズク土偶脚部　ナデ成形→縄文 RL →横位の沈線	G 5 a2 区② 第４層中	
DP225	土偶	(4.1)	(3.7)	(3.7)	(44.1)	黒褐 長石・石英・雲母	ミミズク土偶脚部　ナデ成形→沈線	D トレンチ 覆土中	
DP226	土偶	(3.5)	(3.0)	(5.1)	(32.3)	にぶい橙 長石・石英	右足　ナデ調整→刻み目で指を表現	G 5 b3 区④ 第５層中	
DP227	土偶	(7.6)	(5.9)	(6.2)	(222.4)	黒褐　にぶい橙 長石・石英	大形ミミズク土偶右脚部ヵ　中空構造　隆帯貼付後ナデ→隆帯間横位の沈線→隆帯上刻み目	G 5 b3 区①	PL21
DP228	土偶	(9.0)	(6.9)	(3.0)	(111.3)	にぶい赤褐 長石・石英	ミミズク土偶右脚部　ナデ成形後縄文 RL →沈線　隆帯上刻み目	F 5 j4 区②	PL21
DP229	土偶	(4.9)	(2.1)	(4.2)	(25.0)	橙 長石・石英・赤色粒子	脚部　ナデ成形	G 5 b4 区② 第４層中	
DP230	土偶	(4.9)	(3.2)	(3.6)	(40.5)	橙 長石・石英	左脚部　ナデ成形→縄文→沈線　刻み目	覆土中	PL21
DP231	土偶	(5.3)	(2.4)	(1.8)	(25.3)	明赤褐 長石・石英	脚部　ナデ成形→沈線	覆土中	
DP232	土偶	(3.3)	(2.0)	(2.6)	(14.4)	橙 長石・石英	ミミズク土偶脚部　ナデ成形→沈線	F 5 i3 区③	
DP233	土偶	(2.8)	(4.0)	(3.7)	(29.8)	橙 長石・石英・赤色粒子	脚部　ナデ成形	G 5 c5 区① 第４層中	
DP234	円盤	7.7	7.7	1.4	79.4	にぶい橙 長石・石英	ナデ調整→穿孔５か所	F 5 j2 区②	PL20

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	色調・胎土	特　　徴	出土位置	備　考
DP235	円盤	(7.2)	(3.7)	2.3	(62.5)	にぶい橙 長石・石英	ナデ調整　穿孔１か所	Ｇ５a2 区④ 第３層中	
DP236	円盤	(5.3)	(4.0)	0.9	(19.2)	にぶい橙 長石・石英・雲母	ナデ調整　穿孔５か所	Ｇトレンチ 第３・４層中	PL20
DP237	円盤	(4.0)	(3.7)	1.4	(22.1)	黒褐 長石・石英	ナデ調整　穿孔５か所	Ｇ５a2 区② 第１・２層中	
DP238	土器片錘	3.9	3.6	1.1	19.7	にぶい橙 長石・石英	縄文土器利用　周縁部粗割り後両端に紐掛け部を作出	Ｇトレンチ 覆土中	
DP239	土器片錘?	8.7	3.9	1.0	41.3	にぶい橙 長石・石英	縄文土器利用　周縁部粗割り後研磨調整　長軸方向上・下に掛け部を作出	Ｆ５j4 区③ Ｇ５a4 区③ 第５層中	
DP240	土器片円盤	3.2	3.2	1.0	12.5	にぶい橙 長石・石英	縄文土器深鉢口縁部利用　周縁部粗割り後研磨調整	Ｇトレンチ 覆土中	
DP241	土器片円盤	3.8	3.7	0.8	11.8	にぶい橙 長石・石英	縄文土器利用　周縁部粗割り後研磨調整	Ｆ５j2 区① 第２層中	
DP242	土器片円盤	3.8	4.3	0.8	14.2	にぶい橙 長石・石英・赤色粒子	縄文土器利用　周縁部粗割り	Ｅトレンチ 覆土中	
DP243	土器片円盤	4.0	4.1	1.0	17.6	にぶい黄褐 長石・石英	縄文土器利用　周縁部粗割り後研磨調整	Ｆ５j2 区① 第２層中	
DP244	土器片円盤	4.5	4.6	1.1	23.4	灰褐 長石・石英	周縁部粗割り後研磨調整　穿孔１か所	Ｇ５b4 区①	PL22
DP245	土器片円盤	5.5	5.2	1.3	28.2	にぶい赤褐 長石・石英・雲母	安行１式土器深鉢利用　周縁部粗割り	Ｆ５h6 区② 第３・５層中	PL22
DP246	土器片円盤	(5.2)	(4.5)	1.3	(25.8)	明赤褐 長石・石英・赤色粒子	縄文土器底部利用　周縁部粗割り	Ｆ５f6 区④ 第１層中	
DP247	土器片円盤	5.1	5.2	1.3	30.9	橙 長石・石英	安行２式土器利用　周縁部粗割り後研磨調整	Ｆ５h5 区④ 第２層中	
DP248	土器片円盤	7.0	6.6	2.1	69.0	明赤褐 長石・石英	安行１式土器深鉢利用　周縁部粗割り後研磨調整　中央部穿孔	Ｇ５a1 区② 第４層中	
DP249	土器片円盤	5.3	4.6	2.1	35.5	橙 長石・石英	安行２式土器利用　周縁部粗割り後研磨調整	Ｇトレンチ 第５層中	PL22
DP250	土器片円盤	5.7	(5.0)	1.1	(33.2)	灰 長石・石英	縄文土器底部利用　周縁部粗割り	Ｇ５b3 区③ 第４層中	
DP251	土器片円盤	5.5	5.5	0.9	31.0	にぶい赤褐 長石・石英・雲母	安行２式粗製土器利用　周縁部粗割り後研磨調整	Ｆ５i6 区① 第５層中	PL22
DP252	土器片円盤	6.5	5.9	1.3	40.7	橙 長石・石英	縄文土器底部利用　周縁部粗割り後研磨調整	Ｆ５j5 区① 第４層中	
DP253	土器片円盤	7.2	(6.6)	1.2	(54.9)	橙 長石・石英	縄文土器底部利用	Ｆ５h6 区④ 第５層中	
DP254	土器片円盤	9.9	9.5	2.1	212.9	にぶい橙 長石・石英・雲母	縄文土器深鉢底部利用　周縁部粗割り後一部研磨調整	Ｇ５b2 区③	
DP255	土器片円盤	3.5	3.8	0.8	14.3	にぶい赤褐 長石・石英	縄文土器利用　周縁部粗割り後研磨調整	Ｆ５i3 区④ 覆土中	
DP256	土器片円盤	3.5	3.8	0.7	11.6	にぶい橙 長石・石英	縄文土器利用　周縁部粗割り	Ｇ５a4 区④ 覆土中	
DP257	土器片円盤	4.4	3.2	0.9	16.3	にぶい橙 長石・石英・赤色粒子	縄文土器利用　周縁部粗割り後研磨調整	Ｆ５i2 区③ 覆土中	
DP258	土器片円盤	4.2	4.3	1.8	22.4	褐灰 長石・石英	安行２式土器利用　周縁部粗割り	Ｇ５a2 区① 第２層中	
DP259	土器片円盤	4.4	4.7	0.7	17.3	橙 長石・石英	縄文土器利用　周縁部粗割り後研磨調整	覆土中	
DP260	土器片円盤	5.0	4.9	0.7	18.4	にぶい褐 長石・石英	縄文土器底部利用　周縁部粗割り	Ｇ５a2 区④ 第３層中	
DP261	土器片円盤	4.9	5.2	1.0	24.2	にぶい赤褐 長石・石英	縄文土器利用　周縁部粗割り後研磨調整	Ｆ５h5 区④ 第１層中	
DP262	土器片円盤	4.4	5.0	1.1	26.4	にぶい褐 長石・石英	堀之内式土器深鉢利用　周縁部粗割り	Ｇ５a3 区④ 第４層中	PL22
DP263	土器片円盤	5.5	5.8	1.0	36.0	にぶい褐 長石・石英	縄文土器利用　周縁部粗割り	Ｆ５j1 区① 第２層中	
DP264	不明	(6.4)	(4.0)	1.7	(32.4)	橙 長石・石英	ナデ成形後丁寧な磨き　二等辺三角形状　片面を三角形状に抉る	Ｇ５a2 区④ 第４層中	

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q 205	鏃	(2.2)	1.2	0.4	(0.60)	チャート	有茎鏃　両面剥離調整	Ｆ５i5 区①	PL23
Q 206	鏃	2.4	1.6	0.4	1.06	チャート	表・裏面剥離調整	覆土中	PL23
Q 207	鏃	3.1	1.4	0.5	1.44	チャート	有茎鏃　表・裏面剥離調整	Ｇ５a1 区③ 第１層中	PL23
Q 208	打製石斧	10.2	7.3	2.0	162.5	安山岩	分銅形　扁平な礫を素材とし，両面調整	Ｇ５a1 区③	PL23
Q 209	磨製石斧	(4.5)	(3.0)	0.7	(18.6)	粘板岩	定角式　研磨調整　基部及び刃部欠損	Ｆ５j2 区② Ｆ５j3 区① 第１層中	
Q 210	磨製石斧	(5.8)	(2.7)	0.8	(19.8)	蛇紋岩	定角式　全面丁寧な研磨調整　刃部欠損	Ｇ５a1 区① 第３層中	
Q 211	磨製石斧	(7.7)	(6.7)	(3.7)	(288.1)	玄武岩	定角式　研磨調整　基部欠損	Ｇ５a2 区④	PL24
Q 212	磨製石斧	(9.5)	(5.1)	3.5	(242.1)	玄武岩	定角式　研磨調整　刃部欠損	Ｆ５j2 区① 第２層中	PL24
Q 213	磨製石斧	(12.2)	(5.7)	3.5	(365.8)	安山岩	定角式　研磨調整　刃部欠損	Ｇ５a2 区③	
Q 214	石皿	16.0	10.4	2.6	565.3	雲母片岩	周縁部粗割り後楕円形に研磨　表面中央部がやや凹む	Ｆ５j5 区①	
Q 215	磨石	5.8	5.5	3.7	154.1	安山岩	全面研磨	Ｆ５j1 区④	PL24
Q 216	磨石	6.2	6.3	4.1	258.4	安山岩	全面研磨	Ｇ５a2 区④ 第３層中	
Q 217	磨石	6.7	6.7	4.6	312.2	安山岩	全面研磨	Ｆ５i4 区① 第２層中	
Q 218	磨石	6.9	6.7	4.4	311.6	安山岩	全面研磨	Ｆ５j1 区③ 第２層中	
Q 219	磨石	6.6	6.6	4.7	302.0	安山岩	全面研磨	Ｆ５j5 区④ 第３層中	

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q 220	磨石	6.7	6.5	2.0	129.2	安山岩	全面研磨	F 5 j2 区④ 第３層中	
Q 221	磨石	7.5	7.3	3.1	253.5	安山岩	全面研磨	覆土中	
Q 222	磨石	10.7	8.2	4.2	507.2	安山岩	表・裏面隅丸方形　全面研磨	G 5 c2 区④ 第３層中	
Q 223	磨石	8.6	7.4	2.7	247.7	安山岩	全面研磨	F 5 j4 区③	PL24
Q 224	磨石	9.0	8.1	2.2	234.9	安山岩	全面研磨	F 5 j2 区②	
Q 225	磨石	11.2	(4.4)	(3.2)	(210.9)	粘板岩	磨製石斧を転用　下端に擦痕　一部欠損	G 5 a1 区③ 第３層中	
Q 226	敲石	9.3	6.3	6.9	588.7	玄武岩	自然礫を利用　両端部に敲打痕	F 5 i4 区② 第３層中	
Q 227	敲石	8.8	5.9	2.5	180.6	砂岩	扁平な楕円形の礫を利用　両端部に敲打痕	G 5 a3 区① 第４層中	
Q 228	敲石	11.7	6.7	4.1	432.0	安山岩	扁平な礫を利用　一側縁に敲打痕	F 5 j4 区③	
Q 229	石錘	3.4	(2.8)	1.6	(16.3)	砂岩	扁平な礫を素材とし，表・裏面に紐掛け部を作出　一部欠損	F 5 j2 区② F 5 j3 区① 第１層中	
Q 230	石錘	(3.8)	3.3	0.9	(15.1)	砂岩	扁平な礫を素材とし，長軸端部に紐掛け部作出　片側端部欠損	G トレンチ 第１層中	
Q 231	石錘	8.0	6.7	1.9	150.9	玄武岩	扁平な礫を素材とし，両端部に紐掛け部を作出	F 5 i3 区② 第３層中	
Q 232	石錘	4.5	4.5	1.8	46.2	玄武岩	扁平な礫を素材とし，両端部に紐掛け部を作出	G 5 a1 区① 第３層中	
Q 233	凹石	(10.1)	(6.4)	4.8	(401.8)	砂岩	表・裏面にＶ字状の孔２か所　裏面及び一側縁に擦痕	F 5 i3 区④	
Q 234	凹石	12.9	11.0	5.0	933.8	雲母片岩	粗割り後方形に研磨　表・裏面にＶ字状の孔６か所	F 5 j5 区④ 第４層中	
Q 235	凹石	15.4	(12.5)	4.6	(920.0)	安山岩	石皿兼用。 表・裏面中央部が凹む　表面にＶ字状の孔３か所	G トレンチ 第３・４層中	PL24
Q 236	凹石	20.0	16.3	5.0	1,925	雲母片岩	表・裏面にＶ字状の孔６か所	G 5 a3 区②	
Q 237	ヘラ状 石器	5.9	2.0	0.7	(15.4)	粘板岩	表・裏面研磨調整　断面紡錘形　一部欠損	F 5 j2 区③ 第２層中	PL25
Q 238	石剣	(12.7)	3.8	1.7	(150.5)	粘板岩	表・裏面研磨調整	F 5 j5 区①	PL24
Q 239	石剣	(6.9)	2.9	2.1	(57.7)	粘板岩	表・裏面研磨調整　隆起線で加飾	F 5 j4 区②	PL24

2　その他の遺構と遺物

今回の調査で，伴う遺物が出土していないことから，時期が明らかでない溝跡２条を確認した。以下，遺構について記述する。

(1)　溝跡

第９号溝跡（第 104・付図）

位置　調査区北部のＦ５c0 区，標高 20 mほどの谷に向かう斜面部に位置している。

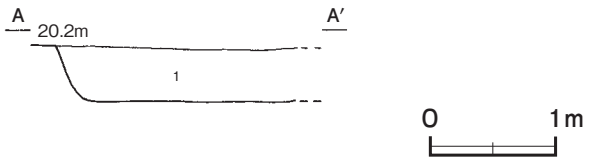
重複関係　第４号包含層及び第６号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状　Ｆ５c0 区から第６号溝跡の北東端部を掘り込み，南東方向（N － 55° － W）に直線状に延びている。南東部分が調査区域外へ延びているため，確認できた長さは 1.92 mである。上幅 0.82 ～ 1.20 m，下幅 0.60 ～ 0.88 m，深さ 40cmで，溝底の高低差はない。断面は逆台形で，壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　単一層である。含有物が均一に含まれていることから，短時間で埋め戻されたものと考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量

所見　時期は，出土遺物がないため不明である。谷部に向かって延びていることから，排水の機能を有していた可能性がある。



第 104 図　第９号溝跡実測図

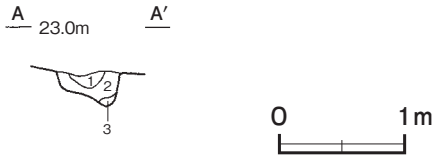
第 10 号溝跡（第 105・付図）

位置　調査区南部のＧ４e9 区，標高 22 mほどの台地上から谷に向かう緩やかな斜面部に位置している。

重複関係　第３号貝層を掘り込んでいる。

規模と形状　Ｇ４e9 区の調査区域際から東方向（Ｎ－ 82°－Ｅ）に直線状に２mほど延び，北東方向（Ｎ－ 36°－Ｅ）に屈曲し，0.5 mほどで収束している。北西端部が調査区域外へ延びており，確認できた長さは 2.45 mである。上幅 0.30 ～ 0.50 m，下幅 0.14 ～ 0.28 m，深さ 13 ～ 28㎝で，溝底は，東に向かってやや下っている。断面は逆台形状で，壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　３層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。



第 105 図　第 10 号溝跡実測図

土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック・粘土粒子中量，炭化粒子少量
2　褐　　色　ロームブロック中量，粘土ブロック少量，炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック中量，炭化粒子・粘土粒子少量

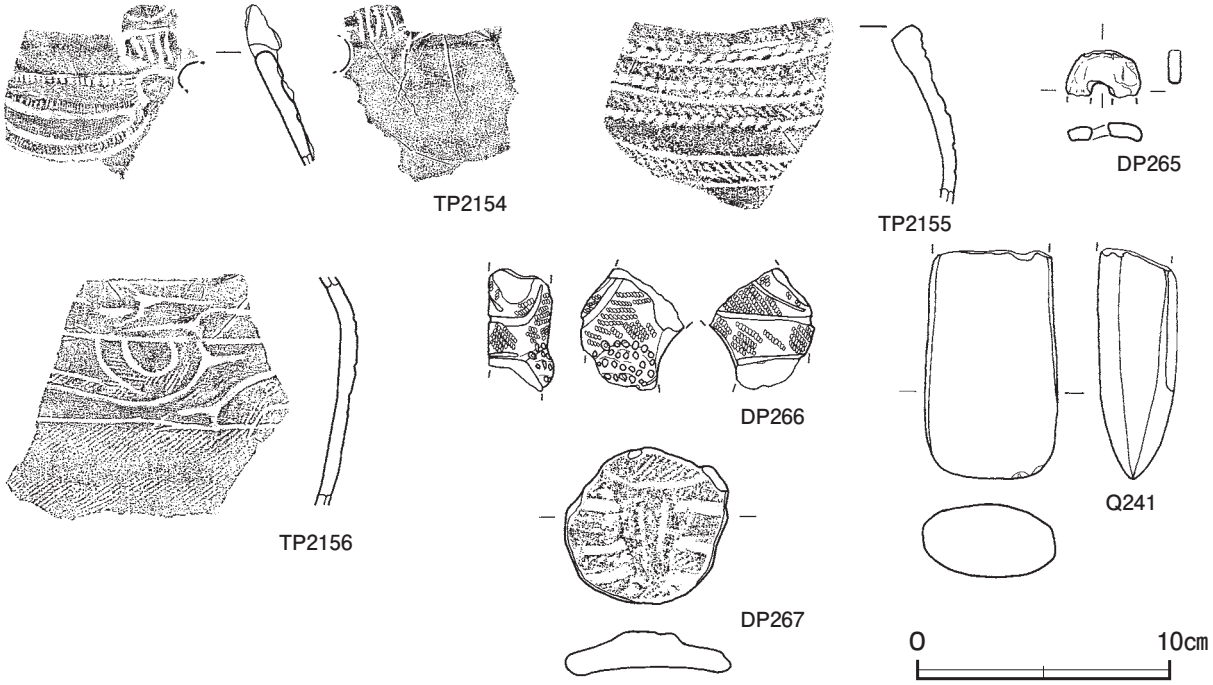
所見　時期は，出土遺物がないため不明である。確認できた範囲が一部のみであることから，性格は不明である。

表 13　その他の溝跡一覧表

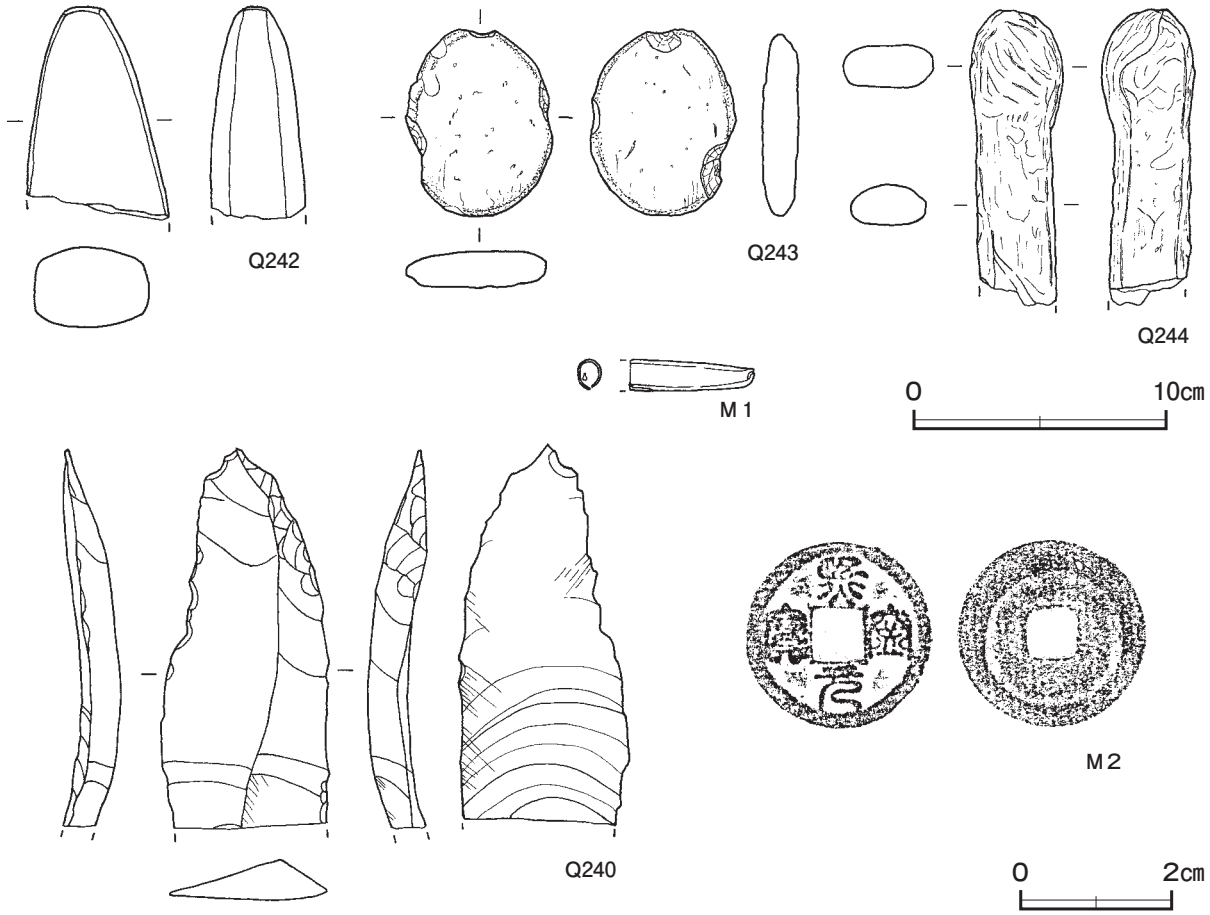
番号	位　置	方　向	形状	規　模				断面形	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備　考
				長さ(m)	上幅（m）	下幅（m）	深さ(cm)						重複関係(古→新)
9	Ｆ５c0	Ｎ－ 55°－ Ｗ	直線状	(1.92)	0.82 ～ 1.20	0.60 ～ 0.88	40	逆台形	外傾	平坦	人為		HG ４，SD ６→本跡
10	Ｇ４e9	Ｎ－ 82°－ Ｅ Ｎ－ 36°－ Ｅ	くの字状	(2.45)	0.30 ～ 0.50	0.14 ～ 0.28	13 ～ 28	逆台形	外傾	平坦 浅いＵ字状	人為		SM ３→本跡

(2)　遺構外出土遺物（第 106・107 図）

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について，実測図と観察表を掲載する。



第 106 図　遺構外出土遺物実測図 (1)



第 107 図　遺構外出土遺物実測図 (2)

遺構外出土遺物観察表（第 106・107 図）

番号	種　別	器種	胎　　土	色　　調	焼成	文　様　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
TP2154	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→突起貼付後沈線・刻み目　隆帯下刻み目→隆帯間磨き　内面ナデ　穿孔痕 1 か所	表土	PL19
TP2155	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	口唇部ナデ→隆帯縄文 RL →隆帯間列点文　胴部横位の沈線で区画→無文部磨き　内面ナデ	表土	PL19
TP2156	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	横位の沈線→三叉文・玉抱き文→胴部下半・文内縄文充填　内面ナデ	表採	PL19

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	色調・胎土	特　　徴	出土位置	備　考
DP265	垂飾品	(1.8)	(3.0)	(0.7)	(3.28)	にぶい黄橙 長石・石英・雲母	堀之内式土器深鉢把手部分利用	表土	
DP266	土偶	(4.8)	(4.2)	2.6	(41.0)	にぶい赤褐 長石・石英	ミミズク土偶右脚部　ナデ成形→縄文→沈線→列点	表土	
DP267	土器片円盤	6.3	6.6	1.8	58.1	にぶい橙 長石・石英・雲母	安行 1 式土器深鉢利用　周縁部粗割り後研磨調整	表採	PL22

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q 240	剥片	(5.0)	2.2	0.8	(6.12)	頁岩	縦長剥片　一側縁上方に二次剥離痕　背面一方向からの剥離　端部欠損	表土	PL23
Q 241	磨製石斧	(9.1)	5.3	3.3	(232.6)	泥岩	定角式　研磨調整　基部欠損	表採	PL24
Q 242	磨製石斧	(8.5)	(5.7)	(3.7)	(243.3)	角閃石黒雲母花崗岩	定角式　丁寧な研磨調整　刃部欠損	表土	
Q 243	石錘	7.4	5.9	1.5	83.2	安山岩	楕円形の扁平な礫を素材とし，上部及び左・右側縁に紐掛け部を作出	表土	
Q 244	石剣	(11.8)	3.7	1.6 ～ 1.7	(124.4)	緑泥片岩	有頭　周縁部粗割り後研磨調整	表土	

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
M 1	煙管	(5.0)	(1.3)	0.9	(7.86)	銅	吸口部　羅宇・雁首欠損	表採	PL25
M 2	銭貨	径 2.6	孔径 0.6	0.11	2.75	銅	熙寧元寶　篆書体　初鋳 1068 年	HG 5 覆土中	PL25

第４節　ま　　と　　め

1　はじめに

本節では，平成19年度から平成23年度までの計６次にわたる調査成果を踏まえ，今回の調査区域で確認及び出土した特徴的な遺構や遺物を概観しながら，縄文時代後期から晩期に至る斜面貝層を伴う集落跡である当遺跡の性格について，若干の考察を加えまとめとしたい。

なお，出土土器の時期については，当財団文化財調査報告第325[1)]・364[2)]・368集[3)]を参考にした。

2　竪穴建物跡について

当貝塚で，これまでの調査で確認した竪穴建物跡は18棟である。これらは，南部及び東部の標高22～26ｍの台地上から斜面部に構築されており，後期後葉から晩期中葉の時期に比定されている。中には，短期間に数回の建て替えが行われているものや，灰・焼土・炭化物などで貼床を行っているもの，床面に編み物を敷いたものなど，特色ある事例が報告されている[4)]。

今回の調査では，東側の谷に面した標高約22ｍの緩斜面上で，晩期前葉の竪穴建物跡１棟を確認した。この第15号竪穴建物は，第４号遺物包含層を掘り込んで構築され，上層には第２号地点貝塚及び第１号遺物集中地点が形成されている。遺物の廃棄場所を掘り込んで整地し，建物を築いていることから，「捨て場」であった土地を「住処」として再利用している。特色としては，床面を構築する際に，焼土・炭化物を含む黒色土を充填して構築していることである。第364集では，第19Ａ・19Ｂ・19Ｃ号竪穴建物跡で，覆土下層に環状に巡る焼土層を確認し，廃絶時に廃棄されたか建物の廃絶に伴う何らかの儀礼的な行為によるものと推察している。第368集では，第17Ｂ・18号竪穴建物跡で床面構築の際に焼土を埋土することにより，湿気防止などの役割を持たせたのではないかとしている。今回確認した第15号竪穴建物跡については，後者と状況が類似しているが，焼土の含有量がさほど多くはないため，湿気防止のための地業的な役割を持たせていたとは明言できない。第364集で報告されている第３・４号竪穴建物跡は本竪穴建物跡と同時期であり，直線距離で約30ｍ西側に所在する。円形プランで複数の壁柱穴を備えるという構造上の点でも類似しており，同一集落を構成する竪穴建物群と捉えることができる。

3　斜面貝層と遺物包含層について

当貝塚では，今回の調査結果を含めると，斜面貝層及び遺物包含層については，それぞれ５か所ずつ確認している。各々が形成された時期は，出土遺物の種類や量，出土状況などの多寡や差異はあるものの，土器形式では堀之内式から安行３式と，概ね後期前葉から晩期前葉に収まるものである。この斜面貝層及び遺物包含層は，集落に付随する形で確認されている。長期にわたって，人々の日々の暮らしによって生じ，廃棄され続けた膨大な量の不要物や食滓の蓄積による所産である。斜面貝層及び遺物包含層は，集落の周囲には必ず存在する「捨て場」と理解することができる。

今回の調査で確認した斜面貝層は３か所で，いずれも調査区域の南部に所在する。第３・４号貝層は，本調査区域の南西側に隣接し，純貝層を有する保存区域から延びている貝層の端部とみられる。一部分のみの調査であることから，出土した貝類などの絶対量は少なかったが，ヤマトシジミ・ハマグリ・シオフキを優占種とする汽水あるいは，鹹水産の二枚貝を中心に採取していたことがわかっている。第９号貝層は，最も

規模が小さく，傾斜の大きい斜面上に位置している。底面に凹凸が多いことや周囲には地点貝塚が点在していることから，地点貝塚が統合されて形成されている可能性がある。斜面貝層は，包含層の上層の黒色土から中層の暗褐色土中に形成されており，包含層中で最も遺物出土量の多い層位と合致する。よって，斜面貝層が形成された時期は，集落の規模が最も拡大した時期と考えられる。

遺物包含層は，東側斜面の北部を第４号，南側を第５号と便宜的に分けて報告した。この二つの包含層は，堆積土の状況や包含されている遺物の種類や出土状況から，同時期に形成されたものと考えられる。上層は黒色を呈し，主に安行２～３式土器が出土している。中層は暗褐色を呈し，曽谷式～安行２式土器が多く出土している。下層は礫を含む暗褐色を呈し，加曽利Ｂ式土器を中心としながらも一定量の堀之内式土器も出土している。このことから，台地上及び斜面部上方では後期前葉に集落が芽生え，後期後葉から晩期前葉にかけて最も規模が拡大し，その後消滅していったことが想定できる。

上述のとおり，下層の方が古い時期の土器を包含するのは明白であるが，同一の層位に時期差のある土器が混在していたり，古い時期の土器が上層から出土したりする状況が見られる。同様な事例は，小山市に所在する寺野東遺跡[5)]，市原市に所在する祇園原貝塚[6)]・西広貝塚[7)]，加須市に所在する長竹遺跡[8)]などでも確認されており，後晩期の集落跡で人為的に盛土や整地などが行われ，遺構の構築や遺物などの廃棄が繰り返される過程で厚く包含層が形成されたことが明らかにされている。当然のことながら，これらの包含層中には，時期差を有する土器類が混在することになる。当貝塚の第４号包含層を掘り込んで第 15 号竪穴建物が構築され，埋め戻された後は，土坑が掘られたり，更に上層に地点貝塚及び包含層が形成されたりしている。また，第３号貝層の上面には，硬化面が遺存しており，整地が行われたとみられる痕跡を確認した。このように，「捨て場」である斜面貝層や遺物包含層を整地あるいは掘削して，「住処」である竪穴建物を構築するなどの行為が繰り返し行われてきた。

4　出土遺物について

(1)　特殊土器

ここでは，今回の調査区域から出土した多量の縄文土器の中でも，貯蔵具や煮炊き具及び食器などの，日常什器以外の特殊な用途が想定される土器を特殊土器と呼称し，報告することとする。

異形台付土器は 11 点出土している。第２号遺物集中地点から出土した 385 はほぼ完形に近いが，それ以外は残存率が低く，廃棄される際に壊された可能性がある。これらは，煮炊きのために火にかけられた

表 14　特殊土器集計表

種類 / 出土遺構	異形台付土器	ミニチュア土器	手捏土器	釣手土器	手燭形土器	製塩土器	計	備　考
第 15 号竪穴建物跡	2						2	
第 296 号土坑						6	6	
第３号貝層		1				6	7	
第４号貝層						25	25	
第９号貝層						5	5	
第２号地点貝塚						1	1	
第３号地点貝塚						1	1	
第４号地点貝塚						1	1	
第１号遺物集中地点						6	6	
第２号遺物集中地点	1						1	
第４号包含層	1	1	1	3		92	98	
第５号包含層	7	6	3	2	2	498	518	
合　計	11	8	4	5	2	641	671	

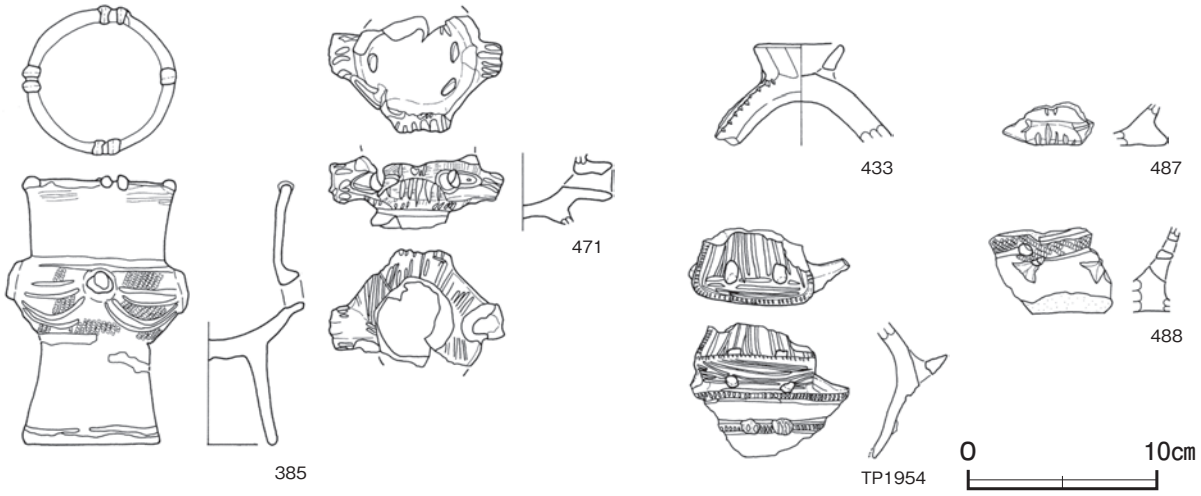
痕跡は認められず，特異な形状であることや，穿孔されていることなどから，実用的な土器ではないことがわかる。祀りの際に供えられた道具という考え方が有力である。385 は，口唇部に貼り付けられた突起の形状や，胴部に施された弧状の沈線文など，晩期前葉の安行３ｂ式の特徴が見て取れる。第５号包含層から出土した 471 は，刻みの入ったヒレ状の突起や隆帯上の刻み目など，後期終末の安行２式の手法がみられる。

釣手土器は５点出土している。中部，北陸，関東地方にかけて広く出土し，縄文時代前期から見られるようになる。浅鉢形で，口縁部に橋を渡したような形状の釣手が付く。その形状が仏具の香炉に似ていることから，香炉形土器とも呼ばれている。第４号包含層から出土した TP1954 は，口縁部に貼り付けられた釣手部分が残存している。隆帯上に刻み目及び貼瘤が施され，無文部が磨かれているなどの特徴は，安行２式に見られる手法である。同包含層から出土した 433 は，釣手に相当する部分とみられる。バスケットの釣手のような形状で，２条の刻み目が施され，頂部は小皿が乗せられているような形状である。加曽利Ｂ式から安行２式期と考えられる。

手燭形土器は第５号包含層から２点出土している。把手付の燭台のような形状をしている土器である。488 は，胴部に三叉文を模したと考えらる透かし及び円形の透かしが施されている。487 は，底部の端に刻み目の施された突起が貼り付けられている。ともに手法の特徴などから安行２式から安行３ａ式期と考えられる。第 368 集においても２点報告されている。

ミニチュア土器及び手捏土器は，包含層を中心に 12 点出土している。いずれも小形の鉢のような形状であり，そこから実用性を見い出すことは不可能である。異形台付土器，釣手土器，手燭形土器，ミニチュア・手捏土器は，全体の出土点数が少なく，形状や大きさなどからも非日常的なものであり，また，残存率が低いものがほとんどであることなどから，特別な祀りが行われた際に供えられ，使用後に廃棄されたものと考えられる。

製塩土器については，第５号包含層を中心に破片 641 点が出土している。今回の調査では，製塩土器片のみで，当集落での製塩活動を検証できる遺構は確認できなかった。当財団第 364 集では，当遺跡の立地や焼成遺構で製塩土器と灰，焼土などを確認したことなどから，製塩工程の「焼き塩」か持ち込まれた塩を加工に用いた製塩活動の可能性を指摘している。第 368 集では，第２号貝層の南部遺物集中ブロックを中心に約 1,600 点に及ぶ製塩土器が出土しており，当集落が塩の消費・流通システムの中に組み込まれて



第 108 図　特殊土器実測図

いた可能性について言及している。今回の調査区域で出土した製塩土器の点数は少ないが，一定量の出土があったことから，当集落での製塩活動や，塩の流通に関わっていた可能性をより高める成果となった。

(2) 土製品

土製品は，192 点出土している。その中で土偶が 32 点，土器片円盤が 110 点で，両者を合わせて全体の 74％を占めている。第 368 集では，土器片錘・石錘などの出土量が少なく，漁労活動があまり活発に行われていなかった可能性に触れているが，今回の調査区域においてもそれを補完する結果となった。ここでは，出土点数が多かった土偶と土器片円盤について触れてみたい。

表 15　土製品集計表

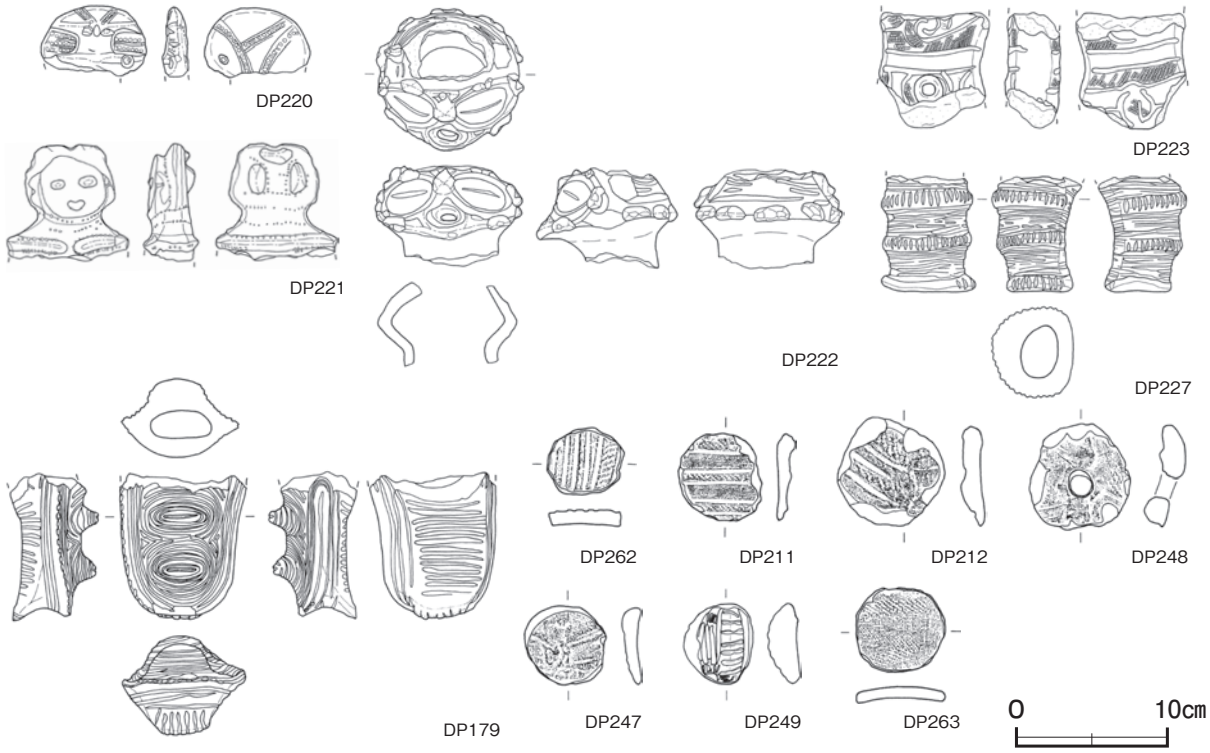
種類 / 出土遺構	土玉	土錘	垂飾品	耳飾り	土版	土偶	海獣形土製品ヵ	円盤	土器片錘	土器片円盤	不明	計	備考
第 15 号竪穴建物跡										2	1	3	
第 193 号土坑										2		2	
第 197 号土坑	1											1	
第 198 号土坑								1				1	
第 296 号土坑					1	1				3		5	
第３号貝層				1								1	
第４号貝層	1			1			1					3	
第２号地点貝塚						1						1	
第１号遺物集中地点				3				1		2	1	7	
第２号遺物集中地点										1		1	
第４号包含層	2	1		3	4	6		2		25	6	49	
第５号包含層	1		2		3	23		5	2	74	5	115	
遺構外			1			1				1		3	
合　計	5	1	3	8	8	32	1	9	2	110	13	192	

土偶は 32 点（他に海獣形土製品ヵ 1 点）出土しており，中でも 29 点が包含層から出土している。縄文時代後・晩期の当集落において，祀りで使用された後，廃棄されたことが想像される。内訳としては，山形土偶が 11 点，ミミズク土偶が 17 点，遮光器土偶が 1 点，不明が 3 点である。山形土偶である DP220 は，頭部は楕円形状を呈し，目・鼻は粒状の粘土を貼り付けている。平行沈線を施文した後，沈線間に列点を充填して眉・頬の表現及び後頭部の施文を行っている。DP223 はミミズク土偶とみられ，腹部が若干突出しており，入組文や無文部磨きなどの手法から，安行３ａ式から３ｂ式の特徴が見られる。DP221 のミミズク土偶は，頭部は円形状を呈し，粘土を貼り付けて目・口・後頭部の頭髪を表現している。また，隆帯で胸を強調し，刻み目や列点で加飾を施している。脚部と考えられる DP227 は中空構造で，大形のミミズク土偶の脚部である可能性がある。DP222 の遮光器土偶は中空構造で，目は楕円形状を呈し，沈線によって独特の表情を持たせている。口は穿孔されており，随所に連続した小突起や平行沈線を施し，大洞式の手法が見て取れる。

最後に第４号貝層から出土した DP179 である。中空構造で，上面には瘤状の突起２か所を貼り付けた後，渦巻状の沈線を巡らしている。下面端部に刻み目を施したヒレ状の突起を貼り付けている。一側縁には列点文１条を施文している。手法の特徴から安行２式から安行３式期とみられる。ここでは，イルカやオットセイなどを模したとされる海獣形土製品ヵとした。

土器片円盤は全体で 110 点と出土量が多く，特に包含層から 100 点ほど出土している。主に，土器の口縁部付近，胴部，底部などを利用し，周縁部を粗割りして製作している。中には，粗割り後研磨調整を行っているものや，中央部を穿孔しているものも見られた。DP262 は文様の特徴から堀之内式土器の胴部を利用している。DP211・DP212・DP248 は隆帯及び隆帯間の磨きの手法から安行１式土器を利用してい

る。DP247・DP249・DP263 は，貼瘤や隆帯上の刻みの特徴から安行２式の土器を利用している。利用されている土器は，後期前葉から晩期前葉までみられ，集落の存続する時期と重なる。用途としては垂飾品，祀りの道具，漁網の錘などと様々に推測されているが，定説がないのが現状である。



第 109 図　土製品実測図

(3)　石器・石製品

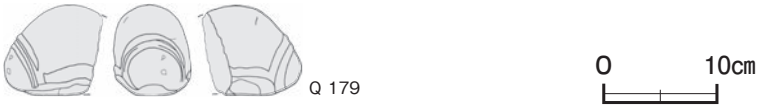
今回の調査区域からは，石器・石製品が 264 点出土している。当財団第 325・364・368 集で報告した調査区域に比して，最も多く出土している。

表 16　石器・石製品集計表

種類 / 出土遺構	鏃	打製石斧	磨製石斧	石匙	石皿	磨石	敲石	石錘	凹石	ヘラ状石器	砥石	小玉	円盤	石版	石棒石剣	独鈷石	石冠	不明	計	備考
第 15 号竪穴建物跡						2									1				3	
第 198 号土坑			1																1	
第 296 号土坑					1		2		1		2		1		1		1		9	
第６号溝跡			1	1															2	
第７号溝跡			1		1	1	2												5	
第 11 号溝跡					1														1	
第６号ピット群															1				1	
第３号貝層	1					1													2	
第４号貝層						2			1										3	
第９号貝層	1																		1	
第１号地点貝塚						1													1	
第２号地点貝塚												1							1	
第１号遺物集中地点											1								1	
第２号遺物集中地点						1													1	
第４号包含層		5	1	1	7	17	1	2	2		7				11	1		5	60	
第５号包含層	3	8	12		12	59	23	4	11	1	10		1	2	12			10	168	
遺構外			2					1							1				4	
合　計	5	13	18	2	22	84	28	7	15	1	20	1	2	2	27	1	1	15	264	

石器は石皿・磨石・敲石・凹石の出土量が目を引く。包含層の最下層で確認した第296号土坑からは，加工痕は確認できなかったが，多量の種実が出土している。石器を用いて，採集した種実などの加工や食材に具すための処理を行っていたことが想定される。石鏃については，５点と出土量が少ない。第368集でも石鏃の出土量が少ない事実が述べられており，骨角製品である牙鏃の使用について言及している。今回は，食滓と考えられるイノシシ・シカを中心とする獣骨が総重量で20kg以上出土している。調査区域内から陥し穴を確認していることから，石鏃・牙鏃などの道具や，陥し穴などの仕掛けを併用して狩りを行っていたものと考えられる。

石製品の出土量は少ない状況において，石棒・石剣が27点と，最も多いことが特徴である。第296号土坑からは，Q 179の石冠が１点出土している。ほぼ半分に割れている状態で出土したが，表面が丁寧に研磨され，端部には環状に，下部には直線状に畝状の隆帯が施されている。原形は頂部に円形や斧状の突出部を持たないタイプのもので，市原市の祇園原貝塚[9]から出土した石冠に酷似している。全面に火熱を受けており，それが破面にも及ぶことから，祀りに供された後に破壊され，火中に投じられたものと考えられる。これらの石製品は「第二の道具」と呼称され，祭祀具と考えられている。



第110図　石冠実測図

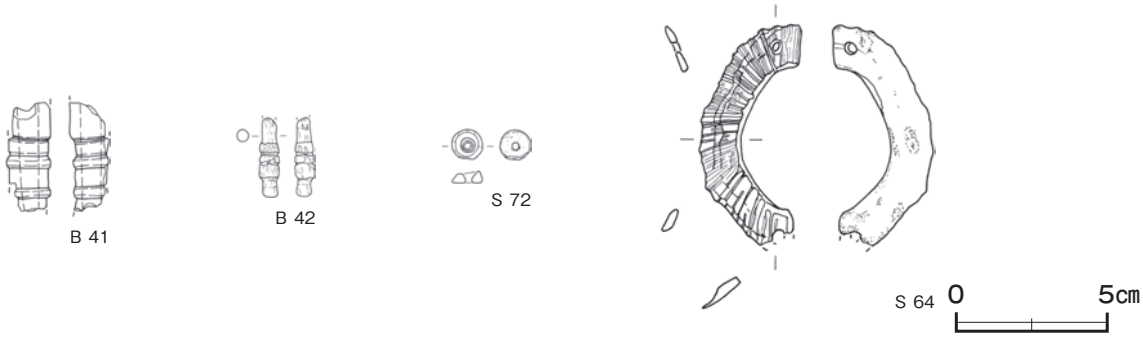
(4)　骨角製品・貝製品

骨角製品・貝製品は，合わせて20点が出土している。骨角製品については，第15号竪穴建物跡及び第９号貝層から合わせて２点確認した。第15号竪穴建物跡から出土したＢ41は，シカの角を素材に製作された髪飾りである。表面には巧みに凹凸が施され，光沢が見られるほど精緻に磨き込まれている。第９号貝層から出土したＢ42は，シカの角を素材に製作された刺突具である。基部のみが残存していたものであるが，溝状の抉りが施されており，現在の爪楊枝の形状に繋がるものである。

貝製品は18点確認した。第２号地点貝塚から出土したＳ72は，イモ貝類を素材に使用した有孔装身具である。イモ貝の螺旋状に巻いている頂部を薄く切り取り，中央部を穿孔して研磨調整を施している。イモ貝類は，主に熱帯･亜熱帯の海に生息するが，日本では紀伊半島以南に生息することが確認されている。第３号貝層から出土したＳ64の貝輪はオオツタノハを素材に製作したものである。オオツタノハは，生息域が奄美大島以南の岩場とされていたが，最近の研究では，伊豆諸島南部でも生息が確認されている。いずれにしても，当貝塚周辺の海域では入手困難な貝種である。貝そのものが流通していたのか製品として流通していたのかは明確ではないが，他地域からもたらされたものであることは確かである。

表17　骨角製品・貝製品集計表

種類 ＼ 出土遺構	骨角製品		貝製品			計	備考
	髪飾り	刺突具	貝輪	貝刃	有孔装身具		
第15号竪穴建物跡	1					1	
第３号貝層			6			6	
第４号貝層			5	1		6	
第９号貝層		1	2			3	
第１号地点貝塚			1			1	
第２号地点貝塚					1	1	
第４号地点貝塚			1	1		2	
合計	1	1	15	2	1	20	



第 111 図　骨角製品・貝製品実測図

5　第 296 号土坑と古環境について

第 296 号土坑は，第５号包含層の最下層の下位で確認した。包含層底面の傾斜が急になるにつれて湧水が激しくなり，土器や石器などの遺物に木片及び種実が混じるなど，覆土の様相が一変した。当初は水場遺構の可能性も視野に入れて調査に臨んだが，確認できた範囲が僅かであること及び東側の調査区域際に向かって楕円形状に延びていることなどから，土坑と判断した。出土土器は加曽利Ｂ式土器が中心であることから，機能していた時期を後期中葉以降とした。

出土した木片及び種実の樹種同定結果は以下の通りである。

・イヌガヤ：山地の暗く湿った広葉樹林内に生育する常緑低木～小高木

・オニグルミ，トチノキ：沖積地や谷沿いなどの水分が多く肥沃な土地に生育する落葉高木

・エゴノキ：山麓の雑木林や山地の谷間，小川のほとりなどに生育する落葉小高木

・センダン：暖地の日当たりの良い場所に生育し，本州ではよく栽培される落葉高木

上記の結果から，当時の当貝塚周辺は比較的温暖であり，谷部の水辺にあたる地域であったことが想定される。縄文時代前期の頃の霞ヶ浦は，海進によって広大な内湾となっていた。北西から流れ込む桜川及びその流域は，山間部に入る現在のつくば市北部まで海水が達していたと考えられている。後・晩期の頃になると，現在の土浦市域まで海退が進んでいたとされている。このことから，当時の当貝塚周辺の環境は，桜川は汽水化して流域は肥沃な後背湿地となり，照葉樹林や落葉樹林の広がる豊かな環境が形成されていたことが想像できる。

6　おわりに

今回の調査区域から得られた成果を，これまでの上境旭台貝塚の３回にわたる調査報告の内容に若干でも付加し，またこれまでの成果を補完することができれば幸いである。

まずは，遮光器土偶の出土である。当貝塚では安行３式土器と平行して羊歯状文，連続突起，曲線的な磨消縄文などの東北地方の大洞式の特徴を持つ土器は出土しているが，遮光器土偶は初めての出土となる。北方との人的あるいは物的な交流が成されていたことを裏付けるものである。貝製品では，南方の海で採取されたイモ貝類やオオツタノハを素材とした製品の出土から，広範囲に及ぶ交流を覗わせる資料となった。

次に，今回の調査区域では石皿・磨石・敲石・凹石などの実用的な石器の出土量が多かったことである。第 296 号土坑から多量の種実が出土していることから，採集した豊富な種実あるいは海産物などを処理・加工していたことが想像される。また，第 296 号土坑からは，種実に加えて多量の木片も出土しており，科学

分析の結果から樹種を特定することができた。当時の当貝塚周辺地域の古環境復元のための一助となれば幸いである。

最後に製塩土器についてである。今回の調査区域からの出土は少量であったが，上境旭台貝塚での出土量を確実に累積させている。当貝塚が海退後の桜川汽水域に所在することから，第364集で指摘しているように，製塩工程の「煎熬」ではなく「焼き塩」，あるいは搬入された塩を加工に用いた製塩活動が行われていた可能性[10]を考えるべきである。また，鈴木正博氏は，霞ヶ浦の土浦入りにおいて製塩の共同運営がなされていたとし，上境旭台貝塚付近からも潮の干満を利して土浦入りまで舟で往復が可能であったことを指摘し，「湾潟湖交流文化」[11]を提唱していることも注目される。

ここまで述べてきたことから，上境旭台貝塚の立地する当時の桜川中流から下流域は，海と陸との結節点にあたり，水上交通の要衝であったことは明らかである。当集落は，縄文時代後期前葉から晩期前葉まで継続して営まれていることが分かっている。よって，人々がこの地に一定期間定住し，当地の豊かな自然の恵みを享受しつつ，他地域との人的・物的交流を盛んに行いながら生活を営んでいたものと考える。

註

1）柴山正広・須賀川正一・小野政美・小川貴行・越川欣和「上境旭台貝塚　中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XⅢ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第325集　2009年３月

2）江原美奈子「上境旭台貝塚２　中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XV」『茨城県教育財団文化財調査報告』第364集　2012年３月

3）荒蒔克一郎「上境旭台貝塚３　中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XⅦ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第368集　2013年３月

4）註３）に同じ。

5）初山孝行・青柳平人・谷中隆・江原英「寺野東遺跡Ⅴ」『栃木県埋蔵文化財調査報告』第200集　1997年３月

6）忍澤成視「祇園原貝塚」『上総国分寺台遺跡調査報告Ⅴ』市原市教育委員会　1999年３月

7）安井建一・鶴岡英一・西野雅人・櫻井敦史・牧野光隆「市原市西広貝塚Ⅱ」『市原市文化財センター調査報告書第93集・上総国分寺台遺跡調査報告XⅣ』市原市教育委員会・市原市文化財センター　2005年３月

8）黒坂禎次「長竹遺跡－低地に埋もれた縄文の巨大盛土－」『関東考古学フェア遺跡発表会資料』全国埋蔵文化財法人連絡協議会　関東ブロック協議会　2014年８月

9）註６）に同じ。

10）註２）に同じ。

11）鈴木正博「縄紋式晩期の「定住性社会」と霞ヶ浦」『茨城県考古学協会誌第26号』茨城県考古学協会　2014年５月

参考文献

・塩谷修ほか『国指定史跡　上高津貝塚Ｅ地点－史跡整備事業に伴う発掘調査報告書－』土浦市教育委員会　2000年３月
・石川功ほか『国指定史跡　上高津貝塚Ｃ地点－史跡整備事業に伴う発掘調査報告書－』土浦市教育委員会　2006年３月
・加藤晋平・小林達雄・藤本強『縄文文化の研究９』雄山閣　1995年３月
・阿部芳郎『土偶と縄文社会』雄山閣　2012年５月
・工藤雄一郎・国立歴史民俗博物館『縄文人の植物利用』新泉社　2014年１月
・金子浩昌・忍沢成視『骨角器の研究　縄文篇Ⅱ』慶友社　1986年12月
・忍澤成視『貝の考古学』同成社　2011年１月
・吉良哲明『原色日本貝類図鑑』保育社　1979年７月
・波部忠重『続原色日本貝類図鑑』保育社　1989年２月

付　章 1

上境旭台貝塚平成 22 年度調査出土の動物遺体

西本　豊弘

1　はじめに

上境旭台貝塚の平成 22 年度の調査で採集された動物遺体は約 3,000 点である。それらの分類結果を出土地点ごとに表にまとめた。その内容を見ると，イノシシとシカが大部分であり，その他にアナグマ・タヌキがごく少量含まれるだけである。魚骨もタクロダイ・スズキ・サメ類が少量見られただけである。この遺跡の動物遺体をこれまでも分類してきたが，貝層が近年の耕作により動かされていることが問題である。そこで，今回は動物遺体の内容を紹介すると同時に貝層の撹乱の程度についても考えてみた。

2　動物遺体の内容

動物骨の内容は，表 1 に動物種ごとの出土数量を示した。これは，破片数を単純に合計したものである。その内容を出土地区ごとに種名と部位を示したものが表 2 ～表 11 である。これらの表で見ると，動物骨の大部分はイノシシとシカである。その他にアナグマ・タヌキ・ヒト・モグラ・スズキ・クロダイ・サメ類がごく少量見られた。鳥骨は 1 片である。

表 1　地区別動物遺体出土量

地区	イノシシ	シカ	その他	破片	合計
SI 15	15	10		159	184
SM 3	32	14	20	400	466
SM 4	93	64	4	527	688
SM 9	42	23		289	354
第 1 号地点貝塚	2				2
第 2 号地点貝塚	15	12	8	182	217
第 3 号地点貝塚	2	1		18	21
第 4 号地点貝塚	13	12		68	93
HG 4	8	4		104	116
HG 5	68	40	4	690	802
合計	290	180	36	2437	2943

イノシシは，この遺跡で最も多く出土していることは，これまでの報告書でも述べた通りである。年齢別の個体数は，若い個体が消滅している割合が多いことから，今回は推定していない。シカについても同様に個体数は推定していない。シカの場合，袋角が数点認められたことが注目される。それらは角幹部分であったがまだ十分に成育していないもので，おそらく夏に捕獲された個体であろう。シカの角と頭蓋骨が角座でつながった状態のものも見られることから，この遺跡ではシカ狩猟が夏も含んで周年行われていたと推測さ

れる。

その他の動物では，アナグマの上腕骨１点とタヌキの上腕骨１点・下顎骨１点・上顎犬歯１点が見られた。モグラ類の上腕骨も２点出土しているが，これは自然死したものであろう。魚類ではクロダイ・スズキ・サメが見られた。サメはホシザメ程度の小さなサメであるが，種は分からない。なお，ヒトの大腿骨の破片が少量見られた。骨質の保存状態がよいので，おそらく貝層内に埋葬されていたものであろう。

3　動物遺体の保存性

遺跡から出土する動物骨の形状から多くの情報を得ることができる。たとえば，縄文人は骨の内部にある骨髄を食べるために骨を割っている。そのために縄文時代の遺跡出土の動物骨の 99％は意図的に割られており，破片となって出土するものが大部分である。弥生時代は破損率が少なく，江戸時代では割られている骨の方が少なくなることも分かっている。

縄文人がシカやイノシシの四肢骨を割ると，ガラスが割れたように割れ目が螺旋状になる。そのような破片を動物考古学ではスパイラル剥片と呼んでいる。その割れ口は鋭いので，過去にはその破片を旧石器時代人の道具とされたこともあったが，今ではそれらは道具ではなく，単なる破片と認定されている。貝塚に捨てられたスパイラル剥片は，時間が経過すると有機質が分解されて枯れた骨となる。その枯れた骨は何らかの要因で動かされると更に小さく割れる。その場合は，枯れ枝が割れるような断面をもつことになる。動物考古学では，遺跡出土の動物骨を分類する時に，常にこのような骨の割れ方を観察している。

また，頭蓋骨や上下顎骨の保存状態も観察する。歯の場合，軟部が腐食すると顎骨から抜けやすくなる。しかし，歯根が曲がっているなど自然には抜けにくい歯もある。たとえばイノシシの後臼歯は歯根が曲がっているので抜けにくい。顎骨と一緒に出土するものが大半である。

このような知見をもとに上境旭台貝塚の動物遺体を見ると，骨が長さ１㎝以下に小さく割れているものが多い。それ以上長い骨でも枯れ枝のように割れている。イノシシの後臼歯も単独で出土するものが多く，顎の骨に植立して出土するものが少ない。このことから，貝層の多くが一度動かされたものと判断した。これは，発掘現場での貝層の堆積状況からも確認していた。ただし，発掘当初に現地で見せていただいたトレンチ調査によって出土した動物骨は，スパイラル剥片が多かった。その部分の貝層は保存されるという。

今回の平成 22 年度調査の資料を見ると，第４号貝層出土の動物骨はスパイラル剥片のまま残っているものが多く，撹乱を受けていないものがかなり含まれると思われた。また，第３号貝層の資料にも撹乱を受けていないものがある。ただし，この地点でも半分以上は撹乱による破砕されたものと思われる。この２地点以外の地点出土の動物骨は，その形状からみて撹乱を受けたものと思われる。さらに，ローリングにより骨の表面が白くなっている骨もあり，ごく最近に撹乱されたものも認められた。

4　おわりに

平成 22 年度調査出土の動物遺体は，これまでと同様にイノシシが最も多く，次にシカが多い。その他の動物が少ないことも特徴である。関東地方の縄文後期の貝塚を伴う遺跡では，動物骨が少ない場合が多いが，ここでは，狩猟活動が盛んに行われていたことが推測される。その点で大変貴重な遺跡と言える。

表２　SI 15 のイノシシとシカ

	部位など	左右	残存部位など	年齢	個数
イノシシ上下顎骨と遊離歯	上顎骨	L	（xＰ３４）		1
	上遊離歯	L	Ｉ１		1
		L	Ｍ２		1
		R	Ｍ２	若	1
		R	♂Ｃ		1
	下遊離歯	L	Ｍ３		1
		R	Ｍ３	若	1
		R	Ｍ３		1
イノシシ四肢骨	大腿骨	R	下		2
	踵骨	L			1
	距骨	L			1
	距骨	R			1
	中手骨				1
	中足骨				1
	中節骨				1
	陸獣肋骨片				1
	陸獣骨片				173
	陸獣焼骨片				5
シカの遊離歯	上遊離歯	L	Ｐ３		1
		R	Ｍ１		1
		R	Ｍ２		2
		L	Ｍ３	若	1
		R	Ｍ３	若	1
		R	Ｍ３		1
シカ四肢骨	上腕骨	L	下		1
	上腕骨	R	下		1
	距骨	R			2

注

Ｉ：切歯（小文字は乳歯），Ｃ：犬歯

Ｐ：前臼歯，ｍ：乳臼歯，Ｍ：後臼歯

数字は歯の順番を示す。

歯の記載で，（　）は顎骨が伴うことを示す。

（　）内のｘは歯が抜けて脱落していることを示す。

幼：幼獣（１歳未満），若：若獣（１～２歳前後），老：老獣。

年齢の記載のないものは成獣（３歳以上）である。

表３　SM ３のイノシシとシカ

	部位など	左右	残存部位など	年齢	個数
イノシシ上下顎骨と遊離歯	上顎骨	R	（Ｐ３４）	若	1
		R	（Ｐ４）		1
	上遊離歯	L	Ｉ１		1
		L	Ｐ３		1
		R	Ｍ１	幼	1
		R	Ｍ１		1
		R	Ｍ３	若	1
		R	Ｍ３		1
	下遊離歯	L	ｍ４		2
		L	Ｉ１		1
		R	Ｉ１		1
		R	Ｉ２		2
		R	Ｐ３		1
		R	Ｐ４		1
		L	Ｍ１		1
		R	Ｍ１		1
		R	♀下Ｃ	若	1
		R	♀下Ｃ		1
イノシシ四肢骨など	後頭骨				1
	後頭骨	R			1
	第Ｉ頸椎（環椎）				1
	橈骨	L	下		1
	橈骨	R	上		1
	距骨	R			1
	中手骨				1
	中足骨				1
	中節骨				1
	イノシシ･シカ椎骨				1
	陸獣肋骨片				1
	陸獣骨片				398
シカ遊離歯	上遊離歯	L	Ｐ３		1
		R	Ｍ３		1
	下遊離歯	R	ｍ４		1
		L	Ｐ４		1
		L	Ｍ３	若	1
		R	Ｍ３		1
シカ四肢骨など	角片				1
	上腕骨	R	下		1
	橈骨	L	上		1
	距骨	L			1
	中足骨		下		1
	中節骨				1
	末節骨				2
鳥骨・魚骨	鳥骨片				1
	スズキ歯骨	R			2
	タイ類椎骨				14
	サメ類椎骨		小型		1
	種不明魚類椎骨				2

表４　SM ４のイノシシとシカ

	部位など	左右	残存部位など	年齢	個数
イノシシ上下顎骨と遊離歯	上顎骨	L	（Ｐ４Ｍ１２３）	若	1
		R	（Ｐ３４Ｍ１２）	若	1
		L	（Ｍ１２３）		2
		R	（Ｐ４Ｍ１２３）		2
		L	（Ｍ２）	若	1
		L	（Ｐ４）		1
		R	（Ｐ４）		1
	上遊離歯	L	ｉ１	幼	1
		L	Ｉ１		1
		L	Ｐ４		1
		L	Ｍ１	若	1
		L	Ｍ２	若	1
		L	Ｍ２		1
		L	Ｍ３	若	2
		L	Ｍ３		3
		R	Ｉ１		1
		R	Ｍ１	幼	1
		R	Ｍ２	幼	1
		R	Ｍ２		1
		R	Ｍ３	若	1
		R	Ｍ３		2
		R	♀Ｃ	若	1
	下顎骨	L	（ｘｍ２３４）	幼	3
		R	（ｘｘｍ３４）	幼	3
		L	（Ｐ３４）		1
		L	（Ｐ４）		1
		L	（Ｍ１）		1
		L	（Ｍ２３）		1
		L	（Ｍ２３）	老	1
		L	♂（ｘｘｘＰ３４Ｍ１２ｘ）大型	成	1
		R	（Ｐ４ｘＭ２３）		1
	下遊離歯	L	ｉ１		1
		L	Ｉ１		4
		L	Ｉ２	若	1
		L	Ｉ２		3
		L	Ｐ２		1
		L	Ｐ３		1
		L	Ｐ４	若	1
		L	Ｐ４		1
		L	Ｍ１		2
		L	Ｍ３		3
		R	ｉ１		1
		R	Ｉ１		1
		R	ｉ２		3
		R	Ｉ２		1
		R	Ｉ３		1
		R	Ｍ１	幼	1
		R	ｍ４		1
		R	♀Ｃ	若	1
		R	♀Ｃ	成	2
イノシシ四肢骨など	頭蓋骨				１個分
	第１頸椎（環椎）				1
	肩甲骨	L			1
	肩甲骨	R			2
	上腕骨	L	下		3
	上腕骨	R	下		2
	橈骨	L	上		1
	尺骨	L			2
	尺骨	R			1
	寛骨	L			1
	寛骨	R			1
	大腿骨	L	下	若	1
	大腿骨	R	中間	若	1

	部位など	左右	残存部位など	年齢	個数
	踵骨	L			2
	踵骨	R			1
	距骨	L			1
	距骨	R			1
	中手骨				2
	中足骨				2
	基節骨				1
	末節骨				1
	イノシシ･シカ椎骨				7
	陸獣骨片				520
シカ上下顎骨と遊離歯	上遊離歯	R	Ｍ１		1
		R	Ｍ２		3
		L	Ｍ３		1
		R	Ｍ３		1
	下顎骨	L	（ｘＭ１２ｘ）	若	1
		L	（Ｐ３ｘＭ１２３）		1
		R	（Ｐ４Ｍ１２３）		1
		R	（Ｍ３）		1
	下遊離歯	L	ｍ３		1
		L	ｍ４		1
		L	Ｍ１	幼	1
		L	Ｍ２		2
		R	ｍ４		1
		R	Ｍ２	若	1
		R	Ｍ３	若	1
シカ四肢骨など	頭蓋骨片				２個分
	後頭顆	L			1
	角＋頭	L			1
	角＋頭	R			1
	角片				4
	袋角片				4
	第Ｉ頸椎（環椎）				1
	頸椎				3
	肩甲骨	L			3
	肩甲骨	R			1
	上腕骨	L	下		3
	上腕骨	R	中間	若	1
	橈骨	L	下		1
	橈骨	R	完存		1
	橈骨	R	下		1
	寛骨	L			3
	寛骨	R	下		1
	頸骨	L	上		1
	頸骨	L	下	若	1
	頸骨	R	下		1
	踵骨	L			1
	踵骨	R			3
	中手骨	L	上		1
	基節骨				3
	中節骨				3
その他の哺乳類	アナグマ上腕骨	R	中間～下部（遠位部）大型下幅 27.2mm	成	1
魚類その他	クロダイ前上顎骨	R	中型個体		1
	サメ類小型種不明椎骨		癒着したもの		３個

表５　SM ９のイノシシとシカ

	部位など	左右	残存部位など	年齢	個数
イノシシ上下顎骨と遊離歯	下顎骨	L	♀（ｘｘＰ３４ｘ）		1
		R	♀C（上と同一個体）		1
			♀上C	若	1
			♀下C	若	1
	上遊離歯	L	Ｉ１		4
		R	Ｉ３	老	1
		L	ｍ３		1
		R	ｍ３		1
		L	Ｍ２		1
		L	♀C		1
		L	下Ｉ１	若	1
		R	下Ｉ１	若	1
	下遊離歯	R	ｉ２		1
		L	Ｉ２	若	1
		L	Ｉ１	若	1
		R	Ｉ１	若	1
		L	Ｉ２	若	1
			Ｉ２		1
		R	Ｉ２	若	1
			Ｉ２		1
			Ｉ３		1
		R	ｍ４		1
		R	Ｐ３	若	1
		L	Ｐ４		1
		R	Ｐ４	若	1
		L	Ｍ１		1
		R	Ｍ３		2
		R	♀C	若	1
		R	♂C		1
イノシシ四肢骨など	側頭骨	R			1
	上腕骨	L	下		1
	腓骨片				1
	距骨	R			1
	踵骨	L			1
	中手骨				2
	中足骨				2
	基節骨				1
	イノシシまたはシカ肋骨片				1
	陸獣骨片				201
シカの下顎骨と遊離歯	下顎骨	R	（Ｐ４Ｍ１２３）	亜成	1
	上遊離歯	L	Ｍ１		1
		R	Ｍ１		1
		L	Ｍ２		1
		L	Ｍ３	若	1
		R	Ｍ３		1
	下遊離歯	L	Ｐ４		1
		R	Ｐ４	若	1
		R	Ｍ１	若	1
シカ四肢骨など	角片				2
	橈骨	R	下		1
	頸骨	L	上		1
	踵骨	R			1
	距骨	L			1
	距骨	R			1
	中節骨				1
	末節骨				1
	陸獣骨片				87

表６　第１号地点貝塚のイノシシとシカ

種名・部位など	左右	残存部位など	年齢	個数
イノシシ上臼歯片				1
イノシシ下	L	Ｉ１		1
シカ橈骨上	L			1
シカ橈骨上	R			1
陸獣骨片				17

表７　第２号地点貝塚のイノシシとシカ

	部位など	左右	残存部位など	年齢	個数
イノシシ上下顎骨と遊離歯	上顎骨	L	（ｍ２３４）	幼	1
		L	（Ｍ３）	老	1
		R	（Ｍ２３）		1
	上遊離歯	L	Ｉ１		1
	下遊離歯	R	Ｉ２		1
		R	Ｉ２		1
		L	Ｍ１	幼	1
		R	Ｍ１	幼	1
		R	Ｍ２	幼	1
イノシシ四肢骨	踵骨	L	下		1
	中手骨				1
	中足骨				1
	基節骨				1
	イノシシ･シカ椎骨				1
	陸獣骨				181
シカ遊離歯	上遊離歯	L	Ｐ２		1
		L	Ｍ１		1
		L	Ｍ２		1
	下遊離歯	L	ｍ４		1
		L	Ｐ３		1
		L	Ｍ２		1
		R	Ｍ２		1
シカ四肢骨など	角片				1
	肩甲骨	L			1
	踵骨	R			1
	中節骨				1
	末節骨				1
その他	タヌキ下顎骨片			老	1
	タヌキ		上C		1
	タヌキ上腕骨	L	小型（長さ 82.1mm, 下幅 18.8mm）		1
	陸獣腰椎		中型		1
	スズキ主鰓蓋骨片				1
	種不明魚類椎骨				3

表８　第３号地点貝塚のイノシシとシカ

種名・部位など	左右	残存部位など	年齢	個数
イノシシ	R	Ｉ３		1
イノシシ基節骨				1
シカ中節骨				1
陸獣骨片				18

表９　第４号地点貝塚のイノシシとシカ

	部位など	左右	残存部位など	年齢	個数
イノシシ遊離歯	上遊離歯	L	m３	幼	1
		L	M１	幼	1
	下遊離歯	R	P４		1
		R	M３		1
		L	♂C	若	1
イノシシ四肢骨など	側頭骨	R		若	1
	肩甲骨	R			1
	橈骨	L	上		1
	尺骨	L			1
	頸骨	L	下		2
	踵骨	L			1
	距骨	R			1
	イノシシ･シカ椎骨				2
	陸獣肋骨片				2
	陸獣骨片				64
シカの下顎骨	下顎骨	L	（P２３４）		1
	下顎骨	L	（P４M１２３）		1
	下顎骨	R	（P３４M１２３）		1
シカ四肢骨	上腕骨	R	下		1
	寛骨	L			2
	大腿骨	L	中間		1
	頸骨	L	下		1
	中足骨	L	上		1
	踵骨	R			1
	距骨	R			1
	基節骨				1
その他	モグラ類上腕骨				1
	スズキ主鰓蓋骨片				1

表10　HG ４のイノシシとシカ

種名・部位など	左右	残存部位など	年齢	個数
イノシシ	L	下M２	若	1
	R	下M２	若	1
	R	下M３		1
イノシシ肩甲骨	R			1
イノシシ上腕骨	L	下		1
イノシシ踵骨	R			1
イノシシ基節骨				1
イノシシ中節骨				1
シカ角片				1
シカ下顎骨	L	（P２３４）	老	1
シカ	R	下M３	若	1
	R	下M３		1
陸獣骨片				91
陸獣焼骨片				13

表11　HG ５のイノシシとシカ

	部位など	左右	残存部位など	年齢	個数
イノシシ上下顎骨と遊離歯	上顎骨	L	（P４）		1
		R	（P４M１２３）		1
	上遊離歯	R	P４		1
		R	M１	若	1
		R	M１		1
		L	M２		2
		R	M２		1
		L	M３		2
		R	M３	若	2
		R	M３		5
	下顎骨	R	（P２３）		1
		R	（M３）	若	1
		R	（xM３）		1
		R	（P３４M１）	老	1
	下遊離歯	L	I１		1
		R	I１	若	1
		R	I１		2
		L	I２		1
		R	I２		2
		R	P４		1
		L	M２		3
		R	M２		1
		L	M３		3
		R	M３		7
		L	♂C		2
		L	♀C		1
イノシシ四肢骨など	後頭骨	R			1
	肩甲骨	R			1
	上腕骨	L	下		2
	上腕骨	R	下		2
	橈骨	L	上		1
	橈骨	R	上		1
	尺骨	R			3
	寛骨	R			2
	頸骨	L	上		1
	頸骨	R	下	若	1
	踵骨	L			2
	踵骨	R			2
	距骨	R			2
	イノシシ･シカ椎骨				2
	陸獣骨片				682
シカの遊離歯	下遊離歯	R	m４		1
		L	M１		1
		L	M２		1
		R	M３		2
シカ四肢骨など	角片				5
	角＋骨	L			1
	角＋骨	R			1
	角＋骨		破片		1
	頸椎				2
	肩甲骨	R			3
	上腕骨	L	下		2
	橈骨	R	上		1
	橈骨	L	下		1
	寛骨	R			1
	大腿骨	R	上		1
	大腿骨	L	下		3
	頸骨	L	下		1
	頸骨	R	下		1
	踵骨	L			5
	踵骨	R			3
	距骨	L			4
	距骨	R			3
	中手骨	L	上		1
	中手骨	L	下		1
	中足骨		下		2
	基節骨				1
	末節骨				1
その他	ヒト骨片		（大腿骨中間部？）		1
	モグラ類上腕骨				1
	種不明魚類椎骨				2

付　章 2

上境旭台貝塚第 296 号土坑の自然科学分析調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

1　はじめに

茨城県つくば市上境旭台貝塚は，桜川右岸の台地縁辺部に立地する。これまでの発掘調査により縄文時代後期から晩期を中心とした遺構・遺物が検出されており，当時の集落跡と考えられている。今回の分析調査では，縄文時代後期～晩期の遺構である第 296 号土坑を対象に，この遺構の年代，この遺構付近の堆積環境，古植生，木材や植物質食料の利用状況ついて検討することにした。堆積環境や古植生については，当社技師が現地にて採取した堆積物を試料とし，珪藻分析，花粉分析，種実同定（土壌洗い出し）を実施する。この遺構の年代や植物利用状況については，発掘調査中に取り上げられた多数の大型植物遺体から試料を選択し，放射性炭素年代測定，種実同定，材同定を実施する。

2　試料

発掘調査地点は南側が台地斜面，北側が現在ため池になっており，現地表でも北方向に緩く下る傾斜が観察できる。今回調査対象とする第 296 号土坑は，発掘調査区壁際の最もため池よりの地点で検出されている。今回の試掘調査は，この遺構の検出層準･時代時期や遺物の分布状況を把握するのが目的であることから，南北の谷の長軸方向に設定したＧトレンチ，東西の短軸方向に設定したＬトレンチ，Ｍトレンチが作成されており，堆積状況の観察に好適な条件であった。そのため，土壌試料採取は弊社技師一名が現地に赴き，これらの３箇所のトレンチを中心に堆積断面の観察と層序対比を行った結果をもとに，１地点～３地点（図 1）を設定して土壌試料を採取した。なお，依頼者から提供されたＧトレンチ断面図（中央部付近）によると，現地表面の標高は約 19m である。

１地点はＧトレンチの台地斜面に設定し，３か所の試料採取地点の中では最も台地寄りである。堆積物は，上位より，地表面下約 0 ～ 40cmが表土の暗褐色のシルト層（３層，４層）である。その下位約 40 ～ 100cmが褐色のシルト層（５層，６層）で，下部では縄文時代後期～晩期の土器が出土する。さらにその下位約 100 ～ 120cmが砂混じりの暗灰色シルト層（７層）で，縄文時代後期～晩期の土器が出土する。土壌試料は，表土の暗褐色シルト層で試料番号１～３を，その下位の褐色シルト層で試料番号４～６を，最下位の砂混じりの暗灰色シルト層で試料番号７の合計７点を採取した。

２地点は，Ｇトレンチの西側で直交方向に設定された，Ｌトレンチ東側に位置する。堆積物は，上位より地表面下約 0 ～ 40cmが現表土で，暗褐色～暗褐灰色の粘土～シルト層（３層，４層）である。その下位約 40 ～ 70cmは，褐色シルト層（５層，６層）である。さらに最下位は，約 70 ～ 140cmが暗灰色の粘土層（７層）である。土壌試料は，現表土直下の暗褐色～暗褐灰色の粘土～シルト層で試料番号８，９を，最下位の暗灰色の粘土層で試料番号 10，11 の計４点を採取した。

３地点は，Ｇトレンチの北端（ため池際）に設定し，３地点の中で第 296 号土坑に近く，標高が最も低く出水が顕著であった。堆積物は上位より，地表面下約０～ 100cmが現代の池の護岸による盛り土（１層）である。その下位約 100 ～ 150cmが褐色のシルト層（２層，３層）であり，縄文時代後期～晩期の土器が出土する。その下位約 150 ～ 260cmが褐灰色～暗褐灰色の粘土層（４層，７層）であり，第 296 号土坑が検出された下部からは縄文時代後期～晩期の土器が出土する。土壌試料は褐色のシルト層より試料番号 12，13 を，褐灰色～暗褐灰色の粘土層より試料番号 14 ～ 18 の計７点を採取した。

これらの土壌試料から，１地点最下層から採取した試料番号７，２地点の最下層から採取した試料番号 11，３地点の最下層から採取した試料番号 18 を選択し，珪藻分析，花粉分析，種実同定（土壌洗い出し同定）を行った。

またこのほか，採取位置の詳細は不明であるが，第 296 号土坑の発掘調査中に最下層より出土したとされる，種実遺体 10 点（No.50，51，65，351），木片５点（№46，61，65①，65②，65③）を対象に種実同定，材同定を実施する。また，種実遺体のうちNo.51 のオニグルミ１点を，放射性炭素年代測定試料とした。

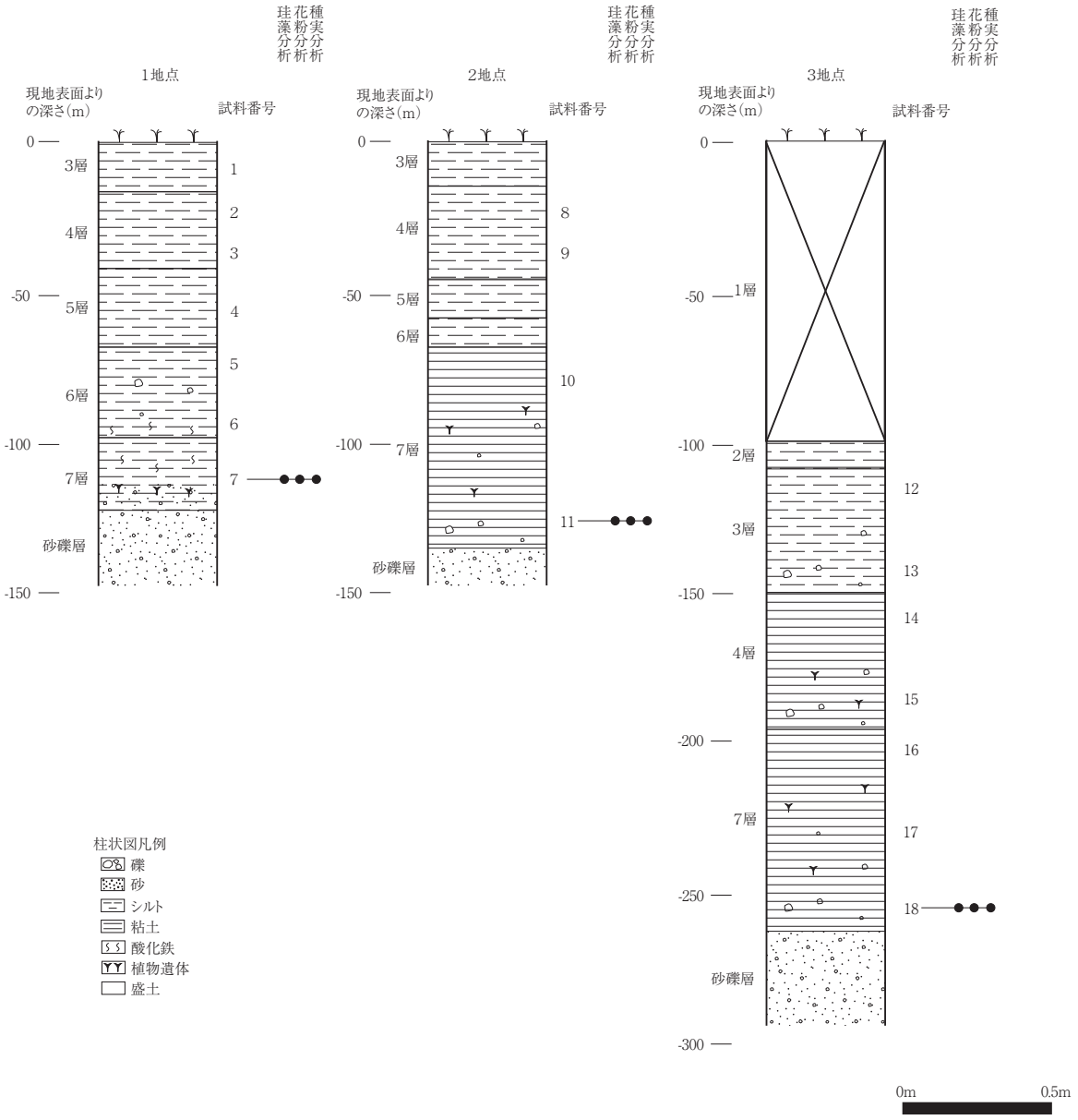


図１　各地点の模式柱状図，試料採取位置および分析層位

2　分析方法

⑴　放射性炭素年代測定

分析試料はAMS法で実施する。試料は，試料表面の汚れをピンセット，超音波洗浄などにより物理的に除去する。塩酸や水酸化ナトリウムを用いて，試料内部の汚染物質を化学的に除去する（AAA処理）。

試料を燃焼させたあと，不純物（水など）を取り除き，精製されたCO_2を得る。これを還元してグラファイトを生成する。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして，タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置を用いて測定する。AMS測定時に，標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また，測定中同時に13C/12Cの測定も行い，この値を用いてδ13Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また，測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり，誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。

暦年較正に用いるソフトウエアは，RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.01，較正曲線はIntcal13（Reimer et ai.,2013）である。

⑵　珪藻分析

土壌は，湿重約５ｇをビーカーに計り取り，過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に，分散剤を加えた後，蒸留水を満たし放置する。その後，上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し，珪藻殻の濃縮を行う。この操作を４～５回繰り返す。次に，自然沈降法による砂質分の除去を行う。その後検鏡し易い濃度に希釈し，カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリュウラックスを滴下し，スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は，油浸600倍または1000倍で行い，メカニカルステージを用い同定・計数した。珪藻の同定と種の生態性については，Horst Lange-Bertalot（2000），Hustedt（1930-1966），Krammer & Lange-Bertalot（1985～1991），Desikachiary（1987）などを参考にする。

個々の産出化石は，まず塩分濃度に対する適応性により，海水生，海水～汽水生，汽水生，淡水生に生態分類し，さらにその中の淡水生種は，塩分，ｐＨ，水の流動性の３適応性についても分類する。堆積環境の変遷を考察するために珪藻化石が100個体以上検出された試料について珪藻化石群集変遷図を作成する。出現率は化石総数を基数とした百分率で表す。図中には，海水生・汽水生・淡水生種の相対頻度と淡水生種を基数とした塩分・ｐＨ・流水の相対頻度について図示する。

⑶　花粉分析

試料約10gについて，水酸化カリウムによる腐植酸の除去，0.25mmの篩による篩別，重液（臭化亜鉛，比重2.3）による有機物の分離，フッ化水素酸による鉱物質の除去，アセトリシス（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い，花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し，400倍の光学顕微鏡下で，同定・計数する。同定は，当社保有の現生標本はじめ，Erdman（1952,1957），Faegri and Iversen（1989）などの花粉形態に関する文献や，島倉（1973），中村（1980），藤木・小澤（2007），三好ほか（2011）などの邦産植物の花粉写真集などを参考にする。

⑷　種実同定

土壌試料は，水に浸し，粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し，ピンセットを用いて同定が可能な種実遺体を抽出する。

種実遺体の同定は，現生標本と石川（1994），中山ほか（2000），鈴木ほか（2012）など参考に実施し，

部位や状態別に個数を数えて結果を一覧表と写真図版で示す。また，保存状態が良好な種実遺体を対象に，デジタルノギスで長さ，幅，厚さを計測した結果を一覧表に併記する。

分析後は，放射性炭素年代測定対象試料（No.51 のオニグルミ１個）を除く種実遺体などを容器に入れて保管する。土壌試料より抽出同定した種実遺体は，約 70％のエタノール溶液で液浸保存する。炭化種実と分析残渣（植物片，炭化材，土器片，昆虫類，骨片，土粒・砂礫類）は，個数または 40℃ 48 時間乾燥後の重量，最大径などを一覧表の下部に表示する。

(5) 材同定

資料の木取りを観察した上で，剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し，プレパラートとする。プレパラートは，生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し，その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお，木材組織の名称や特徴は，島地･伊東（1982），Wheeler 他（1998），Richter 他（2006）を参考にする。また，日本産木材の組織配列は，林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

3 結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を表１に示す。結果は 3,500 ± 30BP である。

暦年較正とは，大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動，及び半減期の違い（14C の半減期 5,730 ± 40 年）を較正することによって，暦年代に近づける手法である。較正のもとになる直線は暦時代がわかっている遺物や年輪（年輪は細胞壁のみなので，形成当時の 14C 年代を反映している）などを用いて作られており，最新のものは 2013 年に発表された Intcal13（Reimer et ai.,2013）である。また，較正年代を求めるソフトウエアはいくつか公開されているが，今回は CALIB を用いる。なお，年代測定値に関しては，国際的な取り決めにより，測定誤差の大きさによって値を丸めるのが普通であるが（Stuiver and Polach 1977），将来的な較正曲線ならびにソフトウエアの更新に伴う再計算ができるようにするため，表に丸めない値（１年単位）を記す。

今回測定試料とした№ 51 のオニグルミ種実試料の測定誤差２σの暦年代は，3,840-3,700calBP である。この年代値は縄文時代後期後半頃を示し，出土土器などの考古学的所見による年代観と調和的である。

表１　放射性炭素年代測定結果

分析番号	種類	処理方法	測定年代 BP δ 13C 補正あり（較正用）	測定年代 BP δ 13C 補正なし	δ 13 C（‰）	暦年較正結果 誤差	暦年較正結果 cal BC/AD	暦年較正結果 cal BP	暦年較正結果 相対比	Code No.
SK296 No.51	オニグルミ	AAA	3,500 ± 30 (3,499 ± 26)	3,500 ± 20	-24.76 ± 0.52	σ	cal BC 1881 - cal BC 1867	cal BP 3,830 - 3,816	0.156	IAAA-140762
							cal BC 1848 - cal BC 1773	cal BP 3,797 - 3,722	0.844	
						2σ	cal BC 1893 - cal BC 1746	cal BP 3,842 - 3,695	1.000	

1)処理方法の AAA は、酸処理－アルカリ処理－酸処理を示す。アルカリ処理時のアルカリ濃度が 1M 未満の場合は AaA と表記している。
2)年代値の算出には、Libby の半減期 5,568 年を使用した。
3)BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
4)付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の 68％が入る範囲）を年代値に換算した値。
5)暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0（Copyright 1986-2013 M Stuiver and PJ Reimer）を使用した。
6)暦年の計算には、補正年代に（）で暦年較正用年代として示した、一桁目を丸める前の値を使用している。
7)年代値は、1 桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正用年代値は 1 桁目を丸めていない。
8)統計的に真の値が入る確率はσは 68.3%、2σは 95.4% である
9)相対比は、σ、2σのそれぞれを 1 とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

(2) 珪藻分析

結果は，表２，図２に示す。分析試料とした３試料のうち，１地点の試料番号７および２地点の試料番号 11 からは全く検出されないが，３地点の試料番号 18 からは 100 個体以上の珪藻化石が検出された。３地点の試料番号 18 に認められた化石の保存状態は，大半が半壊しているだけでなく，溶解の痕跡も認められることから，状態は極不良である。検出された分類群は，淡水生種に限られる。

(3) 花粉分析

花粉分析の結果，１地点の試料番号７は無化石，２地点の試料番号 11 はシダ類胞子が５個体，３地点の試料番号 18 はシダ類胞子が３個体検出された。分析残渣は，１地点の試料番号７は痕跡程度であるが，他の２試料は 50 μ１ほどである。残渣のほとんどは，微粒炭であった。

(4) 種実同定

単体試料の結果を表３，土壌試料洗い出し同定の結果を表４に示す。全８試料を通じて，裸子植物１分類群（イヌガヤ）１個，被子植物５分類群（オニグルミ，センダン，トチノキ，エゴノキ，ミズ属）15 個の種実遺体が同定された。以下に，試料別出土状況を述べる。

・単体試料

常緑針葉樹のイヌガヤの種子が１個（No.50）と，落葉広葉樹のオニグルミの核が５個（No.51），センダンの核が１個（No.50），トチノキの種子が１個（No.351），エゴノキの種子が２個（No.51,65）の，計 10 個が同定された。

・土壌試料

１地点の試料番号７は，試料のほぼ全量 150cc（214g）を洗い出したが，種実遺体が検出されず，炭化材が１個（0.01g 未満 ; 径 3.1mm）と，土粒・砂礫類が 10.7g 確認される。

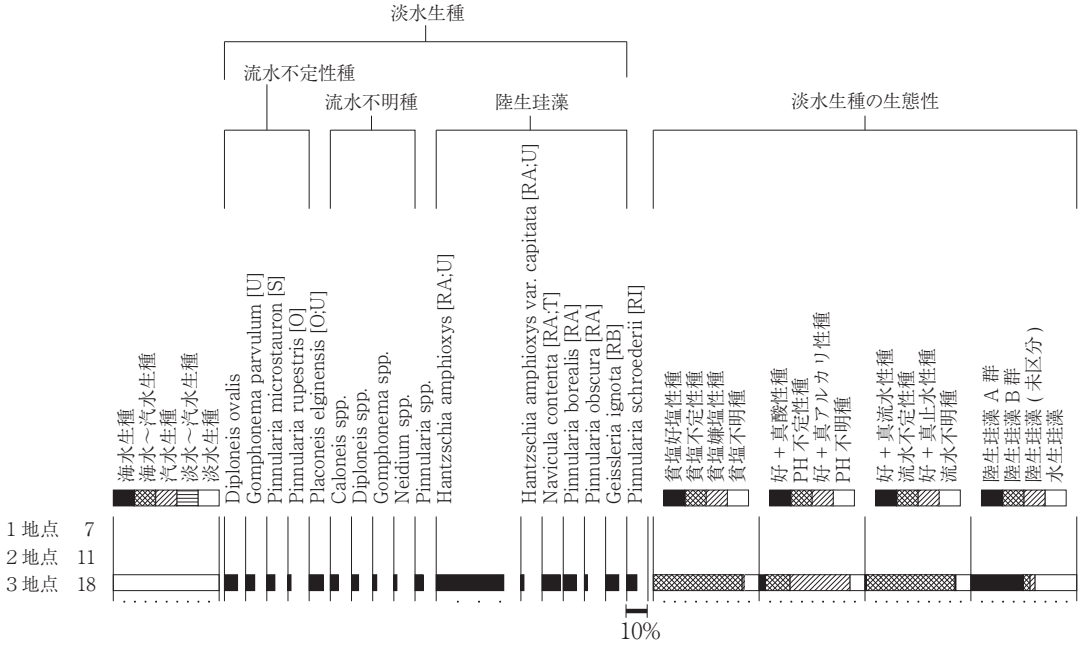
２地点の試料番号 11 は，試料のほぼ全量 200cc（288g）より，草本のミズ属の果実が２個検出されたほかに，植物片が 0.002g，炭化材が５個（0.01g 未満 ; 径 1.8mm），土器片が３個（0.1g; 最大 5.5mm），

表２　珪藻分析結果

種　　類	生態性			環境	1 地点	2 地点	3 地点
	塩分	pH	流水	指標種	7	11	18
Caloneis bacillum (Grun.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	2
Caloneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	8
Diploneis ovalis (Hilse) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	13
Diploneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	7
Geissleria ignota (Krasske) Lange-Bertalot et Metzeltin	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	13
Gomphonema angustatum (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	1
Gomphonema parvulum (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	9
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	4
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	-	-	67
Hantzschia amphioxys var. capitata Muller	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	-	-	3
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	-	-	18
Neidium ampliatum (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	-	1
Neidium iridis (Ehr.) Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-bi	O	-	-	1
Neidium spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	3
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	13
Pinnularia microstauron (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	-	-	8
Pinnularia obscura Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	3
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	-	3
Pinnularia schroederii (Hust.) Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	10
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	8
Placoneis elginensis (Greg.) Cox	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	-	-	14
Stauroneis lauenburgiana fo. angulata Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	1
海水生種					0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0
汽水生種					0	0	0
淡水～汽水生種					0	0	0
淡水生種					0	0	210
珪藻化石総数					0	0	210

凡例
塩分・ｐＨ・流水に対する適応性
H.R.: 塩分濃度に対する適応性
Euh: 海水生種
Euh-Meh: 海水生種 - 汽水生種
Meh: 汽水生種
Ogh-hil: 貧塩好塩性種
Ogh-ind: 貧塩不定性種
Ogh-hob: 貧塩嫌塩性種
Ogh-unk: 貧塩不明種
pH: 水素ｲｵﾝ濃度に対する適応性
al-bi: 真ｱﾙｶﾘ性種
al-il: 好ｱﾙｶﾘ性種
ind :pH 不定性種
ac-il: 好酸性種
ac-bi: 真酸性種
unk :pH 不明種
C.R.: 流水に対する適応性
l-bi: 真止水性種
l-ph: 好止水性種
ind : 流水不定性種
r-ph: 好流水性種
r-bi: 真流水性種
unk : 流水不明種

環境指標種
O：沼沢湿地付着生種（安藤，1990）
S：好汚濁性種
U：広適応性種
T：好清水性種
（以上は Asai,K. & Watanabe,T.1995）
RI：陸生珪藻
（RA：A 群 ,RB:B 群、伊藤・堀内，1991）



海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも 100 個体以上検出された試料について示す。なお、●は 1％未満を示す。

環境指標種
O: 沼沢湿地付着生種（安藤、1990）S: 好汚濁性種　U: 広適応性種　T: 好清水性種（以上は Asai and Watanabe,1995）
RI: 陸生珪藻（RA:A 群 ,RB:B 群、伊藤・堀内、1991）

図２　珪藻化石群集

表３　種実同定結果（単体試料）

遺　構	No.	分類群	部位	状態	個数	枝番	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	備　　考
SK296	No.50	イヌガヤ	種子	完形	1	－	15.7	9.7	8.4	
		センダン	核	完形	1	－	13.1	10.8	－	
	No.51	オニグルミ	核	完形	5	1	28.6	23.1＋	22.8	縫合線上両側面にネズミ類食痕
						2	29.2	21.5＋	21.7	縫合線上両側面にネズミ類食痕
						3	29.6	23.2＋	23.4	縫合線上両側面にネズミ類食痕
						4	29.2	23.7＋	22.8	縫合線上両側面にネズミ類食痕，年代測定対象
						5	29.3	21.8＋	21.1	縫合線上両側面にネズミ類食痕
		エゴノキ	種子	完形	1	－	11.7	8.1	－	
	No.65	エゴノキ	種子	完形	1	－	11.1	6.9	－	
SK296 ③	No.351	トチノキ	種子	破片	1	－	22.2＋	26.2－	－	G トレ 4

表４　種実同定結果（土壌試料水洗）

分類群	部位	状態		1 地点 7	2 地点 11	3 地点 18	（7 層下部）	備　　考
オニグルミ	核	破片	炭化	－	－	－	1	乾重 0.01g 未満
オニグルミ？	核？	破片	炭化	－	－	－	3	乾重 0.01g 未満
ミズ属	果実	完形		－	1	－	－	
		破片		－	1	－	－	
分析残渣（抽出同定対象外）								
植物片				－	0.002	－	－	乾重（g）
炭化材				1	5	－	－	個数 ,0.01g 未満
				3.1	1.8	－	－	最大径（mm）
土器片				－	3	8	29	個数
				－	0.081	12.916	18.977	乾重（g）
				－	5.5	29.89	40.72	最大径（mm）
昆虫類				－	1		－	個数
骨片				－	－	1	2	個数
				－	－	0.001	0.085	乾重（g）
				－	－	2.6	6.41	最大径（mm）
土粒・砂礫類				10.747	4.409	4.986	15.868	乾重（g）
分析量				150	200	200	450	容積（cc）
				214	288	319	630	湿重（g）

表５　材同定結果

地　区	遺　構	番　号	試料名	形　状	種　類
G 区	SK296	No.46	木片	芯持材	イヌガヤ
G 区	SK296	No.61	木片	芯持丸木	イヌガヤ
G 区	SK296	No.65	木片①	芯持材	イヌガヤ
G 区	SK296	No.65	木片②	破片	クリ
G 区	SK296	No.65	木片③	板状	樹皮

昆虫類の破片が１個，土粒・砂礫類が 4.4g 確認された。

３地点の試料番号 18 は，試料のほぼ全量 200cc（319g）を洗い出したが，種実遺体が検出されず，土器片が８個（12.9g; 最大 29.9mm），骨片が１個（0.001g; 径 2.6mm），土粒・砂礫類が 5.0g 確認される。

そこで，現地調査時に多めに採取した試料番号 18（７層下部）の試料のほぼ全量 450cc（630g）を追加して洗い出し，種実遺体の回収を試みた。その結果，炭化したオニグルミの核の微細片が１個（0.01g 未満），オニグルミ？の微細片が３個（0.01g 未満）検出された他に，土器片が 29 個（19.0g; 最大 40.7mm），骨片が２個（0.1g; 径 6.4mm），土粒・砂礫類が 15.9g 確認された。

同定された種実遺体各分類群の形態的特徴などを，以下に述べる。

・イヌガヤ（Cephalotaxus harringtonia（Knight）K. Koch）　イヌガヤ科イヌガヤ属

種子は暗灰褐色，長さ 1.8cm，幅 1.0cm，厚さ 0.8cm のやや偏平な倒狭卵体。基部はやや尖り，基部から半ば付近の両側に稜がある。種皮は硬く木質で，表面は粗面。

・オニグルミ（Juglans mandshurica Maxim. var. sachalinensis（Miyabe et Kudo）Kitamura）　クルミ科クルミ属

核は灰褐色，炭化核は黒色。核は，長さ 2.9 ～ 3.0cm，幅 2.2 ～ 2.4cm，厚さ 2.1 ～ 2.3cm の広卵体で頂部が尖り，１本の明瞭な縦の縫合線がある。核は硬く緻密で，表面には維管束の痕跡である縦網状の彫紋があり，ごつごつしている。内部には子葉が入る２つの大きな窪みと隔壁がある。出土核は，５個全ての縫合線上両側面にネズミ類による円形の食痕が確認された。

・センダン（Melia azedarach L. var. subtripinnata Miquel）　センダン科センダン属

核（内果皮）は灰褐色，長さ 1.3cm，径 1.1cm の楕円体。基部には大きく深い孔がある。背面は浅く広い５～６個の縦溝と縦隆条が交互に並び，上面観は星型。表面は粗面。

・トチノキ（Aesculus turbinata Blume）　トチノキ科トチノキ属

種子は，完形ならば，径 2.5 ～ 4 cm 程度の偏球体で，表面にはほぼ赤道面を蛇行して一周する曲線を境に，不規則な流理状模様がある光沢の強い黒色の上部と，粗面で光沢のない灰褐色の下部の着点に別れる。種皮は薄く硬く，不規則に割れる。出土種子は破片で，残存長 2.2cm，残存径 2.6cm を測る。

・エゴノキ（Styrax japonica Sieb. et Zucc.）　エゴノキ科エゴノキ属

種子は灰褐色，長さ 1.2cm，径 0.8cm（No.50）と，長さ 1.1cm，径 0.7cm（No.65）の卵体で，頂部から基部にかけて３本程度の縦溝と縦隆条がある。基部は斜切形で，灰褐色，径３～５mm の着点がある。種皮は硬く断面は柵状で，表面にはやや粗い粒状網目模様がある。

・ミズ属（Pilea）　イラクサ科

果実は淡灰褐色，長さ 1.1 ～ 1.2mm，幅 0.8 ～ 1.0mm の偏平な非対称狭倒卵体。頂部，基部はやや尖る。果皮表面は粗面で，微細な疣状突起が散在する。

(5)　材同定

樹種同定結果を表５に示す。木片は，針葉樹１分類群（イヌガヤ）と広葉樹１分類群（クリ）に同定された。なお，№65 ③は樹皮であり，木部細胞が残っていないため，種類は不明である。同定された各分

類群の解剖学的特徴などを記す。

・イヌガヤ（Cephalotaxus harringtonia（Knight）K. Koch f.）　　イヌガヤ科イヌガヤ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか。仮道管内壁にはらせん肥厚が認められる。樹脂細胞は早材部および晩材部に散在する。放射組織は柔細胞のみで構成され，分野壁孔はヒノキ型で１分野に 1-2 個。放射組織は単列，1-10 細胞高。

・クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で，孔圏部は 3-4 列，孔圏外で急激に管径を減じたのち，漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，1-15 細胞高。

4　考察

⑴　遺構の年代

放射性炭素年代測定の結果，暦年代で 3,840-3,700calBP（２σ）という年代値が得られたことから，水場遺構の可能性が指摘されている当遺構の年代は，縄文時代後期後半である可能性がある。この結果は，縄文時代後期～晩期の土器がこの遺構に伴うとする，発掘調査所見と調和するものといえる。

⑵　堆積環境

台地斜面で採取された１地点試料番号７と，それより斜面を下った２地点の試料番号 11 からは，珪藻化石が全く検出されない。斜面地であることから，おそらく堆積速度が速かったか，堆積後の続成作用によって，完全に分解消失したものと思われる。そのため，堆積環境の推定を行うことは困難である。

珪藻殻が分解されやすい原因として，堆積した場所が水域ではなく，陸域における好気的環境下にあることが想定されることから，両地点は SK296 が構築された頃，このような堆積環境であったことが示唆される。

SK296 付近の３地点の試料番号 18 からは主に淡水生種の陸生珪藻が検出された。特徴的に認められた種類は，淡水生種で陸生珪藻の Geissleria ignota，Hantzschia amphioxys，Navicula contenta，Pinnularia borealis, Pinnularia schroederii, などである。陸生珪藻の Geissleria ignota, Hantzschia amphioxys, Navicula contenta，Pinnularia borealis，Pinnularia schroederii などは，水中や水底の環境以外のたとえばコケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面，土壌の表層部など大気に接触した環境に生活する一群（小杉，1986）である。特に，本試料から認められた陸生の種群は，離水した場所の中で乾燥に耐えうることのできる群集とされる（伊藤・堀内，1989；1991）。また，堆積物の分析を行った際，これらの種群が優占（70 ～ 80％以上）する結果が得られれば，その試料が堆積した場所は，水域以外の空気に曝されて乾いた環境であったことが推定できる。以上のような種群が特徴的に認められたこと，及び堆積物中に含まれる量が比較的少ないことから，堆積時に本地点は水域ではなく，好気的な環境下にあったことが示唆される。今回花粉化石が３点ともほとんど見られず，微粒炭が少量認められる。花粉化石は好気的環境下における風化に弱いことから，珪藻分析結果と調和的といえる。

⑶　古植生

分析対象とした１地点の№７，２地点の№11，３地点の№18 からは，花粉化石がほとんど検出されず，花粉化石の組成に基づく古植生の推定は，行うことができなかった。以下，種実遺体同定と樹種同定の結果により，SK296 付近の古植生について検討する。

同定された種実遺体には，木本のイヌガヤ，オニグルミ，センダン，トチノキ，エゴノキと，草本のミ

ズ属が確認された。

イヌガヤは, 山地の暗く湿った広葉樹林内に生育する常緑低木～小高木である。オニグルミ, トチノキは, 沖積地や谷沿いなどの水分が多く肥沃な土地に生育する落葉高木で，エゴノキは，山麓の雑木林や山地の谷間，小川のほとりなどに生育する落葉小高木である。センダンは，現在では四国，九州，小笠原，琉球の海近くの暖地の日当たりの良い場所に生育し，本州ではよく植栽される落葉高木である。これらの樹種は，当時の本遺跡周辺に生育していたと考えられる。草本類は，山野の陰湿地などに生育するミズ属が確認され，上述の樹木が生育する林内などに生育していたと考えられる。

材では芯持丸木や芯持材が多く，他に不定形の破片や板状の破片がある。樹種同定の結果，針葉樹のイヌガヤ，広葉樹のクリと種類不明の樹皮が認められた。イヌガヤは，河畔などに生育する常緑小高木～低木で，木材は重硬・緻密で強度・耐水性・靭性が比較的高い。一方，クリは，二次林などに生育する落葉高木で，木材は重硬で強度と耐朽性が高い。

試料別に見ると，芯持材あるいは芯持丸木となる３点（№46,61,65 ①）はイヌガヤ，不定形の破片である№65 ②はクリであった。これらの種類は本遺跡周辺に生育していたと思われる。

(4) 植物利用

同定された種実の内，オニグルミは，核内部の子葉が生食可能で栄養価も高い。トチノキも，灰汁抜きをすることで種子内部の子葉が食用可能となる有用植物である。これらの堅果類は，長期保存可能で収量も多いことから，古くから利用され，遺跡出土例も多い。今回，単体試料で確認されたオニグルミの核は，全てネズミ類による食害を受け，トチノキの種子も破片の状態であったため，人による食利用の確実な痕跡は確認できなかった。一方，３地点試料番号 18 の土壌試料より，土器片や骨片とともに確認されたオニグルミの炭化核の破片は炭化しており, 当時本遺跡内に持ち込まれ利用された植物質食料であることが示唆される。

その他，イヌガヤは，種子を包む外種皮が食用可能である。エゴノキは食用されないが，種皮を包む果皮にサポニンを多く含むことから，洗剤としての利用が可能である。

また，材同定を行った木材には明瞭な加工痕が認められないため，利用の有無などが不明であるが，これまでの各地の調査例では，イヌガヤは縄文時代の丸木弓，クリは建築部材などによく利用される（伊東・山田 ,2012)。

引用文献

・Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,35 － 47.

・安藤一男 , 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42,73 ～ 88.

・Erdtman G.,1952,Pollen morphology and plant taxonomy: Angiosperms（An introduction to palynology. I）Almqvist &Wiksells,539p.

・Erdtman G.,1957, Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy: Gymnospermae, Pteriodophyta, Bryophyta（Illustrations）（An Introduction to Palynology. II）,147p.

・Desikachiary, T. V., 1987, Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation, Madras, Printed at TT. Maps & Publications Private Limited, 328, G. S. T. Road, Chromepet, Madras-600044.　1-13, Plates : 401-621.

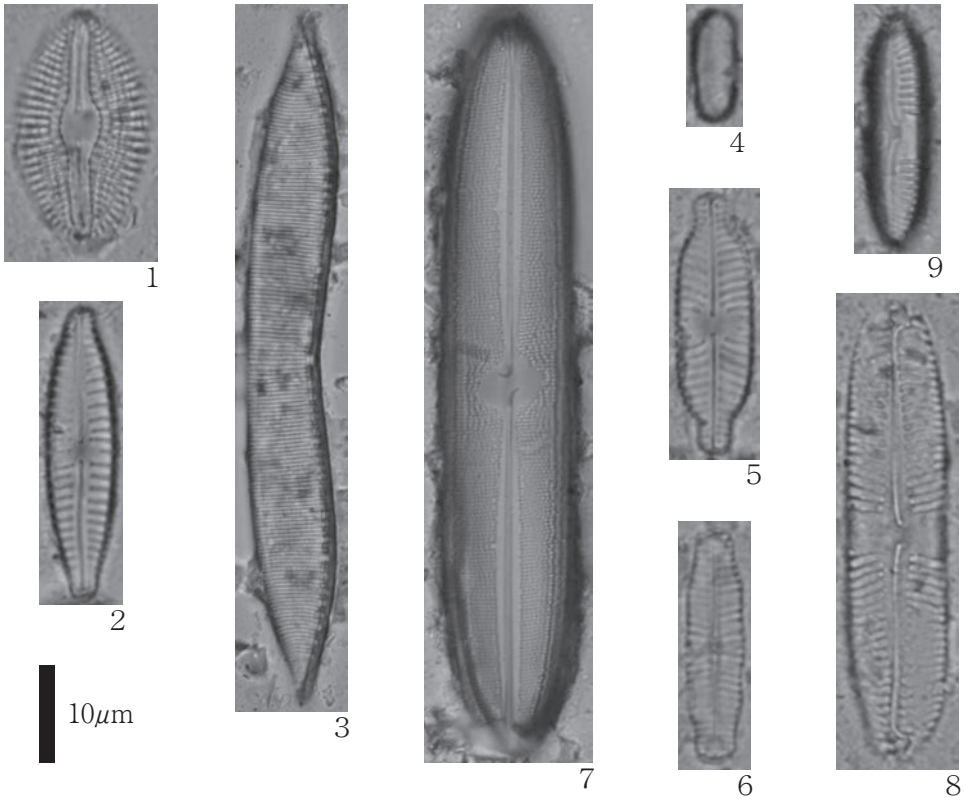
・Feagri K. and Iversen Johs.,1989,Textbook of Pollen Analysis.The Blackburn Press,328p.

・藤木利之・小澤智生 ,2007, 琉球列島産植物花粉図鑑 . アクアコーラル企画 ,155p.

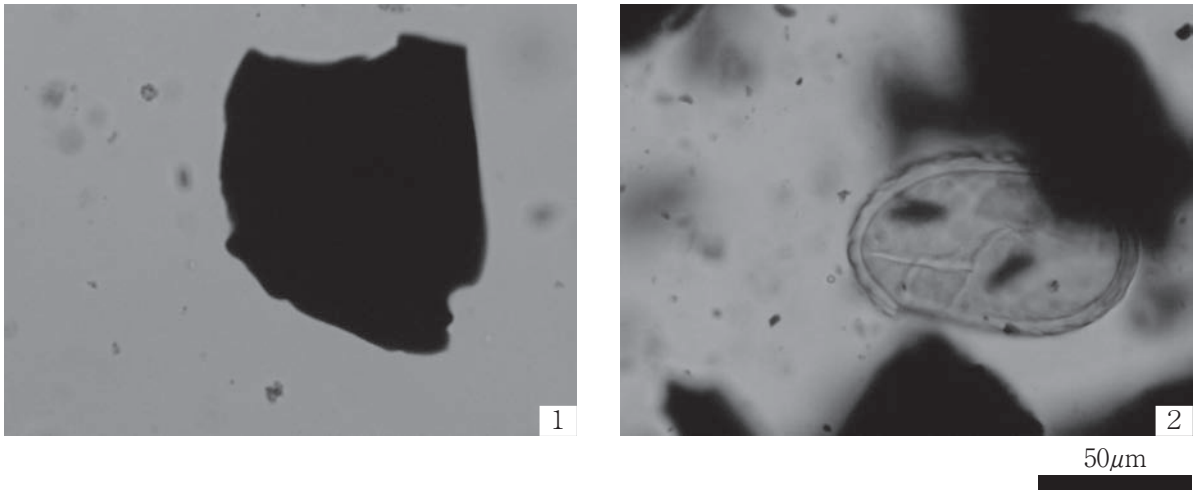
・林　昭三 ,1991, 日本産木材　顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .

・Hustedt, F., 1930, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen

Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1, 920p.
・Hustedt, F., 1937-1938, Systematische unt okologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. Ⅰ～Ⅲ. Arch. Hydrobiol. Suppl., 15, 131-809p, 1-155p, 274-349p.
・Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2, 845p.
・Hustedt, F., 1961-1966, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung derubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3, 816p.
・石川茂雄 ,1994, 原色日本植物種子写真図鑑 . 石川茂雄図鑑刊行委員会 ,328p.
・伊藤良永・堀内誠示 , 1989, 古環境解析からみた陸生珪藻の検討　－－陸生珪藻の細分－－. 日本珪藻学会第 10 回大会講演要旨集 , 17.
・伊藤良永・堀内誠示 , 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用 . 日本珪藻学誌 ,6, 23-44.
・伊東隆夫 ,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料 ,31, 京都大学木質科学研究所 ,81-181.
・伊東隆夫 ,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料 ,32, 京都大学木質科学研究所 .66-176.
・伊東隆夫 ,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料 ,33, 京都大学木質科学研究所 ,83-201.
・伊東隆夫 ,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料 ,34, 京都大学木質科学研究所 ,30-166.
・伊東隆夫 ,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料 ,35, 京都大学木質科学研究所 ,47-216.
・小杉正人 ,1986, 陸生珪藻による古環境の解析とその意義－わが国への導入とその展望－. 植生史研究 , 1, 9-44.
・小杉正人 ,1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用 . 第四紀研究 , 27,（1）, 1-20
・三好教夫・藤木利之・木村裕子 ,2011, 日本産花粉図鑑 . 北海道大学出版会 ,824p.
・Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1985, Naviculaceae. Bibliothyca Diatomologica, vol. 9, p. 250. Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1986, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2（1）: 876p.
・Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1988, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2（2）: 596p.
・Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1990, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2（3）: 576p.
・Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1991, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2（4）: 437p.
・中山至大・井之口希秀・南谷忠志 ,2000, 日本植物種子図鑑 . 東北大学出版会 ,642p.
・中村　純 ,1980, 日本産花粉の標徴　Ⅰ　Ⅱ（図版）. 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録　第 12,13 集 ,91p.
・Reimer J Paula • Bard Edouard • Bayliss Alex •Beck J Warren • Blackwell G Paul • Ramsey Bronk Christopher • Buck E Caitlin • Cheng Hai • Edwards R Lawrence • Friedrich Michael • Grootes M Pieter • Guilderson P Thomas • Haflidason Haflidi • Hajdas Irka • Hatté Christine • Heaton J Timothy • Hoffmann Dirk L • Hogg G Alan • Hughen A Konrad • Kaiser K Felix • Kromer Bernd • Manning W Sturt • Niu Mu • Reimer W Ron • Richards A David • Scott E Marian • Southon R John • Staff A Richard • Turney S M Christian • Plicht vander Johannes,2013, Intcal13 and Marine13 Radiocarbon age Calibration curves 0–50,000 years cal BP.RADIOCARBON,55,1869–1887.
・Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）,2006, 針葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修）, 海青社 ,70p.［Richter.H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（2004）IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］.
・島地　謙・伊東隆夫 ,1982, 図説木材組織 . 地球社 ,176p.
・島倉巳三郎 ,1973, 日本植物の花粉形態 . 大阪市立自然科学博物館収蔵目録　第 5 集 ,60p.
・Stuiver　Minze and Polach A Henry,1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon ,19, 355-363.
・鈴木庸夫・高橋　冬・安延尚文 ,2012, ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実－形態や大きさが　一目でわかる植物の種子と果実 632 種－. 誠文堂新光社 ,272p.
・Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998, 広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト .
・伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）, 海青社 ,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.

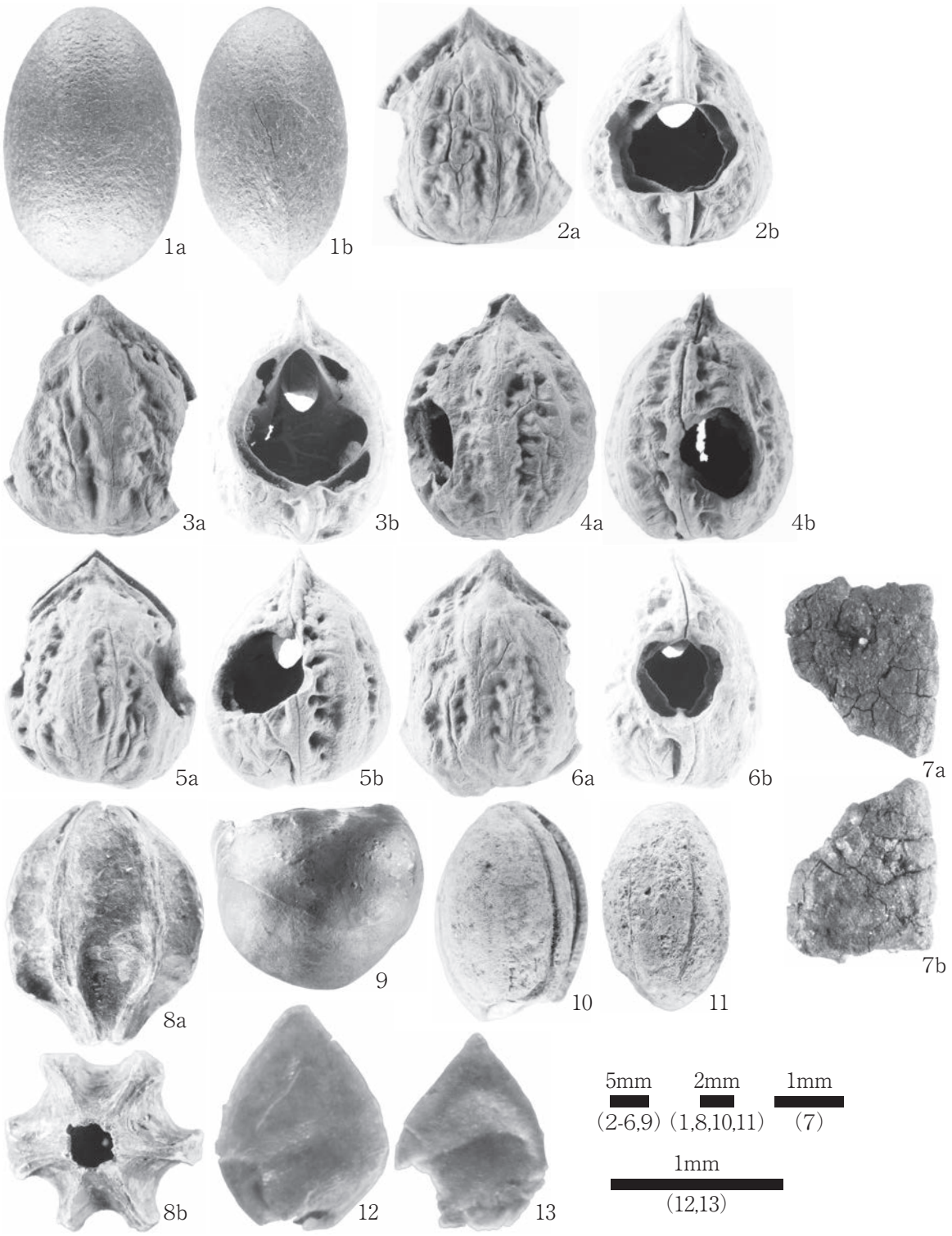


1．*Diploneis ovalis*　(Hilse)　Cleve　（３地点,試料番号18）
2．*Gomphonema parvulum*　(Kuetz.)　Kuetzing　（３地点,試料番号18）
3．*Hantzschia amphioxys*　(Ehr.)　Grunow　（３地点,試料番号18）
4．*Navicula contenta*　Grunow　（３地点,試料番号18）
5．*Placoneis elginensis*　(Greg.)　Cox　（３地点,試料番号18）
6．*Geissleria ignota*　(Krasske)　Lange-Bertalot et Metzeltin　（３地点,試料番号18）
7．*Neidium ampliatum*　(Ehr.)　Krammer　（３地点,試料番号18）
8．*Pinnularia microstauron*　(Ehr.)　Cleve　（３地点,試料番号18）
9．*Pinnularia schroederii*　(Hust.)　Krammer　（３地点,試料番号18）



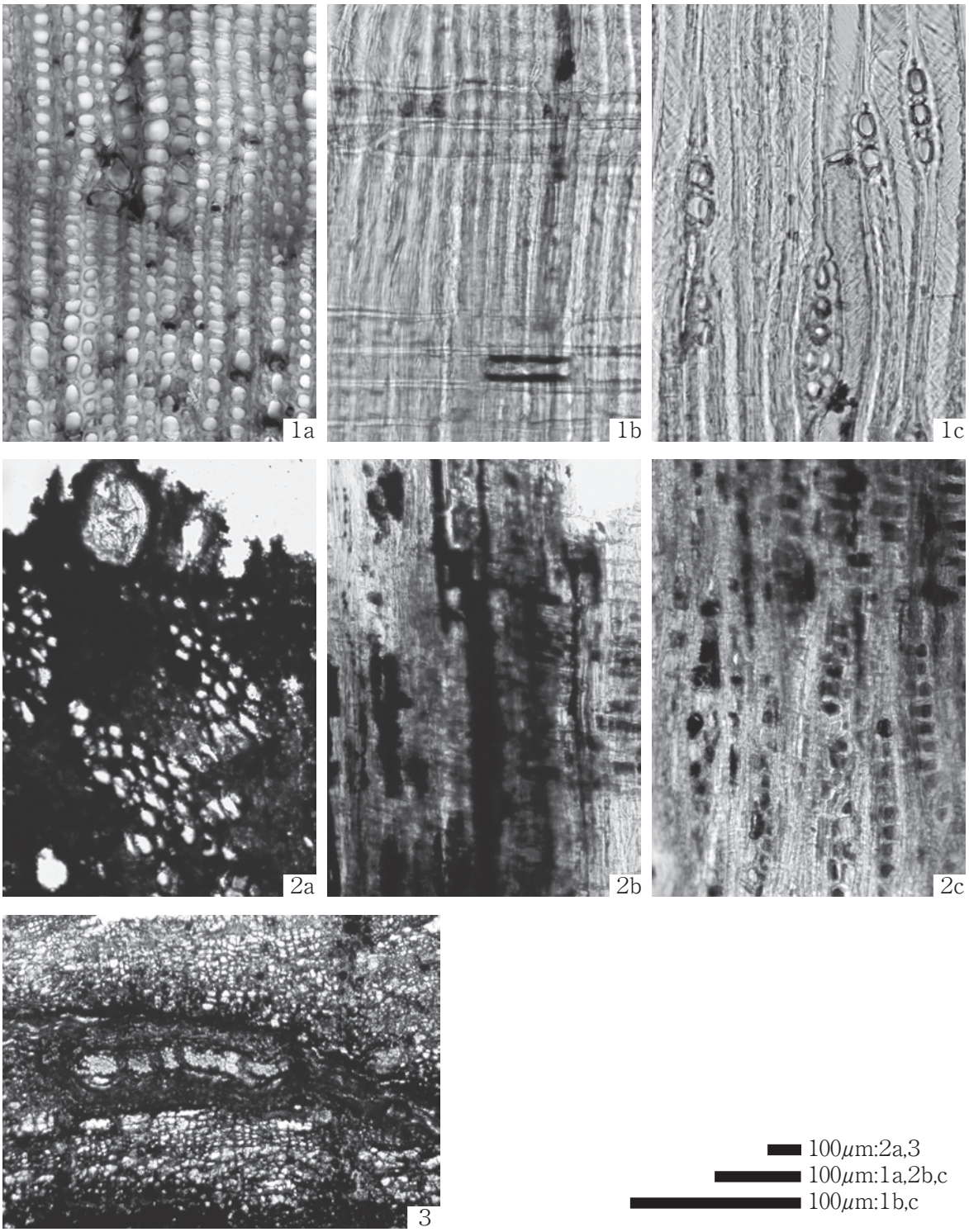
1.微粒炭（１地点,試料番号７）　　2.シダ類胞子（２地点,試料番号11）

写真１　珪藻化石・花粉化石



1．イヌガヤ 種子（SK296;No.50）
2．オニグルミ 核（ネズミ類食痕）(SK296;No.51）
3．オニグルミ 核（ネズミ類食痕）(SK296;No.51）
4．オニグルミ 核（ネズミ類食痕）(SK296;No.51）
5．オニグルミ 核（ネズミ類食痕）(SK296;No.51）
6．オニグルミ 核（ネズミ類食痕）(SK296;No.51）
7．オニグルミ 核（炭化）(３地点,試料番号18）
8．センダン 核（SK296;No.50）
9．トチノキ 種子（Gトレ4 SK296③;No.351）
10．エゴノキ 種子（SK296;No.51）
11．エゴノキ 種子（SK296;No.65）
12．ミズ属 果実（２地点,試料番号11）
13．ミズ属 果実（２地点,試料番号11）

写真２　種実遺体



1.イヌガヤ（SK296;№46）　a:木口,b:柾目,c:板目
2.クリ（SK296;№65木片②）　a:木口,b:柾目,c:板目
3.樹皮（SK296;№65木片③）　横断面

写真３　木材

写　真　図　版

上境旭台貝塚出土遺物

調査区全景 北上空から

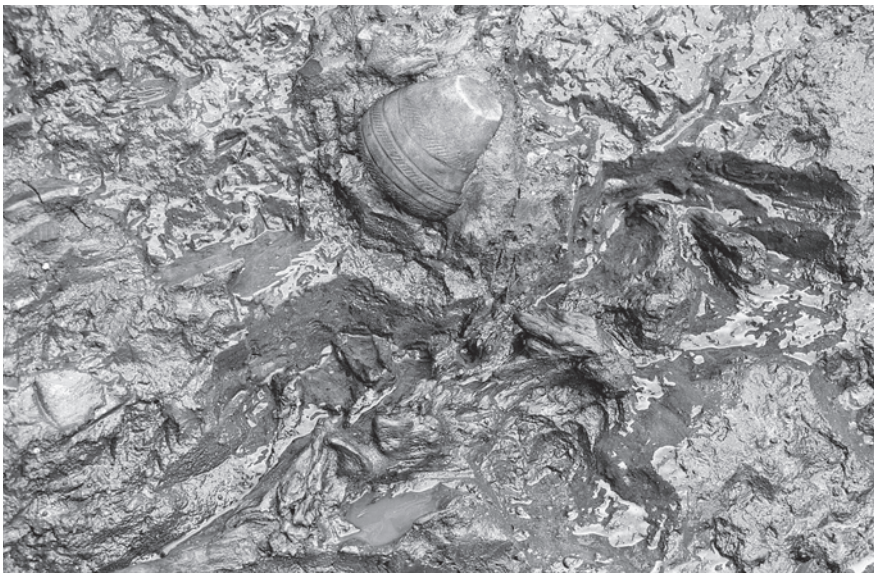
第15号竪穴建物跡 完掘状況

第15号竪穴建物跡
遺物出土状況①

第15号竪穴建物跡
遺物出土状況②

第２号陥し穴
完掘状況

第 193 号　土　坑
遺 物 出 土 状 況



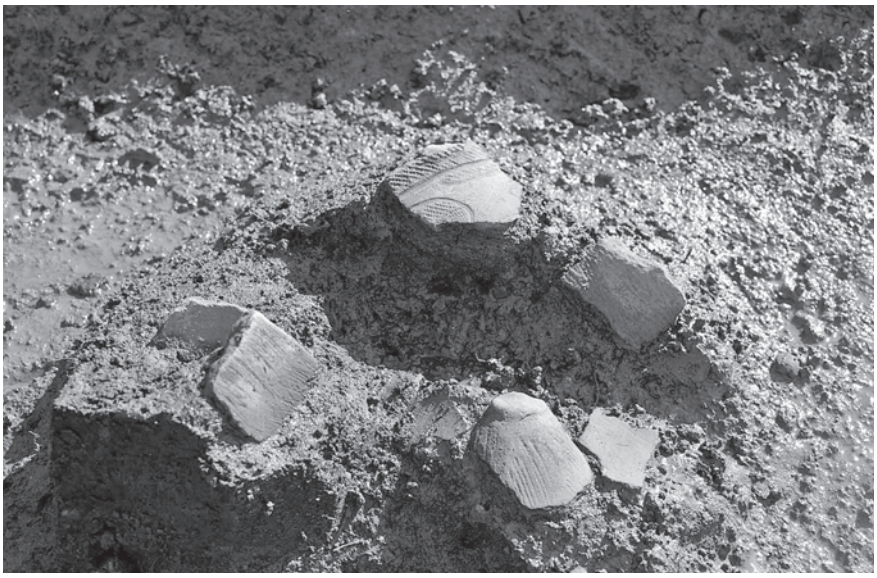
第 296 号　土　坑
遺 物 出 土 状 況

第 296 号　土　坑
完　掘　状　況

第５・８号溝跡
完掘状況（東から）

第６号溝跡
遺物出土状況

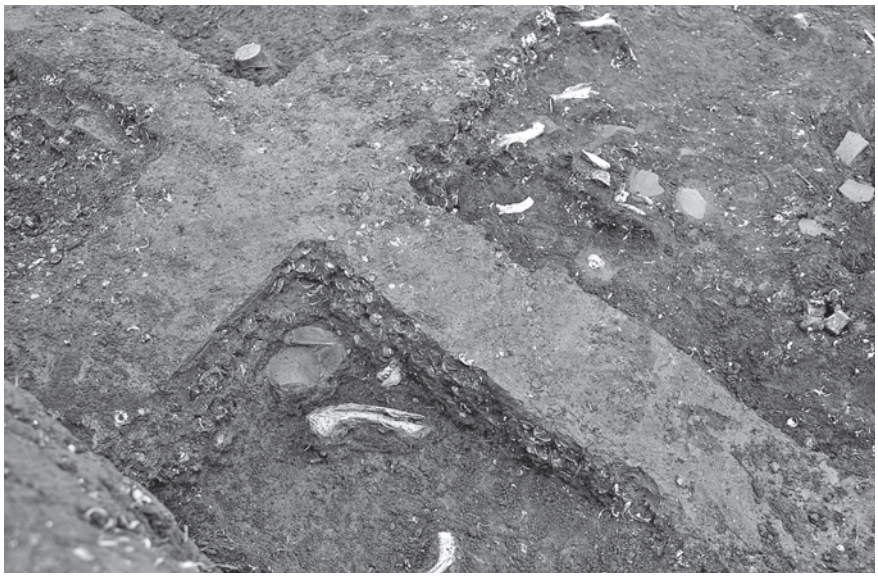
第６・７号溝跡
完掘状況



第７号溝跡
遺物出土状況

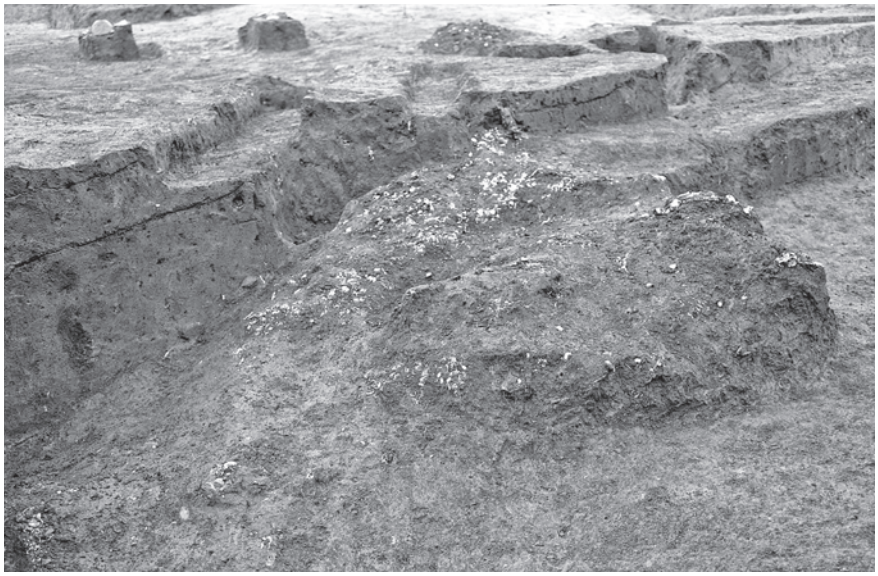
第３号貝層
土層断面

第４号貝層
遺物出土状況①



第 4 号 貝 層
遺物出土状況②

第 4 号 貝 層
獣 骨 出 土 状 況



第 9 号 貝 層
確 認 状 況

第 9 号 貝 層
獣 骨 出 土 状 況

第 4 号 地 点 貝 塚
土 層 断 面

第2号遺物集中地点
遺 物 出 土 状 況 ①

第２号遺物集中地点
遺物出土状況②

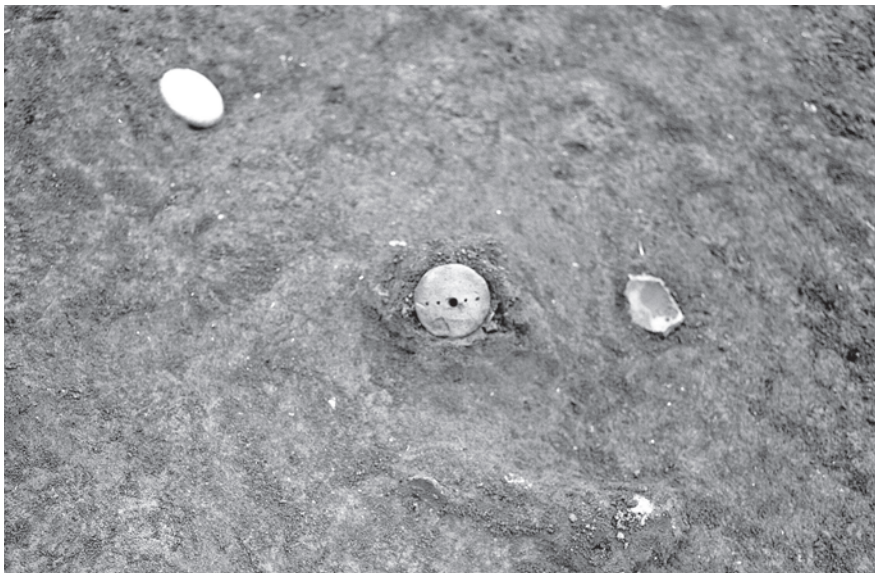
第４号包含層
遺物出土状況①

第４号包含層
遺物出土状況②

第４号包含層
遺物出土状況③

第４号包含層
遺物出土状況④

第４号包含層
完掘状況（南から）



第５号包含層
遺物出土状況①

第５号包含層
遺物出土状況②

第５号包含層
完掘状況（東から）

SD 7 -352

SD 7 -357

SK296-344

SK296-346

SK193-338

SM 4 -365

SM 4 -370

SK296-347

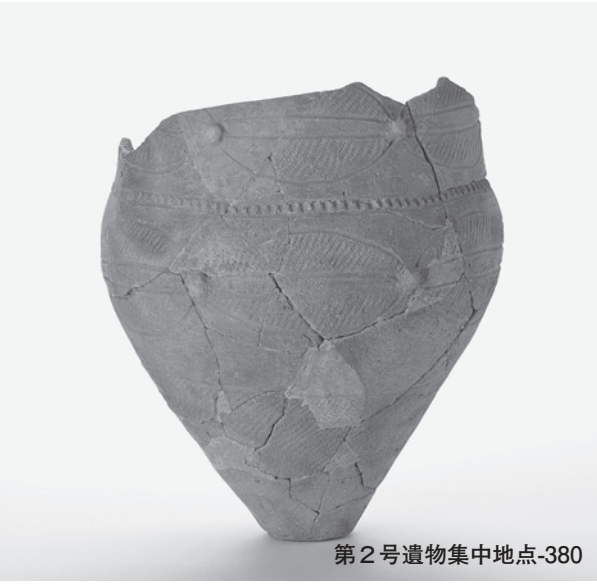
SM 4 -362

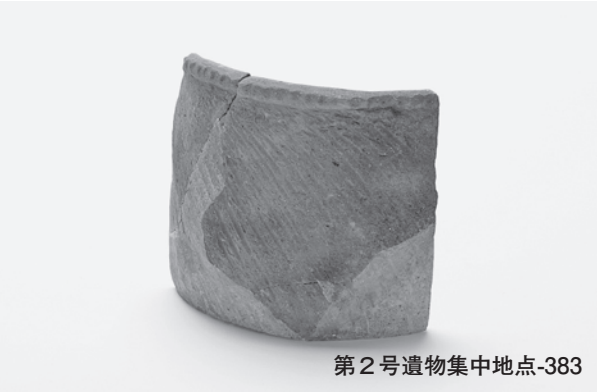
出土土器 (1)

SM４-372

SM４-371

第２号遺物集中地点-385


第２号遺物集中地点-380


第２号遺物集中地点-383

HG４-433

HG４-416

HG４-415

HG４-387

出土土器 (2)

HG 4 -425

HG 4 -437

HG 4 -427

HG 5 -438

HG 4 -423

HG 5 -439

HG 4 -431

HG 5 -452

HG 4 -429

HG 5 -449

出土土器 (3)

PL14

HG5-472

HG5-474

HG5-471

HG5-475

HG5-465

HG5-487

HG5-488

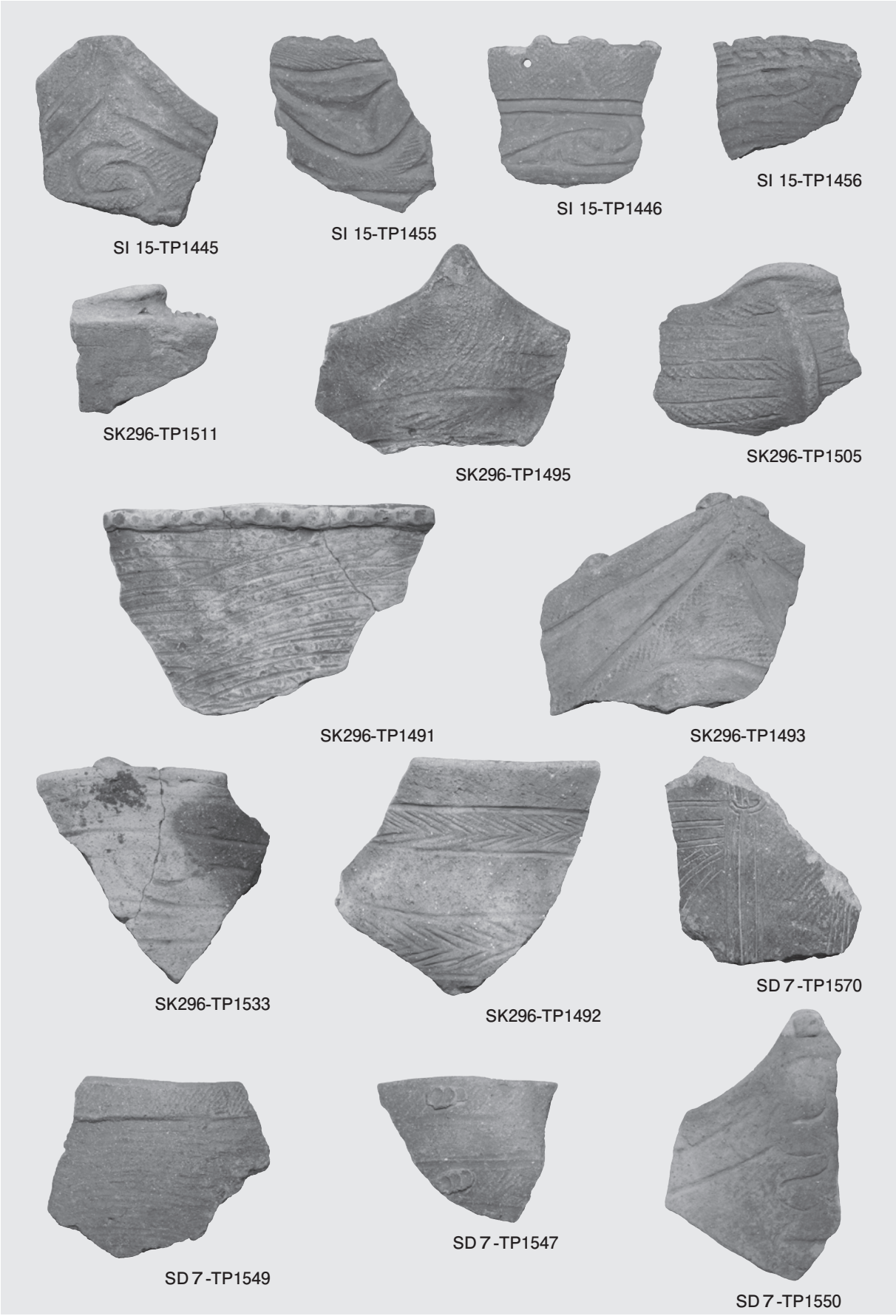
HG5-466

HG5-493

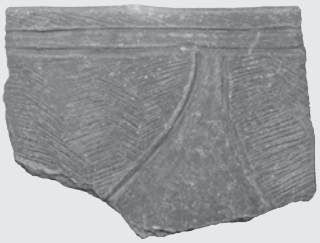
HG5-468

HG5-495

出土土器 (4)


SI 15-TP1445
SI 15-TP1455
SI 15-TP1446
SI 15-TP1456
SK296-TP1511
SK296-TP1495
SK296-TP1505
SK296-TP1491
SK296-TP1493
SK296-TP1533
SK296-TP1492
SD 7 -TP1570
SD 7 -TP1549
SD 7 -TP1547
SD 7 -TP1550

出土土器 (5)


SD７-TP1548

PG６-TP1576

SM４-TP1607

SM４-TP1598

SM４-TP1618

SM４-TP1622

SM４-TP1615

SM４-TP1596

SM４-TP1624

SM９-TP1631

SM９-TP1630

SM９-TP1640

第１号地点貝塚-TP1647

第２号地点貝塚-TP1652

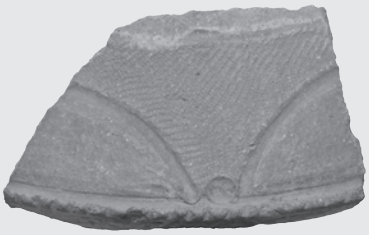
第２号地点貝塚-TP1657

第２号地点貝塚-TP1654

第４号地点貝塚-TP1668

出土土器 (6)

第１号遺物集中地点-TP1678



第１号遺物集中地点-TP1685

第１号遺物集中地点-TP1676

第２号遺物集中地点-TP1688

HG４-TP1949

HG４-TP1954

HG４-TP1776

HG４-TP1816

HG４-TP1828

HG４-TP1940

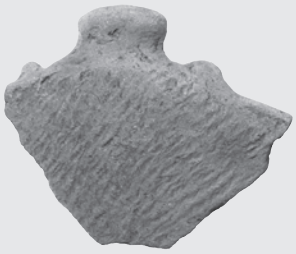
HG４-TP1927

HG４-TP1820

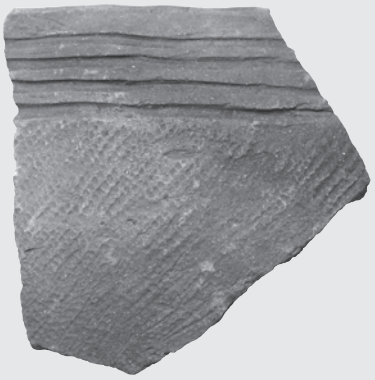
HG４-TP1944

HG５-TP1965

出土土器 (7)


HG5-TP2122

HG5-TP2121


HG5-TP1959

HG5-TP2065

HG5-TP2059

HG5-TP1967

HG5-TP2090

HG5-TP2138

HG5-TP1985

HG5-TP2072

HG5-TP1968

HG5-TP2044

HG5-TP1956

出土土器 (8)

HG５-TP2048

HG５-TP2074

HG５-TP2092

HG５-TP2075

HG５-TP2077

HG５-TP2047

HG５-TP2064

HG５-TP2120

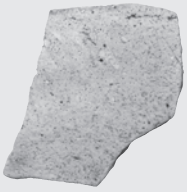
HG５-TP2123

HG５-TP2111

遺構外-TP2155

遺構外-TP2156

遺構外-TP2154


HG４-TP1868

HG４-TP1869

出土土器 (9)（右下：第４号包含層出土「製塩土器」）

SM 4 -DP177

SK197-DP169

HG 5 -DP215

HG 4 -DP187

HG 4 -DP188

第 1 号遺物集中地点-DP183

HG 5 -DP236

SK198-DP170

HG 5 -DP234

HG 5 -DP221

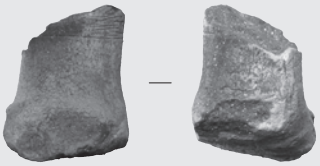
HG 5 -DP220

HG 4 -DP197

HG 5 -DP223

出土土製品 (1)

SK296-DP172



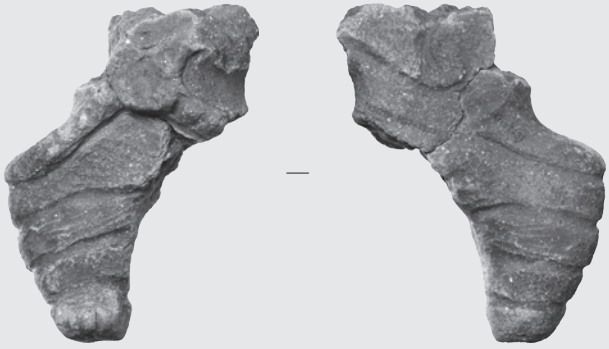
HG4-DP198

HG4-DP200

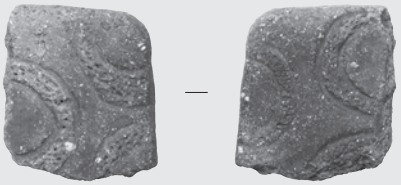
HG4-DP199

HG5-DP230

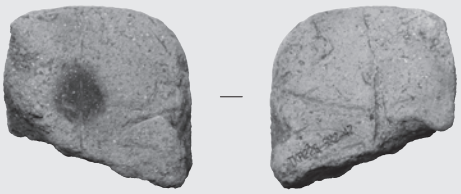
HG5-DP227



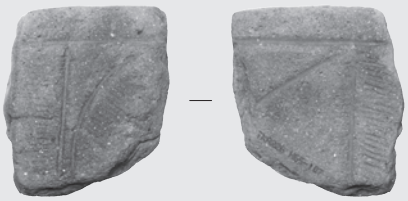
HG5-DP228



HG4-DP194

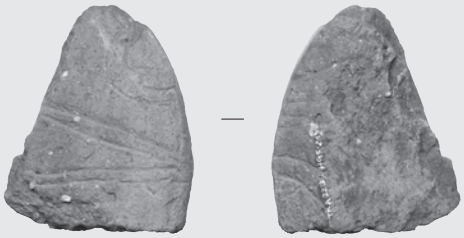


SK296-DP171



HG4-DP196

HG5-DP219



HG4-DP193

出土土製品 (2)

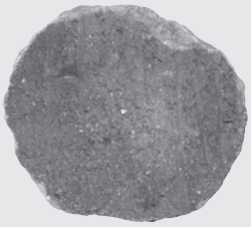
HG５-DP262

HG５-DP244

HG５-DP249

HG５-DP251

HG５-DP245


第２号遺物集中地点-DP186

遺構外-DP267

HG４-DP189

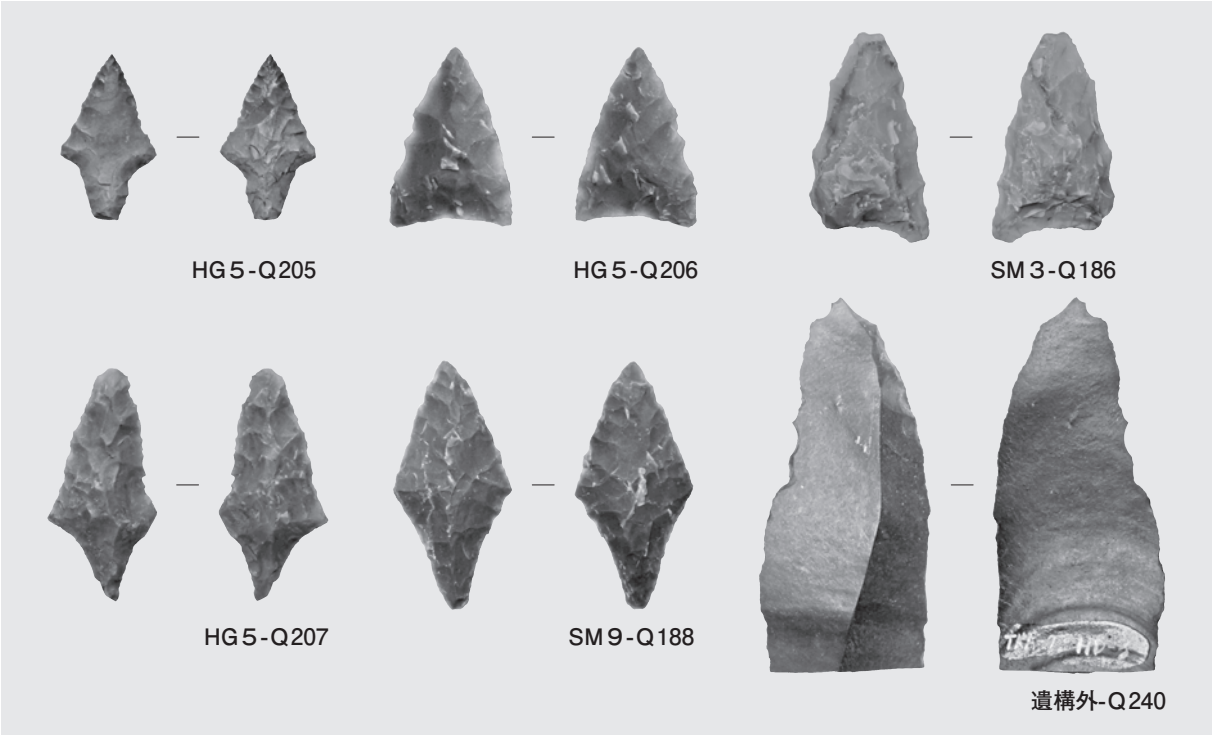
SM４-DP178

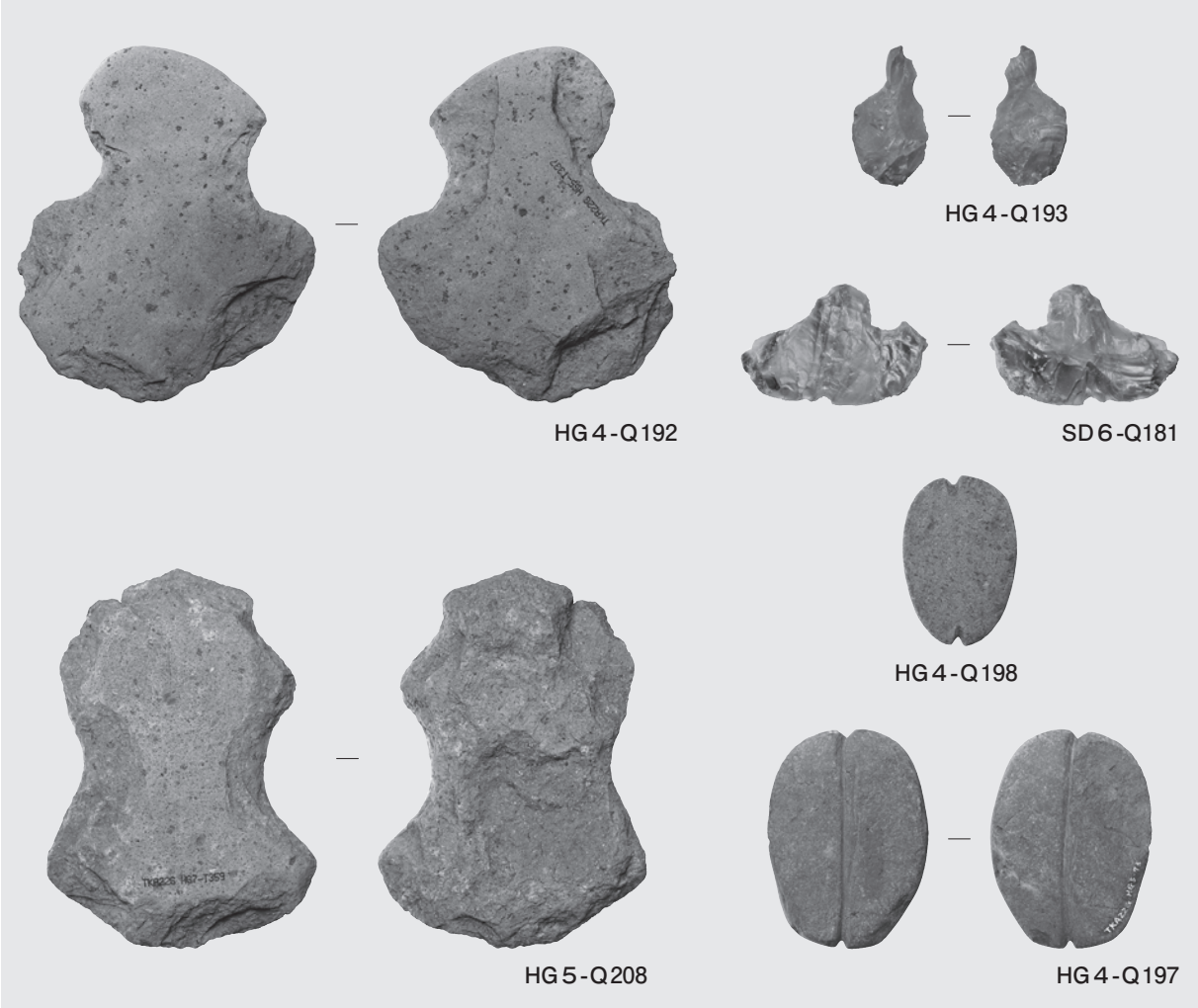
HG４-DP191

HG５-DP222

SM４-DP179

出土土製品 (3)


HG5-Q205
HG5-Q206
SM3-Q186
HG5-Q207
SM9-Q188
遺構外-Q240


HG4-Q193
HG4-Q192
SD6-Q181
HG4-Q198
HG5-Q208
HG4-Q197

出土石器

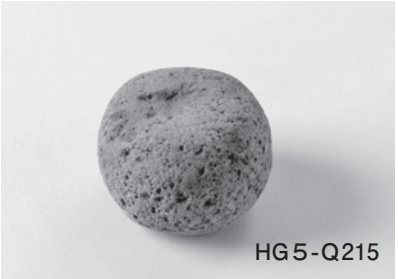
HG5-Q211

HG5-Q212

遺構外-Q241

HG4-Q196

HG5-Q223


HG5-Q215

SD7-Q183

SM4-Q187

HG5-Q235

HG4-Q200

HG4-Q204

SI 15-Q176

HG5-Q239 HG4-Q202 HG5-Q238

SK296-Q179

出土石器・石製品

HG５-Q237

第２号地点貝塚-Q190

SK296-Q178

遺構外-M１

遺構外-M２

SI 15-B41

SM９-B42

第２号地点貝塚-S72

SM３-S64

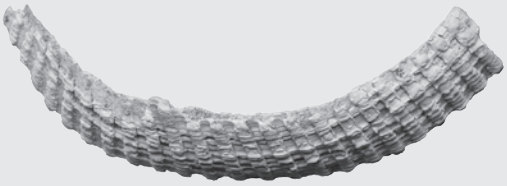
SM３-S65

SM３-S64

出土石器・石製品，金属製品，骨角製品，貝製品

SM３-S66

第１号地点貝塚-S71


SM４-S67

SM９-S70

SM４-S68

SM９-S69

SM３-N17

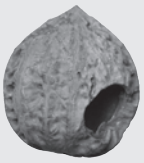
SM３-N16

SM３-N18

SK296-N４

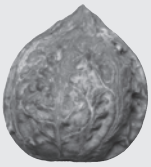
SK296-N15

SK296-N２


SK296-N５

SK296-N９

SK296-N12


SK296-N３

SK296-N６

SK296-N８

SK296-N14

SK296-N11

SK296-N13

SK296-N10

SK296-N７

SK296-N１

出土貝製品，自然遺物

抄　　録

ふりがな	かみざかいあさひだいかいづか よん
書　　名	上境旭台貝塚４
副 書 名	中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XIX
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第 397 集
著 者 名	小林和彦
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団
所 在 地	〒310 － 0911　茨城県水戸市見和１丁目 356 番地の２　　ＴＥＬ 029 － 225 － 6587
発 行 日	2015（平成 27）年３月 16 日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
上境旭台 貝塚	茨城県つくば市 中根字中谷津 834 －１番地ほか	08220 － 093	36 度 06 分 14 秒	140 度 07 分 49 秒	21 ～ 27 m	20101001 ～ 20101231	1,937 ㎡	中根・金田台特定土地区画整理事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上境旭台 貝塚	貝塚	縄文	斜面貝層　3か所 地点貝塚　4か所	縄文土器（深鉢・鉢・浅鉢・台付鉢・台付土器・異形台付土器・壺・注口土器・蓋・ミニチュア土器・手捏土器・把手付土器・釣手土器・手燭形土器・製塩土器），土製品（土玉・土錘・垂飾品・耳飾り・土版・土偶・海獣形土製品ヵ・円盤・土器片錘・土器片円盤），石器（鏃・打製石斧・磨製石斧・石匙・石皿・磨石・敲石・石錘・凹石・ヘラ状石器・砥石），石製品（小玉・円盤・石版・石棒・石剣・独鈷石・石冠），石核，剥片，骨角製品（髪飾り・刺突具），貝製品（貝輪・貝刃・有孔装身具），動物遺体（貝殻・獣骨・鳥骨・魚骨），自然遺物（センダン・トチ・クルミ・エゴ）	第４号貝層からは海獣形土製品ヵの一部が，第５号遺物包含層からは遮光器土偶の頭部，第 296 号土坑からは石冠が出土している。
	集落跡	縄文	竪穴建物跡　1棟 陥し穴　1基 土坑　35 基 柱穴列　1条 溝跡　5条 ピット群　1か所 遺物集中地点　2か所 遺物包含層　2か所		
	その他	時期不明	溝跡　2条		

要　　約	今回の調査では，台地縁辺部と南東部の斜面部から縄文時代後期後葉から晩期前葉にかけての集落跡が，斜面部では貝層３か所，地点貝塚４か所，遺物包含層２か所，などを確認した。斜面貝層及び地点貝塚は，ハマグリ・シオフキ・ヤマトシジミを主体とするもので，台地上から台地縁辺部に展開する集落からの継続的な廃棄行為によって形成されたものと考えられる。また，最も標高の低い地点の土坑からは，多量の木片とともに，トチの実やクルミなどの種実が出土し，当時の古環境を復元する資料となる。

印　刷　仕　様

編　　集	ＯＳ	Microsoft Windows ７ Professional
	編集	Adobe InDesign CS６
	図版作成	Adobe Illustrator CS６
	写真調整	Adobe Photoshop CS６
	Scanning	６×７film　Nikon SUPER COOLSCAN9000
		図面類　EPSON ES－G11000
使用Font	OpenType	リュウミンPro・L
写　　真	線数	モノクロ175線以上　カラー210線以上
印　　刷	印刷所へは，Adobe InDesign CS６でレイアウトして入稿	

茨城県教育財団文化財調査報告第397集

上境旭台貝塚４

中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XX

平成27（2015）年　3月13日　印刷
平成27（2015）年　3月16日　発行

発行　公益財団法人茨城県教育財団
〒310－0911　水戸市見和１丁目356番地の２
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL　029－225－6587
ＨＰ　http：//www.ibaraki-maibun.org

印刷　冨士オフセット印刷株式会社
〒310－0067　水戸市根本３丁目1534－２
TEL　029－231－4241